

---

# 仁義なき妹【改訂版】

ゲレゲレ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仁義なき妹【改訂版】

### 【Zコード】

Z9403W

### 【作者名】

ゲレゲレ

### 【あらすじ】

無茶も通りも、私の愛の前では“ただの言葉”兄以外の異性は眼中に無い……むしろ世界の汚物とも考へている

桐嶋家の愚昧……桐嶋美夏、高校一年生。

この物語は、そんな困った思想の持ち主である人物にスポットを当てた。学園ラブ？ コメディー？ である。

この小説は『ブランクとシンケレ』からタイトルを『仁義なき

妹』に変えたものの改訂版です。

おおよその登場人物には、あまり変化はありませんが。彼らが身を置いている環境がガラリと変わっています。

なので改訂前よりも大分話しが変わってしまうと思います。

改訂前より読んで頂いている数少ない方々には不快な思いをさせてしまう可能性もありますが、どうぞご了承下さい、お願いします。

## 設定（まだネタバレ無し）（前書き）

読んで頂く前に、大まかな設定です。  
まだネタバレとかは御座いませんので、安心してください。

## 設定（まだネタバレ無し）

### ・学園都市

第一区から第十三区まである、小・中・高・大と様々な学校・学園が存在している一つの都市。

基本的に、そこに住んでいる住民は特に学生だけだと、学校の関係者だけという訳ではなく。外食の店舗を構えている者だつたり会社に勤めている者だつたりと、そこら辺の街と変わりの無い一般人もいる。

しかし、学園都市と呼ばれるだけあって、学生や学校関係者の数が圧倒的に多いのも事実。

所によつては、大学生などが研究などのために開いている店もあるぐらい。

また、この学園都市の区分けには特徴……といつより、俗称の様なものがあり。

第一区から第三区までを“才能の区画”と称し。

第四区から第五区までを“品格の区画”と称し。

第六区から第十区までを“勤勉の区画”と称し。

残り第十一区から第十三区までを“未知の区画”と称している。

“才能の区画”はスポーツや芸術、または勉学でも一芸に秀でたものだけが入れる区画と呼ばれ、その中にはプロの世界で活躍する者だつたりだとか、芸能の世界、遙か海の向こうの海外でも活躍出来る者だつたりと、非常に多種多様な才能たちが溢れかえっている事から、そう呼ばれている。

“品格の区画”とは、基本的にお嬢様だとかお坊ちゃんだとか、はたまた御曹司といった上流階級の親を持つ者達が集まる区画で。学校のカリキュラムでは通常の基礎知識だけではなくマナー講座だつたり、彼らの将来にとつては必要な学問などが組み込まれている。

また、この区画には共学の学校または学園は一つも無く。その全てが男子校だつたり女子高だつたりといった、男女を分ける形をとらえている。これは、将来の結婚相手を選ぶ際に、他の家の娘・息子に手を出してしまい、余計なトラブルが起こつてしまつ事を防ぐためにあるとかないとか……真意は謎に包まれている。

“勤勉の区画”とは、その名の通り、才能だとかではなく、努力で学園都市内の学校・学園に入学できた者達を集めた区画だ。そのため、学力だけなら“才能の区画”と時たま互角を張る時があり。なかなかに侮り難い者達がいる場所。

そして最後に“未知の区画”とは、まさに未知。つまり、住んでいる者たちが理解していない、または手を及ぼしてはいらない地区であり。その区画内には、問題を起こし他の区画から追放された学生だつたりだとかが集まるアンダーグラウンド的な場所があるだとか。学園都市が秘密裏に行なつてている研究を隠す為の場所だとか、もはや都市伝説の様な扱いを受けている場所。ちなみに、住民自体は普通に住んでいる。

また、それぞれの区画には留学生もかなりの数が在籍している。

#### ・執行部

区画内で定められた規定の人数で構成された組織で。

基本、学校・学園内、区画内で起きた荒事を処理するために存在していると言われている。

また、構成されたメンバーは、その学校・学園の生徒会にしか知らされておらず、一般生徒はその存在すら認知していないのではないかと言われている。

だが実は、中には執行部の存在を知っている一般生徒も存在しているらしい。

なんとも曖昧な組織だ。

国内外問わず、格闘技団体史上最も最強を決めるに相応しい舞台を用意できる団体と言われている、格闘技のメジャー団体。

その団体に所属している選手達は、基本的に前に所属していた団体でトップ、または優秀な実績を収めた者でないとされており。非常にレベルが世界規模で高い面子が集められている。

桐嶋竜蔵も、高校入学から少し経った16歳の頃にフルコンタクト空手で世界を最年少という記録で制覇し、この団体に所属している。

また、この団体には“階級という概念は存在しておらず”。その全ての試合が無差別級といった常識では考えられない制度を採用している。

基本ルールはMMA……しかし、肘や裏拳などといった制限は一切ない、真の“value tudo【何でもあり】”の世界。

しかし、選手間の交渉次第では、様々なルールが適応される場合もあり、時にキック、時に肘などを抜きにした総合だつたりと、様々な種類のルールを適応する事が出来る。

基本リングは六角形の金網で囲まれた物……しかし、これもルールの適応によっては普通のロープを張られた四角いリングになることもある。

リングの制度は、つい最近に作られたものであり、それまでは見やすいという事で四角いロープのリングのみであった。

竜蔵の父親、桐嶋虎刃喜は、この『JUDGE』の試合中に亡くなっている。

『JUDGE』という団体名は、『全世界で最強の男を、平等の試合で裁き決める』といつ考えの下、創設者によつてつけられた。

## 入学式（前書き）

第一章です。

眩いばかりのライトが、一つの白いキャンバスを照らす中、二人の異なる国籍を持った男達が、文字通り、血で血を洗う殴り合いを繰り広げていた……。

赤と青のコーナーポストや、白いインターバルゾーンのポストなど、リング内だけを見ればどこにでもありそうな光景。

しかし、このリングのキャンバスに立っている二人の男達が。その手に着けているオープンファインガーグローブの拳面を相手の顔面に衝突させ合う度に、周りを囲む万を超える人々の歓声は地鳴りがする程に一人の男達の全身を包み込んでいた。

その万の人員を動員出来るほどの会場は、既に中央で戦う二人以外に興味を示していないかのように、白いライトの照明を、そこにして集中させていない。

男の一人……東洋系の肌や顔立ちをした、一切の脂肪が無いほどに絞り上げられた完璧なまでの肉体を持つ男が、相手の白人男性の右頬を、文字通り左の拳で刈り取る様に打ち抜く。

もはやその拳は、ショートファックなどという名詞の枠では現せないぐらいのキレを誇つており、まるで鎌で相手の顎を削ぎ落としたのではないかという錯覚まで周囲に与えていた程だ。

左の拳を右頬に受けた白人男性の頑丈そうな顎が、殴られた軌道側へと弾き飛ばされるかの様に揺らいだ。

しかし、白人男性は殴られた勢いそのままに沈みそうになつていた巨躯な肉体を、前足として置いていた左足を横に差出し、キャンバスに踏ん張ることで、その場に留めた。

だが東洋系の男の猛攻は止まない……。

崩れ落ちそうだった体を残した白人男性の奥足……つまりは右足の内腿に、右足によるインロー・キックを打ち込んだ。

バチャイイイイイン！！！！ と、地鳴りが響く程に大きな歓声の中でもハツキリと聞こえる、白人男性の右内腿が、東洋系の男の右脛に蹴り抜かれた音。

その音は正に破裂音といつても過言ではなく、例外なく、白人男性の右足を蹴った方向に刈り取った。

右頬への左フックをかろうじて耐えた後の、右内腿へのインローで完全にバランスを崩してしまつ白人男性……体格差は195?125?に185?の100?と、明らかに勝っている筈なのに、これほどまでに良い様にされてしまつ事に白人男性の表情には、ダメージだけのものではない何かが浮き彫りになっていた。

無理やり足幅<sup>スタンス</sup>を広げられる格好となつた白人男性の大きな顔に、再び東洋系の男の拳 今度は利き腕の右 が飛び込んでくる。

真つ直ぐに……真正面に……真正直に、突き出されるその拳は、右のインローを引いたと同時に打ち込まれたために、腰の回転にツイスト氣味の力がかかり、東洋系の男の柔軟な肩甲骨の使い方も相まって。普通のコンビネーションの決めに使われる右ストレートの威力や迫力となんら差異は感じられなかつた。

当たる！！ 東洋系の男は、この両者の顔面が血で染まるほどの殴り合いの終結を、そこに見た。しかし、その刹那……。

グシャツー！

「親父イイイイイー！！！」

鈍い……なんでものではない。

まるで、高速で飛んできた鉄球に顔面を潰された様な、短くも衝撃的な音が、両者の顔面を襲つた。

同時に、東洋系の男の耳に、聞き慣れ過ぎた子供の悲鳴も飛び込んできた……。

相打ち……それも、相手が苦し紛れに打った右拳と自身の右拳が、同時に両者の顔面を捉えるほどドンピシャなタイミング。二人の鍛え上げられた首が、背中が、足が、ゆっくりと後ろへと倒れ込むとする……。

打ち込まれた拳から離れた顔面からは、ネチャリと赤色で染まつた粘液が共に糸を引きながら、生々しく離れていくのが見えた。

そして倒れ行く東洋系の男が、青コーナーからこちらを泣きながら見ている子供を、精根尽き果て朦朧とする意識の中で一瞬だけ捉えることが出来た。

本当に……本当に情けないぐらに涙で顔をクシャクシャにした、小さな男の子だった。

（ごめんな……竜藏……）

東洋系の男は、暗闇に包まれつつあった思考の中で、最後にそう囁いた後。

力なく、リングの上でこちらを照らし続けていたライトを仰ぎながら意識を沈めるのであった。

その男の筋骨隆々の肉体に纏つた道着の黒帯には、金色の刺繡で“桐嶋虎刃喜”と書かれていた……。

桜色の季節とは、まさにこの事……。

三月の別れから、大して時も経たずに訪れる新たな出会いの季節。そう、現在は四月の入学シーズン真っ只中の季節だった

「美夏ちゃん！ もう皆多目的ホールに入っちゃってるよーーー！」

晴天の空！ 正面に見据える桜色満載の並木道や、赤い煉瓦が敷き詰められたお洒落な地面が、視覚的にも新しい心境の訪れを感じさせる今日この頃。

そんな中、一人の少女の後ろから、少し焦り気味の声が聞こえてきた……。

「？」

その声をかけられた少女は、無言で後ろを振り向く。少女の腰まで伸びた黒真珠の様に日光を反射させているロングストレートの髪が、春風によつて桜の花びらと共に舞つ。

「……」

この光景に、少女に声をかけた同学年の女生徒が思わず見惚れてしまう……。

先の艶やかな髪もさることながら、美しくも女子高生といつ若さ特有の可愛さを持つ瞳や、細く整つた小顔の輪郭。まだ15歳という年齢ながら、165cmといつ身長に出るところは出でているモデルの様な体型のラインが、有無を言わさぬ優美さを誇つていたからだ。こちらを呼んだにも関わらず、突然口をボカンと開けて黙りこくつてしまつた同学年の女生徒に、美夏と呼ばれた少女は首を傾げる。「どうしたの？ 急に黙り込んだやつて……」

「……え、あ、うん！ そろそろ入学式が始まつて、伝えに来たんだけど……」

自身が思わず見惚れてしまつた少女に声をかけられ、ようやく意識を覚醒させた同学年の女生徒が、ここに来た理由を思い出したかのように伝える。

「そう……」

同学年の女生徒の言葉に、そつと短く答える美夏と呼ばれた少女……。

「」の様子に、同学年の女生徒が心配そうな表情になる。

「もう緊張の方は大丈夫なの？ 私はやらないから結局他人事になつちゃうけど、やつぱり新入生代表の挨拶つて、そんなに緊張するものなの？」

同学年の女生徒からかけられた言葉に、美夏は軽く微笑んで見せてから。

「うん……昨日までは楽しみって感じだつたけど。今はそれなりに緊張してるかな」

「それなりについて。緊張を解すために外に出るほどなんだから、相当の間違いなんじやない？」

「ふふ、そうかもしれないね？」

おそらく、こちらの緊張を和らげようと頑張つてくれているのだろうが。この言葉のチョイスは、こわさか逆効果なんじやないかと感じる美夏であつた……まあ、口には出さないが。

「でもまあ、どうせやる事になるんだし、なるようになれつて思つた方が気が楽になるよ？ 人間はリラックスが大事つて言うしね」しかし、相手方はこれでこちらの緊張が解れないと感じているのか、言つてやつたという表情を浮かべながら、こちらに満面の笑みを浮かべてくる。

この瞬間、美夏の胸中では“この娘は対象外ね、まずいきなり下の名前で呼んできた時点で対象外、だけど”と謎の評価が下された……。

「アドバイスありがとうね。そうする事にするよ」

「うん！ 頑張つてとしか私は言えないけど、ちゃんと後ろで応援してるからね！」

「ええ、でも、もう少しだけ外で落ち着きたいの。だから、先に行つてて」

「分かつた！ なら、遅れないでね？ あと2・3分ぐらいで始まるらしいから」

そう言つて、同学年の女生徒は、多目的ホールや図書館が一体となつた、地下一階地上四階の建物へと姿を消していく。

女生徒が去るのを、これまでの微笑みとは打つて変わつて特に興味なさげな視線で見送つた美夏は、再び先程まで眺め続けていた桜並木の向こうに視線を戻した。

相も変わらず、綺麗な桜の花びらが、一枚一枚自己主張をしながら散つていく……非常に綺麗で風流な光景だ。

だが、そんなものには美夏は興味を示そとはしない……ただた  
だ、並木道の向こう側を見つめ続ける。

（やっぱり、お兄ちゃんは来ないのかな……）

胸中での寂しそうな咳きは、春の暖かな風にも乗らずに、美夏の  
中だけで響き渡るだけだった。

そして、そろそろ入学式の時間が迫っていたのに気付いた美  
夏は。少々後ろ髪が引かれる思いをしながらも、後ろに佇んでいた  
大きな建物へと踵を返した。

入学式……それも高校生でのと来れば、誰しもが新たな何かに淡  
い期待を抱くであろう。

そして、そんな淡い期待を、入学式会場である多目的ホールへと  
入ってきた瞬間に、他方から浴びた人物がいた。

しかし、様々な視線を全身に感じながらも、その人物は一切の興  
味や物怖じすら見せずに、悠然とした足取りで多目的ホールの最前  
列へと歩を進めていった。

ここ多目的ホールは“第一区”新入生総勢3200人の内、新入  
生の500人は軽く収容できるほどの大きさを誇っている。

まあ確かに新入生の来賓やら父母の方々やらを含わせたら、この  
多目的ホールでも席がギリギリといった状態になってしまふが。高  
校にしてこれ程の人員を収容できる多目的ホールがある事自体珍し  
い事で……更には、この様な空間が、この地下にはあと二つあると  
いうのだから驚きだ。

そんな中を、この多目的ホールにいる人々から視線を集めながら  
最前列へと躍り出た人物が、ようやく席に着いた。

席は、最前列一番右側だ。

瞬間、多目的ホールに灯っていたライトの明かりが一斉に消え、

今度は目の前の壇上へと再び灯ったライトの明かりが注がれた。

この間、気持ちが入学式という事で高揚していた者達の中から驚きの声が上がっていたが。先ほど入ってきた人物は、至って平静のまま次なる出来事を待つた。

『これより、今年度の一橋学園高等部の入学式を開式いたします』

いつの間に現れたのか 多目的ホールの殆どのライトが集中した壇上の中心で、一人の上級生であろう女生徒がマイクに向かって宣言すると共に、会場中の喋り声が一斉に鳴り止んだ。

その様子を確認したあと、壇上の女生徒が照明に向けて、手によるジロスチャーで鬱陶しそうに『ライトを向けるな』と指示を出す。途端に壇上に向けられていたライトが、壇上の上にある照明だけとなつた。

そして再び、マイクへと口を開く。

『国歌斉唱。皆さん、起立のうえ、壇上の国旗に注目してください』すると、会場中の全ての人間がバタバタと中々に座り心地の良かつたシートから起立していく。

会場中の起立が済むと同時に、国家が多目的ホールに設置されているスピーカー越しに流れ始めた。

『よいよ、一橋学園高等部入学式の始まりだ……。』

入学式など、皆のウキウキ具合に比べ、何事もなく終わる様な退屈な一面も備えている。

そして、それはこの一橋学園高等部も例外ではない。

既に入学式も校長やらなんやらの有り難い訓示も終わり佳境に入っている。

だが未だに皆、入学初日から可笑しな目立ち方をしたくないがために、座り心地の良いシートに背を預けながらも話しに耳を傾け続

けている……。

そうこうしていると、先の女生徒、美夏の出番が回ってきた。

『新入生の挨拶。新入生代表、桐嶋美夏さん。壇上へお上がりください』

この言葉を耳に入れた瞬間、壇下最前列の一一番右側に座っていた美夏がハツキリとした透き通る声で「はい！」と返事をした後、シートからスッと立ち上がった。

そして、腰まで伸びた長く真っ直ぐな黒髪を靡かせながら、優美な曲線を描いたスラリと長い足を歩かせ、壇上へと上がつて行く。

この間、新入生の男子生徒や後ろの方に座っている父母……特に男の方から、異様な視線と感慨の声が漏れ出ていたのを、美夏はスルーする。

弧を描いた壇上へと足をつけると、目の前には丁度、美夏の身長に合わされたスタンドマイクが設置されていた。

その前で、女性でありながら堂々と気を付けの姿勢を取る美夏……

心なしか、それだけの事で彼女の垢抜けた気品が感じられた。

しかし、彼女にはこの様なことに対する、何の感慨も生まれてこない。

むしろ、早く終わらそうといつ気持ちが彼女の中では勝つっていたぐらいだ……もちろん緊張などではなく、本気でどうでも良いと考えていた様であった。

だが表情には一切表れない。

この多目的ホールに入つてから依然として、確りとしたなかにも余裕が感じられる表情のままだ。

これを対面で見て、壇上に立っていた二橋学園生徒会長、二橋姫樹の微笑ましそうに閉じていた瞼が、少しだけ興味深げに開いたのを、美夏は気付いていた。

しかし、それでも全く動じなかつた美夏は、優等生らしく、桐嶋という名字に恥じぬよう、悠々と新入生代表挨拶をこなしたのであつた。

入学式も問題なく終わり、現在は多目的ホールからクラス別に退場している。

そして美夏も例に漏れず、多目的ホールの両開きのドアから退場し、約1時間半ぶりに外の空気を体内に入れることが出来た。本当に退屈だった……家族である母も妹も、そして何より兄も来てくれない入学式に、何の意味があるのか？

そんな事を考えながら、長い桜並木の道を歩いている時であった。突然、後ろから右肩をツンツンと突つかれた……。

これに自然に反応した美夏は、何かなどといった風に後ろを振り返る。

そこには、165?と、同年代の女子にしては発育良好な美夏よりも、100cm以上は高い女生徒が人懐っこい笑みを漏らしながら立っていた。

「新入生代表の桐嶋さんだよね。あたしは同じクラスの木下藍って言つんだけど、一緒に教室まで行かない？」

フランクな物言いもそうだが、美夏に話し掛けってきた木下藍という女生徒は、長身にも関わらず均整の取れた体型がスマートな印象を持たせ、高い腰の位置や、コバルトブルーの瞳、少し赤茶がかつた活発なショートヘアなどだが、どこか日本人離れした雰囲気を醸し出していた。

「うん、いいよ」

美夏の返事に「そう、じゃあ行こつか」と言つて隣に並ぶ木下藍。

そうすると、よけいに美夏との身長差が際立つて見える。

「木下さんって、何か部活とかやつてるの？」

やはり、いくらこれまで興味が沸く事が少なかった美夏でも、こればかりは気になったのか、思わず質問を投げかけてしまった。

「あたしは女バスだよ。まあ、この成りを見れば、なんとなく想像が着いたでしょ？」

「ええ、まあ」

「そういう桐嶋さんは、何かやつてるの？ 見たところ凄いプロポーションだから、体とか鍛えてるんでしょ。特に足とか見ると、結構やつてる感じがするよ」

少しだけ俗っぽい視線を美夏に向かつつも、意外に観察力の鋭い木下。

これに美夏は、密かに抱いていた彼女の第一印象である“大雑把そうな女”という評価をちょっとだけ改善させた。

「私は中学まで新体操をやつてたけど、高校では続けないかな」

「へ～新体操ね～……続けてれば、男子達が煩いからって理由で？」

ニヤニヤと美夏の豊かな美乳を眺めつつ尋ねてくる木下に。

「そうじやないってば。ただ続けられる自信が無いつて言うか、暇が無いつていうか……そんな感じかな」

「ふ～ん、もつたいない……桐嶋さんのレオタード姿とか、絶対に男子達が面白そうな反応すると思ったのに」

「まあ、確かに面白い反応はしてたけどね（思い出したくも無いくらいにね。ホント、お兄ちゃん以外の男子つて“糞”ね）」「うん？ ちょっと待ってくれ……。

これまで、確かに桐嶋美夏という女生徒は、節々で影のある感じを醸し出していたが……。

今副音声は一体……？

非常に問いただしたい所ではあるが、ここで美夏にとつて、最も出会ったかった……いや、死ぬまで添い遂げたい人物が、いつの間にかに来ていた桜並木の終わり、一橋学園“入り口”の校門前に現れた。

周囲にはまだ、美夏達の他にも新入生達の姿がゾロゾロとしていたが、その匂い、その存在感により、美夏は神業とも言える探知能力で、件の人物がいる方向へと“バ”っと振り向いた。

「うん？ どうしたのいきなり？」

突然の美夏の動きに、木下が不思議そうな表情をするも、もはや本人には眼中に無い。

視線の先には、一人の体格のいい……いや、もはや芸術とも呼べる肉体を誇った男性が、本学園の男子の制服を身に纏いながら誰かを探している光景が映つていて、その表情には、一向に見つかる気配が無いのか焦燥感すら漂わせていた。

「桐嶋さん、俺同じクラスの佐々木ってんだけど」

「ねえ、桐嶋さんだよね？ 俺、君と中学が一緒だった……」

不意に、視線を固定してしまった美夏の後ろから、同じクラスの男子生徒達が声をかけてきた。

おそらく、彼女の姿に惹かれた者達であろう……。

しかし、美夏は一切の反応を示さない。

ただただ、校門前で誰かを探し回る男を見つめているだけ……。

「桐嶋さん？」

当然、美夏の隣にいた木下は、新しく出来た知り合いを気遣うよう、上から顔を覗き込む。

そこで、動きがあつた。

「え？ ちょっと……」

木下が言い終わる前に、なんと美夏が前方へと飛び出したではないか。

柔らかい物腰や華奢な容姿からは考えられない、流れるように動く柔軟な走りで、美夏はあつと/or間に木下や後ろにいた男子達を置き去りにしてしまつた……。

そのスピードは、本当に高一女子とは思えない素晴らしいもので、腰まで伸びた黒髪を颯爽と風になびかせながら、一気に目的の人物までの距離を縮め……そして。

「うん？」

件の人物の厚い胸板に、思いつきりダイブもといタックルをかました。

「ドン！」　　といつ中々に良い音を鳴らした美夏のタックルであつたが、男は何の問題も無く、飛び込んできた美夏を抱き止める形で包み込んでいた。

ガバッと、美夏が男の胸に埋めていた顔を上げる。するとそこには、高校男児らしい若さと男らしい強さを持つ顔つきをした、自慢の兄の姿があつた。

頑丈そながらも、それなりに整つた輪郭や、眼力のあるハツキりとした瞳。

逆立てた黒髪の短髪は、高校生らしくワックスでセットされ、美夏が抱きついている肉体は、胸囲と腹回りが反比例した理想的な逆三角形をしている……。

また、彼の鍛え上げられた太い首筋を見れば、中も相当な筋が浮き彫りになっているのだろうと想像が出来る。

そんなガチムチな兄貴が、受け止めた美夏を見る。

「おお、やつと見つけた……ごめんな？　入学式に間に合わなくて」「そんな事ないよ！　こつして来てくれただけでも、私は嬉しいんだから……」

抱きつきながら見上げる瞳を潤ませ、本当に嬉しそうに聞こえる美夏の聲音。

それを見て、美夏を抱きとめた格好となつている兄貴の表情が“悪いことしたな”と言外で語る様に眉をハの字にしていた。

しかし、ここにはまだ他にも新入生の面子が大勢いるのだ。

当然だ、なぜならここは学園都市第一区にある“一橋学園”的校門前なのだ。入学式を終えた生徒は、それぞれ教師との顔合わせのために自身の教室へと向かわねばならない。

そして、そんな場所で抱き合つ一人……当然、二人の関係を兄妹と知らない周りからの注目を集めるわけで。

「え、嘘……桐嶋さんって彼氏持ち？」

「うわ、大胆……」

「マジかよ、あんあむさ苦しい奴に何で……」

ヒソヒソと聞こえてくる戸惑いの声。

そして、先程まで一緒に歩いていた木下の後ろからは、声をかけようとしていた男子達が落胆の表情を浮かべている……が、ここで何がなんだか分かつていなかつた木下が、ある事に気付いたようだ。（あれ……あの男の人、どこかで見た事があるような）

頭の片隅に、様々な記憶を巡らせる木下。

もともと考へるということは得意ではないのだが、こればかりはどうにも考へずにはいられなかつた。

「うん？ もしかして、あの人つて格闘家の……」

すると、どこからともなく木下の耳に、そんな声が静かに届いた。瞬間、木下の活発な眼が“カツ”と見開かれる。

「思い出した！ あの人、『JUDGE』に出てる人だ！」

この木下の言葉と共に、周囲から「ああ！ そういえば！」だとか「学園パンフレットに載つてた人か」だとか様々な声が聞こえてきた。

「え？ ああ、そーカ。そういうえば、うちの学園にいるつて書いてあつたな」

「確かに名前つて、『桐嶋竜蔵』だつたつけ？」

「馬鹿、今は先輩を付けるよ」

桜が舞う学園校門前で、方々から向けられる“有名人を見た”といふミーハーな高校生の視線に、美夏の兄、桐嶋竜蔵は気付いたのか……。

「うん？ そういうば、まだ全部終わつてなかつたつけか」

田と田を合わせていた美夏から視線を外し、周囲を見回した後、そんな事を気付いたように呟いた。

同時に、現在兄妹で抱き合つている姿によつやく気付いたのか、抱きとめていた美夏の体をスッと放した……が。

「おい、ちょっと周りが見てるから……」

なぜか、こちらを一コ一コと見つめたまま、美夏が離れようとしてくれない。

むしろ、ますますその発育良好な胸を押し当ててきたぐらいだ。  
「ダメ これは入学式に来てくれくなかった罰なんだから」「いや、それは悪かつたって……だけど、今は離れてくれないか？  
お前もまだやる事が残ってるんだろ？」

「嫌」

甘えた声で、竜蔵の厚い鉄板の様な胸板に頬擦りをする。  
困った……周りの視線が、何やら嫉妬やら何やらが混ざった痛い  
者を見る感じになってきてる。

これは早く何とかしないと。

そう考えた竜蔵は、ここである提案を持ち出す。

「なら、今日の夜に入学祝として何かプレゼントするから、それで  
許してくれないか？」

「そういうのは本人には黙つてるものなんだよ？」

もつともな指摘を受けて、竜蔵はますます困った顔をする……。

拙い、本当に拙い……。

このままだと俺は、極度のシスコン野郎って勘違いされてしまう。  
周りの新入生は、まだこの一人が兄妹とは気付いていない様であ  
つたが。そもそも名字が同じだとかで気付く者が出てきても可笑し  
くは無い。

そして気付かれた上で、こんな事をいつまでもしていろと、確實  
にこれから後輩となる連中に示しがつかなくなる。

故に竜蔵は、その懸垂で出来たたこ廐や格闘家として作り上げてきた  
拳廐が目立つ、ゴジゴジとした両手で、美夏の細い両肩をガシッと  
掴むと。

「あつ！」

「はい、そろそろ本気で離れろよ？」

その岩石の様な筋張つた太い両腕を駆使して、懷に抱きついてい  
た美夏を無理やり剥がした。

む～っと両頬を膨らませながら、不服そうにこちらを見る美夏。  
しかし、入学式に参加できなかつた事を悪いとは思いつつも、公

私を弁えなければならないと考えた竜蔵は。

「必ずこの埋め合わせはするから、今は言つことを聞いてくれ」

「む……必ずだよ？ 絶対だよ？」

身長差は竜蔵170？なので、男女にしては5？しか差は無いが。先ほどからの美夏の仕草で、どうにも彼女が子供っぽく見えてしまつ。

これに、新入生代表の挨拶を見ていた周りの男子達は、いわゆるギャップ萌えという奴で既に陥落寸前の状態であった。

しかし、何度も言うが、周りはまだ二人の関係には気付いていない……。

故に、最初から彼女に目をつけていた男子達からは嫉妬という負の感情が漏れ出るというより噴出していた。

だが、ここでようやく、何やら気付いたものがいるようだ。

「あれ、そういえば先輩の名字つて、桐嶋さんと同じ……」

そう呟いたのは、先ほど竜蔵を『JJDGE』に出てる人と見抜いた木下藍だ。

そういえば『JJDGE』とは、この日本国内だけではなく、既に世界にも認められたメイドイン・ジャパンの格闘技団体で、各方面の団体から本当の実績を挙げたものしか出場出来ない狭き門の団体なのだが……今は割合しておく。

木下の呟きに、周りの新入生達も何かに気付いたのか。

「確かに、同じ名字だ……」

「え？ ジゃあもしかして……」

「マジで？ でも、二人つて言つちや悪いけど似て無くない？」

この周りのざわめきに、美夏と綺麗な耳がピクリと動く……。

同時に、向けていた体の正面を、今度はざわつく同級生達へと振り向かせた。

「急に騒いで、ゴメンね？ 今から紹介するけど、この人が私の“お兄ちゃん”で……」

視線を同級生達に向けたまま、後ろにいた竜蔵のブレザーの袖を

クイクイと引つ張り。

「うん？ ああ、桐嶋竜蔵って言います。知ってる人もいるかもしないけど、一応空手やつてます。部活はラグビー部です」

美夏のサインに気がついた竜蔵が、先輩らしい軽い口調で自己紹介をする。

すると、周囲から驚きと予想外だったという声が上がった。

「え！ うそマジ！？」なんて反応は当たり前で、もはや桜並木の終着点でもある一橋学園校門前では一種の騒ぎが起こり始めていた。

現役高校生格闘家の妹……ましてや、その現役高校生は、世界を相手に戦っているという説得力を持つた風貌をしていて、既に気の弱い男子達は、目をつけていた美夏から手を引こうかと考えている様であった。

だが、気の強いというより意志の強い連中には、どうやつたらあの兄をどかして美夏と接触するのかを画策している者もあり、男子間では非常に混沌とした思惑が入り混じっていた。

「皆さん、一体何の騒ぎですか？」

しかしそこに、なにやら決して大きくは無いが、不思議と誰の耳にも良く聞こえる女性の声が割り込んできた。

その声に、なぜかこれまで騒いでいた校門前にいた全員が振り向いてしまう。

それは例外が無く、美夏や竜蔵も同じことであった。

声の主である女性は、多目的ホール側の桜並木から、丁度ここに辿り着いたという所に、数人の生徒を連れながら立っていた。

「あ、会長だ」

突然現れた彼女を視界に入れた竜蔵の言葉に、美夏も「挨拶の時に会つた人だ」と先の入学式での事を思い出していた。

「あら、桐嶋君に妹さんね 丁度良かつたわ」

二人の反応を、まだ少し距離があるにも関わらず、気付いた会長と呼ばれた人物は。

緩やかなウエーブのかかった、豊かな栗色の長髪を揺らしながら、優雅な足取りで二人に歩み寄っていく……その間、道の邪魔になつてゐた新入生たちは、自然とこの会長と呼ばれる人物に道を譲つてしまつていた。

そして美夏と竜蔵の前で、朗らかな笑顔を浮かべている会長が歩みを止めた。

「入学おめでとう、桐嶋美夏さん。さつき聞いたと思つけど、私は二橋姫樹。ふたはしひめき 学園都市第一区二橋学園高等学校の生徒会長を務めてます」

「ありがとうございます、二橋会長。私も改めて自己紹介をの方をさせていただきます、桐嶋美夏、後ろにいる桐嶋竜蔵とは兄妹の関係にあります」

「ありがとうございます、二橋会長。私も改めて自己紹介を行なつただけで、どこか涼やかな雰囲気すら醸し出す一人の所作に。周りの者達は一瞬だけ空気に呑まれる感覚を覚えた。

学園の生徒会長。

もちろん、先ほどの入学式にも出席していただために新入生には既に知られているが。

目の前で見ると、美夏に負けず劣らず……というより、胸の大きさや大人の女性といった物腰の所為で、どちらかといえば美夏にすら勝つているスタイルを誇つており。

その常に目は瞑つているが朗らかな微笑みを浮かべている表情のお陰で、周りに楽しそうな雰囲気を分け与えている様であった。

この目の前に現れた魅力的な女性に、外見には出さないが美夏の警戒心が高まる……。

（なんなのこの女……底が見えないだけじゃなくて、容姿も油断なら無いじゃない。これは、リストの方に即効で追加ね）

（なにやら黒い感情の籠つた思惑……）

しかし、もしや気付いているのか？

目の前の姫樹はそれを片目だけ薄つすらと開けるだけで流した。

「ええ、一応名簿の方は目を通していたから知っています。しかし、それにしても兄妹揃つて同じ学園とは……ちゃんと面倒を見てあげなくてはダメよ？　“お兄さん”」

悪戯な笑みを浮かべ、竜蔵を茶化す姫樹。

「やめてくださいよ。コイツは俺より出来た妹ですから、その必要も無いですよ」

「あらあら　随分と妹さんの事を信頼しているのね

「やだ、お兄ちゃんたら……」

「お前はからかうな」

姫樹に続き、兄の事を茶化そうとした妹を咎める。

春風が吹く中で、桜の花びらが赤煉瓦調の地面に散りばめられる光景で、このまま他愛の無い会話を続けても良いが。生憎と新入生にはまだやらなくてはならない事がある。

「仲が良いのも結構ですが。そろそろ教室に向かわないと、担当の先生方が待ち草くたび臥くたびれてしましますよ？」

故に姫樹が、やんわりとその事について口にする。

「あ、そっか。じゃあ美夏、また後でな？」

姫樹の言葉で随分と妹を引き止めて、しまつていた事に気付いた竜蔵は、気軽な調子で美夏に言った。

「え……つて言いたいところだけど、仕方ないよね。じゃあ、また後で、お兄ちゃん」

「ああ。それと、学校内では“お兄ちゃん”は止めてくれ。先輩に弄られるから」

「気恥ずかしそうにする竜蔵に、美夏は嬉しそうな微笑を浮かべる」と。

「やだもーん。これは入学式に来てくれなかつた罰です」

言いながら、「ちよー」と反論しようとする竜蔵から逃げるように、学園の校門の向こう側へと走っていく美夏。

妹が竜蔵を過ぎ去る際に、彼女の髪の毛が一瞬だけ竜蔵の確りと筋の通つた鼻を擦つた……春の陽気と相まって、とても甘い香りが

したのは、兄としては口に出しづらいことしかわからず。

「良い妹さんね。会長とも気に入っちゃったわ」

「俺には出来すぎた妹ですよ……家事も出来るし運動も勉強も完璧にこなすんですから」

妹である美夏が、制服のスカートを揺らしながら去つて行つた後で、竜蔵が疲れたように「ふん」と鼻で溜息をつく。

すると、姫樹の後ろにこれまでずっと控えていた連れの生徒達

おそらく生徒会のメンバーであろう

が、周囲にまだ

残つていた新入生達に早く教室へ向かうように促し始めた。

それに反応した、立ち止まつていた新入生達が慌てて校門の向こう側へと走つていく姿を見送ると。

「それで桐嶋君、折り入つて会長からお願ひがあるのだけれど……」

突然、姫樹が静かな聲音で竜蔵に尋ねた。

何事かと、竜蔵が視線を新入生達から姫樹の方へと戻すと。

「なんですか？」

「お願ひっていうより、『命令』って言つた方が格好良いかしら？」

「いや、割とどうでも良いです」

「そう？」

おかしいわね~と、右頬に右の掌を当てながら、困つたように表情を曇らせる姫樹。

「で、折りいつたお願ひって何ですか？」

その竜蔵の本気でどうでも良いから、早く本題に入つてくれというニコアンスの込められた態度に。

自身もこの後、色々と忙しい予定の姫樹は、とりあえず遊びを手放すことにした。

「『執行部』としてのお願いになるのだけれど、いま時間の方は大丈夫かしら？」

姫樹の柔らかそうな唇から出でた“執行部”というワードに、竜蔵が露骨に面倒くさそうな顔をする。

その表情を見て、姫樹は「やっぱり、今はダメなの？」と残念そ

うにしたが。

「いえ、今さつき対戦相手との契約が終わつたところなんで。特にこの後、予定つて言つ予定は無いんですけど……俺じやないとダメなんですか？」

「別に桐嶋君じやないとつて訳ではないのだけど……他の子たちが一切受けてくれなかつたのよ」

「全員ですか？ 確か俺以外に、後何人いましたつけ？」

「うちの学園は少ないから、桐嶋君以外にあと一人しかいないのよ……その一人にさつき『興味が無い』つて理由で、断られちゃつたから。受けてくれないかしら？」

姫樹の両手を合わせて“お願い”というポーズに、竜蔵の胸が撃ち抜かれそうになるも。それはその鋼鉄の大胸筋が弾丸を防いでくれたお陰で、難を逃れた。

理性を失う一歩手前……非常に危なかつた。

しかし、防いだとしても他に人員がいないと言つてでは受けざる負えないのが残り物の宿命。

故に竜蔵は、まだ見たことも無い他の面子に“俺はただの手伝いなんだぞ”という意思を込めながら。思いつきり仕方ないといったふうに「はあ」と溜息を吐いた。

「分かりました、どっちにしろ暇だつた訳ですし。アイツの入学祝のプレゼントを選ぶついでに行つて来ますよ」

瞬間、姫樹のもともと朗らかな微笑みを浮かべていた顔が、更に嬉しそうに花が開いた。

「本当に！ なら、お言葉に甘えてお願いしちゃうわね」

「ええ、どうぞ」

「場所は多目的ホールで、対象はやんちゃ盛りな新入生一名よ」

それを聴いた瞬間、竜蔵は眉を少しだけ意外そうに吊り上げた。

「へゝ入学式早々に問題起こす奴が出たんですか。でも、それにしては落ち着いてコツチまで歩いてきてましたよね？ 会場で暴れてる奴がいるつて言つのに」

やんちゃ盛りな新入生が対象と「こと」で、おそらくそういうことだらうなと当たりを付けた竜蔵の読みは、どうやら正解だったようだ。

「うん、暴れていた子が私の親の友人の息子つて話らしくて、先生方も手が着けられない状態だつたし。私なんかじゃ血氣盛んな男の子を取り押さえるなんて事出来ないから。潔く他の人を探してたつてわけ」

「潔くつて……後ろにいる人たちじゃ無理だつたんですか？ 男も何人かいるみたいじゃないですか？」

そう言つて、竜蔵は姫樹の後ろに控えていた数名の生徒会メンバーを覗き見る。

すると、竜蔵に視線を向けられた生徒会メンバー達は、なにやら三つ編み眼鏡娘以外の全員が視線を反らし始めた。

竜蔵は心中で初めて意氣地なしといふ言葉を彼らに向ける事にした。

「うちの生徒会つて、皆荒事には向かないタイプだから、仕方ないのよね」

「いや、少しは努力をしましようよ……」

「うん だから我が学園でも数少ない“執行部”の子を探してたのよ」

「俺、確かに一応“手伝い”だけつていう話しだしたよね？ それがなんで……」

「“累積”よ、る・い・せ・き 本来なら、アナタは既に停学とかいうレベルの範疇を超えて、退学になつたつて不思議じやないくらいに問題を起こしているのだから、当然でしょ？」

意地悪に微笑み、竜蔵に理由を容赦なく突きつける姫樹の姿は、やはり上に立つもので、弱みなど一くらでも利用してやるという心意気が伺えるものであつた。

「それに、そんなアナタを聖母の如く拾つてあげた恩人に、恩を倍にして返すなんて当たり前の事なのよ？ 返すチャンスを与えてい

るのだから、むしろ感謝して欲しいぐらいね」

このとき竜蔵は、目の前の人物とはそろそろ一年来付き合いに入しそうではあつたが。改めて彼女の微笑みの裏に隠れている黒い部分を垣間見た気がしたのであつた。

流石に、自分の犯してきた過ちを引き合いというより盾に出されてしまつては。潔く逃げてきたという彼女達を責める訳には行かない。

ここは大人しく、無難に従つた方が嫌な所を突付かれなくて済むと考えた竜蔵は、再び仕方ないというニユアンスを込めた溜息を盛大に吐き出しながら。

「分かりました、感謝しますよ……とりあえず、多目的ホールに行けば良いんですね？」

「ええ、きっと彼もそこに居座り続けていると思うから」

その姫樹の意味深な言葉に、竜蔵は「え、どうしてですか？」と思わず尋ねてしまつた。

姫樹はそれに、楽しそうな微笑を浮かべ。

「だつて、『桐嶋竜蔵を出せ』とか言ってたんですもの、きっとまだいると思うわ」

再三に渡つての溜息が、また盛大に竜蔵の口から吐き出された。

「それつて結局、俺が行かなきゃダメだつたって事じやないですか

……

「え？ どうして？ 他の子を使って、後ろからズドンつてやれば

……

「高校の生徒会長が言つてじやないでしょ？」

心底この人は腹黒いのだなど、竜蔵はまた改めて心に刻むのであつた。

そして、もうこの人と話すのは本当に疲れると判断した竜蔵は、そのまま歩を入学式を行なつていた多目的ホールへと、勝手に進め始める。

「あ～じやあ、俺もう行きますから。後で美夏に会つたら、先に帰

つてくれつて伝えといてもうえません?」

「ええ、確りと伝えておくわ」

「頼みましたよ」

そう言つて、竜蔵は生徒会のメンバー達とすれ違ひながら、本当に面倒くさそうな足取りで桜並木の道を歩き始めた……そりやもつ、後頭部を左手でボリボリと搔いているぐらいにだ。

## 新しい環境、新しい友人

入学式後のクラス」とに始まる、最初の先生との顔合わせ。

二橋学園では通常とは違つて、入学式で担当する教員を発表するのではなく。この入学式後のクラスごとの集まりの時に初めて行なわれるのだ。

ちなみに、特に理由は無い。

学園のクラスは基本、大学の様な段状になつていて、教卓からクラス全体が見渡せる様な構造になつていて。

生徒はこのクラスの三人掛けの机を一人で使う事になつており、やはり新学期は窓際一番前の列から名前順に生徒達が並べられる。そしてここは一年A組、桐嶋美夏きりしまみなつが在籍しているクラスで。美夏は運良く窓際最後列の一つ手前の席に座ることが出来ていた。

しかし、現在は肩に掛けるタイプの学生鞄の中身は空っぽのため、非常に手持ち無沙汰な気持ちに晒されていて。

また既に隣の男子との会話も無難に“退けた”後のために、余計な手持ち無沙汰感を味わつている最中なのであつた。

左手で頬杖を付きながら、窓際の特権である外の様子を伺い見る

……。

「こ」は校舎四階のため、窓の外の見晴らしは最高に良く、学園敷地内にある桜も、その外にある桜並木の風景もまとめて一望できた。学園の校舎の近くには、他にもパンフレットにも載つていた三面ガラス張りのデザインと屋上のテラスが売りの四階建て食堂棟や、地下には近代的なトレーニングルームもあるやたらテカイ体育馆に、サッカーグラウンドとラグビーグラウンドが一面ずつ人工芝の上に白線で描かれたナイターも可能なグラウンドなど、普通の学校の施設とは一線を画した施設が点々としていた。

この学園は敷地は、どれだけ広いのだと疑問を投げかけたいぐら

いに充実した施設の数々。

またこの他にも、各部活動が部室として使用している部室棟や、校内合宿用に建てられた合宿棟なるものまであるから驚きだ……更に言えば、この校舎自体デカイ。

これほどの施設……確かにこれなら、“才能の区画”と呼ばれる第一区から第三区の中で最も個性的で優秀な人材を集めた学園と呼ばれているのも頷けるというものだ。

ちなみに、プールは屋内にあり当然の様に温水も可能で“男女別”だ。

美夏にとつて、ある意味ではこれが一番嬉しい事だつたのかもしれない。

（だつて、お兄ちゃんという至高の存在以外の“汚物共”に私の水着姿を見せるなんて。本当に鳥肌が立ちそうで嫌だつたんだもん……）

その誰とも知れない胸中での咳きは当然誰にも聞き取れない。すると、頬杖を付きながら外を眺めていた美夏の背中に、ツンツンといつた細い指の感触が伝わってきた。

「うん？」

それに反応し、上を見上げる形で振り向く美夏……段状というのは、こういう時に面倒だ。

しかし、美夏を振り向かせた張本人は、そんな事は気にしてないようだ。

「何見てるの？ ほ、っと外なんか眺めちゃつてさ？」

後ろの席に座つていたのは、長身でスレンダーな体型が特徴的な活発な女子、木下藍。

彼女はコバルトブルーの瞳や、赤みがかつたボーアッシュな短髪から、どこか日本人離れした容姿をしているが、先ほど美夏が気になつて聞いたところ、やはり日本人とアイルランド人のクウォーターダーだと言つ事らしかつた。

また、これも先ほど教室に入つてきたばかりの時に聞いたことだ

が。

彼女はバスケットの選手として、ここの一橋学園に特待生で入学したらしく。その腰の位置が高い足だつたり、指の長い手だつたりが何よりも彼女の才能を誇示していた。

「ふふ、だつて桜が綺麗じやない……日本人なら、こいつのを静かに眺たい時だつてあるのよ?」

「そんな感覺、あたしにだつてあるよ。伊達に日本で育つてないし本当に桜が綺麗というだけで嬉しそうな聲音で語る美夏に、木下も楽しそうに微笑を浮かべる。

やはり入学式を終えたばかりかつ、新入生としての始まりを実感し始めたからだろ?」

教室中の空気が、どこか浮ついた調子にあるのを誰もが感じていた。

そりやそつだ、新しい仲間、新しい環境……ワクワクする事など、今は吐き捨てるほどにあるのだから。

すると、一人が他愛の無い会話で交流を深めている、そんな時であつた

ガラガラガラ

教室の一一番前にある鉄製のドアが開けられる音が、不思議と浮ついた空氣で騒がしい教室中に響いた。

その音に、誰もが視線と耳を傾ける……。

「お、全員席に着いてるな」

陽気な声と共に、カツカツとヒールで教室を歩く音が小気味良く鳴る。

教室中の視線を一心に集めながら、教卓へと歩を進めるのは、フオーマルなスーツに身を包んだ、背の高い女性。

吊り目気味なアーモンド形のハツキリとした瞳に、ほんのりと塗られた口紅が魅惑的なぶつくりとした柔らかそうな唇。少々癖毛が

強い長髪に、八頭身を体現した高い位置の腰や長い足。そしてそのピシリと伸びた背筋の所為で、更なる存在を強調している、ウエストとかなり反比例をした大きな胸。

また、黒のフォーマルなスーツの下に着ている白いワイシャツは、胸元がかなり開けられており、健全な男子学生の理性をズタボロに引き裂く程の谷間<sup>ゆきま</sup>が、姿を晒していた……首元に着けられた小さなハートのネックレスが、これまた魅力的だ。

そんな完璧なまでのスタイルを持つた女性が、段状に広がつているクラスメイト達を前に教卓に立つた。

「はい！ まずは入学おめでとさん。色々新しい仲間と話したい気持ちはあるだらうけど、今はこちらに注目してくれ」

教卓に両手を突きながら、前へと気持ちを押し出す形でクラスメイト達に姉御肌全開の声音で話す女性。

「私はお前達にとって、この学園で最初の担任となる大熊月美<sup>おおくまつきみ</sup>って言つんだ。これから何も無ければ一年間、よろしくお願ひな！」

そう言つて、軽く頭だけを下げる大熊月美に、クラス中の生徒が一斉に一礼を返した。

「仰々しいのは苦手だから、お前達も緊張しないでいいぞ？ とにかく、今日は顔合わせ以外にやる事は特に無い。やるとしたら、学級委員とか決めたいところだけど、それもメンディから後回しだ」

勝気でスタイルの良い女性でありながら、恰幅の良い雰囲気を醸し出す大熊の姿勢に、生徒達もどこか楽しそうな先生だなという事を理解していた。

「だから今日はプリントだけ配つて、やる事は明日やる事にする！ 誰か、プリント配るの手伝ってくれる奴はいないか？」

瞬間、クラスの男子生徒の大半が、まだ新入生というひょっこり分際では考えられないキレとスピードで、我こそはと手を挙げ始めた。

「お、良いね～やる気あるじゃん。まあ、何人か下心丸出しの奴もいるみたいだけだ」

「ヤーヤと意地悪に笑いながら、拳手をした男子生徒達を見渡す大熊。

すると、何人かの真面目そうな雰囲気を持つ男子生徒達が、ゆつくつと挙げていた手を下ろしていった。

「言つとくけど、こいつ見えても私は確りと相手を選んで付き合つたイフだから、まだお前達じや十年早いよ。それに高校生なら同年代と付き合つたほうが楽しいしね、そつちに努力の趣を置きな」やはり教師というぐらいの年齢にもなれば、自分の姿勢がどれぐらいのものか客観的に理解できているのか、その口調は自信に満ちたものであった。

「ただ、さつさつも言つたけどやる気は買つてやる。大体下心程度で恥ずかしがる事なんて無いんだ、むしろそれを原動力にして動かないと若者らしくないしな。じゃあ、その一番前の男子、プリント配るの手伝つてくれ」

そう言つて、最前列ど真ん中の席に座つていた坊主頭の男子に指示を出すと。

「はい！」

勢いのある返事とともに、指示を出された男子生徒が立ち上がった。

「お、良い返事じゃないか。お前は何部だ？」

「野球部です」

「ああ通りで……金本先生なら納得だわ」

大熊は他愛の無い会話を指示を出した生徒としながらも、持つてきていたプリントを三つに分けた。

「じゃあ、お前はこれを配つてくれ」

「はい！」

再び勢いのある返事と共に、差し出された一つのプリントの束を受け取る男子生徒。

どうやら大熊は一つの束を自分で配るようだ。

まあ、入学初日の中生徒をいつまでも前に出しておくのは可哀想か

もしけないという配慮からだろう。

そして、二人は分けたプリントを、それぞれクラスメイト全員に配り終えた。

ここからは、ただこれからの約一週間を事務的に伝えるだけだったので、閑話休題させていただく。

配布されたプリントを眺めつつ、高校初めてのHRを終えた美夏は、とりあえずこれから何をしようか考えていた。

先ほど、教卓でこれから予定などを話す大熊の眼を盗んで送った、兄へのメールはまだ返事が来ていないし。学園にいる筈の兄を置いて、先に帰宅するというのもありえない。

どうせなら、入学祝いとして昼食だとか買い物だとか、一緒に外を歩いて回りたい。

しかし、返事が返つてこない事には動きようが無いので、美夏はまた手持ち無沙汰な感じを味わっていた。

他のクラスメイト達は、皆これから家族と食事だつたり一緒に帰宅だつたり……または新しく出来た友人と遊びに行くだつたりと、それなりの賑わいを見せている。

そんな中でも、やはり美夏に声を掛ける男子生徒はいたし、新入生代表として挨拶をした事に興味を持つてくれた同性の者達もいた。だが男子など兄以外汚物としか考えていないこの妹に、薔薇色の高校生活を夢見た連中に靡くなどありえる筈も無く。そのこと如くが絶妙な当たり障りの無い断り方で擊沈していった……もつとも、擊沈したと感じている男子などいなかつた。それほど上手く断つたということだ。

また同性にも同じで「これから兄と予定があるから……」と、本当に申し訳なさそうに断つていた……のだが、やはり格闘家といえども有名人を兄に持つという事には変わりなく、ミーハーな性質を

持つ彼女達から質問攻めに合ひつと/or出来事を味わつた。

しかし、ここでも彼女の驚異的な能力が發揮され。

いかに兄であるあの“異性”が素晴らしいのか？

いかに、その兄に相応しい異性は自分以外には存在しないのか？などの事を語ることを、唇を噛み千切りたいほどに我慢をしながら、いわゆる印象操作を行なつた。

簡単に言つてしまえば、興味を持つた彼女達から、兄という存在をどれだけ薄れさせるか、どれだけ幻滅させるのかという事をしたのだ。

だが、恋に恋するなどではなく、兄との恋愛を生涯をかけて熱望している彼女に。愛する兄を蔑む事など酷な事であり、結果中途半端な形に落ち着いてしまつたことは彼女にとつて誤算であつた。

実際、半々の結果に持ち込んだこと自体、彼女の思いにとつては驚異的な数字だつたのだが……。

まあ、その話題に上がつた当の本人がイケメンというよりも男前に近い、若い女子高生には中々理解され辛い顔立ちをしていた所為もある事にはあつたのも要因といえる。

「さつきは大変だつたね～桐嶋さん？」

「まあ、慣れてるからね。それ程でも無かつたよ」

人当たりの良い陽気な声で、美夏に労いの言葉を送る木下。

今はHRも終わり、各自自由に下校が許されているため、木下は美夏の直ぐ横で机の上に腰を乗せて座つている。

しかし、それにしても背の高い娘だ……と見上げながらに思った美夏ではあつたが、決して口にすることはなく、話を続けた。

「やっぱり中学でも有名だつたの？　桐嶋さんのお兄さんつて」

「そうだね、TVに出た去年ぐらいから急にって感じかな？　もともと、雑誌とかでも取り上げられてたけど、やっぱりそこが一番大きかった気がする」

「へへ、あたしも結構格闘技とか好きだから見るけど、お兄さんつて本当に強いし良い体してるよね。初めて見たときは一つ上だつて

全く気付かなかつたぐらいだし」

「本人はそれを気にしているみたいで、結構『今日年上の人には、年上でしょ?』って言われた』とか言つて悩んでるよ」

あれ……なんだか、この木下という同年代の娘と話していくと、打算なしに自然と会話が出来ている気がする。

もともと中学でも、こんな雰囲気の娘は沢山いて、結構仲良くやつてたけど。やっぱり、サバサバとした性格の人と話すのは気が楽だ。

先の通り、美夏と言う新女子高生は、自身の兄に悪い虫を寄せ付けないために様々な小細工を弄してきていた。

しかし、これは例えば美夏を通して兄と接触を試みようと企んでいる者や、同じく美夏という男が寄り付いてきそうな甘い蜜に集つてお零れを貰おうとする蛆虫以下の同性だつた場合にしか行使されず。木下の様な、打算なしでこちらと仲良くなろうとしている者は機能しないのだ。

また美夏は、これまでの経験からそういう輩の見分け方を心得てるので、まず間違えるということは無い。

故にこの時、不思議な高揚感を感じられる木下に対し、美夏は純粋に友人になりたいと考えた……が、それよりも先に木下の方が同じ事を考えていたようで。

「外見の割りに面白い人なんだね。てか、桐嶋さんも何だかんだで面白い人だよね」

「え、なんで?」

「だつて入学式終つたばかりだつていうのに、いきなり校門前にいたお兄さんに抱きつきに行くんだもん。あの時は流石にビックリしたね。桐嶋さんって、結構ブラコン入つてるつて言われるでしょ?」

この面白がつて問い合わせてきた質問に、美夏は即答で『ブラコンじゃなくて愛しているのよ!』とかなんとか答えそうになつてしまつたが、それはなんとか押し留めることができたようだ。

「ううん、確かに言われたりはするけど、私としては普通に接して

るだけなんだけどな……」

「あれは正直普通じゃないって……まあ、でも兄妹仲が良いつて悪いことじゃないしね。桐嶋さんって他に兄弟いたりするの？」

「うん、小学生の妹が一人いるよ。私よりも、妹の方がお兄ちゃんにベッタリつて感じかな？」

「へ～そうなんだ。桐嶋さんの妹つて事は、相当可愛いんでしょ」

「そうだね、今のところもう既に40人の男の子から告白されてるんじゃないかな？」

「40人！？」

「なんだその魔性の女は！ 半端な数じゃないぞ小学生！？」

木下は、そのあまりに飛び抜けた数字に素で驚きの声を漏らしてしまった。

「え、でもそれってホントなの？ ただ妹さんが言つてるってだけじゃないの？」

「うちの妹は、簡単にそういう事はバラさないからね、すつゝい口が堅いし」

「じゃあ、なんで40人もいるって分かつたの？」

「普通に机の中から出てきたんだよ、40人分のラブレターが」

その事実に、更なる驚きの色に染まる木下の整った顔。

「なんでそんなに机の中に入れてたの？」

「なんだか、折角気持ちを伝えるため一生懸命に書かれたラブレターを捨てるのは悪いから、処分に困つてたんだって。それでドンドン溜まっちゃって、ついには勉強机の一つの引き出しを占領するぐらいになつちゃつたらしく」

「は～……あたしならすぐに捨てちゃつから、あまり理解は出来ないけど。なるほどね、何となく桐嶋さんの妹さんがモテる理由が分かつた気がする」

よく言えば純粋な良い子で、悪く言えばどこか抜けた子……。

まだ見ぬ相手の妹ではあつたが、木下はその娘の事を“きっと将来は末恐ろしい女になるね”と勝手に本人が聞いたらちょっと困つ

てしまいそうな評価を下していた。

「まあ気配りも出来るし家事も出来るし勉強も運動だつて人より出来ちゃう娘だからね。我が妹ながら誇らしい反面、もつと色んな面で楽に構えて欲しいつて感じかな」

「新入生代表を務める桐嶋さんが、そこまで言つなら凄い娘なんだね。でもそうなると、お兄さんが色々と黙つてないんじゃない? ほら、告白してきた子に対しても迫めいたことするとかさ なんかあの人つて、子育てとかしたら過保護つぽいイメージあるんだよね」

子育てというワードを、美夏は一瞬の内に脳内で“子作り”に変換させ妄想を膨らませた後。その様子を全く外見に出さず、直ぐに木下の方へと意識を向け直した。

まつこと、神業がかつた思考の切り替えの持ち主である。

「ああ、それは確かにあるかも お兄ちゃんつて、この学園の近くにある道場で支部長をやつてるんだけど。そこに門下生としている私の妹と同じ学校に通つてている子に対して、遠回しに『妹と付き合いたいのなら、俺を倒さないとダメ』みたいな事を言つたときがあつてね……」

美夏は当時のことを楽しそうに語りだした……。

内容自体、システムを否定はしているが否定しきれなかつた兄のエピソードだつたのだが。

普段TVでしか美夏の兄を見たときの無かつた木下にとつては、どこか新鮮というかイメージ通りの人というか……そんな有名人の新たな一面を発見した時の様な、少し嬉しい気分を味わえたのであつた。

それから数十分後、他愛の無い会話をした二人は、いつの間にかお互いに下の名前で呼び合つよつた関係になつていて。

多分、二人はもともとそりが合つ者同士だつたのだらう。

出なければ、こんなに早く意気投合するところのも難しいというものが。

だが、そんな新しい友人と会話をするという楽しい時間も、そろ終わりにしなくてはならないようであった。

「あ、もう一、三時回ってる……」

「え？ もうそんなに時間経つてたんだ。気付かなかつたよ」

「私もだよ。じゃあ、今日はそろそろ帰るつか？ 私、この後、お兄ちゃんと会わなきやいけないから」

「そうだね。私も家の連中と同じ飯食べに行く約束してたし、そうしようつか」

二人はそう言つて同意し合ひつと、互いに座つていた場所から立ち上がつた。

やはり、高校一年の女子にしては背の高い美夏にとつても、木下藍という女子はデカク見える……しかし、スレンダーな体型のお陰で、特に威圧感などは感じられない。

むしろ、ウエストが55以下の美夏をもつてしても、彼女のしなやかでアスリートの様な体型は綺麗だと思ひし、とても魅力的に感じる。

おそらくこの娘も、色々な男子に好意を抱かれているのであるつ。多分、それに気付いていないかも知れないが……。

先ほど配布されたプリントが入れられた、殆ど空っぽの鞄を肩に掛けた。美夏と藍は共に教室から出る。

お互い御揃いの制服を着た、タイプは違えど見栄えのする者同士なので、ただ並んで歩いているだけでとても絵になる光景を作り出していた。

片や女性らしい膨らみや可愛らしさを持つた、凹凸がハッキリとした体型のタイプに。片やボーリッシュな雰囲気を醸し出しながらも、モデルと見間違えても可笑しくは無いスレンダーな体型をしたタイプ。

これだけでも、思春期の男児ならば小一時間程議論が行なえるというものだ。

一人は四階の階段を急ぐことも無く下りて行き、校舎の一年生専

用の出入口である第三出入口から、履いているものをローファーに履き替えてから外へと出て行く。

ガラス張りの両開きのドアから外へと出ると、そこにはやはり地面であるアスファルトとは対照的な桜の柔らかい色が出迎えてくれていた。

また第三出入口の近くには一年生専用の地下駐輪場があるので、美夏と藍には特に関係の無い施設だったので、一人は現代的なエレベーターと地下駐輪場への坂道などは無視して学園の校門へと足を進めていく。

春の風が、二人の髪やスカートを揺らしていく。

美夏は揺れる髪が顔の前に来るのが嫌なのか、顔の横の髪を片手でちょっとだけ抑えながら歩いていく……その姿はどこかお嬢様といつた雰囲気を醸し出していた。

隣を歩く藍は肩に掛けるタイプの鞄を

こちらの方が楽な

のか  
片手で肩に担ぐようにして持ち、春風に晒される赤み  
がかつたボーグイッシュなショートヘアなどは抑えるのも面倒なのか、  
片目を瞑るだけで対処していた。

「なんだか午前中より風が強いね」

「こういう春風って気持ちは良いんだけど、たまに日に自分の髪と  
か飛んできたゴミとかが入つてくるから鬱陶しいんだよね」

先程からそよ風の様に吹くときもあれば、突然ブワッと日を細め  
たくなる風も吹いている。

だがそんな事よりも、一人は先程一回だけ通つてきた一橋学園の  
様々な施設が見られる広い道を、あっちへこっちへと好奇心の眼差  
しを左右させながら歩いていた。

また、敷地内にも桜の木が所々にあるため、非常に視覚的にも喜  
の感情を高めさせてくれるものであった。

そして、学園の校門へと辿り着いた一人の目に、少々信じ難い光  
景が飛び込んでくる。

「ねえ、あれって……」

「うん、お兄ちゃんなんだうけど……何やつてるんだろ?」

校門の向こう側には、さつき入学式後に歩いた赤い煉瓦が敷き詰められた道の桜並木がある……だが、一人はその桜並木から“一人の男を背負つて歩いてくる”、上をブレザーではなくワイシャツ一枚となつた桐嶋竜蔵に視線を向けていた。

岩石の様な筋張つた太腕と、その腕を後ろに回しているために広がつている大胸筋が非常に力強そうで、後ろに背負つている男を絶対に落さないだろうという安定感を回りに与えていた。

そしてやはり両脇に抱えている、背負つている男の足に挟まれた腹回りは、理想的な逆三角形を描くだけではなく、ワイシャツの上からだというのに六つの筋肉の塊の存在を強調させていた。

また竜蔵のブレザーは、背負つている男の肩に掛けられている。

「ごめんね、ちょっと行つて来る!」

「あ、待つてよ美夏! 私も行くから!」

なんだか訳の分からぬ光景を眺めていた美夏と藍は、とりあえず既に校門を跨いだ竜蔵の下へと向かつた。

「何してるの? お兄ちゃん?」

「うん? オ~美夏か、待たせちゃつたな」

状況がイマイチ理解できないため、案外普通に尋ねた美夏に、竜蔵がちよつと機嫌が良さそうな口調で答えた。

美夏が竜蔵の前に立つと、遅れて藍も駆け寄つてくる。

「うわ! その人、顔怪我してるじゃないですか!」

駆け寄つてきた藍が開口一番、竜蔵の「ゴシゴシ」とした僧帽筋やら広背筋やらの背中に背負われた男を見て驚きの声を挙げる。

最初に駆け寄つてきた美夏はどうやら、兄以外の異性を視界に入れるのも嫌がつた所為で、今氣付いた様であった。

「ああ、ちよつと「ゴイツ」が暴れててね。言つこと聞かないから手つ取り早く済ませたら、こんなんなつてた」

「うわ~……モロ鼻血出てるじゃないですか」

「まあ、もう止まつて乾いちやつてるけどね。ところで、君は?」

「はい？」

金で染められた長髪のせいでなかなか確認し辛いが、確かに竜蔵の言つ通り、背負つている男の鼻血は止まっている。まあ、唇の方も数箇所の切り傷があるし、氣を失つてもいたが。

だがそんな男を背負つても普通に世間話でもしようとする雰囲気の竜蔵に、一瞬藍は呆気にとられた顔をしたが。

「あ、木下藍です」

「背が高いね」。何部に入るの？」

「一応、女バスに特待で……」

「へ、凄いじゃん！ 肌の色とか髪の色とか、もしかしてハーフ？」

「あ、いえ、日本とアイルランドのクウォーターです」

アイルランドと聴いた瞬間、一瞬竜蔵は某有名プロレス団体に所属している白人の選手を思い浮かべたが、おそらく言つても伝わらないと思つたので自重した。

すると、二人の初対面の会話に美夏がどこか不機嫌な表情を割り込んだ。

「ところでさあ、後ろの人、早く保健室に運ばなくていいの？」

「ああ、そうだった、忘れてたわ」

「もう、確りしてよねお兄ちゃん」

「はは。まあ取り合えず、俺はコイツを運ばないといけないから、もう少しだけ待つてくれない？」

「待つてるのは良いけど、なるべく早くしてね？ もうお腹が空いて仕方が無いんだから」

「分かったよ、それじゃあ、また後でな？」

そう言つて、軽い笑みを浮かべながら美夏と藍を過ぎ去つていうとする竜蔵に。

藍が思い出したかのように口を開いた。

「そういえばお兄さん！ 確か、携帯で保健室の方に連絡すれば、直接専用の車とか出してくれるんじゃ……」

藍の言つた事は、この広い一橋学園だけに限らず、学園都市の全

区画で取られている制度であり。

学園都市内に存在する全ての学校・学園には、生徒達の緊急を要する怪我や病気などが起こってしまった際に、すぐに保健室や病院へと運ぶための専用の足……つまり輸送車を用意する事を義務付けられているため、電話一本入れれば現場に走らせてきてくれるという非常に便利な制度ながある。

だが実際には、緊急を要する項目が分からぬために、大抵は保健室などではなく近くの大学病院などに搬送される事が多い。

藍が竜蔵に提案したのは、わざわざ広い敷地内を男一人背負つて歩くのではなく、この専用の足を使ってはどつかといつ事であったのだが。

「いや、一応これって“勧誘”も兼ねてるから、使つ氣はないね」「勧誘”ですか？」

その言葉に、藍は首を傾げざる負えない。

藍の仕草を見て、竜蔵は軽く微笑みながら「結構根性ある奴だつたからさ、ラグビー部に引っ張ろうと思って」と短く説明をした。

竜蔵が所属する一橋学園ラグビー部とは。

学園都市内でも有数の強豪チームとして知られていて、毎年シーズンになると必ず県内の大会で決勝・準決勝には上がつてくるチームなのだ。ちなみに竜蔵は、このチームの フランカ F.L. というポジションでレギュラーを張っている……空手の実力でも格闘技界最高峰の団体に所属し、ラグビーの強豪高でもレギュラーを張るとは、恐るべき身体能力と才能の持ち主である。

しかしここで、普通の思考の持ち主なら疑問に思つことがあるかもしれない。

そんな強豪高の部活に、どうみても素行の悪そうな新入生を無理やり入れるのは大丈夫なのかと?

だが……。

「なるほど、そういう事ですか」

もともと活潑で男勝りな性格をしていた藍は、この短い説明だけ

で何かに納得した様であった。

しかし後ろでは美夏が（早くお兄ちゃん来ないかな～）と、眼中にない異性など気にする価値もないとしても言つかのよつて、次に備えていた。

「でも、根性があるつて言つてましたけど……お兄さん、その人と違つて全く怪我とかしてないですよね？」

納得はした事にはしたが、やはり何か引っかかったのか、藍が素朴な疑問をぶつける。

すると竜蔵が、軽く「ふつ」と噴出した後、口を開いた。

「いやいや、一応俺もプロだからね？ 素人に怪我なんてしてちや、面子が保てないから」

「でも、根性があるつて……」

さも当然の様に言う竜蔵に、少々驚く藍。

だが疑問が解けたのではないので、再び尋ねると。

「それはただ、コイツが手加減したとはいえ膝まともに蹴り喰らつて、ちょっとの間だけ立とうとしてからだよ」

「は、はあ……」

軽い調子で言つ竜蔵に、若干引き気味の藍。

そりやそりや……プロの格闘家が、素人の顔面に膝蹴りを入れたところのだから。

おそらく、背負つている男の背が竜蔵よりも高いため、首相撲からの膝蹴りだとは推測ができるが。それにしたつて、エグイ技で仕留めたものだと、藍は胸中で考えていた。

「じゃあ、美夏待たせる訳にいかないし、俺は行くよ」

「はい、お気を付けて？」

「はは、じゃあね。美夏をよろしく頼むよ？」

そう言って、よつやく竜蔵は校舎の方へと歩いていった。

美夏をよろしく頼む……つまり、状況的に入学式で妹が既に友人を作つたのだと推理したのであらう。

校舎の方へと向かつていく竜蔵を見送りながら、藍は後ろにいる

美夏へと振り返った。

「なんだか初めて話したけど、豪快？　いや、大雑把な人なんだね、  
美夏のお兄さんって」

藍の素直な感想に、兄が戻つてくるのを待つ気持ちに切り替えて  
いた美夏は。

「え？　まあ確かに大雑把と言えば大雑把だけど。確りしてるとこ  
ろもあるんだよ？」

自身の兄の話をするだけで嬉しいのか？

表情にホクホクと暖かい微笑みを浮かべる美夏。

これを見て、藍は胸中で（ああ、やっぱりこの娘は相当なブラン  
ンなんだな）と確信するのであった。

## 新しい環境、新しい友人（後書き）

一応、改訂前の時に書いていたキャラクター達のイメージ絵です。ですが主人公である美夏は、また書き直そうと考えているため、今回は載せていません。

いらっしゃる方は、各自で好きにイメージしてください。

桐嶋竜蔵“美夏の兄”

> i 3 0 0 2 6 — 2 3 7 9 <

木下藍“高校で出来た友人”

> i 2 8 7 6 4 — 2 3 7 9 <

基本コピー用紙にシャーペンで書くド素人なので、この程度のレベルしか書けませんが。今後とも自分なりに納得の出来た絵が描けたら、勝手に載せたいと思っていますので、あしからず……。

『虫籠のK&K』（前書き）

今回以降の更新は、私事の事情によりかなり遅れます。  
よつて、この話は急いで仕上げたために小さなミスがそこかし  
いにあるかもしれません。  
いかちゃんと直そうと思います。

一橋学園から出でている学生バスを使って、本来のバス停とは違つ目的地へと向かう美夏と竜蔵の二人。

あの後、背負つていた男を保健室に預けてきた竜蔵が妙に満足気な表情で戻ってきたときには、既に木下藍の姿は見えず、それを美夏に尋ねたところ。

「藍も、この後に予定があるみたいだったから、先に帰つたよ」との事で、ようやく二人も学園から出たという訳であった。バスの車内は、既に同じ学生の姿は見えず、美夏と竜蔵の貸しきり状態となつていて。

学園にはまだ、生徒会などの生徒達が残つてゐるが、ビリヤード人はタイミングに恵まれたらしい。

故に、人がいない寂しい車内にある後部の一人掛けのシートだけを、美夏と竜蔵で埋めていた。

竜蔵の肩幅が広い所為で、先程からバスに揺られる度に、美夏の肩に兄の鍛え上げられた制服越しの三角筋が当たつてくる……しかし、美夏には嫌そうな表情など一つも無い。

むしろ先程からニヤニヤと嬉しそうに微笑んでいるだけだ。

竜蔵自身、妹の入学式に出席できなかつたことを後悔しているので、なにやら嬉しそうな彼女を見て悪い気はしない。ただ、なんで嬉しそうにしているのかが分からぬのが問題なだけだ。

だが、そんな事は美夏自身理解している……兄にそんな甲斐性があれば、もつと浮ついた話がいくつあっても可笑しくは無いからだ。

「そりゃ、新入生代表の挨拶はどうだつたんだ？　上手く出来たのか？」

「上手くもなにも、ただ昨日書いた挨拶の文章を暗記すればいいだけだつたから、特に失敗したとかは無いけど？」

「暗記ね……俺じゃ無理だな。前に出て体動かすならともかく、何か言つだと宣言するだとかは緊張しちやうからな」  
何と言つ筋……という考え方など、兄を崇拜していると言つても過言ではない美夏には一切浮かぶ事は無い。

むしろ、そんな事を言つ兄にたいして心中で（お兄ちゃんが弱い部分を曝け出すなんて、ギャップ萌え！？ これはギャップ萌えなの？）などと興奮しているぐらいなのだから。

ちなみに、この興奮も外に出すこと無い……いくら愛しているといつても、相手に見せていいレベルとダメなレベルがあるという事を、美夏は一応弁えているからだ。

窓際に座っている美夏の横で、外の風景が流れるように過ぎ去つていく。

その間も、二人の他愛の無い会話は続き。  
いつもとは違つた目的地に到着したときに感じた時間の経過は、それはもう短いと感じるものであつた。

『次は『一橋駅前』一橋駅前で御座います』

バス内のアナウンスが、美夏と竜藏の目的地であつた場所の名前を流し始め。

これに反応した美夏が手馴れた手つきで“降りる”のボタンを押し、隣に座つている竜藏に振り返つた。

「ところで、行く場所とか決めてるの？」

ウキウキとした表情を隠そつともせずに、竜藏を上目遣いで仰ぎ見る美夏。

我が家ながら、それを身内ではなく異性に向けていれば何人の馬鹿が引っかかるのかとを考えた竜藏であつたが。まあ、そんな事をしなくとも既に選り取りみどりな状況なんだろうなと、改めて妹の優れた容姿に感心を覚えた。

しかし、ここで困つたことが発生する……。

「いや、特には決めてない」

「えー！？ 自分から埋め合わせするって言つたのに！？」

「え、俺が考えなきやいけなかつたのか？」

「当たり前でしょ？ もう

実はこの兄、入学祝をすると言つたくせに、ノープランで街に繰り出そうとしていたのだ。

それに、頬を膨らませながら抗議の意思を示す妹。

確かに可愛らしい仕草ではあつたが美夏の場合、それをするには少し大人っぽい雰囲気があり過ぎていたために、どこか滑稽に見える……まあ、グッと来るものが有るのには変わりは無いが。だが向けられている対象は身内である兄なために、全く持つて反応を示さない。

というより、ちょっと困つた表情をしていた。

「あー……いや、今日はお前が行きたい所とかに行こうと思つてから

「言い訳はいいよ。だけど、今度からは自分で誘つたんなら自分で行く場所を決めときなよ？」

「ああ、分かつたよ」

竜蔵が美夏の指摘に不承不承と頷くと、どうやら一度バスが目的地へと到着したようだ。

エアブレーキの音と共にバスはバス停の直ぐ横に止まり、入り口と出口の全ての扉を開放した。

「さて、行くぞ美夏」

「うん……でも、ちゃんと今言つたことは覚えててよね？」

「はいはい」

もともと手荷物など持つていなかつた制服姿の竜蔵は、美夏の荷物を代わりに持ちながら席を立ち、バスを降りていく。美夏も、スカートに皺が出来ないように座つていた状態から立ち上がり、バスのステップを軽やかな足取りで降りていつた。

駅前のバス停という事で、そこのロータリーに並んで立つ二人の

前に。二橋駅と大きな看板に書かれた、それなりに大きな現代風の駅が佇んでいた。

その駅には、これから利用しようという人々が行き交い、周囲には美容院やら飲食店、携帯ショップなどといった様々な店が所狭しと構えており、非常に賑わった雰囲気を醸し出している。

「で、とりあえず、まずは飯だろ?」

「そうだね、流石にお腹空いちゃつてるし

「じゃあ、この辺だとどこにしようかな……」

学園都市の街並みというのは、それほど普通の街とは変わることはない。

変わるとこりとこりといえば、その行き交う人々の殆どが学生というだけで、背の高いビルやゲームセンター、家電量販店など見つけようと思えばいくらでも普通の街と同じ箇所を見つけられる。

だが、これらの店舗や会社を経営しているのは確かに企業の大人たちなのだが、その従業員の殆どは大学生やら学生達の親やら、はたまた学園都市が外から雇つてきた大人たちだつたりと少々特殊な人選をしている。

まあ、この話はここまでにして、今は一人の方へとスポットライトを戻すことにしよう。

竜藏は二橋駅付近で、とりあえず昼食を取れるよつとこりを記憶の中から掘り出していく……。

しかし出てくるのは牛丼屋だつたりラーメン屋だつたりと、男が遊びがてらに軽く済ませるような所ばかり……流石に、妹の入学祝と銘打つたこの状況で、そんな所をチョイスするへマなど竜藏はない。

故に悩む……そして後悔する。

(俺つて、本当に洒落つ気の無い遊びをしてたんだな……)

普段空手仲間だつたりラグビー部の連中どだつたりと、男臭い集まりでしか遊んでこなかつた竜藏にとって、これは仕方の無い事であつたが。手痛い状況に陥つているのもまた事実。

「『やかに兄のチョイスを待つ妹の横で、眉間に皺を寄せながら唸つて悩む竜蔵……。』

傍から見れば、厳つい肉体をした男が眉間に指を当てながら渋い顔をしてこるところ、どうみても怒つていそうな空氣を出していきたので。周りを行き交う者達は美夏の優美な姿に見惚れた後、隣の兄の姿を見てすぐさま視線を反らすという条件反射を起こしていた。すると、竜蔵の頭に一つの店の風景が浮かんだ……。

「そういやあ、あの店つてまだ有つたっけかな？」

「うん？ あの店つて？」

ポツリと呟いた竜蔵の言葉に、美夏がまた再び上皿遣いで覗き込むようにして視線を向ける。

あざとい、なんてあざといんだ……と思つかかもしれないが、兄に對してだけは、美夏は打算抜きで攻めてこる。まあ、それもそれで問題ではあるが。

「いや、中学の時に“鬼姫”つて奴がいただろ？」

その問いかけに、美夏の声音がワントーン下がり、表情に至つてはジト目で竜蔵の事を見る様になつていた。

「いたね、そんな人も」

「そいつと一緒に遊びに行つた時に、教えてもらつた場所があるんだわ。そこならお前も満足できると思つ

「へー、一緒に遊びに行つたんだ（あの『ココラ女と』）」

「ああ、そんときはアイツもやっぱ女子だつたんだなつて考えを改めたな、流石に」

当時を思い出したのか、懐かしむように微笑みながら美夏に語る竜蔵であつたが。

そろそろ美夏のテンションがダダ下がりなのに気付くべきだらう……まあ、身内といつ事で気にしてないといつ事もあることはあるのだが。

「とりあえず、さつさと行くか。俺も腹減つてるし」

「そうだね、そうしよう

一人は各々違ったテンションの具合で、バス停がある駅前ロータリーから歩を進めた。

一人が向かつたのは、駅周辺の大通りをちょっと進んだところにある横道に入った場所で。

そこにあつたのは、第一区に学校があつたり家があつたりする生徒達が良く遊びに来る。ちょっとしたガーデニングや、それに合わせた赤茶色の地面に、ウッドデッキなどでテラスを構えているカフェだつたりが立ち並ぶ、少しお洒落な繁華街であつた。

学園都市では車よりも交通手段がバスや電車、はたまた自転車が主流な訳で。こういった駅周辺の繁華街といった地域には、全く持つて通行人達の邪魔になる車やらなんやらの進入は無い。あるとすれば、深夜や早朝に来る業者のトラックぐらいのものか。

故に駅に近い繁華街を行き交う人々には、そういう突然通路を塞がれるといった心配も無いため。普通の繁華街を歩くときよりも、どこか安心した様子が見られる様な気がした。

まあ、あくまで見られる様な気がしただけだ……本当は、別段学園都市外で見られるものと変わりは無いと言えるかもしれない。だがまあ、そういった無用な時間を喰うといった心配が無いのは事実なのだ。

行き交う人々は殆ど学生……たまに社会人の様にスーツを着た人や、明らかに十代二十代ではない年齢の方々も見る事は出来るが。そういう人たちは、大抵近くのお店やオフィスから昼を求めて彷徨つている人達だと、ここでは相場が決まっている。

そんな大半が学生だらけの繁華街の道を、美夏と竜蔵は肩を並べあつて歩く。

「なんだか、皆こっちを見てるね 私達を恋人同士だと思つてるのはかな？」

今にも油断をしたら思いつきり腕を組んでくるぐら<sup>い</sup>いに、こちらの様子を伺いながら笑顔を向けてくる美夏に。竜蔵は少々うんざりとした表情をしながら。

「勘弁してくれよ……ただでさえ、部内でシスコンシスコン言われてんだからさ。それと、腕は組まないからな？ お前も、もう高校生だろ」

もし、こんな学生だらけといつても、更にその大半がカッフルで構成されている空間で知つてゐる奴らに見つかりでもしたら……桐嶋家の家族構成を知る者たちにとつて、これほど弄り甲斐のあるネタは無いだろ？

ましてや本日付で、同じ高校に入学したのだ。

見つかってしまった時のリスクは想像だに出来ない。

「ふう！ 別に見られたつて良いじやん！ 兄妹同士なんだからさ！ 大体、年齢なんか関係ないじやん！」

「お前は良いかも知れないけど、俺はヤなの。分かつてくれ、頼むから」

そう言いながら、右腕に絡もつとしてきた美夏のオーティ<sup>ト</sup>を反対の左手で押さえる竜蔵。

視線は正面を向いたままで、もはや手馴れたように片手間でやるその光景は。これが一人が外を一緒に歩くときの常識なのだと教えてくれていた。

だが、周りにいる者達

主に男性陣

は納得がいか

ないようで。

『あの野郎、あんなに可愛い子連れてるのに腕も組ませねえなんて

……』

『見せびらかしてるんだろ？ 気分わりい』

『あれ？ あれってもしかして、桐嶋竜蔵じやね？』

といった具合に、嫉妬だつたりという様々な感情が男性陣の中では渦巻いていた。

しかし、ここにいるのは大半がカップルということを前記した筈

だ。

故に、美夏という十人いたら変な趣味の者がいない限り十人が美少女と答える女性に視線を奪っていた彼氏に、彼女による何から制裁が其処かしこで行なわれていたのは言つまでも無い。

お昼時の時間も過ぎ、店からまた繁華街を回るうとする若者達が出てきた事によつて雑多とし始めた道を、いつも通りな感じで歩いていく一人……。

途中、美夏の嗅覚を刺激する、とても美味しいそうな「コーヒー」の匂いがするオープンテラスなカフェを見つけたりしたが。竜蔵が「コーヒーとかカフェオレとかじゃなくて、飯食いに行くんだろう?」と言つたために、美夏は渋々そのカフェを諦めるのであつた……いつか、あの店には絶対に入つてやる。

しかし、いつ昼食に辿り着けるのか?

入学式が終わり、ちょっと新しく出来た友人と他愛の無い会話で時間を潰してしまい、お昼時を逃してしまったまでは良い、そんな事は良くある事で済む……だが、あれから既に一時間も経つたというのに、まだお昼にありつけないとはどういった事なのか?

流石の美夏も、さつきから何やら周りをキョロキョロとしている兄にビシッと言つてやらねばと思つたようで。

「お兄ちゃん? 一体いつになつたらお店に着くの? もしかして迷つたとかじやないよね?」

疑うような視線で、右隣を歩く竜蔵を見る。

が、どうにも反応が見られない……。

これは、もう一回言わねばダメかと考えたとき……。

「あ、あつた」

「ほえ?」

竜蔵の声に、美夏も思わず呆けた声を出してしまつ。

普段の美夏なら、こんな声は出さないのだが……やはり空腹や信頼できる者が近くにいる場合、気の緩みというのがどうしても出でしまうのだろう。

だが、今はそんな場合ではない。

「どこー！ お店どこー！？」

あまりの空腹に、竜蔵の視線を一生懸命に追つ美夏。

「あそこだ。あの縁の店」

そういうて、『ゴツゴツとした手の指で示す竜蔵……その指の先に、視線を向けてみると。

「おお、お兄ちゃんにしては結構お洒落な店が……」

美夏の視線の先に、一軒の縁を基調としたパスタの専門店が、他の飲食店と並んで店を構えていた。

店の窓付近には、視覚的に不快にならない程度の色とりどりな花が並べられ。他にも店の人が育てているのだろうと分かる花が、店先に並べられている花壇に植えられていた。

店の入り口前に置かれている縁の縁に黒いボードの看板に書かれた『祝入学記念メニュー1100円』の明らかに女性による手書きの文字は、年頃の美夏に好感を持たせ。他にも『春の新作メニュー・旬の魚介と春野菜を使用したペペロンチーノ1000円』『だつたり・蛸<sup>タコ</sup>のカルパッチョ680円だにや』だつたりと……非常に今のハングリー精神旺盛な美夏に対して挑戦的なメニューの数々が記されていた。

「あーもう我慢できないよー！ 早く入るー！ ねー？」

「分かったから、いきなり手を引っ張るなよ」

もう我慢の限界だしする必要も無いと判断した美夏は、竜蔵の太い右腕が纏っているブレザーの袖を引っ張りながら、店の入り口へと走つていく。

そして美夏は、兄である竜蔵を引っ張りながら、その店の入り口の扉を開いた……すると。

## カラソカラソ 『いらっしゃいませ~』

扉を開けると同時に、非常に落ち着いた店内の雰囲気と香り、そしてホール担当のウエイトレスの声が二人を出迎えた。

やはり店の外の雰囲気通り、中も濃い色の木材を使用した内装をしていて、非常に落ち着いた雰囲気を醸し出しており。カウンター式のキッチンでは、この店のシェフである「人の男性が衛生面に確りと気を遣つたユーフォームで手際よくパスタ料理を作っていた。

また、照明も明る過ぎず暗過ぎずで、どこか大人の店といった印象を初めて入つた美夏に与えてくれている。しかも、客席も意図的に少なくしてある様で、店内の雰囲気だけではなく、実際にも騒がしくない程度の談笑が聞こえるシックで落ち着いた空間を作り出していた。

そんな中、最初に一人に気付いたウエイトレスの女性が近づいてきた。

「ようこそ『伊藤の空間』へ 一名様で宜しいでしょうか?」

「はい」

「では」案内しますね~「ちらにどうぞ~」

店の名前で笑うものか……特に気にしていない美夏ならいざ知らず、竜蔵はこの『伊藤の空間』というネーミングセンスに吹き出す寸前だった。

そういうえば前もこの店の名前で笑いそうになつたつけかど、懐かしみながらも。

竜蔵は店内という事で、もはや諦めた美夏との腕組をしながら案内された席まで引っ張られていく。

「では、ごゆっくりどうぞ~」

良く外からの日差しが当たる窓際の席に、美夏と竜蔵の二人を案内し座らせたウエイトレスは、メニューを黒いテーブルの中心に置いた後、そう言いながら一度深くお辞儀をし、二人から優美な足取

りで去つていった。

その間中、竜蔵はこの店のウエイトレスが着ている、フリルなどが目立つミニスカートの制服を眺めながら。着ている本人も中々に美人だつたために、ついでにそつちも相手に嫌がられない程度にジックリと見続けていた……。

「……お兄ちゃん?」

対面に座る妹の目が、こちらを覗むように座つてゐる。

「うん? どうした?」

何事も無かつたかのように美夏に視線を向け直し、中央に置かれたメニューを相手にも見えるようにテーブルの上で広げる竜蔵。

ああ、これは誤魔化す気だなと感づいた美夏は……。

「今のウエイトレスの人つて、なんだか垢抜けた感じで綺麗だつたよね」

全く持つて心の籠つてない贅辞……なぜなら、自分が数倍美しい愛らしいと確信してゐるからだ。

「そうだな、多分大学生だろ? 高校生つて感じはしなかつたし」  
「バイトかなと、美夏を見ながら尋ねるが、どうにも様子が可笑しいことに気付く。

何と言つか、表情が読めないのだ……。

機嫌が悪いのか? と考へた竜蔵は。

「どうした? いきなり静かになつて」

「いいえ、別になつてませんよ~」

急にこちらから視線を外し、外の景色を覗き始めた美夏……。  
ああ、これは何かやつちやつたかなと、長い付き合いで培つた経験から竜蔵が察すると。

「水をお持ちいたしました~ 『注文はお決まりでしょ~うか?』

さきのウエイトレスが、水とお絞りを持って再び一人の前に現れた。

フワツとしたショートヘアを茶色に染め、おつとりとした目と雰囲気がこちらに安心感を与えてくれて。まるで彼女のために誂た

かのような胸元の開いたフリルのミニスカ制服は、男性客の視線を一身に集めていた。

そして例に漏れず、竜蔵の視線も彼女が独占し始めた……。

水やお絞りをテーブルに置く際に前屈みになるため、どうしても強調してしまった張りのある肌が魅力的な大きな胸に、竜蔵は鼻の下を伸ばしてしまった。

「あ、もう少し待つてもらえますか？」

そう言えばとオーダーを催促された事を思い出した竜蔵は、すぐさまメニューの方へと視線を向けなおす。

これはいくら本能的な反応だったとしても、妹の前でだらしない顔は出来ないと判断した竜蔵なりの行動だったのだが……。

「……スケベ」

（うつ……）

もはや頬杖を付きながら、顔は外に向け横目だけでメニューを見

ている美夏に、小声で棘のある言葉を突き刺されてしまう竜蔵。

声音的に機嫌も悪ければ、態度もメニューに向いている視線も最悪な妹。

だが内面はというと……。

（ふふふ、お兄ちゃんが私の機嫌を伺つてる……ちょっと悪い気もするけど、私と一緒にいるのに他の女に目を奪われたお兄ちゃんが悪いんだから、もう少し楽しませてもらおつと）

折角の入学祝に主役の機嫌を悪くさせてしまつたと罪悪感を感じている兄を、まるで弄ぶかのように楽しんで観察していた。

「じゃあ、俺は明太子の和風パスタで。その……お前はどうする？」しかし、そんな妹の内面など知らない竜蔵が、よそよそしく低姿势で何をオーダーするか尋ねてくる。

一生懸命にこちらの機嫌を直そうとする兄の様子に改めてグッと来ながらも、美夏は努めて内面を外には出さずに面倒臭そうな態度で「じゃあ祝入学記念メニューと食後デザートでイチゴローブルフエ」と常時ニコやかなウエイトレスに注文した。

ちなみに、美夏が頼んだイチゴDXパフェとは、メニューに表記されている値段が4000を超えていた。

「かしこまりました」 ではオーダーを再確認しますね 明太子の和風パスタお一つ。祝入学記念メニューとイチゴDXパフェをそれぞれお一つで宜しいでしょうか？」

「はい、お願ひします……」

メニューに載っている値段を暗算で合計した竜蔵は（ああ、これで俺の財布から諭吉が一枚旅立つわけだ）と、金は天下の回り物という世の理を悟り始めていた。

その様子を見て、美夏のS心が段々とボルテージを上げていく。（じゅるり……まずいわ。さっきまでの私の空腹を、お兄ちゃんの沈んだ表情が満たしていつてしまっている。これは、品が来るまで持つのかな？）

何度も言つが美夏という妹は、外見は至つて平然を装つてゐるが、内面はもはや眼が充血し涎も口端から漏れ出てしまつほどに興奮をしている。

すると、そんな外見だけは空氣の悪い一人の様子を眺めていたウエイトレスさんが、何か気まずく思つたのか。二人の仲をフオローするために口を開いた。

「今日は“彼女”さんの入学式だつたんですか？ お一人とも制服みたいですし」

瞬間、美夏の表情が一気に綻ぶ。

当然だ、何せ兄妹でも親子でもなく“学生カップル”だと思われていたのだから。

「こちらの空氣を和ませようと一コやかに微笑んでいるウエイトレスさんに、美夏は緩みきつた幸せそうな笑みを向けた

「はい」 そうなんです～

どう考へても嘘の肯定なのだが、事情を知らないウエイトレスさんにとっては、この反応は眞実なのだと錯覚してしまう。

「良いですね～、私もそういう入学を祝つてくれる人とか欲しかつ

たな～」

これまで営業のために丁寧な物腰だったウエイトレスさんが、妙に砕けた調子で美夏を羨ましがる。

おそらくこれが、女性店員と女性客が砕けあつた時の様子なのだろうと、田の前で見ていた竜蔵は考えていたのだが……そりではない。

「あ、いえ。俺とコイツは別に……つー？」

盛り上がる二人の間に入つて、己と美夏が兄妹であると説明しようとした瞬間。

インテリア調の黒いテーブルの下で、竜蔵の右足が美夏のローファーを履いた左足の踵によつて踏み潰された。

暗に『お兄ちゃんが悪いんだから、今は黙つてよしね』と、目の前でウエイトレスさんと談笑している妹に警告された気分に陥る竜蔵。

一瞬抗議の言葉を吐こうとした竜蔵であつたが、確かに何が原因か分からぬが、悪いのは自分なので、ここは黙つていようと即座に決心するのであつた。

本当に、こいつた場面に滅法弱いなと、桐嶋家の男……桐嶋竜蔵は、己が弱点を再確認した。

「美味しいなこれ！」

「うん 確かに美味しいよ！ こんな店を“鬼姫”さんが知つてたなんて意外だつたな～」

二人がテーブルに並べられた、自分のメニューを食したときに思わず出でしまつた素直な声。

その中にはどこか棘のある部分もあつたが、特に他の女性の名前を懸々出した妹 概ね味に関しては良好どころか絶賛の域に達していた。

「明太子と和風つて書いてあつたから、結構しょっぱいかとも思つてたけど。いい具合に醤油加減とかが効いてて、これは誰でも食えるな」「

竜蔵がフォークだけで食していた明太子の和風パスタは、もともと濃い明太子の色を刻み海苔やネギ・大葉などを散りばめて調和させた盛り付けがされており。茹でる際に塩を少々絡められたパスタの匂いと相まって、非常に食欲をそそる風味を醸し出していた。

そしてそれを食せば、バターと醤油が混ぜられた明太子の味が竜蔵の舌を満たしてくれる。

これは、濃い目の味付けが好きな竜蔵にとつては最高のメニューとなつたことであろう。

「へへ、ちょっとだけ私のと食べ比べしてみようよ」

そう言つ美夏の前には、祝入学記念メニューとして特別に作られた品がテーブルの上に置かれていた。

一つはマグロの焼きカルパッチョという、オリーブ油で軽く焼かれたマグロが薄切りにされ、水菜・リーフレタス・マッシュルームと共に桜の花が書かれたお洒落なお皿に盛り付けられた料理で、横には薄切りにされたレモンが添えられている

そしてもう一つは、なんとまあパスタ専門店だからこそ出来たことなのか？

唐辛子とニンニクを入れたオリーブ油を味付けとして使用した、ちらし寿司の様な色合いのパスタ料理だ。また、パスタにはもともと、軽くマヨネーズを絡ませていて、本当にちらし寿司のご飯の代わりとしてパスタを使った様に見えている。

「そうだな」

美夏の提案に、竜蔵はスッと自分が食べていた明太子の和風パスタを前に出す。

しかし、当の美夏はといふと……。

「違うよお兄ちゃん」

「へ？」

何が違うのか……いきなり言われた竜蔵は、全く持つて田の前で悪戯に微笑んでいる妹の思惑が理解できていなかつた。

だが、そんな竜蔵のキヨトンとした表情を見て、美夏が甘えた様な声音で言葉を続けた。

「そのフォークで食べさせて？」

「ぶつ！？」

あ～んと、こちらに身を乗り出して口を開ける美夏に、竜蔵は思わず吹き出してしまう。

「何言つてんだよ……」

「だつて、私のフォークにはもうオリーブ油とかマヨネーズだとかが着いちゃつてるし、混ぜるわけにはいかないじゃん明太子とは？だから早く～？」

喋るために戻した口を、再びあ～んと開き直す美夏。

さつきまでの不機嫌さはどうしたと呆れる竜蔵を他所に、田の前の妹は本当にウキウキとした表情で、こちらからパスタを口に運んでやるのを待つている。

どうしてこんな事を……と、頭を抱えそうになる竜蔵であつたが。「彼氏さん彼氏さん、祝いの席なのですから、ijiは“ズドン”と行つちゃいましょう！」

いつの間にいたのが、先程のウエイトレスが小声で囁くように、竜蔵に向けて謎のエールを送つてきていた……更に言えば、決して広くは無い店内でバレバレだというのに、近くにある他の席との仕切りに身を隠しながら、こちらの様子を伺つていた。

何をしてるんだ、この人はと呆れながらウエイトレスが隠れている仕切りに視線を送るが。こちらの様子を影ながらに伺つているウエイトレスは、何故か自信満々な表情で“いったれ”というニコアソスを込めたサムズアップをこちらに送つてきた。

心なしか、真剣な表情の割りに眼が興奮しているようで怖い。

「は・や・く？」

そして視線を正面に戻せば、眼を瞑つた状態で来るのを待つてい

る妹の姿が……。

実際、この妹は身内としての巣原田に見ても可愛らしいし綺麗だと思ひ。

口を開いている事で強調される、オリーブ油で艶やかになつた唇や歯並びの良い白い歯。精端な鼻つきや優美な細さと曲線を描いた眉毛……また彼女が意外と自分のチャームポイントだと良く主張している長い睫毛まつげは、確りとカールを描いている。

これで、一切のメイクを使用していないというのが殊更じよぞうに驚きだ。何故メイクを高校生にもなつて一切していなかと言えば……簡単に言えば、竜藏が『やっぱ女人人はすっぴんが良いよな』と以前に漏らしたことがあるのが原因だ。

「ファイトですよー、彼氏さんー！」

待機中の妹を困つたように眺めていれば、横から飛び込んでくる巨乳ウエイトレスの鬱陶うとうしい小声。

その仕切りの影に隠れているウエイトレスに気付いてか、周りの客達もこちらの様子に気付いたようだ……。

『ほら、あそこ見て見て！　彼氏が照れちやつて初々しいわね～』

『あの娘も綺麗な子だけど、彼氏もガタイ良すぎるだろ……何やつてる学生なんだ？』

『うわ、あの娘メチャメチャ美人じゃん！　高校生なのにー…』

『なに他の女に目えやつてんのよ……後で、分かつてるわよね？』

といった具合に、好き勝手に騒ぎ始めていた。

突然周囲からの生暖かい視線を向けられるようになつた現状に、竜藏は居心地悪いと感じていたが……田の前で楽しそうに待つている妹は、今日入学式だつたのだ。

それをどうしても外せない事情で直接見に行けず、せめて祝いだけでもと誘つた昼食。

更に言えば埋め合わせと謳つた手前、これは罪滅ぼしでもあるのだ……。

（仕方ないか……）

様々な葛藤の末、竜蔵は自身のフォークで明太子の和風パスタを絡めとり始めた。

量は丁度、美夏が一口で食べられる程度のもの……。

普段、絶対にこいついた事はやらなかつただけに。竜蔵の行動を田の前で、薄田にしながら見ていた美夏は。

（え！ 嘘！？ 本当にやつてくれるのつ！？ ど、ビビビビうしょう！ おふざけのつもりだつたのに、いきなりこんなビッシグサップライズにつ！-）

興奮のボルテージが最高潮に上がつてしまい、注意しなければ今にも鼻息が荒くなつてしまいそつなほど混乱していた。

とはいえ、折角のチャンス……ここは、必ずものにする…！

竜蔵がフォークに絡めすくい上げた、明太子のソースが確りと着けられたパスタの麵が、美夏の開けられた口へとゅっくりと運ばれていく……。

それを気配で感じ取つた美夏は、もはや赤面している兄が直接口まで運んでくれるまで一切の動きを見せずに待ち続ける。

徐々に、徐々に近づいてくる美味しそつな匂いは、美夏の嗅覚を刺激して……遂に。

「あむ……」

その開いていた口へと運ばれた。

同時に艶かしく唇を閉じながら、もぐもぐとし始める美夏を赤面している竜蔵は見守る。

「ど、どうだ……？」

妹の口がつけられたフォークなど気にするよつ性格ではない竜蔵であつたが、自身が美味しいといった品が相手にはどう感じるのかは気になる様だ。

すると、尋ねられた美夏は確りと口に含んでいたパスタを食した後。

再び悪戯な笑みを浮かべながら、竜蔵へと口を開いた。

「うへん……一口じゃ分からなかつたから、もう一回して」

たつた一回だとしても、それで味を占めてしまった美夏が再び竜藏に酷な事を言ひ、「……が、当の竜藏は。

「調子に乗るな。もう絶対にやらないからな……」

必死に赤面している顔を直そつとしながら、極めて不貞腐れたよう言い放つた。

「え～ヤダ！ もう一回してよ～！」

「絶対にやらない！ 僕はもう絶対にやらない……」

甘えた声で抗議する美夏に対し、まるで血の匂いに言い聞かせるように突っぱねる竜藏。

こうなると、自身の兄は絶対に言ひことを聞いてくれないと知っていた美夏は……。

「ぶー……ケチ」

「勝手に言つてろよ」

頬を膨らませながら引っ込む美夏に、視線も合わせずに返す恥かしがり屋な兄。

その様子を仕切りの影から覗いていたウエイトレスは……。

「彼女さん彼女さん！」

「うん？」

そのバレバレにも関わらず小声で呼びかけてくるウエイトレスに、実はさつきから存在に気付いていた美夏が不思議そうに振り向くと、「今度は彼女の番ですよ！ 彼氏さんの口に“ズドン”です！」

「！」

「はつ～？ そうか～！」

まるで天啓を得たとばかりに衝撃を受ける美夏であつたが……。

「それも絶対にやらない！ 絶対にだぞ～？」

「え～別に私は気にしないから良いのに……」

先に竜藏から釘を刺されてしまった。

しかし、この様子を仕切りの影から覗いていたウエイトレスは……。

「彼氏さん、それはいくらなんでも根性なしのやうなものですよ……

普通、そんな可愛い娘から言われたら即決でOKを出す筈ですよ？

だというのに、それは余りにもチキンというものです」

やれやれ、これだから最近の男はと首を振りながら溜息まで吐くウエイトレス……。

一体お前は何様だという視線を、竜蔵が思いつきり送つていると。「こら、仕事をサボつて何をやつている！」

「ああつ！？」

突然、仕切りの影に隠れていたウエイトレスの頭頂部に、厳格そうな顔をしたダンディズム剥き出しなナイスミドルが後ろから拳骨を振り落とした。

鈍い音と共に、間抜けたウエイトレスの声が店内に響く。

その様子を、先程まで色々とピンチだつた竜蔵と、原因である美夏が眺めていると。

「申し訳御座いません、うちのウエイトレスがお客様方にご迷惑をお掛けしたようで……」

巨乳ウエイトレスの頭頂部に拳骨を落した背の高い男性が、美夏と竜蔵の一人に深々と頭を下げた。

「あ、いえいえ、お気遣い無く……」

あまりにも突然、客前で拳骨を喰らわせるシーンを見た竜蔵が、頭を下げた男ではなく拳骨を受けたウエイトレスの方へと視線を向ける。

ウエイトレスは、痛そうに熱を持った頭頂部を両手で擦りながら涙目になっていた……不覚にも可愛いと思つてしまつたのは内緒だ。竜蔵の言葉を受けて、深々と頭を下げていた背の高いダンディな男が、顔をゆっくりと上げていく。

短く整えられた顎鬚に、確りとセツトされた白髪混じりのオールバック。鋭い眼光に筋の通つた鼻や、程よい具合にある顔の皺……それは微妙に骨ばつた輪郭や彫りの深い顔の造形も相まって、非常に味のある男という雰囲気を醸し出していた。

またスタイルも良く、身に纏っているウエイターの衣装が若い従

業員よりも様になっている。

そんなナイスミドルが、顔を上げると同時に竜蔵へと視線を合させた。

「いえ、そういう訳にもいきません。お客様に『迷惑をお掛けしたのは事実ですので、私から確りと、この娘には言い付けておきますので』

「あ～別に良いですよ。こちらのウエイトレスさんも、悪気があってやつていた訳じゃないんですし」

むしろ結果的に見れば、何故か機嫌の悪かつた妹の機嫌を直すことが出来たのだ。

お礼を言つのは、逆に「ツチのほうだと竜蔵は続けよつとしたのだが……。

「お客様のお気遣いは大変嬉しいのですが、何分、このウエイトレスはこれが初めてではないのです」

「あちや～……」

既に痛みでへたり込んでいるウエイトレスに一人で視線を向けると。

「いたた～……つて、え？」

痛む頭を押さえながら、ウエイトレスが何を話しているんだといつた表情で、竜蔵と背の高い男の顔を交互に見た。

すると、背の高い男が口を開いた。

「お前は先に裏に行つていろ。話しさは後でする」

その怒氣の含まれた静かな予告に、ウエイトレスは何やら小動物の様に涙目になりながら。

「え～！ 私はお客様の仲を更に進展させよつと……『裏に行つていろ』……はあい」

必死に抗議をしようとしたのだが、それはダンディな男の低く魅有力的な声の一言で封殺されてしまった。

するとウエイトレスがゆっくりと立ち上がり、しゃぼくれた様子でトボトボと裏へと消えていく。

それを見送つた後、ダンティな男が再び美夏と龍藏の一人に向き直つた。

「改めて本当に申し訳御座いませんでした。先程申し上げたとおり、確りと私の方から言い聞かせておきますので」

「いえ、そんなに気にしないですし……むしろ、少しだけ助けてもらつた感じもするので」

「ええ、私も楽しかつたですし……」

ダンティな男の誠意ある謝罪に、流石にここまで謝られてやる！ 人は逆に恐縮してしまつ。

「せうですか、では、そのお言葉も添えて確りとお聞きをおます」

そんな二人の様子を見てか、ダンティな男は突然これまで厳しそうだつた表情を一ヶコリと綻ばせた。

美夏と龍藏は、その途端に雰囲気を変えた男に呆気に取られる…

…。

ペースが分からぬ、まさにJの一言に反きた。

すると、ダンティな男がそのまま言葉を続ける。

「J安心ください、あのウエイトレスが眞面目にお客様方に対して接していたことは、確りと理解はしていますので」

そう言つたダンティな男に、龍藏がホッとした表情で尋ねる。

「じゃあ怒るにしても、そんなに厳しくしないであげてください」

「はつはつは！ 大丈夫です、私は怒るにしても厳しい方ではないので」

「お願いします」

「どうぞお任せ下さい」

ペースは独特なものがあるが、話してみれば普通のおじさんだと感じた龍藏は、若干男に対して砕けた様子を見せ始めた。

流石に、あまり人見知りをしない龍藏ではあっても、いきないの第一印象が怒つていたときのものでは、ちょっとだけ萎縮してしまつと言つことだ。

そこにはプロの格闘家と言えども、まだ子供とこいつだらうが……。

竜蔵と男が向き合つていると、美夏が何か気になったのか、男に向かつて口を開いた。

「あの、アナタはこここの店長さんですか？」

その問いかけに、男は竜蔵から美夏に視線を移しながら。

「はい、ここ『伊藤の空間』の店長は私です。どうして分かつたのですか？」名札などは着けていないのですが……」

「なんとなく雰囲気で聞いただけです。なんだか他の方とは違つた感じがしたので」

「ははは、なかなかに鋭い恋人さんですね？」

茶化す様な声音で、竜蔵に聞く男。

竜蔵は、それに対してもう何を当たり前なといった表情で答えた。

「まあ、他の人は若い方ばかりですし」

一見すれば失礼な物言いだが、ダンディな男は特に気にした様子も無かつた。

「確かに、ここ学園都市に飲食店を構えているのは若い専門学校の方々か、私の様な枯れた男ぐらいなものですからね」

自虐的ではなく、これは正に本当のことだ。

学園都市に住んでいる人間の中で確かに“大人”という年齢層は決して少なくは無いが、基本都市の年齢層は学生が多いために、現場で働いている者達の殆どはアルバイトの学生が占めているのだ。それはごく当たり前なことで、例外といえば大学生や専門学校生達が研究や現場研修として店を構える、または経営するなどといった時の事……または一部の天才と呼ばれる者達がいた時だけだ。

よつて、逆に経営者や管理職などといった重役を担うポジションには、やはり“大人”が就く事になるのが当たり前なのだ。

「そんな枯れたなんて、十分姿勢も良いですし若々しいじゃないですか」

お世辞ではなく本音でフオローをする竜蔵。

流石に、目の前で店長が本当のことを喋っていたとしても、自虐の入ったネタを混ぜてきたり若者としてフォローをしなければならない。

そのフォローを素直に受け止めたのか、店長の男はコホンと咳払いをした後。

「ありがとうございます。一応こう見えても、昔は武術の方を嗜んでおりましたので」

「へえ、どんな武術なんですか？」

「これに食いついたのは再び竜蔵だ。

まあ、格闘家としては当然の反応か……。

しかし、男は武道でも格闘技でもなく“武術”といった。

これに気付かない筈が無い竜蔵の相手を知りたいといった好奇心は、徐々に高まってきた。

だが、店長の男は興味を持ち始めた竜蔵に対して、どこか恐縮した様に答えた。

「いえいえ、おそらく言つたとしてもマイナー過ぎて」「存じないと思いますが……」

「そんな事いわずに、気になるので名前だけでも教えてくださいよ」若干置き去りになつていてる美夏が、表情を不機嫌そうにしだすも、興味が店長の男へと向いてる竜蔵にとつては関係の無い話だ……。後々、また大変な事になりそうで怖いが。

「そうですね……では、恐縮ですが」

「はい、どうぞ」

「伊賀流徒手格闘という、古武術から派生した流派の武術なのです  
が……ご存知でしょうか？」

先程から促してはいたが。

もちろん、本人自身がマイナーと言つただけあって。  
「すみません、やっぱり分からぬないです」

竜蔵は知る由もなかつた様だ。

しかし、店長の男は結局知らなかつた竜蔵に対して、別に気にし

た様子も見せず。

「いえいえ、これを聞いた他の皆さんも同じ反応をしていましたので、別に謝ることもありませんよ」

はつはつはと笑いながら、龍藏に話をするなと並んで店長の男。すると、その店長の男が、今気付いたかのように、龍藏に向けて小声で声を発した。

「そういうば、間違っていたのなら失礼なのですが……もしかして、格闘家の桐嶋龍藏さんですよね？」

周りに聞こえない様に気遣いをしているのか、耳打ち出来るぐら

いに近い距離で尋ねられた龍藏。

しかし、別に周りにバレようとするタイプでない龍藏は、特に間も置かず答える返した。

「はい、そうですよ。良く自分の顔なんて覚えてましたね？」

「やはりそうでしたか……いえ、顔もそうなのですが。やはり肉体の方で気付いたのと、以前他の女性の方といらっしゃった時にお見かけした時がありましたので」

間違えなくて良かつたところより、本当に嬉しそうに微笑む店長の男。

それに“他の女性の方”といつワードで気まぎらうな表情をした龍藏。

「はは、あの時ですか」

だが、本人も店長の男も、そのワードには特に触れずに当時事を思い出していた。

と、ここに店長の男が、なにやら突然気まずそうにし始めた。何となく仕草で店長の様子が可笑しいのを察知した龍藏は。

「どうしたんですか？」

「あ、いえ。そのへ大変困々しいお願いを、桐嶋さんに申し上げたのですが……」

「はい、なんでしょうか？」

妙に畏まった口調に、龍藏は不思議そうにしてくると。

「「うちの店……というより、学園都市の大半の飲食店には外の飲食店とは違つて、その……いわゆる、有名人のサイン色紙というのが飾られてないのです」

ここまで聞けば、このダンディな店長が何を言いたいのか龍藏でも分かるといつものだ。

「ああ、なるほど、そういう事ですか。良いですよ別に？」

「本当ですか！？」

龍藏の許可を得た瞬間、店長の表情がパッと明るくなる。年齢も中年を過ぎていそうな感じがする渋いおじさんではあるが、いつもこの時は誰だつて子供の様な笑顔をするものだ。

もちろん、相手がおじさんといえども、ここまで喜んでくれれば龍藏も悪い気はしない。

というより、サインを身内以外から求めただけで、かなり嬉しいものがあるのだが……。

「ええ全然構わないですよ」

そんなこんな嬉しさからか、龍藏が上機嫌で微笑みながら店長の男の再確認に返事を返す。

すると店長の男は。

「なら、今すぐに色紙とペンを持てきますので。料理をじゅつくり堪能しながらお待ち下さいね！」

「は、はあ……」

田の色を変え、異常なまでに張り切った様子の店長の男に、上機嫌だった龍藏の機嫌が一瞬で引き気味にされる……。

しかし、そんな龍藏などお構い無しに、許可を得た店長はそそくさと裏へと消えていく。

「サイン書くんだ」

その兄と店長の男のやり取りを、かなり置いてけぼりな状態で眺めていた美夏が意外そうに言葉を吐いた。

妹の言葉に、若干面を喰らつた状態の龍藏が視線を向けなおすと

「まあ、断る理由も無いしな」

「ふうん……妹の入学祝いの最中なのに？ 頼まれたからっていつて書いちゃうんだ。入学祝いの最中の妹を置いてけぼりにしたのに？」

やはり気に障っていたのか、棘のある口調で美夏が竜蔵を再び攻め始める。

これにまた何も言えなくなる竜蔵……本当に、こいつた事には滅法弱いようであった。

その様子を見て、美夏が今田何度田か分からぬ悪戯な笑みを浮かべると。

「悪いと思ってるなら、罰として、食後に来るイチゴロ×パフェと一緒に食べること」

といつ、また周囲から生暖かい視線を向けられそうな事を言い始めた。

だがまあ、この程度なら、さつきの恥かしさと比べればと腹を括りとした矢先……。

「もちろん“同じスプーン”でね」

竜蔵はこの瞬間、人生で初めて妹に本気で頭を下げるのであった。

えらい目に合つた……。

『伊藤の空間』から会計を済ませて出てきた竜蔵が、一番最初に思い浮かべた言葉だ。

あの後、イチゴロ×パフェを同じスプーンで食べるといつ恥辱の極みを味合わずには済んだのだが。

またいつの間にかに復帰していたのか、あの巨乳ウエイトレスが再び美夏と今度は店長まで煽りだし。まさかまさかの“店内公開食べさせ合いつこ？”という、もし知人が見ていたのなら、そいつを撲殺しなくてはならなくなるイベントを強制されたのだ。

店内では生暖かい視線を送っていた他の客たちも、なぜかいつの

間にか美夏と巨乳ウエイトレスの味方となり、こちらを煽る始末……。そして、更に最悪だったのが、食べさせ終わつたあと、皆から謎の拍手や指笛を貰う最中起きた、店長の『サインくれよ』のコール。もともと竜蔵の外見を見て、もしかしたらと思つていた客もいたよつて、その時は本当に恥かしくて死ねると思つたぐらいであった……。

これがもし、妹などではなく本当の彼女だったのならと考へる竜蔵。

しかし、それはそれでかなり恥かしいものがあると氣付く竜蔵。どつちにしたつて、恥をかくのは変わらないと氣付いた竜蔵。救われない……本当に救われない。

また、この時の竜蔵は知る由も無いが、店長が悪乗りして取つた美夏とのシーショット写真が、あの店に飾られこととなつた竜蔵のサインと共に飾られているという事が、近いづけに起つ事になる。

まあ自分、竜蔵は『伊藤の空間』という敵か味方か分からぬ空間には近づかないと思うが。

そんなこんなで現在、お腹を満たした一人は再び繁華街を練り歩いている。

目的は入学祝のプレゼント……。

竜蔵はとりあえずマグカップでも買ってやろうかと考えていたようだが、それは美夏の『ヤダ、ペアリングが良い』という理不尽な要求により却下された。

だが流石に妹とペアリングなどするつもりはない竜蔵は、店についた瞬間に自分が気に入ったアクセサリを購入して、有無も言わさずに手渡す算段を企てていた。

すると、そんな時であつた……。

ドン

「あやつー！」

さっきまでの赤茶色の地面ではなく、白い煉瓦が敷き詰められた人通りの多い道を一人で歩いていると。突然、竜蔵の左胸に、丸眼鏡と三つ編みお下げが特徴的な昭和チックな少女がぶつかってきた。

「あ、おい！」

鍛え上げられた厚い胸板にぶつかり、弾かれるように転びそうになる少女の手を、竜蔵が咄嗟の反応で伸ばした左手で掴み取る。それにより、少女の華奢な体が地面に倒れるという事態は回避されたようだ。

「あ、ありがとうございます……」

ぶつかって倒れそうになつた事に相当驚いたのか？ 少女が狼狽しているかのように、手を取り引っ張つてくれた竜蔵を見上げる。だが、一応お礼は言えるようであつた。

「いや、こっちもすみません……って、あれ？」

転びそうになつた少女の手を取つたまま、竜蔵が何かに気付いたようだ。

（やばい、同じ制服だ……）

そう、なんとたまたま妹の入学祝いのために訪れていた繁華街で、同じ学校の生徒とまさかの遭遇を果たしてしまつたのだ。

更に言えば、この丸眼鏡に三つ編みお下げが特徴的な少女を、竜蔵はどこかで見たことがある……。

それがどこかと思い出そうとしている。

「あの、すみません！ 私、急いでますので…」

「あ、ちょっと！」

突然、少女が焦った雰囲気で竜蔵の手を振り払い、そのままどこかへと走り去つてしまつた。

その後姿を見送つた竜蔵は。

（なんだ？ てか、外見の割りに足が速えな）  
と、脳内でクエッショングマークを浮かべながら、そんな事を呟いていた。

「なに？ いまの人……同じ学校だったみたいだけど、態度悪過ぎない？」

これまでの様子を隣で黙つて見ていた美夏が、悪態を付くよつて先の少女に対して嫌悪感を示す。

まあ、この妹の場合、兄に手を合法的に握られた事に対して嫉妬を覚えているだけなのだが。

「さあ？ まあ怪我が無かつただけでも良いんじゃない？」

機嫌の悪い美夏は流しながら、竜蔵は再び視線を歩いている方向へと戻す。

するとそこへ、なにやら違和感を感じた。

正確に言えば、ブレザーの左胸にある一橋学園の校章が刺繡された胸ポケットに、何か紙切れの様なものが入っているのだ。

それを、めげずに腕を組もうとしている美夏をあしらいながら、右の手で取り出し広げてみると。

「ツー？」

「うん？ どうしたの、お兄ちゃん？」

紙切れの開かれた場所を見た瞬間に表情を一変させた竜蔵に、美夏がようやく気付いたのか、不思議そうな聲音で尋ねてくる……。

だが、竜蔵の表情の変化は、すぐに収まってしまったようだ。

「いや、なんでもない……とりあえず急いで。下手したら“千秋”

がへそを曲げる

「え？ あ、待ってよお兄ちゃん」

突然先を急ぐために、歩くペースを上げた兄に、美夏が“そんな事無いのにな”と思いながらも付いていく……。

今さつき竜蔵が開いた紙切れは、既に左の胸ポケットという元の場所に収められている。

その紙切れに書かれていた内容とは……。

『明日の放課後、学園の屋上で待っています。来なかつた場合、  
今日起こつたことを包み隠さず、新聞部の方々へリークします』。

もちろん“執行部”的話も含めて……』

同じ執行部の“忍者”より、待つてますよ～

『伊藤の絵画』（後書き）

絵を描こうとしたがどう無理でした。

## 幕間 尖った青春の変化（前書き）

入学式後に起きた事件の話しです。

## 幕間 尖った青春の変化

目が覚めたのは、夕日が殆ど沈んだ時間だった……。

俺が仰ぐ天井には、おそらく取り替えたばかりの蛍光灯の明かりが眩いばかりの白光を放っていた。

その光に目を細めつつも、俺はある事に気付く……。

(ここに、どこだ……?)

何故だか朦朧とする意識の中で、突然襲ってきた顔面の痛み……心なしか、首の方にも鞭打ちを起こしたときの様な痛みが走っている。

俺は、この痛みに堪らず、天井を仰いでいた状態から起き上がるうとするも。

「あ……」

起き上がるうとした途中で、目の前の視界がぼんやりと霞がかり、俺の上半身を再び寝た覚えの無い、純白のシーツがしかれたベットに引き戻していく……いや、落ちていったといった方が正しいのかもしれない。

ギシ　　と、ベットのスプリングが、衝撃を吸収する音が聞こえた。

すると、ベットの周りを囲んでいたカーテンの向こう側で、なにやらシルエット的にスタイルの良い女が、座っていた椅子から立ち上がるのが見えた。

そしてそのまま、俺が寝ているベットと外を仕切つているカーテンが無遠慮に開けられる。

「あら、ようやくお目覚めね。おはようって時間じゃないのは分かることかな?」

カーテンの向こう側から現れたのは、白衣を袖を通さずに肩に羽織つた、一人の落ち着いた雰囲気を持つ女だった。

お洒落というよりも邪魔にならないように、緑がかつた黒髪を頃辺りで一つに括り。緩やかな曲線を描いた細眉や、口紅が薄く塗られた唇……そしてその、柔らかそうな唇の下には小さなホクロが彼女の大人な魅力を不思議と引き立たせていた。

また、小顔を強調するかのようなハ・頭身に纏つた、胸元の開いたピンクのワイヤーシャツや、ストッキングの上に履かれた黒いタイトスカートは、何故だか意識を朦朧とさせる俺にすら、性的な興奮を覚えさせる。

「あ、あう……」

そんな美女といつても過言ではない女に、言葉を帰そうとするが上手く口が動いてくれない……それに血の味もする。

多分、口の何箇所かを切つてしまっているのであろう。

「無理しないの。君は脳震盪を起こして運ばれてきたんだから、大人しくしてなさい」

舌も口も言うことの聞いてくれない俺に、白衣の女が呆れた様に前髪を搔き揚げる。

露となつた毛穴一つ見えなさそうな額は、多分俺好みなんだが……いかんせん、視界がまだ霞がかつていてから殆ど確認できない。正直、今の状況を全く理解できないために、俺は仕方なく女の言うことを聞く事にした。

「そう、保健室に一人で来れなかつた人は、大人しく寝てるのが一番なんだから」

いや、そこは病院に運んだ方が良いんじゃないかと思うが、ここは黙つておくのが吉だろう。

大人しく身を寝ているベットに預けると、後頭部に良く日干しされた枕の暖かい感触が伝わってきた。

このまま目を瞑れば、また一眠りできそうな心地よさだ。

「あ、あう……」

そうすると、喋ることだけに意識が集中出来たのか、ようやくまともな言葉を発せられるようになる……まあ、まだこれが限界とい

う所なのだが。

「うん？ どうしたのかな……って、聞きたいところだけど」

俺の搾り出すよつこ出された言葉に、女はアーモンド形の目を優しげに細めながら。

「今は本当に無理はしないこと、喋るのが難しいのなら黙つて寝ること。用件なら、私がちゃんと伝えてあげるから」

手のかかる子供をあやす様な聲音で、暗に何もするなと言つてきた。

だが確かに、今の俺は何故か起き上がることも喋ることも、頭がクラクラとしてまともに出来ない。

すると、ベットの前に立つてゐる女は、履いているサンダルの音をゆつたりとした歩調で鳴らしながら、俺が寝ているベットの横に移動した。

「君をここに運んできてくれた先輩から、預かってる物があるの」  
そう言つて、女はベットの傍に置いてあつた丸椅子の上にある、一枚の紙を取り、俺に差し出した。

俺は、その差し出された一枚の紙を、なんとか動いた右手で受け取る……。

「その先輩からは、君が起きたら直ぐに読ませてくれつて頼まれてたからね。ちゃんと渡したわよ?」

頼まれたことを完了したぞと、確認を取つてくる女に、俺は特に何も言わずに、右手に持つた紙に書かれた文章に目をやつた。  
相変わらず、モヤのかかった様に見づらいう視界だったが、まあ何とか文字は読み取ることが出来た。

その紙に書かれた文面は……。

『来るか来ないかは、お前が決めるんだぞ?』

たつた、これだけの文章に記された言葉

だけど俺は。

この時だけは不思議と、朦朧とする意識の中で、ある事だけはハ

ツキリと思い出せていた。

それは、空いている左手に残っている、とても力強い感触……。手を両側から強い力で圧迫されたような、そんな感触……。

俺はここまで感じて、ようやく何故こんな所で寝ていたのかを思い出した。

退屈な入学式……多目的ホールの壇上で、新入生代表として何かを喋っている、レベルの高い女子と。それに負けず劣らずな容姿をした生徒会長とかいう先輩以外に、何の興味も持てない入学式。それを証明するかのように、男……御堂勇輝は「あ～あ」などと、いう大欠伸を、惜しげもなく座り心地の良いシートで披露していた。席は多目的ホールの生徒側の、丁度真ん中辺り……周りに座る者達は。

その御堂のふんぞり返つて座っている、ふてぶてしい態度に嫌悪感を抱きつつも、何も言えないでいた。

（マジでつまんね……てか、先公も何も注意しねえのかよ）あまり綺麗とはいえない、明らかに染めたと分かるボサボサな金髪頭。

別に、この程度なら 一橋学園では珍しいが あま

り珍しくも無い荒れた生徒なのだが。

男の身長は185cmと、高一になりたてと言つ割には長身で、しかも新調された制服越しにでも分かる程度には、程よく肉付けされた体格をしていた。

そのせいか、周りにいる生徒達は皆、入学早々に厄介<sup>いざわい</sup>とに巻きた。

（ホント、これなら早く田舎<sup>いなか</sup>での奴と喧嘩<sup>けんか</sup>して、退学貰<sup>う</sup>つたほうが良いかもしねえな）

顔こそは整つていて、輪郭も細い青年なのだが。いかんせん、鋭い眼光と細い眉毛を携えた状態で無表情なために、御堂が何を考えているかなど周囲には到底理解できない事であった。

故に、余計不気味に感じる周囲の生徒達。

それを見て、更に退屈な気分になる御堂……。

御堂勇輝にとって、二橋学園の入学式は。

じついつた調子で、そのまま終わりを迎えてしまった。

入学式も終わり、周りの進入生達が自分の新しい教室へと向かう最中。

御堂だけは、多目的ホールの席に腰掛けたまま、微動だにしなかつた……。

それを不審に思った教職員が、男数人構成で御堂のもとへと近寄つてくる。

「おい、もう入学式は終つたぞ！ 教室に戻れ！」

「私は終始、君を見ていたが。なんだあの態度は！？ 他の生徒達にはもちろん、ここにいる全員に不快な思いをさせていたんだぞ！

！ 分かってるのか！？」

口々に、やかましい説教を捲くし立てる数人の教職員達……。だが御堂は、全く持つて聞く耳を持たない。

「おい、なめてんのか？」

その態度に、血の気の多い一人の男性教職員が遂に我慢の限界を向かえ、御堂の胸倉を掴み、捻り上げる。

男性教職員は、武道系の出身だったのか？

185cmもある座っている状態の御堂を、軽々と片手で持ち上げてしまった。

だが、それでも無表情な御堂……。

それが、再び瘤に障つたのか、男性教職員が声を張り上げようとすると。

「いいんすか？俺ん家、こここの学園の理事長と仲が良いんですけど？」

すると、声を張り上げようとしていた男性教職員の表情がピタリと止まつた……。

それはそうだ、自分の雇い主と仲の良い家の息子かもしれない生徒に、もしかしたら勢いで行つていただかもしれないのだから。

しかし、ここで引いてしまつたら、この生徒は一生自分の事を軽く見ると考えた男性教職員は、もう関係ないとばかりに、再び声を張り上げ『どうかなさいましたか？先生方？』られなかつた。

突然聞こえてきた、澄んだ女性の声に皆が振り向けば……そこには、豊かな栗色の長髪と、いつも二口やかにしている朗らかな美顔が特徴的な女性徒、二橋姫樹生徒会長の姿があつた。

その存在感は、一触即発な雰囲気だった、この現場を、一瞬で治められてしまいそうな……そんな、不思議な安心感を持たせるものがあつた。

「姫樹か、いやなに、ただ久しぶりに生意気な新入生が出てきただけだ」

御堂の襟首を片手で捻り上げた体勢のまま、体格の良い男性教職員は、後ろにいる姫樹に、そう告げた。

だが、その言葉に姫樹は……。

「この学園は……というより、第一区から三区までにある殆どの学び舎は皆、生徒自身が殆どの自治管理を任せています」

「うん？何が言いたいんだ？」

突然、学園の基本方針を口に出し始めた姫樹に、男性教職員は頭に“？”を浮かべる。

しかし姫樹は、そんな教職員など無視して話を続ける。

「ですので、こういった些細なトラブルも学園の生徒が解決すべきなのです……これは、学園のほぼ全ての懸案事項、または生徒間に存在する問題の解決までに至るまでの決定権が生徒会長である私や、それを支えてくれている他のメンバーや委員会にある事からも頷け

ることです」

表情こそは朗らかな微笑みを浮かべてはいるが、完全に教職員達に対して遠まわしに『さがれ』と言っている様に思える、姫樹の言葉。

本来なら教職員達は、この姫樹の言葉にも反応しなければならないのだが……。

「……そうか、なら勝手にしろ」

そう言って、男性教職員は簡単に御堂を下ろしてしまった。

するとそのまま、ゾロゾロと散っていく教職員達。

まるで、言葉通りに皆“勝手にしろ”とでも言つて居るかのよう

な去り具合に、当事者である御堂も面を喰らつてしまつ。

そんな御堂の、無表情からあまり変わつていらない驚きの顔を見な

がら、姫樹が口を開く。

「それで？ まずは何故、アナタは終始同じ態度を取つていたのか？ それを聞きたいのだけれど……話してくれるかしら？」

凹凸のあるスタイルや、落ち着いた雰囲気のある顔は、とても大人びているのに。なぜか子供っぽい仕草で、コテンと困った表情をしながら首を傾げる姫樹。

その仕草は彼女の、のほほんとした雰囲気も相まって、非常に男心を操るものがあつたのだが。

今、たとえ他人からぐだらないと言われても、明確な目的がある者にとつては、何の感情の起伏も起きなかつた。

「……別に、俺は入学式に来たわけじゃねえから」

「あら？ なら、何でここに居るの？」

ポケットに両手を突っ込みながら、面倒臭そうに言ひ御堂に、姫樹が訪ねる。

そりや高校の入学式なのに、それに来たわけじゃないと言われれば、誰だって疑問に思つことだろつ。

もしかしたら、余程の理由があるのかもしねれない。だが、出てきた答えは……。

「アンタ、生徒会長なんだろ？ しかも、ここでは結構偉い感じだし」

「ええ、一応去年から任されているわ。それがどうしたの？」

「偉いんだつたら、ここに一人ぐらい誰か連れて来れるんだろ？」

「……話が見えないわ。もつと具体的に言つてくれないと」

右頬に掌を添えながら、眉を顰める姫樹……。

「俺が言つてえのは、ここで一番喧嘩の強い奴を連れて来いつて事だ」

その言葉で、ようやく理解できたのか。

姫樹が胸中で（あ～なるほどね）と手を叩く。

田の前の様な風貌をした、血氣盛んな若者が。この学園で一番強い奴を連れて来いと言つたら、彼しかいないだつと田星が付いたからだ。

実際、姫樹自身は本当に彼が“この学園で一番なのかを断言できない”が……おそらく、これで良いのだつと判断が出来た。故に。

「そういう事なら、私に任せて頂戴」

「……は？」

なにやら楽しそうに微笑みながら、やたら乗り気な様子の生徒会長に。

まさか要求が通ると思つてはいなかつた御堂が、聞抜けた声を漏らしてしまつ。

本来なら、このまま居座つたり、必要なら近くの先公か男子生徒をぶん殴つて騒ぎを起こし、目的の人物を呼び込もうとしていたのだが……。

どうやら、田の前の抜けでいそうな割には腹黒そうな生徒会長のお陰で、余計な手間は省けたようであつた。

「アナタが呼んで来て欲しいと言つている子を、私が連れてきてあげます。そうすれば、アナタも満足が行くのでしょうか？」

「……ああ

御堂の返事を聞くと、姫樹の微笑みが一層明るさを増す……。

それは見るもののが見れば、本当に嬉しくて微笑んだのか？ もしくは何か企みが出来て微笑んでいるのか？ どちらか判断出来るものだった。

「じゃあ、皆。後の片付けは、手伝いの生徒や先生方にお任せして、私達は明日の健康診断や奨学金申請などに必要な書類を確認してきましょう」

姫樹はそう言って、ここ多目的ホールに施されていた入学式専用の装飾などを片付けている、他の生徒会メンバーに声をかけた。すると、生徒会のメンバー達は、いま手に着けていた作業に確りと折り合いをつけてから、ゾロゾロと何事も無かつたかのような足取りで、姫樹の後ろに控え始めた。

それを確認すると、姫樹は改めてポケットに両手を突っ込んでいる御堂に視線を向ける。

「必ずアナタが呼んで来て欲しいと思っている子を連れてくるから、ちゃんと待っているように。分かった？」

まるで親気取りの物言いに、御堂は鬱陶しそうな表情を露にするも、一応の同意を示すために「ああ」とだけ返事を帰した。

姫樹は、それを二ツコリと微笑んだ後に確認すると、後ろに控えていた生徒会メンバーを引き連れて、多目的ホールを後にしようとする……。

だが、多目的ホールの出入り口である、現在は開け放しになっている両開きのドアの前で、姫樹は、あまり高くは無い階段の段差を上ることで揺らしていた、緩やかなウェーブのかかった栗色の豊かな髪をピタリと止めながら、後ろを振り返った。

視線を向けたのは、やはり多目的ホールの中央で、いまだこちらを鋭い眼光で眺めている御堂にだ。

目と目が、自然と合わさる……。

しかし、振り返った姫樹と目を合わせた御堂は、無意識の中に、一筋の冷や汗を右頬に流していた。

微笑んでいる……それも、不気味に、不敵に、大胆に。

更に言えば、さつきまで閉じていた“紅い瞳”が、妙な圧力を御

堂に与えていた。

そして、何がなんだか分からぬといつたふうに物怖じする御堂に、底冷えするぐらいに美しくも冷たい微笑みを向けながら、姫樹がゆっくりと口を開いた。

「一応、新入生のアナタには忠告をしておくけど……」

さつきまでと変わらぬ、決して声は張っていない和やかな聲音……だが、不思議と距離の開いた御堂の耳には届いていた。

「殺られる前に殺ること。それがアナタが、これから私が連れてくるであろう人物に対して、唯一出来る事……分かつたかしら？」彼女の薄く開かれた瞼の先にある眼を見れば、これがハッタリでも過大された表現でもないことぐらい、中学上がりの御堂でも理解できる……。

それだけ、これから連れて來ると言つてゐる奴に、相當な自信があるのだろう。

なら、俺の目当ての奴が來る可能性が一段と高まった。

故に引かない……今さつきまでしていた物怖じも、鳴りを潜めた。

「上等だよ」

何故なら、もともと“そいつ”と喧嘩をするために、こんな退屈なところに來たのだから……。

多目的ホールの中心で待つこと数十分、……。

別段、御堂自身は待つことに苦痛は感じない。

むしろ今は、目当ての奴が來ることを、今か今かと待ち侘びているぐらいなのだ。

苦痛なんて、感じるはずも無い……。

多目的ホールの中央の席に座りながら、周囲を見渡せば。既に殆

どの後片付けが終わり、仕事の終つた奴から多目的ホールを出て行くといった所まで進んでいた。

すると、そんな時であつた。

「あ、桐嶋」

この一言で、目的の人物を待つていた御堂にとつては十分であつた。

聞こえてきたのは、多目的ホールの出入り口付近。

中央の席に座つていた御堂は、まるで獲物を目の前でお預けされ続けた狼の様に、席から立ち上がり、切れ長の鋭い眼光を、多目的ホールの出入り口へと向けた。

普段、何を考えているのか分からぬ無気力な表情をしている彼にとつて、非常に珍しい拳動と顔つきであつた。

「なんだ？ 会長の言つてたことと違うな」

多目的ホールに堂々と入つてきた男は、こちらに向けられる御堂の凄みの効いたガン付けを楽しそうに受け止めながら、思つていた状況と違つことに、多少残念な声音で呟いた。

「会長の言つてたこと？」

最初に多目的ホールへと入つてきた男に気付いた男子生徒が、不思議そうに疑問を投げかける。

すると、男は。

「いや、ここで入学早々暴れてる奴がいるつて聞いたから、止めてくれつて頼まれて来たんだけど……静かなもんだね」

「まあ、実際さつきまで暴れる寸前だつたけどな……」

睨み付けてくる御堂に対し、わざわざ真っ向から視線をぶつける男は、そう相手を挑発するかのような態度で、最初に入つてきたのに気付いた男子生徒と会話をしていた。

だが、それも、もう終わり……。

「帰る途中だつたのか？」

「ああ、入学式の片付けも、俺の分は終つたしな。だけどまあ、ちよつと残る事にするわ」

「悪いね、帰るの邪魔して」

「そうだもないだろ？ だつて、合法的にプロの喧嘩を見られるんだからさ」

男と話をしていた男子生徒は、どうやら中々に血の氣の多い部類の人間だったようだ。

しかし、竜蔵の表情には、その男子生徒の期待には答えられないといった色が伺えた。

別に、勝つ自信が無いというわけではない……。

「喧嘩になれば良いんだけどね……多分、無理だろ」

ただ単に、相手の実力が、自分には到底及ぶものではないと確信していたから。

それだけ答えると、竜蔵は期待の眼差しで、こちらを見ている男子生徒から離れていく。

一步……また一步が、確実に中央の通路に既に出てきていた御堂の前へと近づいていた。

近づいてくる男……田当ての男であった、桐嶋竜蔵が近づいてくる度に。

御堂には、嫌にでも気つく事があった。

（なんだ……これ）

背丈自体は、御堂のそれよりも10?以上低いことが分かる。だが、そんな背丈のハンデなど、帳消しにするどころか相手に“自分よりも大きい”と錯覚させるほどの肉体が、ブレザーの制服越しですら存在を強調させていた。

厚く、そして太い……傍目からは、理想的な逆三角形を描いた均整の取れている肉体に見えて。よく見れば、外に露出している筋ばつた首の筋肉や、もはや拳の形状が鈍器の様に膨れ上がった手が、桐嶋竜蔵という男の計り知れなさを物語つている。

どうすれば勝てるのか？

などという次元ではなく、どうすれば無事に済ませられるのかと、考えることしか出来なくなる。

御堂は、この時。

己がこれまで通つてきた、不良たちの世界が、どれだけ狭かつたのかを知る。

TVは見ない方だ……だから、コイツが今まで、どんな奴らと戦つてきたのかなんて知る由も無い。

だが、これだけは分かる。

俺らがいる不良の世界での圧力<sup>プレッシャー</sup>が赤子に見えるぐらいに、奴らのいる格闘家の世界の圧力<sup>プレッシャー</sup>は甘くは無く、ただ相対せただけで凄いことなのだという事が。

「どうした新入生？ 俺に何かあるんだろ？」

こちらの内心を見抜いているのか、小馬鹿にした笑みを浮かべながら、俺に問いかけてくる。

既に俺の背中は、嫌な汗でワイシャツを濡らしている……。

目線は立っている場所の段差が違うとはいえ、背の低い奴を見る高さと、さほど変わりはしない。

しかし、奴が段差を降りるために肩を揺らしながら歩いてくる度に、その大きさを見誤りそうになる。

そして、遂に奴と俺の距離が、大体、一一・二二歩で手が届く間合いとなる。

御堂は、この相手と距離を認識した瞬間に、これから始める事に對しての気構えを一気に組み直した。

瞬間、さっきまでの何もされていないのに押し込まれていた空気は一掃されるが、感じる圧力<sup>プレッシャー</sup>に変化は無い。

むしろ、間合<sup>い</sup>を認識してしまった事によつて、相手が何から出てくるのかという考えが浮かぶようになつてしまい、余計に圧力を感じる。

すると、一向に口を開かない御堂に痺れを切らしたのか？

竜蔵が、また一步間合<sup>い</sup>を歩くだけで詰め、そこで立ち止まつた。

「おい？ 黙つてちや分からぬだろ。何か言おうぜ、なあ？」

相も変わらず、こちらを挑発するかのような喧嘩腰。

やつてゐる事自体は、その辺の同年代と変わらない……だが、こ

ちらを挑発するだけの説得力が、目の前の男にはあった。

近くで見れば、頑丈そうな顔立ちをしている割にパーティは整つており、眼はギラギラと好戦的な雰囲気を醸し出しながら、こちらを見つめている。

多分、こういった魅力は女よりも男のほうが分かりやすいのだろうと、御堂は無意識のうちに考えていた。

だが、挑発してくる相手に、こつまでも啖呵も切らずに立ち尽くしているなど、今まで過ごしてきた世界では有りえない事……中には、啖呵すら切らずに、無言で殴りかかってくる“キレてる”奴もいることにはいるが、生憎、御堂はそういうタイプではない。

「やつぱり、アンタが来たか……」

もともと、竜蔵自身が目的であつたと、暗に語る口調。

それに、当の本人は眉間に皺を寄せ、疑問気に御堂を見る。

「やつぱり来たか……？　ああ、なるほどな」

突然、何かに納得したかのよつにしている竜蔵を見て、今度は御堂が分からぬといつた表情をする。

しかし、これに竜蔵は答えてはくれない……当たり前だ、いくら疑問に感じたからといって、御堂が問いただそうとはしなかつたらだ。

まあ、竜蔵がそういうた雰囲気を出したのは、ただ単に、会長である姫樹の言葉に、若干の“嘘”が含まれていたことに気付いただけなのだが。

すると、今のやり取りで、相手が会話を続ける気が無いと理解した竜蔵の纏う空気がガラリと変わる。

「さて、『やる』んだろ？　来いよ」

何の脈絡も無い誘い……これが、もしも異性との会話なら少々魅惑的な意味が含まれているのであるうが、生憎と相手は野郎だ。

しかも見た目以上に、喧嘩が好きに見える。

なら、竜蔵が発した言葉の意味を正しく理解出来たのであるう。

二人の醸し出す空気が、一気に周囲にすらも危機感を煽るものへ

と様変わりする。

これから何が起きるのか？ 一人は何をしようとしているのか？

それが、今からこの光景を見る者だとしても理解できる空氣。

もう、喋る口も、ガンの付け合いも必要ない。

ただ、殴り合つのみ

最初に突っかけたのは、御堂……いや、意外にも竜蔵の方からであつた。

来いよと言つたにも関わらず、そんなものは関係ないと。御堂が重心を前に傾けると同時に、段差から流れるように降り、間合いを詰めた竜蔵。

（速ツ！）

自身が地面を蹴り出すよりも早く、間合いを完璧に詰めて来た相手に、御堂が驚嘆を覚えながら表情を強張らせる。

相手は重心こそ、安定させるために腰を落しているが。本質を見れば、後ろ足である右足の踵は地面には着いておらず、膝はバネを何時でも利かせられるように、脱力して少しだけ曲げられているために、フットワークの軽そうな足の構えを取つていた。

だが、問題はそこではなく。

御堂が田に付いたのは、完全に両腕を下ろした状態の無防備で、間合いを詰めてきたことにある。

それを、驚きはしたが逃す御堂ではない。

伊達に喧嘩馴れしていない御堂は、突っ込んできた竜蔵の、意図的にがら空きとなつてゐる顔面に向けて、右腕を少しだけ振りかぶつた後に出した、ストレートとも言えない、荒っぽい突きを放つ。

身長差10?以上あるために、上から振り落とされる要領で、突っ込んできた竜蔵の顔面に迫る、御堂の右拳……だが、それは竜蔵が目線は相手に固定したまま、上半身だけを前に屈めるだけで空を切ることとなる。

ダッキング、ボクシングの基本技術の一つだ。

ただただ、全身の力と体重を素人なりのやり方で乗せた御堂のオーバーフック気味の右拳は、空を切った途端。御堂もろとも、重心を少しだけ前に引っ張り出してしまう。

体勢が、出したパンチに持つてかれたのだ。

これは当然の事で、大抵の突きというのは、前足である足を確りと置くことにより。相手に効かせるために突いた際、どうしても前へと傾いてしまう重心を抑えることが出来るのだ。

今の御堂には、それが無く。ただ突っ込んできた相手を迎撃つために殴ろうとしてしまったために、重心を前に傾けてしまったのだ。

一般人同士なら、勢いだけで大抵は勝てるために、それで良いのかも知れない……だが、相手が悪すぎた。

こちらに空振った勢いのままに、御堂が前に出てくる。見る限り、次に御堂が打撃を放つ場合は、一旦間合いを取らないと上手く打てそうに無い。

瞬間、ダッキング状態だった竜蔵の上半身が跳ね上がる。

同時に、御堂の首下を通り抜け、後頭部の所で竜蔵の両手がクラッピングされた。

拙い……と感じた瞬間、御堂が背中の全背筋群と首の筋肉を総動員させて、背筋を反らそうとするが。

ガクン　　と、俄かには信じられない程の力で、御堂の上半身が一瞬のうちに下へと引き付けられてしまつ。

紺色のカーペットが、御堂の視界に移る。

頭を完全に下げられた……。

気付いた瞬間に、御堂が顔を守ろうと両手を動かすが。グシヤツ！

それよりも先に、竜蔵の右膝が、御堂の顔面……正に真正面に突き刺さつた。

「きやツ！？」「うわツ！」「エグ！」

あまりの生々しい打撃音に、周囲に居た生徒達が思わず声を出してしまった。

御堂の視点からは分からなかつたが、竜蔵がやつたのは、ただ単に首相撲からの上段右膝という、至つてシンプルな技。

しかし、その首相撲は竜蔵の太い両腕と、鍛え上げられた背筋力により、相手の顔を無理やりにでも引き込むなどといった強引な手段を取ることを可能とし。右膝に至つては、地面を爪先まで使って蹴り出し、腰を前に突き出した、全身を上手く使つた容赦の無いもので。正に天を貫く膝といつても過言ではなかつた。

しかも、首相撲の引き込みによつて生まれた勢いのせいで、この右膝は若干のカウンター性も含めており。その威力は、御堂の意識を刈り取るだけではなく、唇に裂傷を作る事や、鼻から大量の血を吹き出させるには十分すぎる程のものであつた。

竜蔵の右膝による一撃を受けた御堂が、そのまま前のめりで多田的ホールのカーペットに倒れこむ。

倒れこんだときの御堂の全身には、既に力は感じられなかつた。しばし、静寂がこの場を包む……。

まるで土下座をするかのように倒れ付している御堂を、竜蔵が注意深げに見下ろす。

もう終つてゐる……そう理解していくも、自然とそれをやつてしまふ辺りは、やはり住む世界が違うと感じさせる。

幸い、竜蔵の右膝や衣服には、御堂の返り血は付いておらず、綺麗なものだ。

代わりに、紺色のカーペットに、御堂の鼻から出た粘液混じりの血が染み込み始めた。

すると、そこで動きがあつた。

「あ……あ……」

なんと、地面に頬を擦り付けている御堂が、僅かながらも口を動かしたではないか。

瞬間、竜蔵の眼が鋭くなるも、それも直ぐに収まる……どう考え

ても、今の御堂には10の間に立ち上がるなど不可能だからだ。実際、路上リアルでも、こんなになつてしまつた相手に追撃することなど、余程の加減の効かない奴で無いとする事は無い。

故に竜蔵は、警戒心のために取つていた、意識下の構えを自然に解く。

これにより、勝敗はあまりにも呆氣なく決した事になる。

別に、このまま竜蔵は御堂を放つて置いて、多目的ホールを後にしたつて良い。

だが竜蔵は、完全に落ちそうになつてゐる意識の中で、しゃらり元気を言おうとしている御堂に耳を傾ける。

「ま……まてや……」

おやらぐ、御堂の視界の中は殆ど竜蔵を捉えることは出来ていな  
いだらう。

しかし、いまだ眼ではなく心に、折れていない闘争心が伺えた。

文字通り一撃で、文字通り5秒とかからない秒殺で、軽く一蹴されたにも関わらず、まだ闘う気がある事に、流石の竜蔵も驚きを見せた……同時に、面白い奴だとも思つた。

故に竜蔵は、その場で膝をカーペットに着けた。

「終つてない、か……意外に、根性は有るんだな？」

「あ……う……」

そろそろ、意識も完全に沈んでしまうだらうに……。

だが、御堂は土下座の体勢でカーペットにひれ伏したまま、なんとか動こうとしている。

それを見ていた竜蔵が、突然御堂の両肩を両手で掴んだ。そして己が立ち上がると同時に、完全に体に力が入つていない御堂を軽々と立たせる。

足元だけを見ればフラフラだ……だが、竜蔵が掴み、支える」とによつて御堂は頭をグラグラとさせながらも何とか立つてゐる。正直、傍目から見れば危ない状況だ。

しかし、止めるものが居ないのも事実だ。

すると、無理やり立ち上がらせた御堂と改めて視線を合わせた竜

蔵が、相手に語りかける様に口を開いた。

「お前、ラグビーをやってみないか？」

瞬間、周囲にいた者達全員がポカンとした顔をする。

当然、御堂もと言いたい所だが、生憎、彼は表情を作れるほど、まだ回復してはいない。

「別に、すぐに答えを出さなくても良い。取り合えず、今の状態じやキツイかもしないが、俺に誘われたつて事を覚えていれば、それでいい」

竜蔵は言いながら、今度は御堂の左手を、同じ左手で無理やり掴み取る。

握手だ。

「俺は桐嶋竜蔵、この学園のラグビー部に所属して的一年だ。今は左手同士だが、お前が本気でラグビーに来るのなら、右手同士で握手をしよう」

やつている事は馬鹿げているが、本人の表情は真剣そのものだ……本気で、御堂を勧誘している事が、それだけで周りにも伝わるほどに。

そして竜蔵は、今度はそのまま御堂を器用に抱き上げ、背中へと背負うようにした。

おんぶだ……それも、自分より背の高い者を。

「じゃあ、保健室に行くぞ」

そう言って、竜蔵はこれまでの事が何事も無かつたかのように、多目的ホールを後にする。

残された者達は、皆啞然として、既に意識が飛んでいた御堂を拉致していく竜蔵の後姿を眺めていた。

実際、御堂が薄つすらとではあるが覚えているのは、左手で無理

やり握手させられた所までだ。

なんで、左手なのか？

それは、今の御堂には全く理解出来ない。

だが、なんとなく“あの人”にとつては特別なことなのであらうと、理解は出来た。

入学式後の事を薄つすらと思い出していたとしても、まだ頭はグラグラだ。

視界が、時たま霞がかる事がある。

既に、無理をして動こうという気力は無くなっていた。

今は、動けるようになるまで、まだ傍に立っている白衣の女の言葉に甘えることしよう。

そんな事を考えていると、また彼の瞼が眠ろうとする……。

別に、抵抗する必要も無い。

すると、御堂は再び、この部屋のベットで瞼を閉じ、眠りに付いた……。

それを、隣で見下ろしていた女。

一橋学園養護教諭の岡崎胡桃おかざきくるみは、仕方が無いなといった表情で。眠りに付いた御堂にかけてあつた布団を、優しくかけ直した。同時に、その御堂の右手にあつた紙切れを、スッと取り出す。預かつた時も、そうであつたが。

改めて読んでみると、また笑みが零れそうになる。

「ふふ、あの子も随分と変わったわね……」

まるで懐かしむ様に、大人の女性らしい魅惑的な微笑みを浮かべながら、岡崎胡桃は呟く。

あの子は変わった、本当に変わった……。

胸中で手の掛かった子供の成長を喜びながら、胡桃は眠っている御堂から離れ、ベットを仕切っていたカーテンを閉める。

## 動き出す一人

「軽率ですね」

まだ日も昇つたばかりといった時間。

一橋学園のとある一室で、そんな相手の行いを冷たく咎める様な、女子高生にしては色気のある少々低い声が響いた。

部屋にある、天井に埋め込み式の照明は明かりを点けられておらず。

その代わりに、早朝の淡い春の日差しが部屋を少しだけ明るくしていた。

「なにが、でしょか？ 私には身に覚えがありません」

部屋の隅……窓際の横に長いロッカーの上で、ゆつたりと座りながら早朝の窓の外を眺めている女生徒が。丁寧な言葉遣いの割りに、ひょうひょうとした態度で答える。

部屋の扉付近で立っていた、最初に声を発した女生徒には、それが気に喰わなかつたのか？

一瞬、その皺一つ無い白く綺麗な眉間に、歪みを見せた……が、すぐにそれは成りを潜める。

「昨日の夕暮れ時の事です。一体、何を考えているのですか？ 確か、『彼』は執行部の“手伝い”だった筈です。なのに、わざわざ自らの正体を晒そななどと……本気なのですか？」

執行部の手伝い……この学園には、その様な役職を持つた生徒は一人しかいない。

いや、正確に言えば、既に 既成事実として 存在 はしていない。

おそらく、扉の方に立っている女性は、それを知らなかつたのである。

故に、窓のすぐ下に設置してある、横に長いロッカーの上に座つ

ていた女生徒は、相手を嗜める様に、その事実を教えてあげる事にした。

「それは古い情報ですね」

「はい?」

「もう既に、“彼”は昨日付けで執行部のメンバーに入っています……まあ、まだ非公式という形ですが。昨日の会長の様子からすると、今日にでも呼び出して、正式な手続きを彼に踏ませる事でしょう」

窓際には座っている女生徒の言つことに納得がいかなかつたのか。扉付近に立つている女生徒が、信じられないといった様子で声を張り上げる。

「馬鹿な！ 本当に“彼”を正式な執行部のメンバーに入れるとのですか！？ 手伝いだけならまだしも、機密性の高い執行部の仕事を、“彼”の様な人間がこなせるとは思えません！！」

まだ早朝だというのに、こちらに向かつて紛糾した相手に対して。

「“彼”的実力……というより、実践的な能力の高さはござ存知でしょ？」それを評価すれば、彼の執行部入りは当然だと思えますが

窓際の女生徒は特に気にして様子も無く、ただ淡々と事実を述べるようにして、自分の考えを相手に伝えた。

しかし、やはり納得がいかないのか。

「それは所詮、ただのゴロツキ相手の荒事に限つた話です。私達の仕事には、本当の武術家が相手だつたり、武装した者が相手の時だつてあるのもしれないのですよ？ それを“見世物”としてしか闘うことの出来ない者に……」

その、ここにはいない相手を見下しているような主張に……。

「なら、アナタは“彼”に勝てるのですか？」

窓際の女生徒が、掛けていた丸眼鏡のレンズを、昇つたばかりの日差しに反射させながら口を挟んだ。

眼鏡の奥に見える瞳は、微かに鋭い圧力を、こちらに放っている。

「……今は、そういう話ではありません。“彼”が本当の執行部の仕事をこなせるかどうか？です」

言葉通り、今の議題はそこではないと言つたのだが。

窓際の女生徒は、それをどこか含みのある聲音で。

「答えられない……と。では、私なりに解釈するとしましょ」  
自己完結する事にしたのだが。

「どういう意味でしょうか？」

どうやら、扉付近に立つてゐる女生徒には、その窓際の相手の態度が挑発にしか捉えられなかつたようだ。

それを見た、丸眼鏡の女生徒は、口端を嬉しそうに吊り上げてしまふのを我慢しながら、胸中で悪戯に微笑んだ。

「どういう意味、ですか？それは、私の解釈をアナタに伝えようと  
いう事でしょうか？」

わざとらしく、分かつてゐるのがバレバlena芝居掛かつた仕草と  
表情に、扉付近で立つてゐる女生徒の鋭い目が、ますます鋭さを増  
していく。

下手をすれば、今の彼女の間合いに入つただけで、何かに切られ  
たと錯覚してしまいそうな程の威圧感と存在感が周囲に漏れ出る。  
ただ立つてゐるだけで、これなのだ……凜とした雰囲気を持つ彼  
女が、普通の女子高生などではない事を窺わせていた。

しかし、そんな怒気に近い感情を向けられたとしても、丸眼鏡の  
女生徒の表情どころか纏う空氣も搖るぐ気配が無い。まるで、目の  
前で異常なまでの緊迫した間合いを一人で形成した女生徒が、取る  
に足らない実力だとでも言つかのように。

「フフ。この程度で感情を昂ぶらせてしまふのですか……意外に短  
気なのは、昔からという事なのでしょう

「……」

相手を茶化す様に、天井を仰ぎながら懐かしみ始めた女生徒を、  
もう一人の女生徒は油断無く見つめる……睨みつけるではなく、無

馱な感情、無馱な力、無馱な考えを一切削ぎ落とした、冷静な瞳。それは、どこか研ぎ澄まされた刃物を彷彿させるような、鋭く、妖艶な印象を持たせる切れ長の目で。異性が見たとしたのならば、その一点にしか興味を示さなくなつてしまいそうな、そんな靈惑的で危険な魅力を宿していた。

しかし

「ですが」

この程度のものでは

「それがアナタの魅力でもあるのですよ？」

「ツ！？」

窓際に座っていた女生徒を、尻込みさせるどじろか、『こちらの懷に潜り込ませなくする』事すら出来なかつた。

いつの間にか自身の田の前に、三つ編みのお下げと丸眼鏡が特徴的な女生徒が、『仕方ない』といった表情で苦笑しながら立つていた。

いつロツカーから腰を離したのか？ いつ、この部屋の地面に足をつけたのか？ いつ、こちらに間合いを詰める踏み込みを行なつたのか…… その全てを捉えられなかつた、理解できなかつた女生徒の表情が強張る。

「そんなんに驚かないで下さい。分かつていた事でしょう？」

「……」

「もしかして、何も出来ずに間合いを侵されてしまった事が、そんなに悔しいのですか？」

首を傾げながら、拙いことをしたかなと、相手を心配した表情で訪ねるが。

一向に、返事が返つてくる気配が無い。

「フフ、やはりアナタは可愛いですね。そうやつてすぐに拗ねたり悔しがつたり、昔から素直な娘でした」

言いながら、丸眼鏡の女生徒は、既に顔を緩め、冷めた無表情へと変えた彼女の右頬を、左手で撫でる。

目の前で彼女を見ると、細く整った輪郭や、筋の通つた小さな鼻、柔らかそうな唇に、先に述べた刃物を彷彿とさせる様な、切れ長で靈感的<sup>じわくてき</sup>な瞳が、有無を言わざぬ美しさを備えており。清らかな、それでいて凜々<sup>りんりん</sup>しい顔立ちをしている。

髪型は眉毛辺りで切り揃えられた前髪に、腰まで伸びた真っ直ぐな黒髪をしていて。

また、背も168?と女性にしては高く。キュッと締まった、柳腰と称しても過言ではない、高い位置にある腰やくびれに。見事反比例するかのように存在を強調させている、上向きの形の良い胸が、女性的な魅力を更に引き立たせていた。

言いながら丸眼鏡の女生徒は、目の前の触れ難い美しさを持つ女性の頬から、撫でていた手を相手の後頭部に回して、今度はきめ細かな彼女の髪を梳く様にして撫で始めた。

「一見気にしてないような冷たい表情を作つて、内心では泣き出しちいぐらに悔やしんでいる。今も、そうなのでしょうか？」

頭半分、背の低い位置から訪ねてくる丸眼鏡の女生徒。  
しかし、好きなように撫でられている方は、その言葉を無視する。

そんな態度を、愛しむ様に、丸眼鏡の女生徒は更に体を寄せる。もう、さつ今までの緊迫した間合いは、完全に瓦解していった。

すると、不意に丸眼鏡の女生徒が、後頭部の髪を梳くように撫でていた手を離し、その華奢な体も同時に離す。

いつの間にか、丸眼鏡の女生徒の表情が、こちらを愛しむものか、真剣なものへと変わっていた。

「無反応で詰まらないですね」

本当に詰まらなくなつた溜息を一つ付きながら、田の前の相手を見  
める。

102

ているだけだ。

おそらく、さつきのは國星だったのであつたと、丸眼鏡の女生徒は当たりを付けた。

「では、私なりの解釈……もとい、見解を教えましょう。まず、アナタでは“彼”には勝てません、もちろん私にもです」

「ツ！？」

瞬間、こちらを睨みつけていた目が、更に強張る。

「私が、“見世物”である“彼”には勝てないと？」  
納得がいかない、腑に落ちないなどではなく、“ありえない”といつた声音。

「相手を刀で、いかに効率よく、いかに確実に殺傷できるかを突き詰めた武術と。“彼”的現実的ではない、試合でしか役に立たない格闘技……比べるまでも無いと思いますが」

“彼”という人物と、己が修練している“もの”的違いを、当たり前といった様子で語る女生徒に。

相対している女生徒の苦笑が漏れ出した。

「そうですか。いかに効率よく、いかに確実に……ですか」「なにが可笑しいのですか？」

明らかに、こちらの事を嘲笑つている相手に、切れ長な目を鋭く細める。

しかし、そんな視線などお構いなしに、相手は突きつける様に言い放つ。

「では、先の状況や、今のこの状況で。アナタは何回、私に殺されたと思いますか？」

「……」

「だんまり、ですか……アナタなら分からぬ筈が無いのですがね」  
相手から答えが返つてこなかつた事を、残念そうにする丸眼鏡の女生徒。

だが、それから一拍の間を置いて、相手の女生徒が口を開いた。

「……二回です」

「いいえ、ハズレです。正確には五回ですね」

「……」

即答で、紡ぎ出した答えを否定された女生徒は、唇を悔しそうに噛み締めながら表情を俯かせる……。

それは暗に、この女生徒自体が、丸眼鏡の女生徒の答えに反論はない、正しいと認めた瞬間であった。

その様子を、真剣な表情で見つめる丸眼鏡の女生徒は、別に気にすることではないと、相手を慰める様な口調で言葉を続けた。

「私の言つことを理解できただけでも、アナタは進歩していますよ」

「……」

「ですが、これは相手が私ではなく“彼”だったとしても、殆ど同じ結果が出たことでしょう」

「そんな事！ 有り得る筈がありません！」

これには納得が出来なかつたのか、俯かせていた表情を“バツ！”と上げると同時に、怒氣を露にした。が、丸眼鏡の女生徒は冷靜だ。

「まず、アナタは今、肝心な得物を持つていません。これでは言われても仕方の無い事でしょう」

「ですが、私にも一応、無手の心得はあります！！」

「一応のレベルで、“彼”に対抗出来るとでも？ でしたら、一度試してみると良いでしょ。“彼”なら喜んで受けるのでは無いでしょうか？ そうですね、丁度良い機会です、柔よく剛を制すを体現してみるのも悪くないのでは？ まあ、もつとも、“彼”的身体能力や鍛え上げられた肉体を、アナタの“一応のレベル”で抑えられるのかは保障しかねますが」

「……くつ」

奥歯で苦虫を噛み潰したかの様に、丸眼鏡の女生徒の言葉から引き下がる。

実際、理解は出来ている筈だったのだが、自分の修練している武術を馬鹿にされたようで頭に来てしまったのであろう……。

「そして、もう一つ……」

「……？」

“彼”なら、アナタが無駄なことを喋っている、悔やんでいる間に。既に仕掛けている筈ですからね……今まで見てきて、彼が荒事に関わっている時は、様式美や空気など有つて無きようなものでしたから。それは相手が自身より格下だろうが何だろうが、変わらなかつた事の一つです

冷静に、相手の習性を理解した上で、仮想を語る彼女の言には、不思議な説得力というものがあった。

それに……と、続ける。

「アナタの立場が、私になつたとしても、結果は同じかもしません」

「それは……」

「有り得ない……いえ、有り得ます。まず、体格差は言わずもがな、実際のスピードは“彼”の方が早いと、私は考えていますから」  
己の実力を知るものは、相手の実力も考慮した上で、イメージトレーニングを行なえる。

これは、どんな格闘技だろうがスポーツだろうが同じこと。

なぜなら自分のスピードやパワー、もしくはステップの歩幅やら入り込みの速さやら……これらを知らない限り。例えば自分よりも格上の選手を想定してイメージをした場合でも、自身の実力を考慮しないで、いや、出来ないで、都合の良い試合運びしか想定しなくなってしまうからだ。

自身のスピードに相手は反応できる、自身のパワーや攻撃の仕掛け方は相手に通用する。そういう事を少しでも理解していると、またイメージトレーニングの“現実味”は増し、効率の良い有意義な、かつ、“甘くない”試合を想定できるようになる。

故に、相手を過小評価も過大評価もしなくなり、中立な立場で実力を判断できるのだ。

それを心得ているらし丸眼鏡の女生徒は、まだ信じられないと

いつた表情をしている、田の前の女生徒に至つて眞面目な聲音で視線を向け続ける。

「これは、自身と“彼”を客観的に評価しての考えです。そんなに驚いた表情をしないでください……本当に合っているのか、自信がなくなつてしまふぢやないですか」

「いえ……私はアナタの言うことでしたら、大抵は信じられます。ですが、こればかりは」

「フフ、そこまで信頼されると照れてしまますね」

ほのかに紅く染まつた右頬を、ポリポリと恥ずかしそうに人差し指で触れる……かなり芝居がかつた仕草をする丸眼鏡の女生徒に、対峙している方はとつうと。

「あ、当たり前です……私は、アナタに育てられたと言つても、過言ではないぐらいに、お世話になつてゐるのですから」

「こちらも、恥ずかしそうに顔を赤面させながら、その芝居がかつた仕草を真に受けていた。

彼女の反応に、改めて

可愛いと思つた丸眼鏡の女生徒は、もうちょっと遊んでみようかなとも考えたが、そろそろ時間も迫つていて、話を切り上げるためにへに入つた。

「ですが、安心してください。確かに身体能力では、圧倒的に“彼”の方が上でしょうが、こちらは眞正面から鬪つつもりはありませんから」

「眞正面から鬪わない、ですか？」

相手を真心から安心させるための、優しい口調。

それは、眞に丸眼鏡の女生徒が、相手の女生徒を愛してゐるかの様な暖かさが籠つていた……が、それは次には不敵な表情と共に、一変する。

「はい、私が何者か……それを忘れているのではないですか、『<sup>じま</sup>と<sup>うこ</sup>島刀子<sup>さん</sup>』さん？」

冴島刀子と、丸眼鏡の女生徒に呼ばれた者は。

その彼女の絶対的な自信が内包された表情を見て、ようやく落ち着いた表情をした。

「なるほど……そういえば、そうでしたね。木佐貫家第八代目女忍  
筆頭目“木佐貫千代女”先輩？」  
傍目から聞けば、何を訳の分からないと感じるかもしれない。

女忍……一般的に“くの一”とも呼ばれる、遙か昔に消えた名称。現在では、創作物などで登場したり、日本を勘違いした外国人観光客が、おふざけ程度に探している、そんな程度の言葉だ。

しかし、この場にいる一人は、そんな現実味の無い名称を、大真面目に受け入れていた。

冴島という女生徒に、木佐貫千代女と呼ばれた丸眼鏡の女生徒が。そろそろ話しも切り上げようと、視線を冴島から外しながら扉の前まで歩いていく。

「少し、今回の私の目的とは違った話になってしましましたが。これで納得してくれましたか？」

扉の前で、視線も向けずに、背中越しで問い合わせる木佐貫……。暗に、もう口は出すなどといったニュアンスも感じられたが。

冴島は、それを無視する。

「千代女さんが、そう仰るのなら納得はします。ですが、一つだけ」「はい？」

さつきまでの怒気を含んでいた声音とは、違った真剣みのある言葉。

それに、何があるのかと振り返った木佐貫は。そこで、冴島刀子という洗礼された、凛々しく清らかな容姿を持つ女性の、本当の自信に満ちた表情というものを見る。

「彼……桐嶋竜蔵」という男を、私に“試させて”下さい  
胸元に片手を添え、真に訴えかけてくる彼女の表情に、木佐貫は一度、軽い溜息を吐くと。

「良いでしょう。ですが、それは私の用件が終つた後にして下さい

ね？」

それだけ言って、木佐貫千代女は嬉しそうに微笑みながら、この部屋を出た。

すると、途端に静寂に包まるる室内……まあ、いるのが一人だけになつたから当たり前だが。

だが、しかし。

そこに一人残つた、冴島刀子という女生徒の胸中には、室内を包む静寂とは真反対の、剥き出しの対抗心が芽生えていた。（千代女さんに、あそこまで言わせる男か……楽しみといつよりは、負けられないな、絶対に）

心で、そう決心をつけると。

冴島刀子は、学園内で所属している部活の朝練に参加するために、この部屋を後にした。

一橋学園の健康診断とは、まあ例に漏れず、皆体操着に着替えた後。

視力・聴力・身長・座高・体重などといった他に、心電図や後日の尿検査までを測定する。

また、その際に体の上からのサイズも測るため。この日の朝のために絶え間ぬ努力を三日間ぐらい限定で続けてきた女子の生徒達がいる。

そして現在、それら三日間限定で絶え間ぬ努力を続けてきた他の女子生徒達を、まるで嘲笑うかのような記録を残した者が、学園の保健室にいた。

「ウエスト……1'、54cmですって」

メジャーを持つ手を小刻みに震わせながら、敗北感と懷疑心の入り混じった表情で、信じられないと言葉を漏らす養護教諭、岡崎胡桃……。

田の前には、水分の吸収率と発散率が高められた体育着の上を捲つた、黒髪の美少女が佇んでいた。

「あの、岡崎先生？」

「う、嘘よ……だって、この娘のバストは87? もあつたのよ? ありえるわけがない。そうよ、ありえるわけが……」

ぶつぶつと言いながら胡桃は、再び細いメジヤーを田の前の美少女のウエストに巻きつける。

しかし、結果は変わらない……。

「そ、そんな……」

張りのある、透き通るような若々しい白い肌に、薄つすらと見える、お腹の筋……女性だけではなく男性ですら理想としか浮かべられない、奇跡のぐびれが田の前で岡崎胡桃に、現実の厳しさを教えていた。

それはもう、口惜しいや悔しいなどを通り越して、祟めたくなってしまう様な気持ちになるほどだ。

奇跡のぐびれを持つ女生徒の後ろでは、既に同じクラスの女子達から、どよめきの声が上がっている。

「岡崎先生、次の人も控えているので、早く最後の方も計つてくれませんか?」

一向に現実を認めようとしない胡桃に向けて、田の前の女生徒が困つたように声をかける。

すると、それにようやく田を覚ましたのか。

「え、あ! うん、『めんなさいね、じゃあ最後も計っちゃうから

……』

言いながら、胡桃は彼女のウエストに巻いていたメジヤーを、今度は上とは違つて下着姿になつているヒップの方へと下ろしていく。

そして、胡桃は再びの絶望と、女のとしての敗北感を味わうのであつた。

満足気な表情で鼻歌まで歌いながら、次の測定場所にまで移動をしているのは。

先程、新入生以外では大人の色気と悩ましいボディが有名な養護教諭、岡崎胡桃を絶望のどん底にまで突き落とした美少女。

その美少女は、長く真っ直ぐな黒真珠を思わせる髪と、女子高生らしい可愛らしい瞳や、細く整った輪郭が特徴的で。尚且つ、その体操着越しからでも十二分に確認できる、メリハリのある膨らみが、異性の視線を釘付けにしていた。

彼女がご機嫌な様子で、手に持つてるのは健康診断の記入プリントだ。

体重・身長・スリーサイズ共に、そんじょそこらのモデルでは太刀打ちできない数値を叩き出しており、また先に述べたとおり、あの場にいた殆どの女生徒に劣等感を通り越した絶望感を与えていた。そして、その名前の欄には、桐嶋美夏きりしまみなつと記載されていた。

つまり、廊下を歩いているだけで、周囲の視線を釘付けにしていた美少女とは。

あの兄妹である竜蔵が大好きで堪らない妹であった……。

「ふつふうん」

「ご機嫌だね~」

美夏が両手で覆つようにして、胸の前で記入プリントを大事そうに抱えていると。

隣を歩いていた木下藍きのじたあいが、こちらを少し沈んだ様子で尋ねてきた。それに、花が咲きそうなくらいの微笑みを浮かべた美夏が、“分かる?”と言つたふうに振り向く。

「だつてえ、私が予想してた以上に成長してたんだもん」

「へー」

本人には悪気は無いのは分かるのだが、どうしても棒読みで白けた視線を向けてしまう。

そんな藍は、花も恥らう女子高校生だ。

「良いね、自分が思つたとおりに成長できてさ……」

「何言つてゐるの？ 藍だつて、平均から見れば完全に嫌味を言えるレベルよ。」

高身長な筈なのに、表情に影が差し込むほど沈んでいる藍を見て、美夏が首を傾げる。

「へん……どうせ、それも“背の高い女”とか言われて、馬鹿にされるんだ」

へそを曲げたといつよりも、不貞腐れ始めたと言つた方が適當な藍の豹変ぶりを見て。

美夏は（あ～、変なスイッチ入れちゃつたかも）と、何に後悔したら良いのか分からぬが、とりあえず後悔をしていた。

しかし、彼女のしなやかかつ機能的な肢体を見る限り。そんな馬鹿にしたほうが痛い目を見そな、レンダーナ美しさがある……正直、美夏自身、彼女が持つそいつた魅力には勝てないと踏んでいるぐらいなのだ。

何を落ち込む必要があるのか？ むしろ、その態度が周囲に劣等感や嫉妬を芽生えさせるのではないかとも思つ。

「背が高いからつて言つても、世界のモデルの人とか見ると、たまに180cmの人とかいるし、そんなに落ち込むことも無いんじやないかな？ 実際、ウエストだつてヒップだつて負けてないんじよ？」

故に美夏は、事実に基づいた、彼女の正当な評価を自分なりの見解で伝えることで、慰めようとしたのだが……。

「でも、胸は負けてる……」

（あ～……）

悲しそうに呟く藍に、美夏は返す言葉を見失つてしまつた……。

確かに、彼女の胸は小さくはある……だが、それは平均と比べたら大差は無い。

しかし、それは胸が出でているからとかいう次元の話ではない。

ただ単に、藍の“もともとの胸囲”が、それぐらいあつたというだけの事。

つまり、簡単に言つてしまえば、彼女の胸は小さいということなのだ。

そんな胸の小さな藍が、今度は恨めしそうに美夏の大きくて形の良い胸に視線を向ける。

「世の中つて、どうしてこうも格差があるんだろう。不公平だよね」「いや、それを言つのだつたら、藍がやつてる女バスだつて同じ事なんじやないの？」

「確かにそうだけども……納得いかないじゃん、こう、女として」「藍は別に女性としてダメって訳じやないと思うんだけどな。顔だつて、凛々しい感じの美人つて雰囲気だし。もと自信持ちなよ」もはや沈み続ける藍を、いかに慰めるかという難題になつてしまつた、この状況。

そこでふと、美夏は良い案を思いついた。

まあ、これは木下藍という、ボーグッシュな雰囲気を持ちながらも、確りと女性らしい凛々しさと清純を持つた人物だからこそ、通用する手段なのだが。

しかし、思い立つたが吉田……この際、条件ありの手段だらうが何だらうが選んでられない。

自身の思いついた案を決行しようと美夏は、まだ他の新入生達が次の診断のためにゾロゾロと歩いている廊下に目を配らせた。

そして、目的のものを見つけたと共に声をかける。

「ねえ、竹島君……だつけ？ ちょっと良いかな？」

「えつ！？」

美夏が声をかけた“もの”……それは、同じ1年A組の男子生徒だ。

ちなみに、なぜ“もの”なのか？

それはただ単に、美夏が“兄以外の異性を人として見ていいからだ”。

しかし、そんな美夏の事情などは知らない、声をかけられた男子生徒は、新入生代表挨拶の時や、現在の状況下でも一番目立つ、十

人が十人、美少女だと断言できる程の容姿をした美夏に。声をかけられただけではなく、名前も覚えてもらっていた事に、内心で小躍りしてしまいそうな程に胸を昂ぶらせていた。

「あのさ、素直な意見を聞かせてね？」

腰に片手を当てながら、人差し指を立て、相手に“これは重要だよ？”といった、あざといジェスチャーを取つた美夏の仕草に。思春期真っ盛りの初心な男子生徒は、思わず顔を赤らめながら「お、おう！」と微妙に男らしい返事を返した。

おそらく、優美な容姿や纏う雰囲気とは違つた、美夏の気さくな態度に。オドオドと動搖をしてしまつたら、舐められてしまうかもしないと、変な誤解が彼の脳裏に浮かんだのであつた。……まあ、彼女は舐めるどころか、兄以外の異性など「ヨミ」程にも思つてはいないのだが。

しかし、それと、高校での友人一号である藍を慰めるのとは話が別だ。

今は、どんなに兄以外の異性と話すのが面倒でも、優先すべきは友人なのだから。

「じゃあ、聞くね？」

「おう！ い、いつでも良いぞ……」

「よろしい、良い心がけだね……」

あまりの動搖で、米神に一筋の汗を垂らす男。

周囲では、その美夏に声をかけられた男に対する嫉妬心が芽生えていたが、美夏にとつては全く興味のないことだ。

故に、美夏は男子生徒に、何の気兼ねもなく尋ねる。

「竹島君は、木下さん。藍の事、素直に可愛いと思つ？」

「……え？」

受け取り様によつては、印象の悪い問い合わせなのだが。

それは、美夏の嫌味のない声音や仕草、または微妙に心配している様な表情のお陰で、不思議と感じはしなかつた。むしろ、友人思いの好意的な印象が持てたぐらいた。

そして、美夏の問いに、男子生徒は全く持つて迷いなく答える。視線はもちろん、テンションのダダ下がっていた藍に向けながらだ。

「いや、普通に可愛いってか、美人だと思つけど？」

「ひやいつ！？」

男子生徒に見つめられた状態で、そんな事を言われてしまった藍は。

これまでの暗い表情が嘘だと思えるぐらいに顔を紅潮させ、素つ頓狂な声を思わず出してしまった。

「ほら言つたじやない、藍は誰から見ても可愛いし美人な女の子なんだから、自信を持ちなつて！」

「い、いや。そ、そそそんないこと… い、いきなり言われたって

……

あまりの驚きに歩いていた足を止めてしまった藍は。

こちらに嬉しそうな表情で、『言つたとおりでしょ』といった視線を向けてくる美夏に、声を萎ませてしまつ……。

昨日、今日と見てきて、彼女に活発で男勝りな印象を持っていた美夏は。この恥ずかしそうに顔を赤らめながら萎んでいく友人を見て、ちょっと面白いと感じてしまった。

故に、この面白さをもつと感じたいと思つてしまつた美夏は。

「一人じゃ納得してくれないんだ……じゃあ、他の男の子にも聞いてみよつか！」

「ちょ！？ ちょっと待つてよ美夏…！」

「え、あれ？ 僕つて、これだけ？」

もはや涙目になりながら、暴走しようとする美夏を止めようと、藍は走り出した彼女を追い始めた……幸い、この追いかけっこのお陰で、美夏が他の男子に声をかける事はなかつたが。

（何この娘！ あたしが本気出しても追いつけないなんて…？）

チラホラといる人の障害物を巧みなステップで避けながら走る一

人。

だが、背も高く、足も前を走る美夏よりも長いはずの藍が、ビックリしても彼女の流れるような走りに追いつけない。

外見に似合わないピッチ（脚の回転数）やストライド（歩幅）もそうなのだが。

彼女の走りは、足を素早く入れ替えるたびに、腰まで伸びたストレートの黒髪が舞い、また、その大きく形の良い胸も揺れるために、周囲にいた男子生徒達の視線を釘付けにしていた。

しかし、そんな視線など関係ないといったふうに、美夏の表情には本当に楽しそうな笑顔が浮かんでいた……まあ、後ろを走る藍は、止まつたら再び恥ずかしい思いをしてしまうので、若干の涙目を浮かべていたのだが。

だが暫くすると、突然、美夏の表情に笑顔はなくなる。同時に、その動かしていた脚もゆっくりと止め始めた。急に逃げなくなつた友人に、何事かと思つた藍は、そのまま止まつた友人の隣までペースを落としながら歩を進める。

「……急に、どうしたの？」

美夏の隣へと歩いてきた藍が、その相手の顔を覗き込む。瞬間、藍の背筋に嫌な悪寒が走つた……。

「み、美夏？ 何か恐いよ？」

「え、何が？」

藍の震えた声音に反応こそするが、美夏は向けていた視線を外そうとはしない。

表情は正に無表情……それも、精氣というより感情を感じさせない、お面の様な無表情。

目は見開いたまま、ずっとある一点を凝視している。

流石に、この整つた顔立ちをした美少女が、一切の感情を感じさせない表情をしている光景に、恐怖を感じたのか。藍が美夏の放つ空気から逃れるように、彼女が向けていた視線の先を追う。

すると、そこには本校舎と別の建物を繋ぐ渡り廊下があつた。

この渡り廊下は、本校舎と別の建物の一階同士を繋いでいるため

に、外履さえあれば外に直接出れるよつ、何箇所か出入り口のよつな所が見受けられた。

だが、美夏が視線を向けているのは、そんなどうでも良い所ではない。

視線の先には、彼女の兄である桐嶋竜蔵と“一緒に”隣を歩いている一人の女生徒がいたのだ。

ちなみに、他にも彼の友人らしき者達も近くに数人ほどいたのだが、どうやら彼女には見えていないようであつた……恋は盲田などという言葉では、全く持つて片付けられない現象だ。

「ちょっとごめんね、藍。私、行かなきや」

そう言つて、至つて当たり前の様に兄がいる方へと行こうとする美夏を。

ガシ 藍が肩を掴む事で止めた。

「どうしたの、藍？」

「いや、行くのは別に構わないんだけど、まずはその“誰だらうと構わづ虫の様に殺してしまいそうな眼”は止めてくれ。本気で恐いつてか、これは誰だつて止めざる負えなくなる」

静かな、それでいて透き通る様な声音で振り向いた美夏に、藍が額に汗を浮かせながら言つ。

「え？ 私、そんな眼なんてしてないよ」

カクンと、まるで人形の首が折れたかのように首を傾げる美夏。不気味だ……また、それをやつている本人が、人形の様に造形の確りした顔立ちをしているから、余計に不気味だ。

だが、ここで彼女を野放しにしてしまうと、渡り廊下の途中で友人達と楽しげに談笑している彼女自身のお兄さんや、その周りの人たちに、確実に危害が及んでしまう。

まさか、この虫も殺さないような可憐な少女が、そんな事をするとは思えないが、一応念のためだ。

「とりあえずさ、早く次の診断に行こうよ、ね！ お兄さんと話すなら、また後でも良いじゃん！」

「え、あ、ちよつと藍！？」

藍は捲くし立てるようにしながら、美夏の肩から手を離し、今度はその右手を取って渡り廊下から離れていく。

そのあまりの唐突さに、抵抗する術もなく引っ張られていく美夏は。

「藍、放して！ 私は、お兄ちゃんのところに行かなきゃいけないの……！」

「今は診断の方が先でしょ？ 終つたら、それだけ早く帰れるんだからさ！ 協力し合おうよ、みづ、ね！」

宥める言葉こそ、それっぽいものがあるのだが。相手の手を引っ張つて、強引に歩いていく様は有無を言わさぬ……とこつより、どこか必死に見えた。

動き出す一人（後書き）

またイメージ絵です。

冴島刀子

> i 3 2 0 9 3 — 2 3 7 9 <

桐嶋美夏（ちょっと『彌』りが悪かつたやつです）

> i 3 2 1 0 3 — 2 3 7 9 <

## カミングアウトと爆弾発言（前書き）

今回、下手ながらも描いた挿絵があります。  
お見苦しいかもしませんが、ご覧になつていただけた幸いで  
す。

行間といつものを、少しだけ意識して書いてみました。  
まだ見づらいといつ方がいらっしゃつたら、気軽に意見を下さ  
い。  
それは直接、私の成長にも繋がるので。

## カミングアウトに爆弾発言

新入生の健康診断は、特に問題も無く、順調に全生徒の診断を終えた。

ただ、一部の生徒……とくより、木下藍にとつては、大変面倒臭い行事だったという事を、ここに一応記して置こうと思う

理由は高校での最初の友人が、何やら人を殺しかねない雰囲気で、その友人の身内である兄の所へ歩こうとしていたのを阻止していたからであるが……まあ、それも暫くすると落ち着きを取り戻してくれた。

が、それは一時の安寧だった様で。

それから事あるごとに、友人はその身内である兄を見つける度、突入を繰り返し。

男友達で集団を作つていたのなら何事も無く済んだのだが。そこに一人でも女性がいると、また人を殺しかねない顔で歩み寄ろうとしてしまうので、何度も木下藍が必死に友人を引きずるという光景が見受けられた。

ただ数としては、そこまで繰り返した訳でもなかつたので、助かつたといえば助かつたのだが。

何故このような事になるのか？

理由が全く分からぬ状

況で、同じ事を繰り返していくのは辛いものがあつた様だ。

故に現在。

友人の原因不明の暴走に振り回された木下藍は、教室の自分の席の机の上で、ダラーッと疲れた様子で突つ伏していた。

彼らの教室は、新入生の中でも成績優秀・中学時代に課外活動や校外活動などで高い成績を収めた者達が集められた1年A組。つまり、新入生内のエリートを寄せ集めたような学級だ。

しかし、いくらエリートだとか言つても、所詮高校生は高校生……周囲では、終つた健康診断や、昨日やつていたTV番組、はたまた既に学園の部活に入部している者達の話題で、ガヤガヤと騒がしい限りであった。

そんな中でも、名前順的に藍の前に席を置いている人物の周りでは。

入学早々、“可愛い彼女をゲットして他の男子達に優越感を感じられる薔薇色の学園生活”を夢見た、ちょっと軽そうな男子や、明らかにまだこういった事に慣れていないデビューしたての男子が集まっていた。

この光景を、突つ伏した状態で一段上の机から眺めていた藍……。中には、藍の眼から見ても（あ、ちょっと格好いいかも）だとか（へへ真っ直ぐで優しそうな奴じやん）だとか、そういう高評価の者達もいたのだが……。

その尽くを、美夏は小悪魔よろしくの当たり障り無い対応と微笑みで退けていた。

故に、退けられた男達の顔に無念の文字は無い……あるのは、無意味な希望を持たされた哀れな顔だけだ。

真に恐ろしい娘である。

しかし、そうなると藍には疑問に思う事がある。

（しつかし、ホントにお兄さん以外に興味とか示さないよね……この娘）

昨日の入学式での一幕。

新しい教室へと移動する際に、校門前で周りの目も憚らず、身内である兄の胸に飛び込み。そして傍から見ても恥ずかしいぐらいに甘えていた様子を藍は思い出していた。

それに今日も今日とて、次の診断がある場所に移動している最中

に、偶然その兄に会うと、毎度お馴染みの如く駆け寄る、または飛び込んで行こうとする……。

おまけに、その兄が他の女子生徒と仲よさげに歩いているだけで、不機嫌そうな顔。というより、人を殺しかねない危険な色を感じさせる表情になるのだ。

まだ何となくではあるが、藍はこの前の席に座っている友人の事を、ただのブラコンでは無いのではと感じ始めていた。まあ、まだ感じ始めた程度ではあるが。

「ねえ、どうしたの。そんなボ～っとしちゃってた？」

「え？ ああ、うん」

思いの他、考える事に意識を向け過ぎていたのか。

いつの間にやら、件の友人、美夏がこちらに、椅子の背もたれに右ひじを乗せながら振り返っていた。

その機嫌の良さそうな声に、意識を思考の世界から引き戻された藍は、どこかまだ呆けたような返事を帰す。

しかし、あんなにもこちらに迷惑というより、労働力をかけておいて。どうしてそこまで機嫌よくいられるのであるつか？

藍は、そんな疲労により荒み始めた心によつて生まれてしまった負の感情に、何の躊躇いも無く身を任せた事にした。

まだ会つて一日田の相手に、中々の度胸、思い切つた性格である。

「いや、ちょっと疲れちゃってね……主に、あたしの前にいる困ったブラコン娘のせいで」

言いながら、一段下に座る美夏に、意地悪な視線を落す。

「えっと、ホントにどうしたの？」

その視線の意味するものが分からなかつたのか、美夏が困つたようになに聞き返す。

「……分からないの？」

聞き返された藍は、結構自分なりに皮肉を込めたつもりだったの

に、本当に分からなかつたのかと、信じられないといった表情をする。

それに藍自身、一瞬可愛いと思つてしまつ仕草で小首を傾げる美夏……。

だが、いくら何でも、あれだけの苦労をこじらひに強いておいて（止めなければ拙いという義務感に駆られて）、全く自身の落ち度に気付いていない彼女を見て、藍の苛立ちが徐々に増していく。

故に彼女は、もう回りくどい言い回しなど捨てて、直接的な表現をぶつけやると決意した。

「美夏わあ……本当に気付いてないなら、結構危ないかもよ?」「え?」

「診断の最中にさ、何度も移動があつたけど。その度に、美夏はお兄さんを見つけては突っ込んだりしてたじやん? しかも、お兄さん近くに他の女人がいよるものなら、すんごい危ない顔してたんだよ?」

「……」

藍の直接的な指摘に、美夏は表情に苦笑いを浮かべながら固まつてしまつ。

おそらくさつきまでの自らの行動を、記憶の底から引き揚げているのであつた。

そんな彼女の様子を見て、藍はようやく（あ、やつと反省する気になつたかな）と安心していたのだが……。

「藍?」

「うん? やつと、謝る気になつてくれたかな」

記憶の引き揚げを終えたのか、美夏がいまだ体操着姿の居住まいを正して、藍に視線を向けた。

藍は『おし、話を聞いてやつ』と、机に突つ伏していた体制から、椅子の背もたれに体を預けた、どいか偉そうに踏ん反り返つた態度で美夏の言葉を待つ。

しかし、出てきた答えは……。

「『めん、ちよつと私には何がいけないのか分からなによ……』  
「はあ！？」

本当にすまなそうにしながら発せられた、彼女の信じられない言葉に。藍が思わず驚きの声をあげてしまう。

危うく、椅子から転げ落ちそうなぐらいだった。

「そ、そんなに驚く事なの？」

キヨトンと、こちらのリアクションに戸惑う美夏。

そんな彼女に、藍はこちらがキヨトンとしたいわと、心中でツツ「コミ」を入れながら。

「だつて、どう考えたつて私が見てきたどの兄妹よりもスキンシップというか、接し方が悪いけど異常なんだよ？ 公衆の面前で飛び付いたり、お兄さんが他の先輩達と話している最中に、また飛び込んだり……ついには、さつきも言つたけど、他の女子生徒を殺しかねない眼をしてたんだよ？」

「え？ そんなの藍の気のせいじゃないの？」

「違う！ 絶対に違う！ だつてあたし、証拠に写メも撮つたもん！」

そう言いながら、藍は美夏同様、いまだ着ていた体操着の短パンのポケットから、自身のタッチパネル式の携帯電話を取り出した。

「ほら、見てみなよ！」

取り出したタッチパネル式の携帯電話を、手馴れた様子で操作しながら、藍はすぐに証拠である写真を美夏に見せた。

向けられたディスプレイを、『まさか、そんなことは無いでしょ』といった態度で確認した美夏は。

「……嘘」

あまりの事に、そう呟く事しか出来なかつた。

藍が、こちらにかざしたディスプレイに写つていたのは、能面の様に表情を凍らせた状態で、その普段はハツキリと見開かれた可愛らしい、長い睫毛がチャームポイントの瞳には全くの精気が感じられない、日本古来のホラー映画を髪髪とさせる、自身の色白な顔で

あつた。

♪ 132260 | 2379 ♪

恐い、というより信じられない……。

この写真を見せられた美夏は、自身がしていた表情に自ら恐怖した……。

そこでふと、写真を見せられていた美夏が気がつく。

「あれ？ これ、光の反射じゃない……よね？」

「え？」

美夏のどこか震えた様子の口調に、藍が向けていたディスプレイを、自身に向け直す。

だが戻したもの、田の前の友人が正直何に怯えているのか理解できていなかつた藍は、暫くディスプレイと睨めっこを続けていたのだが。

「……なに？ この丸く光つてるのは？」

藍の表情が、気味の悪いものでも見たというふうに歪む。

二人が見たもの……それは、写真に写っていた美夏のすぐ傍にあつた、白く丸い発光体。

始めはただディスプレイが光を反射させているだけかと思つていた。だが、よく見てみると、角度をどんなに変えようと、写真に写つていてる白い発光体は消えやしない……。

流石に気味が悪いと思ったのか、藍はすぐさまその写真のデータを消去する。

「何だつたんだろう……多分、ただの偶然だったと思うんだけど」

自身が写っていた写真に、謎の現象が起きていた事に、気持ちの悪い思いを感じた美夏は、まるで血に訴えかけるように推測を述べた。

「そ、そうだよ！ ただ単に、光が変な感じで写り込んでただけだつて、きっとそうだつて！」

「どちらも、この不思議な現象を偶然で片付けたいのか。誤魔化すよりは、わざとらしい笑みを浮かべている……ただ、その笑みはどこか引きつった様子であったが。

一刻も早く、こんな訳の分からぬ事は忘れない。

そう考えた二人は、無理やりな話題転換を試みた。

「えつと……あ！ そういえば美夏の身体測定の結果つて、結局どんな感じだったの？ あたし、ウエストの事しか聞こえなかつたからさ！」

「そ、そうね！ えーと、その……」、『じじやあ言ひづらいから、耳貸してくれるかな？』

藍の思い出したかのような言葉に、美夏が恥ずかしそうにしながら周りを見回した後。椅子から腰を上げて、藍の耳元に口を近づけた。

普段なら、どんなに嬉しい結果が出ていたとしても、こんな軽々しく情報を晒すような事はしないのだが。おそらく、今しがたの気味の悪い雰囲気を、早く払拭したかったのだろう。

だからこそ、藍の言葉通りに、自身のスリーサイズを小声で伝えたのだが……。

「……なんだけど。うん？ どうしたの？」

伝え終え、相手の耳から口をゆっくりと離した瞬間。

なにやら藍の様子が不穏なものへと変わっていくのが、美夏にも確認が出来た。

具体的に言えば、彫りの深い目は影に隠れ、机に付いた両手の手の甲には力が入っているのか、数本の血管の筋が浮き出ていて……更には、その女性にしては筋肉質であるが、意外と華奢な印象もある両肩がブルブルと、何かに打ちひしがれている様に震えている。

何事か……と、美夏が疑問に思つた刹那。

「だああああッ！……！」

「きやッ！？」

突然、藍が狂つたように……いや、狂つた。

座っていた席から怒涛の勢いで立ち上がり、一つ下の段の美夏だけではなく、教室中のクラスメイト達すら驚かす大声を鳴り響かせた藍。

周囲からは、何事かといった視線を浴びせられる……が、今の藍にそんな事を気にする余裕は無かつた。

「ほ、本当にやったの!?」

「うるさい……！」の声が聞こえた。

· 三國志 ·

「あたしはね、このJapanという国を、侘び寂のある本当に謙虚で美しい国だと今まで信じて来たんだ！！　だけどね、美夏。アントンタの体は、その古き良き侘び寂の精神を忘れた、非国民以外の何者でもない！！　返せ！　あたしの好きだったJapanを返せ！」

もはや涙目になつて、美夏に指を突きつけながら、己が思いをぶちまける藍。どうやら相当、彼我の戦力差が絶望的であつたのである。

それに、少しの間、訴か分からな」といふたふへに弓して、いたもの。

「いやあ、おまえの口を開けたまゝで誰が誰を罵るか、誰が誰を罵られるか、それとも誰が誰を罵られても無いと、誰も罵らぬと……」

『……桐嶋さんは、もう少し“無意識な主張”を控えるべきだよーー!』

持つている者と持たざる者の差が、どれだけのものか知るべき！

『大体、トップに比べて、あのアンダーは羨ま……いや、反則だと  
思う！』

『桐嶋さんのスタイルは、“校則で規制すべきレベル”！！ そうしないと、私達の立場が……』

周囲のクラスメイト達から、悲痛とも称せる格差の撤廃運動が起  
こり始めた。主に、健康診断の際に保健室にいた女子達から。

そのあまりの勢いに、流石に当たり障りの無い付き合いが得意な美夏でも気圧されてしまう。

一体、何が起こっているのかと、突然の事だつたために思考が混乱してしまう美夏。

しかし、尚も彼女達の格差撤廃運動は怒濤の勢いを見せる。

『桐嶋さん！ どうやつたら、そこまでのプロポーションになれるのか、私達に情報を開示して！！ でないと、あまりにも……』  
『泣かないで！ 泣いたら、私達は一生、この格差に屈しなければならないのよ！！ 今は最後まで立ち続けて、勝利を？ぎ取るの！』  
何をどうすれば勝利を？ぎ取れる事になるのか？

今の彼女達に、そんな事は些細な疑問の様で。

既に美夏の席の周りには、無数の血の涙 に見えるだけを流した女子達が集まっていた。

「 ちょ、ちょっと。皆、落ち着いて……」

もはや苦笑いどころか、本当に困った表情をしながら彼女達を宥めようとする美夏だつたが。

「 落ち着いてなんかいられる訳が無い！！ 大体、いくら高校生だからといって、まだ中学から卒業したばかりだつていうのに、どうしてそんなに立派に育つてしまつたんだ！？ この学園での最初の友人から御願いだ！ どうやつたら、そんなになれるんだい！？」

自身の席の後ろから、もはや言葉遣いがグチャグチャになり始めて来た、学園での最初の友人からの涙混じりの悲鳴が耳に届いた。それに連られるかの様に、他方向からも、また同じような言葉が飛んでくる。

一体、この状況は、どうすれば収まるのか……今の美夏には、全くといって良いほどに手立てが無かつた。

しかし、そこで美夏がふと、何かを悟り始めた……。

なぜ、体の発育が良いだけで、ここまで言われなくてはならないのか

なぜ、皆さんそれぞれ魅力的な部分があるのに、そこばかりに拘

るのか

大体、この体を自由にしていいのは、敬愛する兄だけなのに

そうだ、兄だけなのだ……なのになぜ、皆が皆、自分が負けたみたいない言い方をしているのか？

私はもともと、兄以外の異性には興味も無いし、勝負をする気もないのに……。

そう、はなつから勝負をする気も無いのだ……。

なのに、なぜ？

あまりに不条理な立場に立たされてしまった美夏は、これらの思考が一気に脳裏を過ぎった瞬間。

バンッ！　　「落ち着いてって言つてるじゃない……！」

自身の机を両掌で思いつきり叩き、怒氣の混じつた口調で、騒ぐ皆を一瞬で黙らせた。

ちなみに、この間中ずっと男子達は、関わり合いになりたくないと無視を決め込んでいた者と、もしかしたら、うつかり美夏のスリーサイズが聞けるかもしれない、聞く耳を立てていた者の二種類に分けられていた。

また、聞く耳を立てていた者に至つては、美夏が机を思いつきり叩いた瞬間、ビクンと体を跳ねさせていた。

そんな外野の状況など知らない美夏は、先程悟つた事を踏まえながらの反論を静かに開始する。

「皆が言いたい事は分かるには分かるけど、それは私にはどうしようもない事なの……聞かれても私は、これまで真剣に打ち込んでいた新体操以外、人と違つた事をした事が無いから何も言えないし知らない」

シンと静まり返つた教室内で、美夏の真剣な言葉が続けられる……

内容は、この際どつかに置いておく事にする。

「それに、どうして皆、そんなに自分を下に見ているの？ 私から見れば、皆だつて其々魅力的な部分があるし、十分に可愛いと思うよ？」

「この美夏の真心からの言葉に、クラス中の男子達がウンウンと頷く……。

実際、確かにこの一年A組の女子レベルは高い。

それは美夏を筆頭に、藍や他の女子生徒達を見てみても、誰しもが認める事であろう。

おそらく、あと一瞬間もすれば一学年中に広まり、様子を見に来る男子生徒たちも現れる筈だ。

そして何より、美夏の全く嫌味でない真摯な聲音が、クラス中の生徒達に、それを認識させるだけの説得力を生んでいた。

美夏の表情に、少しの変化が現れた……。

これまで少しだけ怒っていた表情から、ビニカいつも通りの柔らかい表情に変わっていたのだ。

多分、皆がよひやく自分の話しひを聞いてくれて、安心し始めたのである。

だが、ここからが本題なのだ。

これを言つてしまえば、まだ入学一日目であったが、そろそろ鬱

陶しくなってきた男子達の浮ついた誘いを遠ざける事が出来るかもしない。

そして、彼女達の負け犬根性も、元に戻せるかもしない。

そう考えた美夏は、表情を柔らかいものから真剣なものへと変え、口をゆつくりと開いた。

「大体、立場とか格差とか、屈しなきやならないとか……、皆、ちょっと勘違いしてるよ」

この意味深な言葉に、教室中の皆が頭に“？”を浮かべ始める。だが、美夏は止めようとはしない。

これは、色々と面倒が起きる前に、皆に向けてハッキリとさせておかねばならない事だからだ。

ハッキリさせておけば、自身の知らないところで変な嫉妬だとかを買わずに済むし。なにより、美夏自身、ここでハッキリと宣言しておきたいのだ。

故に、彼女は微妙に本音を言つてしまつては拙いといひはオブラーに包んで、その言葉を口にする。

私、この学園にちゃんと好きな人いるから。  
だから、その人以外見る気は無いもの

瞬間、教室中の男子が言い知れぬ危機感にざわめき立ち。女子達は得意というより大好物な恋話が突然舞い込んできた事に、さつきまでの血走った雰囲気など何処吹く風で、嬉々とした表情をしながら、ある意味爆弾発言をした美夏に先を促そうと言い寄つてきた。

『え！　え！？　ホントに？　誰なの！？　同級生？　それとも先輩で！？』

『どんな人？　ねえ、他には絶対に言わないから！』

『芸能人でいえば、誰に似た感じ？　それだけでも良いから教えてよ！　自分でいつたんならわ～』

本当に、さつきまでの空気は何だつたのか？

もはや、クラス中の恋に恋する“才能ある”乙女達の中に。同じく恋をしている美夏を敵視している者などいなかつた。

その様子に目の前で当てられている美夏は、やっぱり女の子は恋愛をしなきやダメな生き物なのだなど、謎の考えに至つていた……が、話しを続けなければ、また同じような轍を踏むそうだったので、さつきとは違つた意味で迫り来る彼女達に、気持ちの面で向き直つた。

『えつと……じゃあ、絶対に他のクラスとかに漏らさないつて約束するなら、学年だけは教えるよ』

瞬間、周囲でこちらを囲んでいた女子達が。まるでバリケードの様に固まり始め、美夏の声に耳を傾けた……どうやら、開示される

情報が先輩か同級生だけでも、盛り上がりがあれば良いといった感じのようだ。

その様子を確認した美夏は、座った体勢から身を屈めて、なるべく外に声が漏れないよう、ヒソヒソとした声音で口を開いた。

「学年は一つ上……『もう一声』……それで、クラスはABCの内のどれか『もう一声！ でないと、また騒ぐよ？』……じゃあ名前とか以外なら聞くけど？」

一年A組の女子達は、奇跡とも言えるチームワークで。これらの耳打ちにも似た小声でのやり取りを、皆に確りと共有させていた。『じゃあ、どんな感じっていうか、どんな雰囲気の人かってだけで教えてよ？』

「そうだね……背は私より少し高いぐらいだけど、かなり強そうな感じの人かな。だけど、それでいて優しそうな雰囲気がある人」正直、これだけの情報で何が特定できると言うわけでもない。

だが、彼女達は皆一様に嬉しそうな表情で『頑張つて』だとか『誰か分かつたら、応援するよ』だとか、暖かい声援を、好きな人がいると公言した美夏に送っていた。

この時、美夏は。

このクラスの女子達はもしかしたら、乗りだけで生きているのかもしれないとか、本気で思つたとか。

しかし、そんなクラスの女子達が騒いでいる中。美夏の席の後ろに座つていた木下藍は、どこか考えに耽つているような表情をしていた。

（美夏より背が少し高くて、かなり強そうな感じの人つて……）もしかして……と、考へが浮かびそうになるも、藍はそれを胸中で頭を振りながら否定する。

まさか、そんな事はあるわけが無い。

いくらなんでも、常識を一応は弁えている彼女が、そんな事を考へていてるわけが無い。

“どんなに仲が良さそうでも”、それだけは無い……。

これらの否定は、藍の思考の中だけで繰り返される、決して外には漏れないもの……。

故に、この時の藍は、なんの確証も得ぬまま、巡らせていました思考を一旦止めるのであった。

全学年の健康診断も、何事も無く無事に終わり。

現在は様々な生徒達が部活や委員会活動、または帰宅と……それぞの放課後を過ごす時間帯となっていた。

所々から聞こえる、学園の時間から開放された生徒達の会話。

そのどれもが、どこか嬉しさを帯びたものであり。また部活動に向かう者達からも、嫌々といった声音ではあったが、本質はやつと好きな事に取り組める時間が来たといった様な気持ちが伝わってくるものであった。

そんな中を、部活の仲間達には『呼び出しをくらったから少し遅れる』とだけ伝えていた、ラグビー部所属の桐嶋竜蔵が歩いていく。歩き、到着した場所は本校舎の四階……そこはの屋上へと出られる扉の前。

正確には、四階の階層から一つ上がった所にある、薄暗い空間。さつきまで聞こえていた生徒達の活気が、不思議と耳から遠のいていく。

だが竜蔵の表情には変化は見られない……ずっと、ここに来るまでと同じ、少々眉間に皺のよつた機嫌が悪そうな仏頂面だ。

なぜかと言われば、昨日の脅迫とも取れる文章が書かれた、一枚の紙切れが原因であろう。

内容は、来なければ昨日、竜蔵のプライベートで起じた事や、執行部の事をバラすといったもの。

正直、昨日のパスタ専門店での出来事も誰にも知られたくは無いが、それより執行部の事を外部にバラすといった内容の方が、竜蔵

には少しだけ看過できぬものであった。

一橋学園の執行部……まだ昨日までの竜蔵は、名田上“手伝い”といった立場に無理やり就かされていただけに過ぎないが、その存在がどれだけ重要なのか、一応は理解できている。

### 執行部の重要性。

それは、この学園都市という街には“警察が存在していない”といふ事に起因している……いや、正確には警察官・自衛官・消防隊員などを学生のうちから目指している者達が通う専門学校があり、それらが実習・研修科目として、街の至る所に設置された交番を使って、警察に似たような治安維持活動はしているのだが。

学園都市の執行部とは、これらの活動とは違つたものを重点的に担当しているのだ。

それは、この街に来る外部からの脅威への対応……もつとハッキリと言つてしまえば、学園都市の創設者である一橋家に連なる名家に対して、様々な工作を弄してくる相手に、学園内で対応・解決していく組織である。

この様々な工作を弄される一橋家や、他の名家とは一体のどのようなものなのか？

それ自体は竜蔵は把握していない……が、何故か竜蔵の所属する日本最大の勢力と門下生を誇る空手団体“真道会館”の館長や。日本だけではなく世界からも注目されている格闘技団体『JUDGEMENT』を取り仕切っている人物から、直接に『彼らの言うとおり、執行部の活動に参加しておけ』と指示を出されているのだ。

いくら竜蔵でも、自身が所属する団体のトップから指示を出されでは断る事は出来ない……それに、これだけの格闘技という限られた枠ではあるが大きな勢力が、参加しておけと推していくのだ。ただの金持ちな家柄という訳でもなさそうだと、竜蔵は考えている。

また、竜蔵がこれまで執行部の“手伝い”として割り当てられていた仕事も。工作を弄してくる相手が、よく陽動として使う街でチ

ームを組んでいるチンピラなどが相手だつたのだ。所詮は手先で捨て駒として利用されていた者達、情報を吐かせようにも、出来ない事を竜蔵は既に学んでいる。

これらの事を踏まえて言えば、竜蔵は実は執行部の事を良くは理解していない……が、その“手伝い”として使つている者にすら情報を与えてくれない事から、影に包まれた組織、悪く言えば碌な組織でない事は理解しているつもりだ。

後は、この執行部という胡散臭くて碌でも無さそうな組織では、“暴力”といった行為が“プロの格闘家”でもある竜蔵でも、何の問題も無く許されてしまつといつ危ない傾向もあると言つ事だけだらうか。

故に、限られた知識ではあるが、竜蔵はこのよつなきな臭いにも程がある組織の公表を良しとはしない。

もし公表されてしまつたら、そこに所属させられた竜蔵自身、色々と立場的に拙いものがあるから、といづ理由もあるが

そして現在。

竜蔵は、そんな学園でも全くといつていいほど知られていない組織の人間から、直接呼び出しを受けている。

今までは一橋学園の生徒会長である、一橋姫樹からの命令もといお願いで色々とやり取りはしていたが、執行部のメンバーと直接顔を会わすのは今回が初めてのことだ。

また、昨日胸ポケットに入れられていた紙切れに書かれた、“忍者”という既に廃れてしまつた名称が、竜蔵に更なる警戒……ではなく、懷疑心を与えていた。

だが、これから学園でもきな臭い組織の相手と対面するのだ、警戒はし過ぎても問題にはならないだろつ。

そう考えた竜蔵は、慎重に……いや、普段通り何も考えずに、目の前の鉄製扉のドアノブを回した。

瞬間、開かれた扉の隙間から、屋上特有の強い風が入り込んでく

る。

無風の状態から、突然全身にちょっとした圧力を感じるほどの風を浴びた竜蔵であったが。少しだけ目を細めるという行為以外、特に何もリアクションは取らなかつた。

そして、竜蔵がいた薄暗い空間と屋上を仕切つていた鉄製扉が、完全に開かれる。

鉄製扉を開いた竜蔵の視界には、まだ暁が少し過ぎた辺りの日中の日差しが照りつけた、屋上の風景が広がつていた。

特に何の変哲もない、大型の給水タンクと空調装置である「コンプレッサー」以外、何も置いていない、寂しくもどこか落ち着けそうな場所。それが、一橋学園の屋上だ。

周囲の囲いは背の高いフェンスで仕切られている……そして、そこに一人の女子生徒の姿があつた。

女子生徒は、屋上へと出てきた竜蔵の正面に位置するフェンスの前で、こちらを向きながら静かに立つてゐる。

屋上風に吹かれ、揺られる彼女の黒髪であつたが。当の彼女自身が、それを気にした様子は見せず、ただ風に吹かれるままに長い三つ編みの黒髪を揺らしてゐる。

特徴的な大きな丸眼鏡や、少し控えめな背丈に華奢な体つき……そこだけ見れば、ただの目立ちそうにない“普通っぽい”女子高生で済ませられるのだが。

どうやら、竜蔵の目には違つた少々印象に映つてゐる様であつた。（良い立ち方だな……重心が確りと足の裏が安定した中心になつてゐる）

もはや職業病に近い観察眼。

竜蔵は彼女の立ち姿を見た瞬間に、そんなとこから見始めた……。すると、向こうもそんな竜蔵に気付いていた様で。

「こんなちわ。こうやって一人で話すのは、初めてですね」

風に揺られていた黒髪を押さえながら、眼鏡越しにじりじりに視線を向けてくる三つ編み少女。

彼女は確か、以前入学式後に校門前で、生徒会長の姫樹の後ろに控えていた生徒会メンバーの一人だ。

名前は、木佐貫千代女といつたか……竜蔵は彼女の容姿や声を確認すると、記憶の中から彼女について知っているだけの情報を引っ張り出していた。

「アンタが？」

記憶を引っ張り出した竜蔵の短い問い。

だが、どうやらこれだけで通じた様で。

「はい、昨日はお楽しみだつたみたいですね」

本来なら皮肉混じりの微笑みで、竜蔵をからかえる様な台詞なのだが。彼女の顔に、表情という表情はなく、全くの興味を感じさせない無表情であった。

「人のプライベートを覗いておいて、なんの悪びれも無しか……」「ええ、私は良く趣味が悪いと言われるので」

「自分で言うかね、普通」

他愛の無い会話を続けながら、竜蔵は屋上の地面を歩き、彼女の前まで来た。

間合いにして、約4歩分の距離。

あと一步進めば、まあギリギリ仕掛けられる程度の距離だが、竜蔵はそれ以上の歩を進めなかつた。

それに、始めて彼女が感心したような表情をする。

「流石です、やはり気付きましたか」

抑揚の無い賞賛に、竜蔵は鬱陶しそうにしながら。

「よしてくれ。こんなので褒められても、何の自慢にもならないから

」

「いえ、相手が隠している手を感じ察知し、それを警戒しながら、なるべく安全な間合いで進む脚を止めておく……普通の人間では、こうはいきませんから」

「そうか？ いつこいつ事は、結構その辺のチンピリでもたまに出来る事だぞ？」

「路上な実戦で得た感、ということですか。これは、私達武術に精通する人間とは違つたものですね。素直に興味深いです」

感心……しているのだろうか？

だが、彼女。

木佐貫千代女は、竜蔵と対面しながらも、制服であるブレザーの懷から、一本の“クナイ”を取り出すと。そのまま自身と竜蔵が立つて、『ちょい』と中間辺りに、それを放り投げた。

簡単に得物である

物珍し過ぎて、別の意味で驚いたが

“クナイ”を捨てた彼女を見て。

竜蔵はその行動から、おそらく自分は試されたのであらうと判た  
りを付けていた。

自身よりも遙かに弱そつた相手に、それをされたとこり苛立ちを  
覚えながら。

「すみません。やはりお気に触りましたか」

あまり気にしては無さそうな物言い……だが竜蔵は、苛立ちこそ  
覚えてはいたものの、これを無視する。

「俺も待たせてる身だから、单刀直入に聞くけど。何の用だ？ いや、そういうえば先輩だつたな。何の用ですか？」

「今更、私の事を先輩と見なくとも良いのですよ？」

「分かった、なら早く教えるよ。こっちも忙しいんだ」

先の冷静な危機探知や状況判断能力を、自然と披露していた者は思えない、どこか落ち着きの無い言動。

だが、相手方の木佐貫も、竜蔵がそついた男である事は理解しているようで。

「そうですね、いつこいつた事は、やはり早めに済ませた方が良いで  
すし」

「……」

もはや聞きの体勢に入つてしまつた竜蔵に、少しだけ微笑みながら

ら、木佐貫は本題に入った。

「アナタの言うとおり、单刀直入に申します……まあ、もともとはアナタの正式な執行部入部に、歓迎を込めた挨拶をするという事が用事でもあつたのですが」

「……」

「今のおななつの感覚や立ち居振る舞いを見て、事情が変わりました」相手の言葉を聞いてはいるが、どこか不機嫌な表情の竜蔵に対し、木佐貫千代女は一拍の間を置いた後に……。

私と子作りをしませんか？

「ブーーッ！？」

そんな、うら若き、花も恥らう女子高生が直接口にするとは俄かに信じ難い爆弾発言を、目の前の竜蔵にしたのだった……。

同時に、この場にはいない竜蔵の妹が、一瞬だけ言い知れぬ悪寒を感じていたのは、言つまでも無い。

## 経験の差

私と子作りをしませんか？

「ブーーッ！？」

あまりに率直、あまりに突拍子も無くストレートな表現で発せられた言葉に。

屋上風が微妙に鬱陶しい、この場で龍藏は思わず吹き出してしまう……。

結構、先程まで彼なりに真面目に凄む、といつより威圧しながら急かしていただけに、これは少し情けない反応になってしまった。が、いきなり何の脈絡も無く、こんな事を言われてしまえば、誰だつて吹き出すといつもの。

「な、何言い出すんだよ！　お前！？」

狼狽する自身を隠す事も無く、とんでもない爆弾発言をした相手  
木佐貫千代女に声を張り上げる龍藏。

しかし、当の本人は全く気にした様子も見せずに。

「だから、私と子作りを……」

「分かつてるよ！　俺が聞きたいのは、どうしてさつままでの流れで、そこに行き着くのかだ！？」

頭のネジが、一本どころか全て吹き飛んでいるのではないかと口にしそうになるも、それは流石に自重した。

「流れも何も、あれを含めたのが、今回の私の目的です」

「えー……」

しつと言う木佐貫、もはや反応するのも馬鹿らしくなった龍藏。だが、彼女はそんな龍藏など放つておいて、話を進めてしまつ。「執行部への正式入部など、もともと会長が計画していた事ですか？　私にとつてはあまり関係の無いものなのです」初耳だが、なんとなくそれは理解していた……。

もともと、竜蔵が執行部の手伝いをやらされていた理由は、彼自身が起こした問題による罰だつたのだが。最初に『お咎め無しの代わり』として強制させられた時から、薄々こつなるのではないかと感じていたのだ。

故に、ここには驚きはしなかつたが。

「私に関係……というより私の家、木佐貫家に大きく関わる事が。今しがた私がアナタに尋ねた、『子作り』という訳なのですが……について来れていますか？」

「いや、全然……とか、ついて行く気も無い」

「そうですか」

もう何がなんやら分からなくなつたと、考える事、話を聞く事すらも放棄し始めた竜蔵に。

木佐貫は、どこか寂しそうな聲音で相槌を打つ。

だが、どうやら彼女には引けない理由があるようだ。

「でしたら、アナタはそのままでいてください」

「？」

言いながら、木佐貫は竜蔵の傍まで歩み寄つていいく。

田の前で足を止めた木佐貫は、竜蔵の身長よりも10?以上小さくて華奢な体型だった。

しかし、優美な曲線を描く背筋や、竜蔵が第一印象で感じた、軸の確りした立ち方が、彼女の存在感を外見以上に高めている。

心なしか、彼女の方から竜蔵の鼻孔に甘い香りが、風に乗つて流れてきていた。

どうやら、丸眼鏡に三つ編みといった地味な外見の割りに、女性らしい所には気遣つているようであつた。

すると、田の前でこちらに視線を合わせていた木佐貫が、おもむろに膝を折り、身を屈める……。

それも、『竜蔵の社会の窓を開けながら』

「おこ」

「この見えて、私は“床上手”で有名なのです。必ずやアナタを

満足させた上で、田舎が手を突っ込もうとしたところで、暫くの間、大人しく……」

何やら開けた社会の窓に、木佐貫が手を突っ込もうとしたところで、竜蔵が彼女の頭を上から掴んで引き離す。

あ……と残念そうにポツリと漏らしながら、頭を竜蔵に掴まれた木佐貫。

それを、無表情のまま見下ろす竜蔵。

「どうかしましたか？ もしや、こういった事には興味が無いと？」「興味が有る無いの前に、ありえないだろ？ なあ？ いきなり屋上で人の社会の窓開くとか」

「いえ、私独自の調べでは、こういった誰もいない屋上で、男女が二人になつた場合は、大抵が“合体”するという記録が……」

「どこでどう調べれば、そんな所に行きつくんだ？ ド田舎のヤンキーでも無しに、普通はそうはいかないぞ？ てか、なんだ？ お前にとつて、屋上つてのはラブホテルと一緒みたいなもんなのか？」「おやおや、社会の窓は開けても、どうやら心の窓は……」

「上手くもねえし、勝手に開いたのはそっちだろ」

怒鳴りたい気持ちを抑えながら、先程から謎の行動しかしてこない木佐貫の頭を、竜蔵は放した。

すると、膝を曲げ屈んでいた状態から、ペタンと後ろに尻餅を付いてしまう木佐貫。

同時に、何かのチャンスだと感じたのか？

わざとらしく脚を崩し、上から見下ろしていく竜蔵に覆いつているスカートの中身を見せ付ける。

しかし、竜蔵はそれを冷めた目で見下ろす。

「これも効果が無いと……ふむ。ここまで私の“セックスマピール”が通じないとなると。もしやアナタは……」

「そこまであざといパンチラじゃあ、誰だつて冷めた目で見るわ。大体、さつきからなんなんだ？ お前、本当に大丈夫か？」

側頭部を右の人差し指でトントンと叩くジエスチャーで、相手の

正気を疑う竜蔵。

しかし、木佐貫にはどこも堪えたところが無く。

「同性愛者という可能性を否定したとなると……もしや……私自身に、桐嶋さんを欲情させる魅力が足りない」と……？」

世紀の大発見でもしたかのように、一人で盛り上がり始める彼女に、竜蔵は逆に冷静な表情で、つぶさりとする。

一体、田の前の執行部を名乗る女は、何がしたいのか？まさか、本当にナニがしたいだけなのか？

なら、据え膳食わぬは男の恥として、今から頂いても良いかもしない。

だが生憎と、竜蔵はそういう軽率な行動を取る人間ではないのだ。

「なあ？ いい加減、ふざけるのは止めてくれないか？ こっちだつて、部活の連中に遅れるつて断つてまで来てるんだぞ？ 本題に早く入ってくれ、頼むから」

心の底から早くしてくれと……まるで懇願するかのように、頭をボリボリと搔きながら言つたが。

どうやら、この懇願は相手にどうしては別に意味を成さなかつた様で。

「いえ、ですから、私の目的は執行部としての挨拶や歓迎などではなく。アナタとの子作りですと、先程に言つたはずですが？」

「それが意味分からねえって言つてんだろ！？ ちゃんと伝わってるのか俺の話しさ？」

しつと当然の如く言つ彼女に、竜蔵は遂に怒鳴り声を上げてしまつ。

普通の女性ならば、竜蔵の様な風貌の男に怒鳴られれば、身動きの一つでもする筈なのだが…… そういう可愛らしげ動きは一切見られない。

むしろ、冷静な眼差しで、こちらを見上げているだけだ。

その様子に、竜蔵はまともに取り合つのも馬鹿馬鹿しく思つたの

か。

制服の胸ポケットから、昨日渡された一枚の紙を取り出す。

「はあ……とりあえず、ここに書かれた通り、俺はちゃんと屋上に来たんだ。約束は守ってくれるんだな？」

取り出した紙を広げながら、地面に座っている相手に書かれている文章を見せる竜蔵。

「ええ、それはもちろん。といつより、もとから執行部の情報を表沙汰にするつもりはありません。してしまったのなら、私が一橋家の方々に消されてしましますからね……おっと、今のは他の人に漏らさないでくださいね？」

わざとらしい……いや、絶対にわざとだと分かる彼女の仕草に、竜蔵は再びゲンナリとする。

知つてもしようがない事だが、知つてしまつては拙い感じの情報……。

一橋家といふことは、あの生徒会長、一橋姫樹の実家の事である。

だが、ここでその様なことを追求しても、仕方の無い事は理解している。

そう考えた竜蔵は、相手に見せていた紙を、その辺に捨てる。もう用はないと言外に語りながら、彼女に背を向けた。

「だったら、俺は部活に戻るぞ？ アンタの目的とやらば、他を当たつてくれ。俺はバスだよ」

相手に背を向けながら、右手をフラフラと上げて揺らす。

そしてそのまま、竜蔵は屋上から出るために、歩を進め始めた……が。

そう急がないで下さい、まだアナタにはいてもらわないと困ります

す 「ツ！？」

突然、自身が振り返ったことで、後ろにいた筈の木佐貫千代女が、いつ移動したのか？ いつ、こちらに振り返っていたのか？ それすらも、分からぬぐらの動きで、竜蔵の田の前に立ち塞がっていた。

彼女の佇まいに、一切の乱れは感じられない。

という事は、今の現象は彼女にとつて、ごく当たり前の事だったのか？

様々な推測が頭の中で駆け巡るが、それよりも早く、竜蔵は彼女との間合いを本能としか表せられない反応速度で取つていた。

距離にして、さつきよりかは近い3歩半。

その気になれば、中段蹴り（ミドルキック）を、ステップ込みで蹴り込める距離だ。

だが、まだ竜蔵は相手に危害を加えよつとも、そのために構えを取ろうともしていない。

ただの自然体で、また木佐貫と向きあつていた。

「良い反応ですが、とりあえず、まだ私の話し……もとい、こちらの用件は終つてはいません」

「……」

先程と変わらぬ、冷静な声音に竜蔵は沈黙で帰す。

どうやら自然体ではあるが、完全に警戒し始めてしまつたようであつた。

お前は自然界に住む動物か、というツッコミが、木佐貫と喉下まで這い上がつてきていたが、彼女はそんなキャラではないため、あえなく消沈していた。

「まあ、用件とは言つても、先程の様な性交渉をするつもりはありますんで……（いすれは、必ず“して”もらいますが）」

最後のほうは聞き取れなかつたが、どうやらもう、子作りだとかふざけた事は抜かさないらしい。

それを信じた竜蔵であったが、まだ警戒心を解こうとはしない。

まず、プロでもある自身の前に、全く持つて確認できないほど

入りで現れたのだ。

警戒をするなという方が無理な話しだ。

だが、そんな竜蔵などは他所に、木佐貫は徐に屋上の出入口の方へと視線を向けた。

「そろそろ出でたらどうですか～！ もうきから恥ずかしがつて出て来れないのは丸分かりですよ～！」

どこかやる気の感じられない、間延びした呼びかけをする木佐貫。おそらく、ここの中入り口である鉄扉の向こう側にも聞こえるよう、彼女なりに声を張つてているのだろうが……いかんせん、やはりどこか霸気に欠けるところがある。

しかし、どうやら鉄扉の向こうには声が届いていたようだ。

ギイ……。

屋上風を押しのけて、屋上の出入口である鉄扉が開かれる。しかし、開かれた部分は僅かな隙間だけ。

まだ、扉を開けた人物は確認できない。

「そんなに心配しなくとも、別に“行為に及んでいる訳ではないですしど”。彼との交渉も決裂してしまったので、早く出てきてください」

まるで相手を諭すように、扉の向こう側へと声を掛け続ける木佐貫。

すると、彼女の説得が功を奏したのか、重い鉄扉がゆっくりと開かれた。

「お前は……」

重い鉄扉を開いて出てきた人物に、竜蔵は思わず声を漏らしてしまふ……。

「これから桐嶋さんには、彼女と闘つて頂きます。いわゆる、実技試験の様な感じですね。私達、執行部からの腕試しという訳です」竜蔵と扉から出てきた人物の視線の邪魔にならないように、横に

身を引きながら、木佐貫が説明をする。

竜蔵の視線の先……そこには、開いたドアノブを放したばかりの、木刀を立つた一人の女子生徒が立っていた。

昼過ぎの日差しを煌びやかに反射する、黒曜石を思わせる長く真っ直ぐな黒髪に、研ぎ澄まされた刃物の印象を持つ、切れ長な目……細く整った輪郭や、透き通るような白い肌。

また、体型も華奢に見えるが、なかなかに凹凸の有る、スレンダーかつ女性的な膨らみも確りと持つた、モデルの様な体型なのだが。それよりも、竜蔵には彼女の出で立ち、とりわけ木佐貫と同じように安定した背筋や重心に目を奪っていた。

正直、かなりの美人……竜蔵は彼女を見た瞬間、胸中でそう呟かざる負えなかつた。

しかし、竜蔵は彼女の事を別に知らなかつたわけではない。

「さえじま 泽島刀子か……まさか、二年で一番有名な女子が、執行部に関わつてたなんてな。意外通り越して、ビックリだわ」

竜蔵に名を呼ばれた女子生徒、泽島刀子は。

そんな意外そうな声音で、こちらを見ている竜蔵に、同じく視線を向けながら。

屋上のコンクリートの地面を、一步一歩、静かに、されど優雅に歩んでいく。

その間も、一切の軸のブレを感じさせない……明らかに、意識をした歩き方をしていると、竜蔵は当たりを付けていた。

「まあ彼女は私と同じく、二橋家に仕える分家の一つで、泽島家の長女ですから。当たり前と言えば当たり前なんですけどね。知らなかつたのなら仕方ないですが」

泽島と木佐貫を挟んで向き合つ中、竜蔵はずつと、彼女の目に視線を向け続けていた。

（こう見えてる、抜き身の刀みてえな女だな……）

泽島刀子という女性に対して、竜蔵が浮かべた第一印象がこれだ。事実、彼女が醸し出す、独特な張り詰めた雰囲気は、どこか日本

刀の様な魅惑的な印象がある。

そう考えると、竜蔵が思い浮かべた第一印象は、間違いではないのかもしない。

だが、竜蔵が彼女の目を見続けていると、突然、彼女が顔を赤らめながら、恥ずかしそうに視線を外し始めた。

「うん？ どうかしたのですか？」

それに、不思議そうに反応する木佐貫。

竜蔵もまた、（なんだ？）と疑問に思つていたのだが……。

「いえ、その……なんと言いますか」

言いながら、ゆっくりと原因であるものに指を示す冴島。

一人は、その今にも爆発してしまいそうな程に恥ずかしがつている彼女が指示した場所に、目を向ける。

そこは、竜蔵の下半身……とりわけ、先程から開きっぱなしであった社会の窓であった。

「あ、すみません。閉めるのを忘れていました」

開け放しの社会の窓を確認した木佐貫は、まるで何事も無かつたかのように竜蔵のズボンのファスナーを上げる。

まるで少しだけ閉め忘れていた窓を、自分が一番最初に気付いたから閉めますといった動きであった。

「おい」

「はい、なんでしょうか？」

冴島に指摘された部分を直し、再び横に身を引いていた彼女に。竜蔵があまり抑揚の無い低い声音で、彼女を呼び止めた。心なしか、眉間にかなりの皺が寄っている。

「さっきから、なんで俺の股間を、そつやつて平氣で触れるわけ？」

「おや？ おかしいですね……男性の方は、よっぽどの容姿をしていない限り、異性に股間を弄られて嫌な思いはしないと認識しているのですが」

「……」

おかしいのはアンタだと、思いつきつつコニを入れたいといひ

であつたが。不思議と、竜蔵は彼女に冷めた視線しか送れなかつた

……相當、彼女の奇行に参つているのである。

すると、これまで黙っていた冴島が、ようやく真っ赤だった顔を治して口を開いた。

「そ、それで千代女士。用件の方は、本當にもう良いのですね？」  
木佐貫の用件……端的に言えば、竜蔵との子作りを、この場で始めようとした、あの奇行。

どうやら冴島は、事前にその事を知らされていなかつたのか  
消え入りそうな声で、しれつとした表情の木佐貫に尋ねた。

「ええ、どうやら桐嶋さんは、私では不服の様子でしたので、”今日のところは、お引き下がる事にします”

「貴様！ 千代女さんの、ビームが不服だと申つのだー。」  
「えー」

木佐貫の答えを聞いた瞬間、冴島の表情が一気に強張り、竜蔵に木刀の刃を向かせ始めた。

不思議の世界のアリス

もしかしたら、ただの悪乗りなのではないかと疑うほどの変わり身の早さに、龍蔵は今回何度目か分からぬ、うんざりとした表情と声を漏らす。

落ち着いてください、刀子さん。私は別に気にしていませんから、まあまあと、相手を宥めようとする木佐貫。

その表情は、どこか楽しげに見えた……絶対に、冴島刀子という人物の反応を予測しての発言だったと、この木佐貫の対応を通して、竜蔵は当たりを付けていた。

だがまあ、そろそろ話を付けなくては、竜蔵も部活に行けなくなつてくる可能性が有る。

故に竜藏は、この流れる空気を無視して、話をやつやと進める事にした。

事にした。

「あ～……何でも良いけど、沢島さん？　俺と“やりたい”的な部活があるんだ」

やりたいのかと聞いてはいるが、既に構え……といつより、冴島

に向いている視線に、明確な圧力が籠つている竜蔵。

それに気付いたのか、冴島の方も、持つていた木刀を、両手で持ち、右足を前にした正眼の構えを取つた。

一人の雰囲気の変化を感じ取つた木佐貫が、彼らが形成し始めた間合いから、静かに外れていく。

さつきまでの空気が嘘の様に、屋上に吹く風だけが、この場の音を支配していた。

切つ先を竜蔵の喉下に向けた、正眼の構えを取つている冴島に対して。

竜蔵は、今にもポケットに手でも突つ込んでしまいかねない、自然体で相対している……ただし、体に通つた軸や、相手の眉間に射抜くような視線が、ただの自然体でない事を物語つている。

すると、冴島が、この硬直状態を和らげるかのように、正眼の切つ先を、ゆらりと地面に斜めで向け始めた。

下段……いや、そこから更に木刀が流れるように移動し。前足だつた右が下がり、今度は左足を前に置いた、木刀を立てるように横で構えた、“八相”を取り始める。

真つ直ぐに伸ばされた背筋に、スカートのお陰で露出している、スラリとした長い脚が、異性である竜蔵の目を奪わせる……が、それと同時に、沈み過ぎず、浮き過ぎずの重心と、油断の無い研ぎ澄まされた緊張感が、彼女をただの女だと思わせない警戒心を抱かせていた。

間合いは半歩分開いたが、辺りの空氣を張り詰めさせる緊迫感は、更に上がつた様な気がする。

だが、それでも構えという構えを取ろうとしない竜蔵に、ようやく冴島が口を開いた。

「どうした？ 早くやろうと言つたのは、君の方からだろ？

静かに、凜とした姿勢で“八相”的構えを取る冴島から発せられた、挑発とも取れる言葉に竜蔵は。

「……ふん」

一度、軽く鼻で溜息を付いた後……。

「？」

突然、保っていた緊張感を、自ら解き、軸や重心も意識していた自然体すらも、同時に解いてしまった。

これに、訝しげな視線を向ける冴島……。

そして更に、竜蔵の不可解な行動が続く。

(おや?)

「……何の真似かな?」

なんと、竜蔵が冴島と形成していた間合いから、何の躊躇も無く出て。後ろのフェンスのところまで、勝手に歩いて行ってしまった。フェンスの前に来ると、竜蔵は上着のブレザーを脱ぎながら、再び冴島の方に振り返った。

竜蔵の視線の先で冴島は、先程まで取っていた構えを、一度解いていた。

その様子を見て、ようやく竜蔵が口を開く。

「ほら、こっちまで来いよ。ここなら、俺はバックステップも取らないし、馬鹿みたいに逃げ出す事も無いぞ?」

屋上のグリーンのフェンスを背にしながら、竜蔵は冴島に向けて、挑発とも取れる言葉を投げかける。

瞬間、冴島の眉間に歪むが、すぐにその怒気は抑え込められた。

「……ふん、なら、君の希望通りにしてあげよう」

一拍の間を置いた後、冴島は竜蔵の言葉通りに歩を進め始めた。油断無く、いつでも反応出来るように脱力された、武術的な歩行は、まさに歩く刃物と行つても過言ではなかつたが……この場に、その程度の事で驚く者など一人も存在しなかつた。

出来て当たり前……警戒して当たり前。

この三人だけの光景を見ていると、おのずとそのような考えを感じ取れる。

それ程に、実戦というやり直しが効かない舞台を、この場にいる者達は理解しているのであるつ。

そして再び、冴島が左足と左肩を前に出した真半身の構え“八相”を、竜蔵との間合い三歩半付近で取り始めた。

今度は、竜蔵の言葉どおり。彼の後ろには、屋上からの落下を防ぐための、背の高いグリーンのフェンスが威を構えていて。冴島の木刀からの逃げ道を限定させていた。

外見は、完全に竜蔵の不利……だが、それでも竜蔵は構えという構えを取ろうとはしない。

何か特別な事をしていると言えば、左手に持つていて脱ぎたてのブレザーを、いまだに持つている事だけだろうか。

冴島が、ジリ……と、ミリ単位で間合いを詰め始めた。

しかし、それでも自然体で立っている竜蔵に動きは見られない。

ただただ、こちらに迫つてくる相手と、視線を合わせ続けているだけだ。

また、ジリ……と、冴島が屋上の地面を摺り足で削る。

彼女が竜蔵との間合いを詰める度に、その時が来る感覚が、どんどん強まっていく。

あと、確実に相手に打ち込める距離まで、半歩ぐらいか。

次第に、冴島の左頬を、一筋の汗が流れ始める。

間合いを詰めている、圧力を積極的にかけてているのは、彼女の筈だ。

だが、対する竜蔵には、何の変化も見られない。むしろ、涼しい顔で、相手が来るのを待つてている様に見える。

一体、田の前の男は何を考えているのか……？

次第に、冴島の頭を、この思考が支配し始めてきた。

予想するに、おそらく左手に持つていて、脱いだブレザーを、こちらの注意を引き付ける為に投げてくるのである。

そして、自身がそれに気を取られ、動きを止めている間に仕掛けてくる。

随分と古典的な手を……。そう胸中で冷笑混じりに呴いた汎島は、再び間合いをジリジリと詰め始める。

確実に、木刀だろうが一刀で仕留めてみせる……。

それが、我が剣術なのだから。

絶対の自信を胸に持ちながら、遂に汎島の詰めが止まつた。

気付けば、竜藏との間合いは既に一歩半。

やううと思えば、素手の竜藏でも仕掛けられる距離だ。

そんな攻撃が飛び交ついても不思議ではない間合いで、二人は再び静止する……。

既に、緊張感なるものは限界にまで高まつていた。

汎島が持つ木刀に、彼女の意思が通い始める。

今、竜藏の目には、彼女が木刀を“体の一部”として認識したのが、感覚として捉えられた。

道具に使われるのではなく、使うのでもなく。

道具という概念すらも否定し、それを自身の腕の延長線上と認識する考え方。

似ていると、竜藏は素直に思つた……が、その瞬間であった。

「ふツ！」

突然、汎島が、これまでの沈黙や緊張感すらも切り裂く様に、竜藏へと間合いを一気に詰め始めた。

奥足を蹴り出し、前足でその全身の勢いを受け止めた動作……。

次に来るのは　　そこで、遂に竜藏も動いた。

竜藏は間合いを一気に詰めた汎島に、持つていたブレザーを投げつける。

汎島の視界が、竜藏の肩幅のために特注されたブレザーに占領される……が、それもほんの一瞬の事で。

（やはり！）

予めブレザーを視界塞ぎのために使つてくるであろうと予測していた汎島は、意識を空中で広がつて、ブレザーに向けるのではなく。

ブレザーに便乗して突っ込んでくるであらう竜蔵の側面を取りつと、そのままの構えで体を右にずらした。

既に木刀も、“八相”の構えの状態で、腰だめに寝かせてある。後は、脱力された全身の力を使って、軸をぶらさずに木刀を逆袈裟斬りで振り抜くだけだ。

しかし、冴島の予想は完全に裏切られた。

「なッ！？」

投げられたブレザーが通り過ぎ、竜蔵への視線を再び向ける。そこには、こちらがブレザーから見て、左に動くであろうことを予測していた竜蔵が。“元の位置”から動いていないまま立つてゐる姿があつた……それも、これから前蹴りを蹴り出す為に、左足の腿を上げてゐる状態で

この事実に急いで反応した冴島が、腰だめに寝かせていた木刀を、右から斜め上へ振り抜こうと、腰よりも腹を意識した回転で動かそうとする……が。

「シッ！」

「ツー？」

短い息の吐き出しが共に蹴り出された、竜蔵の左前蹴りが。冴島が両手で持つていていた木刀の柄頭に直撃する。

背中を反り、腹と股関節を前に出した、体重の乗つた前蹴りの爪先が襲つた事により。冴島が握つていて、振り抜く寸前だつた木刀が、思わずすっぽ抜けてしまう……。

また、既に木刀を振り抜こうと冴島は動いていたために。突然前に蹴り出された、竜蔵の左足の靴底に、木刀がすっぽ抜けてしまつていたために、何も持つていらない両手を激突させてしまう。

しかし、この次の行動は、冴島の方が早かつた。

（得物が無いのならツー！）

木刀を飛ばされた事など、一切気にしないかのように再び地面を

蹴り出し。前蹴りを蹴つた左足を引いている最中の、竜蔵の懷へと彼女は突貫した。

しかし、後手に回つたとしても、この土俵は、完全に竜蔵のものであった。

相手の飛び出しを確認すると同時に、竜蔵は左足を一瞬の動作で、体勢が前屈みになるくらいに“必要以上に引いた”。

「ツー？」

突然、冴島の視界から竜蔵が下へと消えた。だが、気付いたときにはもう遅い

「ブンツー！」　「ふぐツー？」

竜蔵が飛び出していく彼女を迎撃のために、前に出していた右肩が。

ピンポイントで相手の腹部を捉えた……。

刹那に冴島の口から、一気に空気が吐き出される。

それを見越していたかのように、冴島の腹部に右肩をめり込ませた竜蔵が、地面を脚で“ 搜き始める”。

タックル それも、出てきた相手を迎撃するための、総合やラグビーでは当たり前の技術。

竜蔵の太く鍛え上げられた両腕と、丸みを帯びるくらいに頑強な右肩に抱え上げられた冴島の体は、彼女の腹部を基点として、“ くの字”に折れ曲がっていた。

既に、もとの飛び出した地点から、力チ上げられるようなタックルで完全に後ろへと押し込まれている。

脚も、地面上には着いていない……これでは、抵抗も何も出来ない。出来るとすれば、竜蔵の背中のワイシャツを、必死に掴み続ける事だけか……。

この後の展開は、なんとななく一瞬のうちに理解できた。

おそらく、このまま自分は、地面に背中や後頭部を叩き付けられ

るである。」

視界が、信じられないぐらいのスピードで流れる。

（落とされるツ……）

直後に訪れる、未体験の衝撃に覚悟を決めた冴島であつたが……。ピタッと、その落下の勢いは止まってしまった。

「……え？」

あまりに突然訪れた、助かつたという気持ちに、彼女の思考は一瞬停止する。

竜蔵の背中のワイヤーシャツを掴みながら、抱きかかえられた状態で、何が起こったのか、理解出来ないといった表情をしている冴島。しかし、そんな彼女を無視するかのように。竜蔵が抱きかかえていた彼女を、ゆっくりと地面に下ろした。

浮いていた足元が、屋上のコンクリートに確りと下ろされる。

同時に、冴島は竜蔵の背中から手を放した。

彼女の腰に回していた腕を、何の躊躇いも無く開放する竜蔵は。そのまま状況が飲み込めていない彼女と、再び視線を合わせた。だが、その視線はさつきまでの圧を感じさせるものではない。むしろ心配そうに、すまなかつたと言外に語つているような目であつた。

「すまない、やり過ぎた」

言外だけではなく、口にも出して、タックルから開放した相手を見る彼の目には、なんの嫌味も感じられない。

しかし、まだ状況を飲み込めていない冴島は、その言葉に反応できなかつた。

すると、彼女の後ろから、今回の闘いの立会人代わりであつた、木佐貫が口を開いた。

「刀子さん、どうやらアナタの負けみたいですね」

木佐貫の率直な……容赦の無い宣言に、ようやく意識を思考の世

界から戻したのか。

震えるような声音で、冴島が声を発し始めた。

「私が……負けた？」

「ええ、それは綺麗な負けっぷりでしたよ？ 怪我らしい怪我も特に無いという、本当に見事な負け方でした」

冷静に勝敗を決める木佐貫に、冴島がもともと鋭かつ切れ長の目を強張らせながら振り返る。

「そんな！ 私は認めません！！ だつて、私はまだ立っていますし、意識も確りとしているのですよ！？ これは真剣勝負じゃ……」

「真剣勝負なら、アナタは既に、この世にはいないのではないですか？」

「ツ！？」

彼女の言葉を遮るように、木佐貫が抑揚の無い声音で話を続ける。

「真剣勝負だと、もとから彼が認識していたのなら。アナタは今タックルで、このコンクリートの地面に叩きつけられ、意識を失っていたのでは？」

屋上の地面を、足裏で叩きながら、木佐貫は厳しい視線を冴島に眼鏡越しで向ける。

「意識を一瞬でも失つた……そんな事が、真剣勝負の世界で起つたのなら、アナタは何回死んでいると思うのですか？ それにもし、叩きつけられたとしても、アナタが舌を噛み、意識を保つていたとしましよう。その先、何が起こるのか？ 彼が、どんな行動に出るのか……想像するのも馬鹿らしいと感じないのですか？」

説教……といつより、負けを認めない彼女を咎める様な、木佐貫の言動。

そして冴島は、その頭に血が上つた自身でも理解できてしまうほど、もっともな言葉に。ただただ無言で悔しそうに、拳を握り締めるしかなかった。

ギリギリと、彼女の奥歯を噛み締める音や、拳を握り締める音が、

竜蔵にも聞こえてくる気がした。

故に竜蔵が、そこまで言つ事じゃないのではと、口を挟もうとする。

「桐嶋さん、アナタは黙つていてください。これは、私と未熟な彼女の問題です」

「いや、俺はまだ喋つて無い『黙つていてください』ぞ？」

有無を言わさぬ木佐貫の声音。

それに思わず、当事者であつた筈の竜蔵が「う」もつてしまつ……。

黙つた竜蔵を確認すると、木佐貫は更に冴島に強い視線を送つた。「大体、もしこの場がアナタと彼の一人だけの空間だつたら。タックルで地面に組み伏せられたアナタは、彼に何をされるのか分かっているのですか？」

「……？」

突然、例え話をし始めた木佐貫に、冴島が恐る恐るといった感じで首を傾げる。

どうでも良いが、背の高い彼女が悔しそうにしながら、背の低い先輩に咎められている光景が。どうにも竜蔵の視点からしたら、緊張感の欠けるものであつた。

「周りには誰もいない、助けを呼ばうにも、アナタの武術家としての“無駄なプライド”が、それを許さない……なら、考えられる結末は一つだけです」

刀子さんの肢体に興奮した彼が、アナタを欲望のままに犯しつくすでしよう

「ちょおおおつと待とうかあ！－－ なあ！？」

もはやツツ「ミミ」ころしかない……いや、ツツ「ミミ」やれる見えない状況に、竜蔵が後ろから木佐貫の肩をガシリと掴んだ。

ちなみに、冴島は突然の彼女の発言に、顔を真っ赤にさせ、竜蔵の事を変質者でも見る目で睨みつけていた。

「なんですか？まだ、私と彼女の話は……」

「話してもなにも、かなり可笑しな方向に飛んでたな！ええツ！？」

肩を掴んだ彼女を振り向かせずに、背中に向けて凄む竜蔵。

だが、どんなに竜蔵が掴んでいる肩に圧力をかけたとしても、彼女の表情には変化が見られない。

これは、握力を思いつきり入れるべきかとも考えたが、相手が一応は女性ということで、竜蔵はそれを自重した。

「俺はどんな状況だらうが、さつきと同じ行動で事を穩便に済ませるつもりだつたんだぞ？それがどうして、ソイツに危害を加えるとかいう話になるんだ？確かに、思った以上に強そうだつたから、ちょっとやり過ぎちやつたけどさ？流石に、そんな事は絶対にしないと思つぞ？」

強い口調で、完全にさつき木佐貫が言つた事を否定する竜蔵。

しかし、当の木佐貫は、これまで通りのしれつとした態度で。

「なら、あの刀子さんの見事な体を、ジックリ見てみてください」「は？」

あまりに堂々とした感じだったので、竜蔵は木佐貫の言葉どおり、目の前で顔を真つ赤にさせている沢島の体に視線を向けてしまった……。

スラリと優美な曲線を描いた美脚に、キコツと締まつた、柳腰と称しても過言ではない、くびれのある腰つき。そして、それに逆らうかのように、存在を強調させている、制服越しからでも分かるほどの、張りの有る形のいい胸……極め付けに、彼女の白い肌と柔らかそうな唇が、異性である竜蔵の劣情をそそらせていた。

思わずマジマジと見てしまつ、彼女の完璧な肢体に、竜蔵は意識すらも釘付けにされてしまつ。

対峙している最中は、全く気にもしなかつたが。こうして見ると、やはり校内でも才色兼備と有名になるのも頷けるし、タックルした際に密着した、意外に柔らかかった感触が甦つてくる。

すると、その竜蔵の視線に気付いたのか。

冴島は、まるで身を守るかのよう、両手で胸を隠しながら、竜藏と木佐貫からバババッと距離を取った。

「な、何を破廉恥な目で、私を見ているのだー？」

「……はッ！？」

実は結構鈍感な部類に入る彼女にすら、いやらしい目で見ていると看破されてしまった竜藏は。

何かからの支配から覚醒したかの様な表情で、意識を取り戻した。その光景を、客観的な立場から見ていた木佐貫は、意地悪な微笑みを浮かべながら、後ろにいる竜藏に、首だけ回して振り向いた。

「でしょ？」

たつた一言の、簡単な言葉。

だが今の竜藏には、たつたそれだけで彼女が何を言いたいのかを理解できてしまっていた。

「……いや、まあ確かに、魅力的な体だと認めるが。俺は絶対に、そんな事はしない」

「おやおや、さつきよりも、声に自信が感じられませんね」

「そ、そんな事はないぞ！？ 俺は、絶対にソイツを襲いなんかしない！！」

「本当に言い切れるのですか？ 地面に力ずくで組み伏せた彼女のブレザーやワイヤーシャツを、力任せに破き。下着を剥ぎ、スカートも剥ぎ。そして本能のままに、彼女の体を貪るため、唇も奪う……更に」

「ち、千代さん！？」

迫真の語り口調に、思わず竜藏ではなく、本人である冴島が。これまた例外なく、耳まで真っ赤にさせた状態で、割って入ってきた。

「おや？ どうしたのですか刀子さん？ 私はまだ、彼から事の真意を……」

「聞かなくて良いです！ 本当に、やめてください！ お願いします！ ！」

もはや涙目になりながら千代女に、これ以上の暴走は止めてくれと懇願し始めた冴島。

当たり前だ……目の前で、自分が暴行を受けているという設定の話しが、大真面目で異性にされているのだから。

普通の感性を持つた女性ならば、冴島の様に止めてくれと懇願せざる負えない。

そんな彼女の反応に、なぜか千代女は残念そうにしながら。

「……そうですか、幼少の頃より知っている刀子さんが、そこまで言つのです。まだアナタにも、言う事は色々とあります、今回のところは、これで済ますとしましょう」

助かったのか？ それとも、良いように遊ばれてしまったのか？ 判断の付かない冴島であったが、とりあえずはホッと一息を付くのであった。

木佐貫千代女という、ちょっと独特な感性を持つた女性に振り回された二人は。

現在、さつきとは違つた落ち着いた表情で、確りとお互いに向き合いながら対峙していた。

ちなみに、この二人を振り回したという当の本人は、場をかき回すのを、ようやく自重したのか。

一人の様子を、静かに傍で見守っていた。

「その……さつきの闘いでは、取り乱してすまなかつた。あれは、確かに私の負けだ。認めるよ、君の実力を」

気まずげに、対峙している竜蔵に腕試しの結果を告げる冴島刀子。

……。

普段、学園内では凜々しい雰囲気と、異性すら魅了する容姿で有名な彼女にとつて。

この視線すら、まともに合わせられない仕草は、とてもレアなもの

のであつた……が。

対面している竜蔵には、特には関係ないらしく。

「いや、俺自身、手加減が出来ない部分があつたし。もう少し、ハツキリとした勝負の付け方もあるつた筈だから、そんなに気にしないで良いと思うぞ？」

かなり真面目に闘つた相手に對して、失礼な物言いであるが。当の本人が、それを本氣で言つているために、不思議と嫌味には感じられなかつた。

しかし、感じられなかつたとしても。負けた本人にとつては、とても屈辱的な事には代わりが無い。

故に、一瞬沢島の目が険しくなるも、それを彼女は自ら頭を横に振る事によつて、感情を治めた。

「……それだけ、私と君の間には差が有るという事なのであらう。今は、その言葉を胸に刻んでおくよ。後々、確りと返すために「自ら感情を治めた沢島の表情には、どこか晴れやかなものが感じられた。

おそらく、気持ちを次に確りと切り替えられたのであらう。

それを見て、竜蔵は短く「そうか」とだけ返した。

二人のやり取りが、ひと段落した所で、木佐貫が口を開いた。

「確かに、刀子さんと桐嶋さんの実力には差が有ります……ですが、それは多少です」

「？」

「さつきの勝負では、桐嶋さんの奇策に、刀子さんが引っかかった形で勝敗が決しました。これは、完全に“経験の差”と言えるでしょう。それも、稽古や真剣同士などという事ではなく。どんな事でも、勝つた者が正しいとされる、路上リアルでの経験です」

「路上リアルでの経験……ですか？」

「はい」

木佐貫の至つて真面目なアドバイスに、沢島は教え子の様に視線を彼女に向けていた。

すると、汎島と竜蔵にも視線を向けられた彼女は、突然、何かを提案するかのように、右手の人差し指を立て始めた。

「ですので、ここで私の指令です」

木佐貫千代女といふ、一橋学園では数少ない執行部の中で、一番上の学年に籍を置いている彼女からの指令……つまり、執行部からの直接的な命令という事。

それを理解していた汎島は、彼女に向けて居住まいを正す。

それをまだ理解していない竜蔵は、ただ突つ立つたまま、彼女と汎島のやり取りをボ�と眺めていた。

「明日から開始する、桐嶋さんの執行部正式メンバーとしての初仕事に。刀子さん、アナタも同行してあげてください」

「同行というと、バディという事ですか？」

聞き返す汎島に、明日から初仕事がある事を初めて知つて、目を見開いている竜蔵。

そんな二人の様子を、軽く一瞥した後、木佐貫が言葉を続けた。  
「ええ、今までの刀子さんの仕事は、路上リアル……いえ、ストリートな内容のものではなく、どちらかとこくと隠密に近いものでした。ですで、これまでラフな闘いではなく、精密さを問われる、必中必殺の闘いを経験して來ていたという事です」

「つまり、私は彼と同行して、そのラフな闘いを学んでくれば良いのですか？」

「その通りです。また、もちろん彼の初仕事のサポートにも回つてもらいますので、明日は頑張ってくださいね」

「はい、了解しました」

勝手に進められる会話、勝手に進められる初仕事とかいう厄介事。

竜蔵は、それらに異を唱えようと、ようやく会話に割つて入るうとしたのだが。

「ちょ……つ」

「あ、それと桐嶋さんに拒否権は存在しませんから、あしかりりす」

「ちゅ～！？ いや、それは酷すぎるだろ！」

とても理不尽な遙りに、思わず竜蔵が声を張り上げる。

しかし、当の木佐貫は、そもそも自然かの様に。

「アナタが去年に起こした問題や、昨日の“妹さん”とのプライベートな二ヤン二ヤン……それら諸々を、世間に公表されたいのですか？」

「ぐ～～～？」

「妹さんとの二ヤン二ヤン……？ 私には聞きなれない言葉だが……それは一体、どういう意味なのだ？」

木佐貫に脅迫とこいつ、弱みを突きつけられた竜蔵は、思わず口ごもってしまう。

沢島は、本気で意味が分かっていないのか、竜蔵に対して、知らない事が恥ずかしそうに尋ねてくる。

そんな光景に一瞬、悪戯心を擽られた木佐貫であったが。 そろそろ時間的にも、色々と圧し始めていたので、それは自重する事にした。

「まあ、そんな事を私がしなくとも、桐嶋さんは、どうせ元しても、明日から取り掛かる初仕事には絶対に参加しなくてはならない理由があるのですけどね？」

「絶対に参加しなくちゃならない理由？ なんだ、それは？」

気になる言葉を発した彼女に、竜蔵は訝しげな視線を向ける……。

しかし、次に彼女から発せられる情報に、竜蔵の表情は驚きと、怒気に染まる事になる。

それは、竜蔵にとつて絶対に守らなくてはならない者に関係する、一番許せない事。

「アナタの妹さん、桐嶋美夏さんが

」

何者かに狙われている様です



## 経験の差（後書き）

次回から、本格的に本章の話が進みます。

なるべく、テンポ良くという目標を掲げていますので。

描写不足があるかもしれません、そういう場合は、なるべく

ご指摘下さい。

直せる範囲で、直して行きたいと考えています。

ではノシ

## 執行部のお仕事（一）（記録会）

今回から、このサブタイが続きます。

## 執行部のお仕事（1）

健康診断から、翌日の朝。

昨日の放課後、正式な執行部としての仕事を受けた桐嶋竜蔵と、  
バディとなつた冴島刀子は、  
さえじま とつこ

学園の生徒会長室内で、長机を間に挟み、何も書かれていないホ  
ワイトボードを背に、パイプ椅子に座る一橋姫樹の前に並んでいた。

「さて、まずは桐嶋君……一橋学園執行部への正式入部についてな  
のだけど」

まだ大半の生徒達が登校していくには30分ぐらい早い、朝の生  
徒会室は、

外からの外気を入れないために、カーテンこそは閉められていない  
ものの、窓は完全に閉め切られており。そこから日の光が、空氣  
中に舞つて いる少々の埃を反射させながら部屋の中に差し込んでい  
た。

会長である姫樹が現在、両肘を預けている長机の他に、同じ形の  
机が竜蔵と冴島の左隣・右隣に並べられている……つまり“口の字  
型”に並べられた机の内側に、一人は姫樹を前にして立つて いると  
いう事だ。

「取り合えず、この書類に印を通してから、自筆のサインをして頂  
戴」

言いながら、姫樹は自身の机に置かれていた一枚の紙を取り、  
座つたまま竜蔵に差し出した。

いつも通りの朗らかな微笑み……だが、窓から入つてくる日の光  
を背にし、優美に整つた顔立ちの彼女から、その微笑が向けられた  
のなら。それは、どこか慈愛に満ちた、人の心に直接暖かさを送り

込んでくる、女神の微笑みに感じられるだろ？

だが、竜蔵の視点<sup>ビジョン</sup>からは、全く持つて違つた印象が彼女からは発せられていた。

柔軟な雰囲気……いや、竜蔵は彼女の強かさ。機を見て敏なりと、いつ言葉を体現し、一年の頃に問題を起こした自身を、この執行部といつ暴力すらも隠蔽される胡散臭い組織にぶち込んだ時の事を知つていて。

こちらを優しく迎えようとする、書類を持った細く美しい手……いや、竜蔵は彼女の狡賢さ。こちらが執行部の手伝いを断つて、実際に、どんどんと周りの外堀から逃げ道を塞いでいった事を知つていて。

母性を感じさせる、豊かな胸や。包容を感じさせる、栗色の緩いウェーブの掛かった長い髪が、異性である男性を魅了する……いや、竜蔵は彼女の包容力の恐ろしさ。こちらの心が弱つて、その隙を突いて抱きとめ、男を持ち前の母性で包み込み“洗脳紛い”の事をしようとしていたのを、竜蔵は知つている。というより、被害にあつた。

故に、これらの事から竜蔵は。

目の前で、早く一緒になろうとも言つかのように、執行部の書類をヒラヒラとさせている姫樹の事が、とても胡散臭く、背後からは一度飲み込まれたら逃れられない瘴氣を発している狡猾な女性にしか見えていなかつた……。

だが、ここ、生徒会室に来た時点では、逃げ場が既に無いのも事実。

もし逃げたのならば、昨日の屋上での出来事を、ある事無いこと脚色されて、お日様の下を歩けない立場に立たされるかもしだれない。そう考えると、普通の人なら余計に関わり合いになりたくないと感じるだろうが……。

「ペン貸してくれます？ 全部教室に置いて来ちゃつたんで」

「ええ、どうぞ」

竜蔵には、全く持つて迷う事の無い事であった。

大体、ここまで事が進められていた場合。目の前の生徒会長が、こちらを逃がす筈が無い。

既に、外堀は埋められていると考えるのが妥当であろう。  
物理的な面では……スライド式の出入り口に目をやれば、モザイクガラスから、人の頭の様な影が一・三見受けられる。

心理的な面で見れば、昨日、木佐貫千代女から伝えられた情報が、竜蔵を今回の件から離れさせないようにしていった。

「……規約って、これだけなんすか？」

姫樹から書類を受け取り、机の上に置いてから、借りたボールペンで記入を始めようとすると。

竜蔵が、不思議そうに姫樹に向かって聞いた。  
書類に書かれた項目……。

それは、規約条項に、自筆で名前を記入する欄……のみ。  
しかも、規約条項には一項目しか記載されていない。

一つ　　自身が執行部であること、また執行部の存在を他者に伝える・仄めかす事 자체を禁ずる。

二つ　　関わった案件の全てに対して、守秘義務が発生する。

たつたのこれだけ。

竜蔵の所属する二つの団体から、強く入る事を勧められ。殆どの一般生徒や都市に住んでいる住民にすら存在を知られていない組織の規約条項が、たつたのこれだけ……。

当然の疑問と質問に、姫樹が至つて真面目な声音で答えた。

「 もともと、学園都市からの指示で各々の学校で作られる執行部には、ちゃんと都市から提示されている規約条項もあるのだけれど……大抵が、一般常識と差して変わらないの。それに、規約条項が各々の学校や学園で、専用のものを作る事も出来るから、他所も同じような感じなのよ。だからウチも、その程度の事しか書いて無いの」

「 ……」

その説明に、竜蔵が片眉を吊り上げる。

「 他校でも、こんなのが有るって事に驚きましたけど。それよりも、普通に都市から提示されてる規約も見せてくださいよ？」

「 ……うひ」

当たり前の事を確認しようとした竜蔵は、そこで信じ難いものを見た。

「 ……舌打ちしましたよね？」

「 なんの事かしら～」

「 いや、いま絶対に“ちつ”て言いましたよね？」

「 会長が、そんな下品な事をする訳がないでしょ～」

右頬に右手を添え、本当に“なんの事かしら”と、一切崩れる様子の無い微笑みを浮かべながら臼を切る姫樹。

どう考へても、どう遡ってみても、あれは彼女から発せられた舌打ち。

その確信を持つて、竜蔵は姫樹に追及しようとしたのだが。

「 ……うん？」

竜蔵の視線の先で、なにやら姫樹が。

こちらとは違う方向に、微笑みで閉ざされた、無言の圧力が込められた視線を向けていた。

それに何だと、追つてみると……。

そこには、姫樹の無言の圧力に冷や汗を搔きながら、目を泳がせ

ブレッシャー

ている、普段なら凛とした雰囲気が女性としての魅力を引き立たせている冴島刀子がいた。

立ち姿は、正に直立不動…… 一切のぶれすら感じさせない、見事な硬直状態。

蛇に睨まれた蛙とは、こいつ事だったのかと、竜蔵は理解した。すると、そんな冴島が、震える口調で竜蔵に口を開いた。

「き、桐嶋君？」

「……」

冴島の問いかけに、竜蔵は視線を向ける事で返す。

「い、今のは私なんだ……だから、会長がしたのではない。そ、その気に障つたのなら……」

「いや、それは無いだろ？」

もはや裏返つた声で、どう考えても罪を被ろうとしている冴島に、竜蔵が冷静に返す。

しかし、尚も冴島の可哀想な姫樹に対してのフォローは続く。

「そんな事はあるものか！ 舌打ちをしたのは、この私だ……」

「じゃあ、何に舌打ちしたんだよ？」

「そ、それはだな…… そう！ 虫が飛んでいたんだ！ 私の顔の周りで……だ、だから」

「もう無理しなくて良いって。会長が恐いのは、俺も同じだからさ」「あら なぜ、いつの間にかに私が悪役になつていいのかしら？」見ていられない。

昨日、結果的には一刀も振るわせずに勝つた相手だが。

その立ち姿や、醸し出す空気……更に言えば、くもりや穢れ一つ無い出で立ちからは考えられない、鋭く洗練された威圧感を放つていた者が。こうも情けなくしていいる様に、竜蔵は無意識の内に耐えられないと感じていた。

故に、昨日の敵は今日の何々といった精神の下、自分なりに助け舟を出したのだが……。

当の本人に、全くもつて罪の色は見られない。

「 事実じゃないですか。大体、俺が音の方向を聞き間違えると思いませんか？」

言いながら、自身の耳たぶを、片手で弾くジエスチャーを取る。それを見て、姫樹は“はあ”と溜息を付きながら。

「 それもそうね。ちょっとした戯れのつもりだったのだけれど、ごめんなさいね、刀子さん？」

「 は、はい……私は気にしておりませんので」

仕方が無いといった雰囲気を隠そうともしていなかつたが、意外にすんなりと冴島に謝罪をする姫樹。

だが、どうにも冴島は姫樹に話し掛けられる度に、緊張した様子でいる。

昨日、木佐貫に聞いた話では、確かこの二人は本家と分家といった、一般人である自分には良く判らない関係上にあるらしいと、竜蔵は思い出していた。

だからだろうかと、胸中で首を捻るも、そういうた世界には全くの無知な竜蔵には、何も浮かばない。

仕方なしに、その思考を切り上げると。竜蔵は本題の、自身の話題へと再び軌道修正を計った。

「 とりあえず、都市から出されてる方の規約を見せてくださいよ」「まあ、別に構わないのだけれど……意外ね、桐嶋君が、そこまで書類に対して慎重だなんて」

「 仕事上、よく契約書とかにサインを書かされますからね。自分でチェックするのは普通つですよ。逆に、しなかつた場合、大抵ろくな事にならないですから」

「 あらあら、いつちよ前に確り者ぶつて……去年のアナタからは、考えられない言葉ね」

姫樹は、そんな事を口にしながらも。

自身が座っていたパイプ椅子の横に置かれた、学校指定の鞄から、冊子になつてている程の紙の束を取り出した。

ドンっと、思わず効果音を点けたくなつてしまつぐらじに分厚い

紙の束…… もとこ弔子は、竜蔵に口端を呑つ上げさせた苦笑いを浮かばせる。

「はー、これが都市から提示されている規約条項が全文書かれた弔子よ。好きに目を通して頂戴」

「お、おおつ……」

その紙束の量は、パツと見て200はあるのではないかと感じるぐらいで。

流石に、プロの格闘家として契約などには慣れている竜蔵でも、この量に呻き声を出してしまつ。

「ちなみに、表紙と最初の目次以外、全部が規約についてだから。一つの見落としもなく読むには、流石に朝の授業には間に合わないんじゃないかしら」

楽しそうに微笑みながら、竜蔵に弾んだ声音で言つ姫樹。

その笑顔…… 正に女神の如し慈悲深さ。

ただし、内側は悪戯に成功した子悪魔の様な高笑いを上げていた。

「まさか、これを見越して、わざと舌打ちを……？」

「さあ？ ただ言えるのは、確かに“この中に”、私が“アナタを手に入れるための手段”が入っているのは間違いないという事だけよ」

一やりと、普段は笑顔で閉じている目を薄く開けながら、一矢ちらに薄気味悪い微笑みを向けてくる。

恐い…… まさに猛獸が獲物を前で、舌なめずりをしているかの様な危機感。

今度は、冴島ではなく、竜蔵の額に冷や汗が流れ始めた。

自身が先程、直感で浮かべたのは、ただこちらに嫌がらせをするために、デカイ冊子を読ませるよう誘導させたという事…… だが実際には、読まなければ、もしかしたら自身が、目の前の腹黒い強かな女の手駒になってしまつという、部活や校外で活動している身としては何としても避けたい罷。

謀つたな！ とまでは言わないが、何も、ただこちらに弔子を読

ませたいがために、ここまでするだらうかと、竜蔵はゲンナリとした

視線や向けられる微笑は恐い……それはもつ、冷や汗ものだ。

だが、込められている真意は、実は有る程度理解できている。

「はあ……あんまり、俺を見ぐびらないで下さい。いわれなくとも、ちゃんと読むようにはなりましたから」

「あら？」

竜蔵の反応に、意外なものを見たと、姫樹が驚いた表情をする。

「もしかして、私が何をアナタに言いたかったのかが理解できたの？」

「そりやあね……去年から今まで、だいぶ色んな方面で矯正されましたから。お陰で、色々と助かってますよ」

疲れたような声音で、パイプ椅子に座っている姫樹の前に置いてある冊子を手に取る。

そしてそのまま、パラパラと冊子の頁を流すように捲り始めた。  
「男子三日余わざれば何とやら……前は、一切こいつ事には注意を向ける様な子じやなかつたのに。会長、桐嶋君が成長してくれて、とても嬉しいわ」

感慨に耽る……というより、妙に大げさな芝居がかつた仕草で、竜蔵に“飛び込んでおいで”と両手を広げる姫樹。

それは、学園の男子生徒が、いくら憧れても辿り着けない、一橋姫樹という慈愛に満ちた女神の懷。

もし、これが他の男子生徒だったのなら、大半が誘惑に負けて飛び込んでいたところであろう。

だが、当の竜蔵は。

「なるほどねえ……確かに、一般常識みたいなのはつかだわ  
パラパラと流し読みしている冊子に、目を向けたままであつた。

面白くない……」この様子に、微妙にカチンときた姫樹は、少々眉間に歪める。

だが、そんな表情も、彼女の本性を知らない者にとっては、あま

り恐くは感じない。

むしろ愛らしく思えるぐらいだ。

だが彼女自身が、今の竜蔵を見て多少の不機嫌を覚えたのは事実だ。

故に、姫樹が意地悪次いで、今後、彼には内緒の勧めようとしていた、ある事について口を開いた。

「ねえ、読みながらで良いから、ちょっと話をしてもいいかしら?」「……どうぞ」

姫樹の言う通りに、冊子に視線を向けたままで、静かに答える。その様子を一瞥した後、姫樹は心底楽しそうな笑みを浮かべながら、いまだ凛とした佇まいで立っている沢島に視線を向けた。

「昨日、千代女に手作りを申し込まれたんですけど?」「ふツ!?

まるで世間話でもするかのように、昨日の事を話題に出された竜蔵は、思わず吹き出してしまう。

なぜか姫樹に視線を向けられたままの沢島は、頬を少しだけ赤らめ、恥ずかしそうに視線を伏せた。

「でも断られたって、昨日の夜に千代女から連絡が来たから。我が家園の屋上で、そんな行為が行なわれなかつたって事は安心したのだけど」「…………何が言いたいんすか?」

「いえねえ……私としては、小さな頃から幼馴染として知っている千代女の、何がいけなかつたのか気になつて 桐嶋君は知らないかもしけないけど、彼女、普段はわざと地味な格好をしてるから、脱いだりしたら凄いのよ? それに、あれでも見れば整つたスタイルをしてるつて、アナタの目なら分かるでしょ?」「心底分からないといった声音で、視線をこちらには向けたがらない竜蔵に問いかける……だが、当の彼女はなぜか、視線をまだ沢島

に向けたままだ。

竜蔵は、その問いかけに当たり前といった様子で答えた。

「やつや、やらせてくれるって言つんなら、やりたいのが俺ですけど……こゝりなんでも、いきなり面と向かって手作りをしようつて、事務的に言つてくる人とやる気はないですよ」

「そう……意外に、軽率な事はしないと。だけど、もしそれが刀子さんだつたらどうしてたかしら?」

「「ふッ!?」」

その続く問いかけに、今度は竜蔵と冴島の二人が同時に吹き出した……ちなみに、冴島は吹き出しども、どこか下品には感じられない、小さく控えめなものであった。

「刀子さんは、何を驚いてるのかしら?」

「な、何をではありません!? いきなり、何を言つ出すのですか!」

「何つて……刀子さんも、一応は耳にしているのでしょうか。私達の家々には、本家だろうが分家だろうが、優れた遺伝子を持つ者といすれば交じ合わねばならない決まりがある事を」「そ、それと今のが、どうして関係するのです!?」

二人……いや、冴島が一方的に憤慨する中。

竜蔵は、これはどういった会話なんだ?

と、頭の上に

? を浮かべていた。

「どう関係するつて……それは昨日、桐嶋君と鬪つたアナタの方が理解しているのではなくて?」

冷静さを失い、もはや顔を真つ赤にして声を張る冴島を相手に。姫樹は至つて冷静な声音で向き合つていた。

「日本古来より続くといわれる、一橋を中心とした六芯に数えられる家の者達は……」

「姫樹さん!?」

しかし何やら竜蔵にとって、訳の分からぬ方向へと会話が進んでいく途中。

突然、冴島が驚いたように、姫樹の言葉を遮った。

これまでの直立不動が、既に嘘の様に崩れ去っている……どうやら、相当焦っている様であった。

が、当の姫樹は至つて涼しげな表情で、いつも通りに微笑んでいる。

そんな姫樹に、冴島が咎めるような視線を向ける。

「アナタは何を急に……」

「あら？ 私は私の判断で、別に構わないとthoughtたから、話そうとしたままでだけど？」

「……」

傍田から見れば、冴島が何に対しても怒っているのか……発端となつた言葉は理解できるが、明確な理由が理解できない。

故に、竜蔵は、この生徒会室内で、一人の。いや、冴島が一方的に姫樹を睨んでいる姿を、何ともなしに眺め続ける。

すると、暫くしてから、姫樹がゆっくりと口を開いた。

「……はいはい、今日のところは、私が引きましょう。いつなると、刀子“ちゃん”は頑固でちゅからね~」

「なッ！？」

身を引くと言いつつ、相手に悪戯な笑みを浮かべながら、何やら赤ちゃん言葉で子ども扱いし始める姫樹。

それに、顔を真っ赤にさせながらビクッとした反応する冴島刀子という、いつもは凛とした涼やかな空気を纏っている女子生徒。

この光景に……いや、明確に言えば、一橋姫樹といつ、豊かな母性を感じさせる女性から出た赤ちゃん言葉に、竜蔵は一瞬、不覚にも嬉しい方の反応を示してしまった。

それに気付いたのか、姫樹が竜蔵に意外といつた表情を向ける……ちなみに、顔を真っ赤にさせた後、必死の形相で反論し始めていた冴島は、完全にスルーされていた。

「あらあら 桐嶋君は、いつこつた口調が好きなのね？」

「違いますよ……」

「そり……なら、さつき私が言つた様に、刀子さんはどうかしら?」「あ……もうそろそろ時間なんで、俺は教室に戻つていいつすか?」

あからさまに姫樹の話題戻しを、面倒臭そうに流す竜蔵。その様子を、ちょっとだけ詰まらなそうな顔をしながら、姫樹が見ていた。

だが、確かに竜蔵の言つとおり時間も迫つていて。

故に姫樹は、この少々脱線気味であつた場の空気を軌道修正し、改めて竜蔵に内緒で勧めようとしていた事の本題に入る事にした。

「そう言えば、私から、アナタに頼みたい事があつたのよね」

本来なら、さつき竜蔵が規約の書かれた冊子を流し読みしている最中に、問い合わせる筈であつた事。

既に竜蔵は、その冊子をある程度読み終え、その辺の机の上に放置していた。

それほど、色々と話を脱線させるのを楽しんでしまつたのかと、姫樹は一瞬だけ自身を咎めようとしたが……考えてみれば、今の直ぐにでも教室に戻らなくてはいけないというタイミングは、一番この話題を振るのには適していたのかもしれないと思いつなおした。

「頼みたい事つすか?」

「ええ、時間も無いから、後からで良いのだけれど」

「はい、どうぞ?」

「アナタの妹さん……きつしま みなづ桐嶋美夏さんを、生徒会に迎い入れたいのだけど」

手伝つてくれるかしら?」

「失礼しました」

生徒会室の窓とホワイトボードを背にした姫樹が、いつも通りの微笑みを浮かべながら手を振る中。

冴島刀子が、深々と背筋の通つた一礼をした後、生徒会室のドアを閉めた。

ドアを閉めた後、すぐに後ろへと振り返る。

そこには、昨日、色々と変な事を真面目な顔で行なおうとしていた、木佐貫千代女と、さつきまで共に生徒会室にいた竜蔵が。朝の日差しが差し込んでくる廊下の窓のすぐ傍で、互に向き合つていた。

二人の表情には、なんら特別な色は見られない。

ただただ、其々が普段している、いつも通りの何も無い表情だ。

「さつきまで、ここに何人か人影が見えたんだけど？」

「こ……とは、いま竜蔵・冴島・木佐貫の三人が立つている廊下の事。

まだ、登校時間までには余裕が有るため、とても静かな空間だ。

「はい、私の他にあと二人、生徒会のメンバーがいましたが。その二人は、今しがた私が教室に帰しました。彼らは執行部の存在こそ知つてはいても、具体的な活動内容までは認知していませんから……知る必要も無いことですね」

別に、気にする事もないですよという声音で、竜蔵の問いかけに返す木佐貫。

すると、木佐貫が冴島の方に、軽く視線を向けた。

冴島は、その視線の意味を察知すると、ゆっくりと瞼を下ろし、何やら周囲に向けて集中し始めた。

そして、5秒もしないうちに、冴島が下ろしていった瞼を上げる。

「大丈夫です、周囲には、私達と会長以外に気配はありません」

「分かりました、ありがとうございます」

問題はない、と告げる冴島に、目礼をすると、木佐貫は再び竜蔵

と向き直った。

「では、今日の午後から始める執行部の活動について説明しますよ

うか」

「だな

相手は先輩にも関わらず、これまでの印象から敬語を全く使わない竜蔵に、木佐貫は何も言わずに話を続けた。

「今日やる事は、まあ簡単に言つてしまえば聞き込みですね。それも、完全に自分達の足で行なつてもらいます」

理由は一つと、指で竜蔵に示しながら。

「まず、昨日説明した正体不明の相手に“こちらが探ししているのを臭わせる”のが一つ目の理由です。これは、本来ならアナタ達だけで進める筈だつた事件に、私が手助け出来るようになつた事で可能になりました。出来るだけ臭わせまくつて、犯人を焦らす、または迂闊に動けなくしてください。なるだけ早く、犯人がどうやって犯行に及んでいたか？　どこにいるのかなどを特定してみせますので、その自信に満ちた……というより、やれて当然といった口調に、竜蔵は小声で漏らすように「頼もしいね」と呟いた。

すると、目ざとく木佐貫が食いつく。

「でしよう？　ならば、これ程に頼もしい女を手に入れたいとは思いませんか？　思いますよね？」

「自分を安売りするような女は信用できないから、まずはそこをどうにかしろ」

「……残念です」

話が脱線したところで、傍に控えていた冴島が「こほん」と小さく咳払いをする。

それに反応した木佐貫が「では、一つ目の理由は……」と、説明の方を再開した。

「アナタと刀子さんの距離を縮め……『木佐貫先輩？』」

再開した途端、じう考へてもふぞけよつとした所を、再び冴島に冷たい声音で咎められる。

しかし、木佐貫に気にした様子はない。

ただ淡々と、言われたとおりに軌道修正を計つた。

「ぶつちやけ、アナタに執行部の動き方を教えるのと、刀子さんに武術的な成長を促す事の二つにあります。おそらく、相手方も、アナタ達が嗅ぎ回つているという情報を掴めば、何らかのアクションを起こす可能性があるので、その時に……といった感じです」

昨日の腕試しと銘打たれた闘いで、冴島は竜蔵の奇策の前に、何も出来ずに終るという結果に沈んでしまった。

それは確かに、竜蔵の実力も相まって可能だつた奇策なのだが。実際に、ただの一刀も木刀を振れずに負けてしまつたという事は、冴島ひいては、木佐貫にとつても無視できない事だつたらしく。

今まで闘つってきた世界だけではなく、他の世界も見て学べという事を、昨日の時点で木佐貫は冴島に言つっていたのだった。

しかし、竜蔵自身の意見は少々違う様で。

「俺は別に構わないけど……ホントに、“じつちの戦い方”なんて必要なのか？俺的には、そのままでも十分だと思うし。むしろ、今ままの戦い方を伸ばした方が良いと思うんだけど？」

その問い合わせたのは、傍に控えていた冴島自身であった。

「確かに、それも一つの考え方だ……だが、現に昨日、私は君に完敗している。その事実から目を背ける事は出来ない」

「いや、だから昨日は、あの後に言つただろ？無傷で終らせるのは、あの方法しか無かつたつて。実際、普通にやつてたら、多分、俺も危なかつたと思うぞ」

「だが結果は結果だ、受け入れない限り、私に成長は無い。それに、相対した時点で、そういう考え方を相手から消せなかつたという事が、既に私の未熟を示している」

だから、君が何と言おうと、考え方を変えるつもりは無い  
強い意志……そこから計り知れない程の向上心すら感じさせる、

刀の様な妖艶さと魅力を持った、切れ長の目。

それを真っ直ぐに向けられてしまつた龍藏は、「はあ～」と呆れたような溜息を吐きながら。

「頭固いね～……」

「なんとでも言えば良い」

「だけど、そういうのは嫌いじゃあない……俺も同じ様な人間だし？」

達観した様な声音だつたが、真剣な表情をする冴島に、仕方が無いといつた笑みを龍藏は浮かべた。

笑みを向けられた冴島は、一瞬面を喰らつた顔をするも、直ぐに蠱惑的こわくてきな微笑みを返した。

そんな二人の様子を見て、木佐貫が抑揚の無い声音で、面白くないといつたふうに。

「やはり桐嶋さんは、冴島さんの様な女性に欲情するのですね。私に向けるものとは違つた感情が感じられます」

瞬間、冴島の顔が爆発したのかと錯覚する程に、一気に真っ赤に染まつてしまつた。

対する龍藏は、何を馬鹿なことをといつた聲音で口を開いた。

「当たり前だろ？ 実際、誰が見ても同じだと思うし。他を見ても中々いないとと思うぞ？ こんな美人」

「それは、アナタの妹さんと比べても、という事でしょうか？」

「……」

「そこで迷うから、他の方々からシステムと言われてしまつのですよ？」

「……ほつといてくれ」

なぜ、木佐貫が自身の周りの事を知つているのか？

それはさて置いて、龍藏はこの時、本氣で自身の無意識下での家族顛廻を治そうと考えたのだった……決して、システムではない。

するとそこで、顔を真っ赤にさせた状態のままの冴島が、話題を変える、もしくは本題を進めるために、視線を一人に向けなおした。

「そ、そういうえば！ 桐嶋君は、さっきの規約条項の冊子を流し読みしていたが、内容は確りと頭に入っているのか？」

話題を転換しようとしたのは分かるが、どう考へても焦つているのが分かる、声が裏返つた様子の彼女に。一人は一瞬、笑いを堪えた。

堪え終えた竜蔵が、冴島の問いかけに答える。

「いや、また後で見に来る。流石に、そんな早く読めないって、あんなの」

「そうか……なら、外に出る前に、またここに寄らないといけないな」

必死に、真っ赤になつていた感情を抑えながら。

なにやら、その細顎に指を添えて考え込む仕草を取る冴島……妙に様になつていて。

「だな。さつきのは会長の冗談だつて信じたいけど、もしマジだつたら笑えないからな……」

実際、心の隅で所詮、学校・学園関係の機関が出した規約と、舐めている竜蔵ではあつたが。それがもし、法的以前に、何らかの拙い拘束力を持つていい場合を否定は出来ない彼は、一応の警戒を込めて、冴島の提案に賛同する。

「では、そろそろ他の生徒達が登校してくる時間帯なので、一旦解散するにしめようか」

二人の様子を見て、そろそろ頃合だと感じた、木佐貫が発した解散の言葉に。

竜蔵と冴島の二人が、無言で頷いた……。

## 執行部のお仕事（1）（後書き）

感想とか欲しいです。

生意気かもしませんが、反応が有るのと無いのとでは、だいぶモチベーションが違いますから。

あと、台詞と地の分は、一行空けた方がいいですか？  
読みづらいうつた方がいらっしゃるなら、遠慮なく申してください。

なるだけ、今度から意識して書きますから。

執行部のお仕事（2） 兄を追え！（前書き）

今回、ちょっと辻褄が合っていないのか心配です。  
何分、今日ぐらいしか、他に書ける日が無かつたもので……。

## 執行部のお仕事（2） 兄を追え！！

（さて、今日から本格的に部活か～！）

一橋学園のとある廊下で、そんな事を胸内で嬉しそうに呟びながら歩を進めている女子生徒。

少し赤茶のボーリッシュなショートヘアと、長身にも関わらず均整の取れていたスマートな体型をしている、活発そうな顔立ちが特徴的な女子生徒

木下藍は。

入学から三日目。

一年A組のクラスで、明日の体力測定の説明や、前期に使用する教科書の説明、部活の入部申請書などの説明を、退屈そうに聞き流した後。

特待生として入部した、女子バスケットボール部へ言葉どおり本格的に参加するため、意気揚々と、その部活動の部室へと向かっていた。

辺りには余裕を持つている彼女とは違つて。他の一年の生徒達が、新しい先輩達に変な印象を持たせぬよう、遅刻厳禁とばかりに駆け足で部活動へと向かっている最中で。

（でもまあ……こんな風に新一年生を焦らせる辺り、結構どこも上下関係が厳しそうだよね）

それを眺めていた藍が、ちょっと嫌そうな表情で、肩を下ろしていた。

もともと、彼女は上下関係といつものが苦手だ。

苦手といつても、ある程度は普通に接せられるし、先輩などに気に入れられる素養もある。

では、どうして苦手なのか？

それは上下関係というよりも、今の藍が見ている光景に原因があ

る。

簡単に言つてしまえば、皆が皆、先輩などとの上下関係を気にし過ぎていて、傍から見たら窮屈でならないからだ。

もう少し、肩の力を抜いて、先輩と接せられないものなのか？先輩も、緊張した後輩よりも、少し碎けた後輩の方が、色々と気を遣わなくて良いのではないか？

藍は常々、そういう事で、日本の部活動を通じて感じてきた……。

まあ最近では、こういう事は人それぞれで、個性が集団を成すときはバランスが大事と考え始めてるので、そこまでは気にしなくなつて来てはいるが

そこでふと、周囲に視線を流していた藍が、何かに気付く。

いや、何かというよりは、思春期・浮いた話が好きな女子にうつては、見過ごせない光景。

(あれって、美夏のお兄さん？)

藍の視線の先には、なにやら一人の男子生徒……桐嶋竜蔵が歩いている姿があった。

確かに彼は、人の目を集めると見事な肉体をしている……が、別に筋骨隆々の男が歩いている姿など、気にする事もない。

だが、ここは一学年の教室が構える階層。そこに、第二学年の人間がいるだけでも、少し不思議な風景なのだが……もちろん、藍にとって見過ごせないのは、そんなところではない。

(隣に歩いている人、誰だろう……？)

藍の好奇心を惹きつけたのは、竜蔵の歩調に合わせて隣を歩いている、黒髪の女子生徒。

その女子生徒は、隣を歩く竜蔵と差して背は変わらず。腰まで伸びた長く艶やかな黒髪を、美しい歩法のたびに揺らしながら、藍だけではなく周囲の目も独占している……。

見えるのは後姿だけ。

しかし、それだけでも彼女が非凡な容姿をしている事が確信できる、不思議な空気が感じられた。

現に、彼女が他の男子生徒を通り過ぎる度に。一年の男子生徒達は、顔を赤らめながら、その女性の事を眼だけで追っていた。人を魅了するとは、こういう事なのかと、藍が妙に納得してしまった光景であった。

そんな光景を目当たりにしていると、ふと自分が、いつの間にかに足を止めていた事に気付いた。

また藍が気付くと同時に、竜藏と謎の美女は、この階層……本校舎四階の一隅にある、とある部屋へと姿を消していった。

一人が部屋に入ると共に発せられた、ドアの閉まる音で、この廊下に広まっていた空気が、一瞬にして霧散する。

藍がそこで、ハッと我を取り戻したかのよう、竜藏と共に消えていった女生徒に固定していた視線を元に戻した。

周囲では、藍と同じように目を奪っていた者達が、先程同様、部活へと向かうために意識を戻していた。

（すつごい美人だったな、もう空気が違うっていうか……）

先の女性から発せられていた、蠱惑的<sup>じわくてき</sup>な空気の余韻から目を覚ました藍であったが。

それでも、胸中で感慨そうに呟かざる負えなかつた……それほど、この空間で一際目立つ存在感を持つていたのである。

これほどの空気は、あの新しく出来た友人でも、作れるかどうか分からぬ……おそらく、容姿だけなら引けを取らないかもしけないが。

だがここで、藍は重大な事に気が付く。

（あれ？でも、いま一人が入った部屋つて、確か一般生徒が使えない教員用のPCルームだつた筈じゃ……って、まさか！？）

瞬間、藍の顔面が着火した様に真っ赤に染まる。

上級生である友人の兄が、わざわざ下級生だけがいる階層に足を運び。あまつさえ、かなりの美人を、一般生徒が出入りできない、

教員用の部屋へと連れ込んでいた……更に言えば、その部屋は常に明かりが灯つておらず、担任の話から、教員ですら使用していない無人の部屋だと聞く。

色々考え付いた事はあるが、どうしても思考が一点にしか向こうとしてくれない。

思春期の少年・少女が、殆ど誰も使っていない学園の一室に、一緒に消えていく……しかも課外活動の時間に。あわわわわと、声にならない焦りと、外に出してはならない妄想が、藍の頭の中を駆け巡る。

そして気がついた時には、何故か藍の手元に、学園指定の鞄に入られていたタッチパネル式の携帯電話が握られていた……。こうなつてしまつては、自己の思考を制御出来なくなつてしまつた人間の行動は止まらない。

藍のタッチパネル式の携帯電話のディスプレイは、既にメール画面に切り替えられている。

そして、その宛名には桐嶋美夏きりしま みなつという、彼女の友人の名前が入れられていた。

普段は全く使われていない教員用のPCルーム……。

だが、天井に埋め込み式の蛍光灯が点灯されていない、この暗幕すら閉められた薄暗い空間には、一箇所だけ、稼動しているPCの明かりが灯つていた。

数あるホワイトのデスクが並べられている所の、丁度真ん中辺りを照らしている明かり。

そこに、部屋へと入ってきたばかりの一人は視線を向ける。

「遅かつたですね、もう既に纏まっていますよ」

すると、この部屋で唯一稼動しているPCの前に座っている女子生徒が。

振り向きもせずに、入ってきた一人……桐嶋竜蔵と冴島刀子の二人を言葉だけで出迎える。

「すみません、少々、私のクラスの方で……」

「いいえ、分かっています。どうせ、アナタを迎えて来た桐嶋さんに、クラスの殿方達が群がつたのでしょうか」

「女子も、だけどな……」

他愛のない会話をしながらも、一人は部屋の中央に座っている女子生徒のもとへと、ゆつたりとした何の警戒もしていない足取りで近づいていく……若干、なぜか竜蔵の聲音が疲れているものに聞き取れたが。

そして、とりあえず一人が、先程からPCの前でキーを叩いている女子生徒の後ろへと立つたところで。

「さて、早速ですが、お一人にはこれを見てもらいいます」

と言つて、PCの前で椅子に座つていた人物が。

そのかけている丸眼鏡で、ディスプレイの明かりを反射させながら、PCの前から横へと身をどけた。

同時に、竜蔵と冴島の一人の顔が、ディスプレイの明かりに下から照らされる。

しかし、そんな事など、二人は気にしてない……。

それよりも、見るようになると言われた画面に表示されていたものに、一気に表情を強張らせていた。

「これは……」

「悪質だな」

二人が目の前にしている、PCの画面に映されているもの……。

それは、何やらピンク色の怪しい背景を背に張られた、数々の写

一人が顔を強張らせたのは、その画像集の“内容”だ。表示されているページのサイトには、こう題名として書かれている……。

#### 『女子高生丸秘盗撮画像館』

名前どおり、貼られている数々の画像には、各校の指定された制服を着用した少女達が、至つて自然な姿で映し出されていた。

中には、かなり至近距離で撮ったと思われる画像まである。

また、其々の画像の下には、まるで「写真展の様に、二人の眉間に歪めるに値する題名が表示されていた。

「このサイトは、一昨日。つまり本校の入学式が終った後、すぐに設立されたものの様です……見つけるのには、あまり苦労はしませんでしたが。サイト入り口に表示されているカウンターを見る限り、まだそれほど人は入っていないようですね」

画面に視線を落としていた一人に、この部屋で先んじて調べ物をしていた女子生徒……木佐貫千代女が、マウスに手を乗せながら説明を始めた。

「そして、お二人……というより、桐嶋さんに見てもらいたいのは、この下です」

言いながら、木佐貫は手を乗せているマウスを使って、画面を下へとスクロールしていく……。

すると、彼女が竜蔵に見てもらいたいと言っていたものが、すぐにつつかつた。

「この写真に写っている人物……」

その写真を一度見た瞬間、暫く信じられないといった表情をしていた竜蔵が、説明をする木佐貫を無視しながら。PCが置かれていたデスクの上を握り締めた拳でぶつきら棒に殴りつける。

ガニッ！

と、机の上に設置されていた物が、一瞬浮き

上るほどの衝撃。

竜蔵の「ゴツゴツとした、拳凧で変容している拳で殴りつけられた机の表面には、若干の蜘蛛の巣状のひびが入っていた。

「なんだ……これ？」

怒りに震えた声音……また強張ったのは目だけではなく、額にも怒氣を露にさせる筋と血管が浮き彫りになっていた。

拳を握り締めた右腕の前腕には、既に無数の血管の道と筋肉の亀裂が頑強に張られている。

もはや前のめりになりながら、画面を睨みつける竜蔵……。その視線の先には。

「なんで、美夏が撮られてんだよ……」

自身の妹、桐嶋美夏のカメラを全く意識していない姿が、画像のフレーム内で映し出されていた。

幸い、盗撮などで良く見られる、スカートの中の写真などの存在は見受けられない……だが、それよりも昨日の体操着姿だつたりだとか、桜並木を散ゆく花びらと共に歩いている姿だつたりだとか。明らかに、撮られている事に気付かれていない姿が、このサイト内には無数に存在していた。

「物に当たるのはよしてください……と、言いたいところですが。こればかりは、お気持ちもお察しします」

「おい！ どういう事だよ……なんでもうちの妹の写真が、こんな変なサイトに載せられてんだ！？」

眉間や米神にまで薄く血管が浮き出ている、怒気に染められた視線を。

今度は横に身を引きながら椅子に座っていた、木佐貫の方へと向ける。

しかし、妹の写真を明らかに如何わしいサイトに無断で載せられた怒る竜蔵とは対照的に、木佐貫の方は至って冷静だった。

「昨日、私が言った“妹さんが、何者かに狙われている”という言

葉は、これが原因です。桐嶋さん、怒るのも分かりますが、今は相手が誰なのかも分からぬ状態なのです、一旦落ち着きましょう。落ち着かないと、これ以上の説明はしませんよ?」

「……くそッ!」

木佐貫の宥めるというより、むしろ咎めている様な言葉に、竜蔵は悪態を付きながらも理解し、居住まいを正してから向き直った。

「……それで、どうして、こんなサイトにうちの妹が?」

「はい。これは桐嶋さんの妹さんだけの話ではなく、基本的にサイト内では、今年の新一年生をターゲットに扱っている様なのです」

「新一年生を?」

「はい、それも本校だけではなく、第一区内全ての学校・学園で行なわれている様なのです」

「第一区内全て……となると、相手は集団という事でしょうか?」

竜蔵が落ち着いたところで、ようやく本題へと入った説明に、冴島が参加し始める。

それに、木佐貫は静かに頷きながら。

「確証はないですが……ただ、これだけ近くで撮影されているのです、内部の犯行と見て間違いないでしょう。が……」

「が、て……どう考へても、こんだけ人の顔の近くで撮つてる写真もあるんだ、学園内の誰かが犯人なんぢやないのか?」

外見 자체は落ち着いてはいるものの、見るものが見れば、落ち着きのない乱れ方をしている、竜蔵の周囲を漂う空氣……木佐貫は、それを意図的に見逃しつつ、竜蔵の疑問に答えた。

「最近、学園都市内の機械工学系の大学から、超小型の自立飛行偵察機なるものが発表されたばかりなのを、桐嶋さんは存知ですか?」

「……ああ、あのハエや蚊よりも静かに飛べるってやつだろ?」

木佐貫の知つていて当然という問いに、竜蔵は一拍の間を空けながら答える。

どうやら、若干曖昧な記憶だつたらしく、この程度の情報しか頭

から引き出せない様であった。

それを見かねた冴島が、出来る限りの補足を入れる。

「確かに、虫の様な複雑な飛行は出来ない代わりに。エアーなどを外気と循環させながら噴出して、空中を漂い続けられる程の小ささと軽さを備えた。将来、医学や災害救助でも活躍出来るかも知れない現代の画期的な発明……大きさは一ミリから一ミリ程度で、内部にエアーの循環器の他に簡易的な撮影機器、それで撮影した画像を他所に送るための送信装置があるという話だ」

冴島の補足に、竜蔵は「へ」と呆けた表情をするも、次には木佐貫のほうへと視線を戻していた。

「で？ その自立飛行偵察機とやらが、もしかしたら使われているかもしづれないって事なのか？」

「はい、あまり考えられない事ですが。ここまで近くで、何枚もの写真が収められている事と、時期的な問題から、その可能性も捨てきれないのです」

「だとすると、絞込みの時点で、だいぶ難しくなつてくるな……」これまでの説明から、少々難しげに考え込む竜蔵。

だが、それを木佐貫が付け足す。

「ですが、これはあくまで可能性です……それに、いくら自立飛行型といつても、まだ試作段階。しかも、一応出来上がったというレベルの話です。使つたとしても、撮影したデータの送信に関しては、結構近い距離でないと、まだ使えないといった物ですしね」

「そうか……」

あくまで可能性……竜蔵は、この木佐貫の説明に少しだけ疑問を覚えた。

暗い室内の中で、唯一稼動しているPCのディスプレイに映し出された、妹の盗撮写真。

如何わしい内容のものは取られていないものの、ほほ……というより、完全なオフショットで写真に収められている事から、妹は撮影者に全く気付いていないという事になる。

だとすると、どうやって撮影したのか？

「写真の背景を見ると、どう考えても隠れる場所のない所からでも、美夏の写真を撮っている。

これは、普通の人間に可能な業なのか？

そう考えていた童貞に、木佐貫が「気付きましたか？」と、若干嬉しそうに尋ねてきた。

「何にだ？」

「もちろん、この写真の違和感です」

「それは、まあ……正直言つて、素人の俺から見ても、この距離からアイツに気付かれずに撮るなんて不可能な話だからな」

「ええ、その通りです。普通の人間なら、これ程の距離・角度で写真を撮られれば、何かしらに気付くはずですからね」

木佐貫の言うとおり、サイトに載せてある盗撮写真の数々には、どう考へても、普通の人間の視点から撮れないものも存在している。つまり……と、今回、事前に調べをまわしていた木佐貫が、結論付ける。

「撮影者は確実に、最近発表された、自立飛行偵察機を使用していると言えるのです」

確かに、これ程までの写真を見せられれば、その考えに行き着くしかない。

しかし、ほぼ出来上がったばかりの試作段階だと、彼女は言った筈だ。

それに疑問を持った冴島が、木佐貫に不思議そうな目を向けた。

「ですが、そうなると、内部の犯行という可能性が強くなるのでは？」

当たり前の質問に、木佐貫が特に気にした様子も無く答えた。

「ええ、おそらくはと言いたいところですけど。流石に、安易に答えを出すのも拙かったので、私も昨日から色々と考えましたよ……いくらんでも、盗撮程度に最新鋭機を使うのか？ だと。使ったとしても、どんなメリットが？ だと。……正直、考えるのも馬鹿

らしく思えるぐらいに」

言いながら、おもむろに木佐貫が椅子から立ち上がり、ディスプレイの前を陣取っていた竜蔵を片手でどけ、今度は自身がディスプレイの前に立ち、マウスを操作し始めた。

すると、どんどんと下へと移動していく画面に、竜蔵と冴島も視線を集中させる。

「ですが、このサイトの法則というより、趣向について考えた瞬間に、吹っ切れたんですよ」

「吹っ切れた？」

竜蔵が訝しげな聲音を、木佐貫の背中に向けて発する。

同時に、下へとスクロールしていた画面がピタリと止まり、木佐貫もディスプレイから一人へと振り返った。

「ええ、このサイトをダラダラと眺めていれば、サルでも気付きます」

確信が込められた口調と、眼鏡越しの瞳。

「最初こそは、色んな趣味の女子生徒達が写真に収められていました。ですが、それが次第に一人の女子生徒へとヒュされる写真の枚数が集中していくのです」

「それって……まさかッ！？」

「そのまさかです。言つたでしょ、桐嶋さんの妹さんが、誰かに狙われていると」

木佐貫の言いたい事に気付いた竜蔵が、驚愕を覚えて目を見開く。確かに彼女は言った、これはあくまで可能性だと……だが犯人、いや、サイトの運営者のHP画像では、他校の生徒も被害にあつていた筈なのに、次第に趣向が固定されていく事や、その収められた写真の数々が、どう考へても人が相手にバレずに撮れる物では無い事。

これらを考へていくに、次第に馬鹿らしい結論にしか到達できなくなつてくる。

そう……。

「桐嶋さんの妹さんは、最新鋭機を使った盗撮……または、ストーカーの被害を、現在進行形で受けているのです」

（なんなのよ！　なんなのよ、なんなのよ！…）

焦燥と怒り、更には嫉妬心を身に纏いながら、一人の少女が本校舎の階段を駆け上がっていく。

階段を軽やかに、体重を感じさせないステップと共に上り、疾走していく様は、正に風の如しと称しても過言ではない。

証拠に、先程まで帰宅する途中であつたため、再び一階から上り始めたばかりなのだが、既に二十秒と経たずに三階まで駆け上がっていた。

少女の手には、学園の指定校推薦を貰つたと同時に、母から貰つてもらつたタッチパネル式の携帯電話が握られている。そしてふと気がつけば、ものの三十秒と掛からずに、少女は本校舎の階段を四階まで上りきっていた。

だが流石に、このペースには無理があつたのか？  
肩で息をし、額には少量の汗が浮き出ていた。  
しかし少女は止まらない。

怒氣の籠つた、ズンズンという音が聞こえてきそうな歩調で、足を目的地へと進ませていく。

周囲には、既に四階に教室を構えている、他の一学年の姿は見られない。

おそらく、皆、部活か帰宅か、どちらかの徒に着いたのである。本来なら、少女自身、既にこの静かな階層には用は無い筈なのだが。

今は、とてもとも、少女にとつて重大な事件が、この階層で起きていると、先程友人から連絡があつたのだ……それはもう、場合によつては、慈悲すら見せずに殺人を犯さなければならぬ程の、

## 重大な出来事。

少女が、その女性らしい膨らみを持ちつつも、しなやかかつ華奢な細さが印象的な体から禍々しい殺氣を放ちながら、歩を進めていく。

目的地である“教員用のPCルーム”の前へと辿り着いた。

その扉の前で、一旦少女は乱れていた息を整える……焦ついていては、ベストなコンディションで、泥棒猫を確實に仕留められないかもしれないからだ。

少女の年齢にしては豊かな胸が、膨らんだり縮んだりを三回ほど繰り返すと、いつのまにか、乱れていた呼吸に落ち着きが取り戻されていた。

それを確認すると、少女は、その細く美しい手で、目の前の扉を勢い良く開く。

あまりに勢い良く開いてしまったために、スライド式のドアが、耳に衝撃が来るほどの音を立てながら、縁に衝突した。……また、全身を使って開いたために、少女のきめ細かな長い黒髪が、サラサラと揺れ動いていた。

ドアの先に広がっていた光景は、暗幕すら閉じられた、真っ暗なPCルーム。

そこには、ここまで全力で駆けつけてきた少女……桐嶋美夏が考えていた人物どころか、殺害する予定であつたビッ も、人つ子一個人いない。

どうということ? と、美夏が首を捻っていると、突然、彼女が手に持つていた携帯電話がブルブルと小刻みに揺れ始めた。マナー モードにしてあつた携帯電話に、どうやら着信があつたようだ。

美夏はそれにすぐ反応し、タッチパネルの操作を手馴れた手つきで進めながら、届いたメールを開き確認した。

そこに、書かれていた内容は

『いま、部室棟の二階から、アンタのお兄さんと知らない女子生徒が、校門から出て行つたのが見えたけど？ やつぱり、お兄さんつて彼女いたの？』

美夏はPCルームから踵を返し、再び怒涛の追走劇を開始した。

執行部のお仕事（2） 兄を追え！（後書き）

プロジェクトはあつまってるで、書を上げるのと皿体は苗であります  
ん。

ただ、やはり辻褄が合っているのかが心配です。

執行部のお仕事（3） 聞き込み開始（前書き）

皆さんお待たせしました。

教育実習から帰ってきたばかりのゲレゲレです。

今回はリハビリがてら、本来ならもう一場面書くところを省略して、短いものとなつております。

次回には、ちゃんと書かなかつた場面も入れたのを書くので、ご安心を？

では、どうぞ。

「こんにちわー！　こんにちわー！」

部室棟の三階。

そこを通路で、他の女子達と比べても一際背の高い女子生徒、木下藍が壁際に身を避けながら、女子バスケ部の部室へと向かっている先輩達が目の前を通過する度に、片つ端から頭を下げていた。

これは、藍の他にもいる新一年生達も同様で、部室棟三階の通路は女子バスケ部の新一年生による、一種の花道の様な情景を成していた。

そして再び、一人の女子バスケ部の先輩が、壁際に出迎えるように立っている藍たち新一年生の目の前を横切っていく。

「こんにちわー！」

「こんにちわー！」

「こんにちわー！」

……。

……。

一人の人間が歩を進めるたびに、次の一年生、次の一年生と、順々に頭を下げていくため、その光景はさながらウェーブが巻き起こつている様であった。

それが何度も繰り返され、そろそろ藍も面倒になってきた頃、一人の先輩だと思われる女子生徒が、部室棟の階段から三階の通路へと入ってきた。

本来なら先輩は先輩と、制服の左胸に着いている色着きラインの刺繡で分かるのだが……どうにも藍は、この女子生徒を先輩という

よりも年上だとは思えなかつた。  
なぜかと、問われれば……。

「あ、あうう……」

部室棟の階段から、開きっぱなしの両開きの扉を潜つたと思えば、一年生の中でも入り口側の最前列に立つてゐる藍の事を見た瞬間に、突然オドオドとした様子でまるで小動物の様に、藍が立つてゐる壁際とは逆側の壁に身を寄せ始めたからだ。

その姿は、まさに天敵に逃げ場を塞がれた小動物の様で……。

（なにやつてんだろう、あの先輩……）

と、先程から繰り返してきた挨拶を、例外なくかまそうとしていた藍に、訳が分からぬといった表情をさせるには十分なものであった。

反対の壁際へ、ぱり付いてゐる先輩の女子生徒は、癖毛の田立つ金色のセミロングの髪を、軽く七二に分けた髪型をしていて、確りと見開かれた吊り眼が特徴的な、活発そうで整つた顔立ちをしている。

また、その吊り眼の視力が悪いのか、フレームの無い、ちょっとお洒落な眼鏡を掛けっていた。

体格は華奢というより、女性である藍ですら、少し力を入れて抱いたら壊れてしまいそうな……そんなか弱い印象を持たせるもので、身長もそれほど高くは無く、むしろ小さい。

この女子生徒を一言で表すのなら、『妙に保護してあげたくなる娘』と誰しもが思い浮かべるであろう。

それは後輩であり、同性でもある藍も例外ではなかつた。  
しかし思い浮かべたとしても、相手は絶対の上下関係にある先輩だ。

口に出すなんて、もつての他……。

故に、藍は怯える様に反対の壁際へ張り付いてゐる先輩に対して、

これまでと例外なく、完璧な「こにちわっす！…！」を繰り出したのだが。

「ひい！？」

逆に、更に怯えさせてしまい。

仕舞には元来た階段のほうへと、先輩を逃がしてしまった。

その際、あけっぱなしになつてゐる両開きの扉の縁に、あまりにも怯え・焦りすぎな小動物な先輩が足を引っ掛けたのは言つまでも無い。

ドテンツ！ 「いたあ！？」と、体の正面からコンクリートの地面に衝突する小動物な先輩もとい、小動物先輩。

幸い、体の正面とは言つても、顔面からの衝突は避けられたので、かけていた眼鏡の損傷は無かつたが、後輩達が立ち並ぶ、この三階の空間で見事なこけつぶりを披露した事は、どうしようもないぐらに情け無い光景であつた。

自身の挨拶で、ここまで反応が返つてきた事に驚いていた藍であつたが、すぐにうつ伏せの体勢で、こけたままの小動物先輩に駆け寄るうとした……が、

「うう……くそぅ」

（あ、一人で立てるんだ……）

あまりにも失礼な事だが、ヨロヨロと立ち上がる小動物先輩の後姿を見れば、誰だつてそう呟いてしまうであろう。

この場合、呟きそうだったので、口内で留めた藍を褒めるべきだ。すると、背を向けたまま立ち上がつた小動物先輩が一度、自身を落ち着かせるためなのか？

ゆっくりと深呼吸をした後、藍たち後輩が立ち並んでいる方へと改めて振り返つた。

振り返つた姿は、制服越しでは有るか無いか判断しかねる胸を堂々と張つた。

心なしか、どこか誇らしいもので……。

（あ、こっちに来た）

小動物先輩の歩みは、さつきまでの弱気な雰囲気は感じられず、むしろ“先輩だぞ、偉いんだぞ”とばかりに自信に満ちた気迫が感じられた。

そして、再び他の新一年生同様、困惑している長身の女子生徒、木下藍の前を横切ろうと……。

「あ、あああ……」

「？」

いや、横切れず、後一步の所で“藍の前にすら立てなかつた”。見れば、ガクガクと体を震わせている……といつより、藍の方に、涙目の視線を向けてきている。

二人の光景は、小動物先輩の背の小ささと、藍の女性にしては、かなり高い身長が相まって。

さながら、“巨人に睨まれた小人”の様な情景をなしていた。デカイ……そして小さい。

周囲にいる他の新一年生達も、一人の様子を交互に伺つていた。すると……。

「わ、私は……！」

突然、震える声音で、小動物先輩が藍に対し、何かを訴えかけてきた。

だが、私はの後に、言葉が続いてくれない……。

強気に出ようとしているのは分かるのだが、どうにも口がパクパクと動いているだけだ。

流石にサバサバした性格な藍も、これには戸惑う以外に無い。

しかし尚も、小動物先輩の勇ましい……いや、傍から見れば微笑ましい威勢は続く。

「わわわわ私は！ セ、せせせ先輩な……なんだぞ！？」

左肩に掛けている、エナメルバックの肩掛けを両手で握り締めながら。

“言つてやつた”と言わんばかりに、涙目の眼を、眼鏡越しで藍

に向ける小動物先輩。

正直、藍は一瞬だけ、この時的小動物先輩の事を可愛いと思つてしまつた。

「は、はあ……？」

色々な意味で狼狽しそうな藍に、言つてやつた小動物先輩は、絶望的な身長差を前にして、よつやく震えて動かせなかつた足を、自由に動かせるようになつっていた。

しかし、動かせたとしても、小刻みに震えている事には変わりはない。

「せ、せせ先輩を、そんなにみ、見下ろすなんて……！」

「見下ろす……ですか？」

「そ、そうだ！ し、しし失礼だりよつ！」

精一杯の虚勢を張りつつ、藍の目の前に立つた小動物先輩であつたが、あまりの緊張のためか、思わず噛んでしまつた。

それに、新一年生全員が、胸中で『あ、いま噛んだ』と反応する。また、これによつて自分が満足する威儀を示せたと思い込んだのか？

ふふん……と、意氣揚々に鼻を吹く小動物先輩。

だが、腰は引けたままだ。

ついでに足も震えたままだ。

「いや、見下ろすもなにも……」

「な、ななんだ！？ せ、せせ先輩に意見をしゅ、するといつのか！？」

やたら無理をしながら、長身の藍に突つかかつてくる小動物先輩であつたが

「はいはい、後輩が出来て嬉しいのね」

「にゃ！？」

突然、小動物先輩が後ろから頭頂部を鷺づかみにされてしまった。

大きな手……浅黒い肌ながらも、綺麗な指先は、おそらく女性のもの。

これまで、小動物先輩に視線を落としていた藍が、そこで初めて視線を従来の位置へと戻した。

そこには、高一女子にして175?を越える自身と同じぐらいの高さを持った、ベリーショートの茶髪と少し垂れたアーモンド形の瞳が印象的な、女子バスケ部の先輩が立っていた。

この人は！？

と、藍は目を見開く。

瞬間。

『い、こんにちわッ！』

これまで、藍と小動物先輩の一人の様子を静観していた新一年生全員が、一斉に頭を下げた……それは、この大きな女子生徒の立ち居地などお構いなく、通路の奥に立っていた新一年生も例外なくだ。すると、その一斉の挨拶に答えるように、妙に凜々しくも強気な顔立ちをした先輩が、女性にしてはハスキーな声音で口を開いた。

「うい！ 初めまして、新一年生ども！」

屈託の無い、心から清々しいと思える笑顔で、新一年生達を歓迎する大きな先輩。

目の前に立たれていた藍も、皆に少しだけ遅れて「こんにちわ」という挨拶をした。

そんな藍に、いまだ小動物先輩の頭を驚づかみにしたままの先輩が視線を向ける。

「お前が、『あの』木下藍ね……なるほど、こりやあウチの顧問が必死こく訳だ」

下げていた頭を上げ、視線を合わせた藍に、いきなり一人で納得し始める先輩。

「俺は、この女バスのキャプテン、五十嵐真樹！ これからよろしくな、スーパールーキー？」

言いながら、五十嵐と名乗った女子バスケ部のキャプテンが、直立の姿勢でいる藍に、女性にしては大きな右手を差し出した。

握手 古今東西、決して悪い意味には取られない、共通の儀礼の様なもの。

藍は、その差し出された右手を、恐縮といった様子で手に取った……。

すると。

強ッ！？

五十嵐の右手を手に取った瞬間、握り返してきた彼女の握力に、思わず藍が胸中で驚きの声を上げる。

決して、わざと強く握られたわけではない……それは、二コやかに邪氣の無い表情を向けてくる、相手の目を見れば分かる事。それなのに、この握られた右手の骨が、全てくっ付けられてしまいそうな程の力。

「よ、よろしくお願ひします……」

藍は、素直に田の前の五十嵐と、自身のバスケでの実力差を、この握手一つで実感していた。

何がスーパーパーリーキーだ……この女性に比べれば、あたしなんて。右手同士でなされた握手を見つめながら、藍がそう考えていると。「そう緊張するな。俺たちはこれから同じチームで闘うんだから。な？」

言いながら、五十嵐が小動物先輩の頭を驚づかみにしていた左手を離し、そのまま藍の右肩に乗せた。

これまた大きく、それでいて優しい暖かみを持つた掌だった。

それに、藍の緊張が不思議と解ってきた……本当に不思議と、だ。

「は、はい！」

藍が力強く返事を返すと、五十嵐が「うん、その活きたー」と頷いた。

二人の長身な女子生徒が、そうしていると。

「うん？ あれ、竜蔵じゃん」

唐突に、一人の下で小動物先輩が、何かに気付いた様に声を発し始めた。

瞬間……。

「え、うそーー？」

これまで、男勝りな雰囲気だった五十嵐の様子が、一瞬にして様変わりした。

どんな風にと聞かれれば、それは乙女の様にとしか言いようが無い変わりようであった。

「ど、どこだ！？ 御来屋！ みくらや 桐嶋君は、どこの間に居るんだーー？」

既に藍との握手は放され、五十嵐はこの三階通路から外の光景に目を向けていた。

手すりに両手を置きながら、身を乗り出しそうな勢いで外を探す彼女の姿は、さつきまでのイメージからは想像が出来ないものであった。

すると、この状況を作り出した本人、小動物先輩改め、女子バスケ部一年、御来屋鳴子が、背伸びをしながら手すりに手を添え、三階から見える外の風景の、ある一箇所を指差した。

「ほら、あそこでよ五十嵐先輩」

その指示された場所とは、ちょうど学園の正門辺り……。

そこに五十嵐と、何事か分からぬといつた表情をしている藍が、視線を向けた。

（あ、お兄さんじゃん……って、あの隣を歩いてる女性ってーー？）

瞬間、この部室棟に来る前同様。

彼女の表情が、一瞬にして朱色に染まる。

ここに来る前、一年生の階層である四階の廊下で見た光景と、浮かんできた邪推がフランクシユバックしてきたからだ。

「い、いた！」

しかし、そんな藍を放つておいて、五十嵐は桜や他の建物などが

田立つ校門前を歩いている、龍藏と沢島の一人を発見する。

「鳴子の言つたとおりでしょ？」

「あ、ああ……だが」

鳴子が首を傾げながら、微笑を浮かべた表情を五十嵐に向ける……。

しかし、とうの五十嵐の表情は、先程とは違つて、嬉々としたものではなく、むしろ陰りが掛かつて見えていた。

五十嵐が、手を置いていた手すりを、ギュッと掴む。

「隣に歩いている女子は、誰なんだ……」

柔らかい唇を噛み、田を薄つすらと潤ませながら、五十嵐は悔しそうに声を漏らす。

その姿に、またしてもいつの間にか、ブレザーのポケットから自身の携帯電話を取り出していた藍が。これまた気付かぬうちに、携帯電話でメールを打つていた。

というより、なぜ自分は、じついた場面に直面すると携帯電話を取り出すのか？　と、血問自答をしょいとすむか、じつに頭が回らない。

むしろ、頭を回そうとする度に、さつきから浮かびっぱなしの、如何わしい妄想が藍の頭を駆け巡つてしまつ。

これが思春期かど、うんざりしがちになるも、じつは出来ない藍であった……。

「で、とりあえずは、どこから回るんだ？」

「千代女士からは、既に被害にあつてゐる他校の生徒達を当たるよう」に言つてゐるから。まずは、そちらからだらつ

学園の正門を抜け、既に学園専用のバスの座席に腰を下ろしていふ一人は、互いに一切の視線を合わせることも無く、事務的な抑揚

の無さで、今後取る行動の確認を行なつていて。

二人は共に学園指定の制服姿に、同じく鞄を持っただけの、そちら辺にいる帰宅部と変わらない格好をしているが（冴島は、木刀の入った竹刀袋を膝に寝かせている）……醸し出している、常人とは違つた雰囲気は、一目見ただけで只者ではない事を指している。

座つている座席は、バスの一番後ろで窓際に竜蔵、一つ間を空けたところに冴島といった位置関係であった。

「は……面倒だねえ、そりや。今日の残りの間に、一回を回るつてことだろ？ それ？」

窓の外に視線を向けながら、本当にダルそうな聲音を吐く竜蔵。それに、冴島は特に気にした様子も無く。

「明日に持ち込んで、また部活を休むよりかはマシとは思わないのか？ まあ、私には関係の無い話だが」

「そうだな、そう考えれば少しはマシかもしれないな……」

昨日今日と、竜蔵は執行部関係の用事で既に一日連続で部活であるラグビー部を休んでいる（支部長を務めている道場の方は、確りとこなしていいる様であった）。

これは新一年生を迎える、この時期にとつて重大な損失だといえる。

まず、初っ端の顔合わせや、名前を覚える、交流を軽くでも良いから取つて、今後につなげるといった。チームという集団を主とする競技にとつて、重要なファーストコンタクトを取りこぼすのは、二年にながつたばかりの先輩としては痛いところなのだ。

更に、竜蔵には気掛かりがあつた……。

そう、入学式直後に、色々とあつて勧誘した一年生の結果を、まだ見届けていないのだ。

自らが指し示した事だけあって、こればかりは自身の田で、早く確かめなければいけない。

故に、竜蔵は早くこの執行部の仕事を終らせようと、じつで改めて決心をする

「しつかし、部活の話になるが。あ……冴島さんが、剣道部所属じゃないことには驚いたわ」

窓に視線を向けつつ、相手の呼び方に困りながらも会話を続けようとする竜蔵。

ちなみに、このバス内には、既に一橋の生徒達は竜蔵と冴島以外には、数人しか見受けられない。

PCルームでの話しお陰で、彼らとはバスに乗車する時間帯がズレたのであるう帰宅部。

だからこそ、この静かな空間に耐えかねた竜蔵は、一つ空けた隣に座っている彼女と会話を続けようとしていたのだが……。

「刀子で良い。部活の件なら、私はただの助つ人として出ただけの事……勝手に勘違いをしているのは、そちらの方だ」

「なら俺も竜蔵で良い。普通、剣道でインハイ優勝したら、誰だつて部活に所属してるって思うだろ?」

「それなら、君にだつて言える事であろう? ラグビー部に所属しながら、プロの格闘家として公の場に出ているのだから」

「俺の場合は、学校とは違つた所でやつてるから違つだろ?」

「私だつて、学園とは違つ場所で剣術を磨いている」

会話が妙に続いているように感じられるが、実情、二人は全く視線を合わせなければ、声音に抑揚を持たすという事すらしていない……それはもう、某ゲームで伝説的な棒演技を演じた金城 の様に。しかし、そんな二人とは違つて、周囲の数少ない視線からは、色々と複雑な感情が送られてくる。

まあ、これも当たり前と言えば当たり前か……。

何故なら、一橋学園に所属していれば、必ずと言つて良いほどに全生徒が名前を知つていると言われる一人の男女が、一つ席を空けているとはいえ隣同士で座つてているのだ。これの異常さが分からぬいのなら、学園ではもぐりと言われても仕方が無い。(埒があかないな……話題を変えるか?)

だが、当の本人達は、そんな周囲の視線など構いやしない。

竜蔵が、これから仕事をするといふことで、『ミコニケーション

を確り取つておこうと勤しんでいると。

「無駄な会話は止めよう……これから、もしかしたら荒事に遭遇するかもしないのだ。今のうちから、軽い気構えでも組んでいたほうが、より建設的だ」

沢島が、そんな竜蔵の努力を塵にする様な事を口にし始めた。

すると、竜蔵はそれに異を唱える。

「無駄に構えたって、固くなるだけだぞ？ もつと気楽にいけよ、そっちの方が柔らかくて良い」

「私から見れば、君は樂觀視しすぎだ。確かに脱力とは、全てにおいて必要だが。君の場合、それは脱力ではない。ただの油断だ……今なら、私でも君を倒せる自信があるぞ？」

瞬間、沢島が膝に寝かせていた竹刀袋に手をかけ、竜蔵に視線は向けずに威圧感のみを送り始めた……心なしか、彼女の居住まいや、刀の様に妖艶な瞳が、更に研ぎ澄まされたように感じた。

が、とうの竜蔵と言えば……。

「無理無理。常識を一応は弁えてる人間だつたら、こんなところで仕掛けられる筈ないじゃん」

へらへらと笑いながら、窓際の肘掛にかけていた右腕を、無い無いと振る。

しかし、一向に視線は向かないまま……外の流れる風景だけ、先程から竜蔵は見ている。

「……確かに、そうだな」

言いながら、竜蔵の言葉を聞いた沢島が、固め始めていた鬪氣と威圧感を収めた。

やはり、本気ではなかつた様だ……が。

一つだけ言つておく事があるとでも言つかのよつて、沢島が言葉を続けた。

「だが、これから君が直面する世界には、今の状況でもお構いなし

に切りかかって来る者もいる……別に流儀を貫くのも良いが、気をつけることだな」

「はいはい、心配してくれて、どうもありがとう御座いますよ」

一応、竜蔵のための忠告として告げたのだが、どうにも彼は不真面目な様で、聞く耳を持つとはしない。

そんな相手の態度に、冴島は“ふん”と鼻で短い溜息を付く。

そもそも、一つ目の目的地へとバスが到着する頃だ……。

美夏は焦っていた……それはもう、かなり焦っていた。

どれぐらいと聞かれれば、世界一不幸な男が、クリスマスに疎遠になつた妻と、何事も無く寄りを戻してしまつぐらいに……いや、少々分かり辛い。

もつと正確に、分かりやすく説明すれば、相手の現在地が分かる携帯機器のアプリで、目的である兄の動向を探つてみた時。向かつている先に、よく第一区や二区のカツブルが利用していると噂のラブなホテルがあるから、焦つていた。

なぜ、そんな情報を美夏のよつな、兄以外の異性は眼中に無い15歳超絶ブラコン娘が知り得ていたかと言えば……いやといつ時に、という理由でだ。

そんな時が、いざれば来るのだろうか？

いや、こればかりは神すらも知らぬ……という内容の話だ。

話は少しだけ脱線したが美夏は現在、バスに乗つて学園から遠のしていく兄と謎の女を追つために、同じく同じ駅行きのバスに、一本遅れる形で乗車していた。

なぜ、乗つているバスの行き先すらも分かつたのか？

それは、先も言ったように、相手の行き先が表示されるアプリを使って、どここの学園専用のバス停で待つていたのかを、目視で判断していたからだ。

つまり、携帯機器のディスプレイに表示された地図に浮かび上がった、兄のアイコンの微妙なズレをヒントに、待っていたバスのバス停を割り出したという事だ。

ちなみに、これは藍から二人が正門を出たと連絡が来た瞬間から行なっていた事で、走りながらの作業になっていたのだが……何事も器用にかつ完璧にこなす、この無駄にハイスペックな妹には、造作も無い事であつた様だ。

証拠に、さつきまで走り回っていた筈の彼女は、涼やかな顔をしながら、居住まい良くバスの最後尾の席に座っている……。

しかし、内面は先に説明したとおり、焦りに焦つてゐるために。下手に今、彼女を家族や親しい間柄の人間以外の者が刺激しようものなら、その者には“死”あるのみなのかもしれない。

暫くバスに揺られていると、美夏が手に持つてゐるタッチパネル式の携帯機器の画面に、一つ先の駅で兄のアイコンが、本来のバスの進行方向とは、違う方向に移動し始めたのが確認できた。

降りた

そうと分かれば、美夏も兄と同じ駅で降りるだけだ。

すると次第に、沸々と燃え上がるものが、美夏の胸中に芽生え始めた……。

それは何なのか？

いや、聞くまでも無い……邪魔者を殺せ、兄を誑かす売女（ビッ）を根絶やしにしろ。

今、彼女の胸中を支配しているのは、そんな狂氣とも呼べる荒々しい感情だけだ。

今回の事件の鍵とも呼べる人物、または自身の妹に追われている

とは、一切考へてもいゝない竜蔵は現在。

一橋学園から、バスで大体15分程の距離にある、お隣の学校。東野台大学付属高等学校の近くまで来ていた。

ここは竜蔵達が普段通つてゐる、一橋学園とは違つて、大学と高校が一緒になつてゐる学校なので、敷地もそれなりに広い……だがまあ、一橋学園の場合、それ単体で、そんじょそこらの大学よりも敷地があるので。東野台大学付属高等学校がいくら高・大と一緒になつていても、広さの面積では到底勝ちようも無いのだが……。

周囲は桜の木が咲き乱れる、春特有の風流な情景をなしていた……が。

竜蔵は田の前に広がる、なんとも面倒臭そうな地形にうんざりとした表情をしていた。

「これを登るのね……馬鹿じやねえの？」

「なにを文句を垂れているのだ？」急ぐぞ

桐嶋

竜蔵

と、その前を進む冴島刀子の田の前に広がる地形。

それは、正門自体は平地にあるものの、学校自体は山の頂上にあるという、長い坂道を歩く事を約束された面倒臭い光景であった。確かに山自体は桜の木の色や、他の木々の色が入り乱れて、とても綺麗なものであったが、竜蔵はどうして先程のバスは、ここも登つてくれなかつたのかと溜息を吐く。

しかし、今回の事件についての情報収集や、木佐貫千代女から言われた陽動を効果的に進めるには、この山を登つて、東野台大学付属高等学校へと向かわねばならない。

そう考えた竜蔵は、なんとも気の進まない足取りであつたが、ゆっくりと先に立つてゐる冴島のもとへと、坂道を上りながら近づいていった。

長い坂道を歩き続けて数十分、一人はようやく東野台の校舎を目の前にしていた。

来る途中、幾度と無く、東野台の高校生や大学生の男から、他校の制服を着ている冴島にアプローチがかけられていたが、それは隣を歩いていた竜蔵の存在によつて、これまた幾度と無く消沈していった。

だが別に、竜蔵はただ彼女の隣を歩きながら、東野台の山一つを学校の敷地として使用している、珍しい立地条件のもと建てられている施設の数々に視線を向けていただけで、別段、来る男に対してはシカトしていただけのだが……。

どうやら、その制服越しからでも確認できる肉体の造形や、隠そくにも隠し切れない眼力が、勝手に近づいてきた男を退けていた様だ。

「で、これからどうするんだ？」

「まずは君の妹さんと同じ被害者である、こここの学校の生徒を探す。それもなるべく目立つ様にだ」

しかし、一人にとつて、これまでの坂道での行程など気に触るものでもなかつたようで、既に当初の目的へと意識を向けていた。

東野台大学付属高等学校の校舎は、少し歴史の感じられる煉瓦調の作りながらも、様々な修繕や改装が行なわれていたためか、どこか独特的な現代感を醸し出す、少し独創的な建物で、初めて見る者にとっては、だいぶ不思議がられる造形をしていた。

また校舎を取り囲む敷地も、様々な植物や木々が確りと手入れをされた状態で並んでいて、アスファルトのよつたな单调な色に緑の飾り付けをしている。

そして現在の時刻が、各部活動の活動時間であつたため、校舎内や敷地、または竜蔵と冴島の後ろや横を、東野台の生徒達が忙しく走つたり歩いたりと動き回つていた。

「田立つ様にね……なんか具体的な指示とかは無いのか？」

「こういった事は自分で考えることだ」

「だとすると、ワザと人に聞き込みまくるとか？」

「それも一つの手だろうな。こここの生徒達に私達が被害者の女子生

徒を探し回っているという情報が流れれば、おのずと犯人の方へと、その情報が流れるかも知れないからな」

「はあ……時間が掛かりそうだな、それ」

自らが思いついた、誰でも考え付きそうな案であったが、竜蔵は今日何度も分からぬ、面倒臭そうな溜息を盛大についた。

こつしている間に、今も妹を狙つた盗撮写真がネット上に公開されてしまつてゐるかも知れない。

そういうつた無意識の焦りが、竜蔵に時間を気にさせていた。

「仕方ないだらう、もともと私達がすべき事は、今も学園で犯人の妨害や割り出しをしている木佐貫先輩の時間稼ぎなのだから。機械に疎い私達が、とやかく言える事ではない」

「まあ分かつちゃいるけどな……だけど待てな？ いくら俺が機械に疎いといつても、『お前程ではない』からな？」

「ツー？」

お前とは違ひ……それを妙に強調して発した、冴島の隣に立つてゐる竜蔵の言葉に、彼女は無言で顔を真つ赤にさせてしまつ。

その様子は、普段の凜々しい彼女からは考えられない面白いものであつたが、竜蔵は眼すら向けぬまま、歩を東野台の校舎へと進め始めてしまう。

だが、そんな竜蔵の背中に、顔を真つ赤にさせたままの冴島が、異議ありとばかりに口を開いた。

「べ、別にあれば仕方が無いだらう……今まで、ああいつた物には関わりが無かつたのだから……」

そんな彼女の異議の主張に、竜蔵は特に気にした様子も無く……。「それでも“わ、私が触つたら壊れやしないか！？”なんて、真顔で聞く奴なんて、さつきまでいな」と思つてたよ……マジで

「ツー？」

振り向きもせずに竜蔵から発せられた、さつきバス内で起きた出来事に、冴島は再び黙りこくつてしまつ……。

実は先程、この地域へと来る途中のバス内で、竜蔵が暇だからと

沢島にスマートフォンのアプリをやらせようとした一コマがあったのだ。

そこで、もともと携帯電話“すら”持っていない沢島は、突然目の前に現れた最新機器に戸惑つてしまい

『「」この機械は何なのだ?』

『うん? いや、スマホだけど? 知らないのか?』

『いや……私は、こういういた物には疎いのだ』

『ふうん。じゃあ、教えてやるから、ほれ』

『……な、なんだ?』

『これ使って軽いゲームするから、ほら、もてよ』

『い、いや……私はいい』

『なんでだよ? 田舎の場所まで、まだ時間がかかるんだし暇だろ?』

『だ、だが……』

『物は試しだろ? ほれ、やってみろよ』

『お、おおおおい!! 何を勝手に!!?』

『そんな驚く事でもないだろ? ちゃんと教えてやるから、落ち着いて画面を見ろよ』

『だ、大丈夫なのか!? し、知らないぞ! わ、私が触つたら壊れやしないか!?!?』

『……』

という、現代人なら誰しもが絶句しそうな一幕が、行きのバス内で起こっていたのだ。

この21世紀の現代社会で、花の高校一年生である女子生徒が、携帯電話すら持っていない事にも驚きだが、ここまで機械に対して疎い、もしくは恐怖心を抱いているのは、もはや天然記念物ものだと言えるのではないだろうか?

よく今まで、そういう通信手段も無しに、都市の裏で動かなくてはならない執行部で活動を続けてきたなど、竜藏は彼女の前を

歩きながら考える。

おそらく同じ学校で、しかも昔ながらに付き合いがありそうな木佐貫千代女や一橋姫樹が、かなりサポートをしていたのだろうと、竜藏はすぐに考えに当たりを付けた。

だが、今回ばかりは、そういう甘えを出してもうつては困る。なぜなら、被害者の一人というより、すでに主な被害者に自身の妹がリストアップされているからだ。

そういう状況で、犯人もしくは有益な情報源が見つかり、もしこ二手に分かれる必要性が出てきてしまった場合、連絡に遅れが出るのは致命的な損失に繋がってしまう。

端的に言えば、妹に更なる危害が加えられてしまうかもしれない

……。

これは後で、後ろでいまだ恥ずかしそうに、悔しそうに立ち止まっている彼女に、携帯電話の一つぐらい持たせないと拙いなど。

この時、危機感を覚えた竜藏は考えていた……。

執行部のお仕事（4） 必然の遭遇、そして追走（前書き）

急いで書いたもので、チェックはしません。

## 執行部のお仕事（4） 必然の遭遇、そして追走

東野台大学付属高等学校の敷地内で、竜蔵と刀子の二人は“なるべく目立ちながら聞き込みをしなくてはならない”。なぜか？

それは犯人に対しても現在、インターネット以外でのアプローチをかけ、敵は電子網の中ではなく現実の世界で動き回っていると認識させるためだ。

これが上手くいけば、一人とは違つて学園の方でネットの世界を見張つている木佐貫が動きやすくなるし、同時に犯人の居場所も特定できる可能性が出てくるからだ。

実際には、相手がまだ複数なのか個人なのか特定できていないため、非常に賭けの部分が強くなるのだが、木佐貫自身が個人の可能性が高いとしているために、この方法を取つている。

だがそもそも、“なるべく目立ちながらの聞き込み”とは、ただ手当たり次第に聞き込みまくる以外にないのではないかと考え始めた竜蔵は……。

聞き込み開始から丁度20分後。

『“うちの女子にちょっとかい出しておいて、その態度なんなんだよ！』

!』

『やめて翔くん！！ やめよう！』

『菜子は下がつてくれ！ 僕がコイツと話つけるから……』

「あ……メンドくせ～」

「……はあ」

もう一つそ別の方法で目立とつかと、当初の目的から挫折しそうとしていた……。

場所はテニス部が練習していた、柵で囲われているテニスコートのすぐ横。

周りには、何事だと見に来たテニス部や、他の部活動の者達が野次馬として集まり始めていた。

そして、そんな人だかりが出来た場所の中心で、竜蔵と刀子の目の前には何やら、いかにも高校生といった、眼にかかりそうなぐらに伸びされた無造作な黒髪に、中肉中背の体格が特徴とも言えなが特徴的な男が、背に一人の小柄な女子生徒を庇いながら憤慨していた。

『おい聞いてんのか!? お前に言つてんだよお前に!...』

『翔くん!』

特徴のない男が、面倒臭そうに後頭部をポリポリと搔いている竜蔵に向けて指をさす……背に庇われている小柄な女子生徒は、そんな竜蔵の態度を横目で見つめ、憤慨する男の袖を必死に引っ張り続いている。

ホントにどうしてこうなつたと、この状況を第三者の立場として客観的に見ていた刀子は、本気で頭を抱えたくなる思いであつた。

「どうしてくれるのだ、こんな面倒ごとを……」

「どうするもなにも、ただ“写真を見せて”、身に覚えがないか聞いただけじゃん」

言いながら竜蔵は先程、学園でPC相手に鬱鬱している木佐貫から送られてきたばかりの、東野台の生徒の写真が映し出された盗撮画像を、右手に持っていたスマートフォンで困ったように確認していた。

『そう、原因はこれなのだ……。』

「普通、いきなり自分にとつて身に覚えのない写真を見せられれば、誰だって混乱をするだろうし、親しい間柄の者なら激昂するかもしれないと考えられないのか?」

咎めるような視線を困った様子の竜蔵に向けながら、刀子は両腕を胸の下で組む。

そのポーズは普段なら竜蔵ですから眼を釘付けにしてしまいそうな、妖艶な雰囲気漂うものであつたが、生憎と、今の竜蔵には、そんな余裕はない……釣れたといえば、周囲を囲い始めた東野台の生徒達と、目の前の騒いでいる男女二人だけだ。

だけだと言つても、この場に居る竜蔵以外の全てを釘付けにしていた訳だが。

「いや、だから最初に前置きしておいたじゃん。“ちょっとゴメンね、今ある問題について色々な人に聞き回つてるんだけど”って……何がダメだつたんだ？」

自らの左斜め前で、なぜ上手くいかなかつたと頭を悩ます竜蔵に、刀子は再び「はあ」という溜息を吐いた……腕を組みながら、男に対して呆れた表情をする彼女は、それだけでも絵になるものであつた。

「その後、何の説明もなしに写真を見せたのが、いけなかつたのではないか？」

「説明か……そうだな、確かにいきなり見せられれば、驚くどころか俺を疑うもんな。失敗した！」

『おい！ なに勝手に話しつけてんだよ！ ……こっちに眼だけでも向けるよ！ ……』

一人して、この舗装された道があるものの自然の木々に囲まれた、山の中に作られたテニスコートの横で起きている人だかりや騒ぎなど関係ないかの様に、反省会の様なものを開いている雰囲気に。先程から竜蔵に對して怒りを示している男が、更に激昂し始めた。

当然だ。

おそらくは親しい間柄の、後ろに庇つて居る小柄な女子生徒のために怒つて居るのに、全く持つて張本人一人に無視されているのだから。

故に、男はついに竜蔵の前へと怒氣の籠つた歩みで近づいてきてしまつた。

小柄な女子生徒は、必死に彼のことを引つ張るも、力が足り無い

のか、ズルズルと引き摺られてしまっている……。

そうして、彼が竜蔵の前に立てば、二人の体格差が如実に確認できるようになつていた。

「なんだよ？ 別にちよつかいを出したわけじゃねえんだから良いだろ？」

『うッ……！？』

これまで怒りに任せた勢いで、色々と竜蔵に対して言つていた男であつたが、目の前に立つた瞬間、相手と自分の体格差や戦力差に、思わず身動きしてしまう。

中肉中背の男は、竜蔵より大体3？ほど背が高いのだが……その胸板や、腕の太さ、首の太さ、果ては妙に強く威圧感を放つてくる竜蔵の眼力に、圧倒的に自身の実力が劣つている事を一瞬で悟つてしまつたのだ。

見れば、目の前の男の拳は、そこら辺の一般人とは違う、ゴツゴツとしながらも丸みを帯びたもので、非常に硬い、鈍器の様な印象を持たせていた。

だが、男は引けない……引くつもりはない。

なぜなら後ろに庇つている小柄な異性は、自分が小さな頃から恋焦がれてきた、近所の幼馴染だからだ。

“才能の区画”と呼ばれる第一区内にある学校に通うと彼女が言つてきた時は、必死に特技であつたテニスを練習し、中学の関東大会で優勝して、自身も第一区内の学校に入学できるように結果を残したぐらいなのだ……それはもう、彼女に対する思いは相当なものであろう。

そんな強い恋心を持つた男は、目の前の漢を見ながら考える。

もし、目の前の漢が、後ろで袖を引っ張つている彼女に危害を加えようとしていたのなら？

考えられる……なぜなら先程、彼女だつて身に覚えの無い写真を持つていたのだから。

重度のストーカーかもしない。

そうなった場合、後ろに庇っている何の抵抗手段もない彼女は、容易く目の前の漢に連れ去られ。その清く真っ白な柔肌を、強引に男の劣情を持つて汚されてしまうであろう。

おそらく、これは相手のすぐ後ろに控えている、美人で常識っぽい女性は止めやしない……なぜなら、どうみても目の前の男と同じような鋭い空気を身に纏っているからだ。

どう考へても、同じ種類の人間である。

これはやはり、小柄な幼馴染を守れるのは自らしか居ないのではないか？

その考えに一瞬のうちに至ってしまった男は、ついに目の前の漢

……竜蔵に対して、戦力差を顧みない行動に出てしまう。

男が取つた行動……それは、竜蔵の襟首を取る行為。

つまり胸倉を掴んだのだ……。

が、それはすぐに無意味となつてしまつ。

何故なら竜蔵が、胸倉を掴んできていた男の右手の手首を、思いつきり左手で握り返していったからだ。

いつの間に……そういつた疑問が浮かぶ前に、男の右手首に集中していた筋組織が圧迫され、血流が止まり、胸倉を掴んでいた右手が開かれてしまつた。

『あ、ああああ……ツ！？』

声にならない呻き声……下手をすれば、手首に集中している細かい骨が、全て碎かれてしまうのではないかと感じてしまう程の握力。胸倉から手を放してしまつた男は、あまりの痛みに膝を曲げ、苦痛に歪んだ表情のまま、地面に両膝をつけてしまう。

まるで右手の手首から先が無くなつたと錯覚を起こしそうな痛み

。

しかしそれは、これまで庇い続けていた守るべき人によつて、解放させられた。

『止めてください！……お願ひします、翔くんを虐めないで！！

私なら、何だつて言ひ事を聞きますから！！』

突然、痛みに膝を屈してしまった男の耳に入ってきた、聞き慣れた異性の悲痛な叫び。

顔を上げてみれば、守るべき人だった彼女が、田の前の屈強な他校の男に飛びつき、必死に自分を解放するよう懇願しているではないか……。

その様子に、他校の男は困った様な表情をしながら、こちらの右手首を握り潰そうとしていた左手を放してくれた。

途端に解放された男は、そのまま地面へと右手首を押さえながら頭を垂れてしまう。

『ああ！ 翔くん！』

自身の懇願が通った事もあつたが、何よりも大切な人が解放された事によって、涙目の笑顔を浮かべながら、地面に頭を垂れてしまつている男へと向き直る小柄な彼女。

そんな様子に、当の竜蔵はと言うと……。

（あ、あれ？……俺、別に悪い事してないよね？）

どう考へても、自身が悪者なこの状況に、訳が分からないと額に汗を浮かべていた。

しかし、いくら竜蔵が困り、焦つていたとしても事態は急速に進んでいく。

地面上に右手首を押さえながら跪いている男を、身を挺して守る様に、小柄な女子生徒が、こちらに涙目視線を向けた。

『あ、あの……翔くんを放してくれて、ありがとうございます』

「あ、ああ……（いや、別にすぐ放すつもりだつたし）」

小柄な女性に涙目で見上げられ、困惑する竜蔵。

だがやはり、困惑する本人を放つておいて、女子生徒は話を進めてしまう……。

『……では、お約束通り、私を好きにしてください。翔くんには、もう何もしないで下さい』

消え入りそうな声で、搾り出されたその決意に満ちた感情は、彼女の本気を示していた……が、そんな事をされても、竜蔵自身にも

とからその気は無い。

だが、もう一度言おう……事態は本人を放つておいて、更に進んでいいてしまう。

『な、菜子！？』

頭を垂れ、跪いていた男が顔を上げる。

『大丈夫だよ、翔くんは私が守るから……恐くないから』

「あ、いや、別に俺は……」

なにやら悲壮感漂う雰囲気になつてきた二人に、手を差し伸べようとして竜蔵が近づくと。

『菜子に近づくな！！』

突然、地面に跪いていた男が、目の前に立つていて彼女を押しのけ、反り上がる様にして竜蔵へと、その手首を痛めた右手の拳を突き出そうと

ガシャツ！！ 「あ は出来ず。

立ち上がりながら、こちらを殴ろうとしていたため、無防備にも晒されていた男の顎に向けて、竜蔵が“無意識”とも呼べる反応で、右の膝を合わせてしまったのだ。

ちなみに、男が突き出した右拳は、右膝を突き上げるため背筋を反つていた竜蔵には届かなかつた。

基本に忠実な技は、攻防一体の形を生み出す……。

まさに竜蔵は、ここで無駄な技術を發揮してしまつたのだ。

いくら無意識とはいえ、プロの右膝……それもカウンターで貰つてしまつた男は、再び地面へと倒れこむ。

一瞬蹴り上げられた事で、頭を鞭打ちの様に弾かせながらも、直立の姿勢で、額から弾力性のある特殊なゴムの素材を使った地面に倒れた男は、先程とは違つて、呻き声すら上げずに、意識も地面へと沈めていった。

『翔くん！？』

その見事なまでのカウンターもそうだが、他校の生徒が、自分達の学校の生徒を伸した光景に、周りがどよめき立つ……。

これは拙いと感じた、これまで静観を決め込んでいた刀子が、まづつたなと困惑していた竜蔵の肩を後ろから掴む。

それに振り返る竜蔵であつたが、刀子はすぐに口を開いた。

「急いでここから出るぞ、面倒ごとになる前に！」

「ちッ！ 分かったよ！」

瞬間、二人は驚きの切り替えの早さで、この他校の生徒達が囮を作つていていた場所から抜け出し、東野台大学付属高等学校から脱出したのであつた。

東野台のバス停へと到着した美夏が、まずは確認した事……。それは当然、自身の兄が現在、どの辺をうろついているのかと持つていた携帯機器でGPSを確認する事だつた。

位置的には山一つを学校の敷地としている、東野台大学付属高等学校にアイコンが表示されているのだが、どうやら走る様な速度で移動中らしい。

進行方向は、山から下りて、東野台大学付属高等学校の正門に向かっている様だ。

これはもしかしたら、そこで張つていた方が賢明かも知れない。そう考えた美夏は、すぐさま件の場所へと向かつたのだが……。

（まづつたわね……）

早速、問題にぶち当たつていた。

美夏の目の前には、東野台大学付属高等学校の平地に設置された正門があるのだが、それは既に正門の直ぐ横にある控え室にいる、警備員の手によつて閉じられた後だつたのだ。

おそらく、あの控え室には正門を自動的に閉じれる装置もあるのだろう。……でなければ、あんなに重そうなスライド式の門を、控え室にいるオッサン一人で閉じられるはずがない。

そんな事を、美夏は東野台大学付属高等学校の正門近くにある、不動産屋の建物の物陰で考えていた。

周囲には人通りがあまり無く、美夏の現在とつて、スパイ映画よろしくの壁に背を預けた格好も、誰の眼にも止められていない。もし人の通りが多い場であつたのなら、美夏という類稀な優美さを持つている女子高生は、こんな落ち着いたというより、変な行動は取つていらない。

（あの門が閉められてるって事は、お兄ちゃんは他の出口から出でくる事になる……そうなつたら、また追いかけるのに時間が掛かつちゃう）

美夏はそこで、周辺に何か無いかと視線を巡らせ始める……。

店主が寝ている不動産屋の物陰の向こう側には、まだ開店時間には早い焼肉屋の閉じられたシャッターが目に付き、隣にはパン屋だとかの飲食店が軒を連ねている。

そして視線を右上に移してみると、そこには東野台商店街と書かれた、入り口である大きな門が建つていた。

そう、ここは東野台大学付属高等学校の生徒達や、大学の学生たちが専門の研修やゼミの研究として開いている学生商店街なのだ。しかし現在は、まだ飲食店の開店が見られていない……おそらく、店を開いている生徒や学生たちが、まだ到着していないのであろう。故に今、この商店街で開店している店といえば、美夏が物陰として利用している、不動産屋ぐらいのものであった。

だが、そんな事など美夏の知つた事ではない。

美夏は再び、視線を東野台大学付属高等学校の正門へと、壁際から覗き見る様にして移した。

（だけど、どうしよう……GPS的に見れば、お兄ちゃんはおそらく、あの正門へと向かっている筈なんだけど。閉まっているのを見

たら、絶対に別の出入口を探すだろうし…… そうなると、山一つが敷地の、この学校の外周をグルグルと張りながら、お兄ちゃんの出現を待つしかなくなる。でも、それは無理ね。中から出てくるの人間を、ほとんど円に近い外周から張り続けるなんて、体力的にも難しいから）

閉じきられた東野台大学付属高等学校の正門を壁際から覗き見つても、体育会系の氣合理論を放棄する美夏……。

なら、どうすれば？

そう考えた美夏は、おもむろにGPSのアプリを起動している、自身のスマートフォンに目を向けた。

見れば、いまだ兄は正門の方へと山下りの最中だ。

あと大体、2分もしない内に正門の向こう側から現れるのでは無いかと思えるぐらいのGPSのアイコンの移動速度。（ならどうする？ もう時間は無いし、さっそく）お兄ちゃんは私の前に現れる…… あれ？

その時、美夏は根本的な事に気がついた。

（……だつたら、私が姿を見せれば良いじゃない！ そうすれば、お兄ちゃんは何で私が、こんな所にいるのか気になつて止まつてくれる筈！ 何を難しく考えてたんだろう……）

天啓を得たとばかりに、瞳を輝かせた後、再び閉じられた正門を壁際から覗き込む美夏。

なんで今まで、そんな簡単な事に気付けなかつたのかと、不思議に感じつつも、自身の兄が閉じられた正門の向こう側から来るのが待ち遠しい彼女は。今にも、隠れている不動産屋の物陰から飛び出しそうな雰囲気を醸し出していた。

だが、まだだ…… 右手に持つてているスマートフォンのGPSアプリによれば、あと一分くらいで兄は山を下つてくる筈。

ここは落ち着いて、いかにも急いで追つてきたのではなく、たまたま鉢合せた感じを演出しなければならない。

故に美夏は、すぐさま地面に置いていた鞄から手鏡を取り出すると、

髪やらなんやらの乱れが無いかチェックし始めた。

当然、普段から清潔かつ完璧な外見を心がけている彼女に、乱れなど存在せず、すぐさま取り出された手鏡は鞄へと仕舞われてしまう。

あと30秒……そもそも、この物陰から出て、門の向こう側から現れる兄の迎える準備をする頃合だ。

タイミングを逃さないと、普段から注意している彼女は、地面に置いていた鞄を左肩に掛けると、何食わぬ顔で、これまで隠れていた不動産屋の物陰から出てきた。

それはもう、自然かつ優雅な足取りで、たまたま歩いていただけと言い訳が出来るほどの何喰わなさと堂々とした空気が漂っていた。

あと10秒……。

あと5秒……。

そして、その時は来た

速い……というレベルでは無いのかもしれない。

東野台大学付属高等学校の敷地内である、アスファルトで舗装された山道を下る刀子は、前を先導して走る男の背中を眺めながら、そんな事を考えていた。

力強い肉体の躍動、歩幅もさる事ながら、脚の回転数が並みではないのも、後ろから確認できる。

坂道の下りで、これ程までにバランスよく走れるのもそうだが、やはりそんな事よりも、この50mを5秒台で走りそうな勢いを、いつさい落すことなく先程から走り続けている事に驚きを受けるべきである。

中距離走が得意……そんな言葉だけでは納得が出来ない、目の前の男の走りは、それだけすぐ後ろを走っている刀子を驚かせるものであった。

だが、これに汗一つ、息一つ乱さず付いて来ている刀子自身も、大概なものなのだ……。

「もうすぐ正門だろ！？」

「ああ、おそらく既に正門は閉じられているだろ？が、今から他の出口を探すのは得策ではない。一気に飛び越えるぞ……」

先導をする竜蔵は、坂道の緩やかなカーブを、内側から切り込みながら下っていく。

また、それに後ろから刀子が、長く艶やかな黒髪を揺らしながら、軽やかに付いて行く。

カーブが来ればインコースを攻め、直線なら一気に走りきる……先程から、周りを山の自然と人工の建造物で囲まれた東野台の敷地内を、こうやって二人は駆け抜けている。

荷物である鞄や、刀子に至っては袋に入れた木刀の重みなど、全く意に介していない走り。

「正門が閉じられてるって、どうして分かるんだ！？」

竜蔵は後ろを振り返らず、ただ大きな声で刀子に問いかける。

「問題が起これば、それを起こした張本人を、みすみす逃がすと思うか？」

その問いかけに、全く持つて涼しい顔で答える刀子。

一般人なら、殆ど全力疾走と変わらないペースであるのに、彼女の声音に息遣いに、一切の乱れは見られない。

「あ、そうだよ！俺のせいだよ！仕方ないだろ、ほとんど反射みたいなものなんだから……」

静かに、そして冷静に答えを返してきた刀子に、竜蔵は吹っ切れた様子で意識を正面へと向きなおした。

既に、目の前には正門までの直線道となる、平地の道が確認できる。

というより、確認した瞬間に、竜蔵はその平地へと足を踏み入れ、そして下りと変わらない速度で走り続けた……が。

「……うん？」

傾斜の無い平地のアスファルトへと、走るステージが変わった竜蔵の視線の先には、確かに今さつき刀子に言われた、閉じられた正門があつた。

しかし、竜蔵が思わず眉間に皺を寄せてしまつほど、不思議な光景と感じてしまったものは、そこではない……。

それは正門の向こう側……東野台大学付属高等学校の敷地外。そこに、一人の見知った人物が、春の風に自慢の黒髪を揺らしながら、何食わぬ顔で立っていた。

「おい！ あれはどういう事だ！？」

走り続ける竜蔵と同様、平地へと入ってきた刀子が、声を荒げる。

「知らん！ とにかく逃げるんだる、今は！…」

だが竜蔵は、刀子の質問に答える事もせず、少々スライド式のものにしては背の高い正門へと、更に走る速度を上げる。

大体、竜蔵自体、なぜ正門の向こう側に、彼女がいるのか皆目見当もつかない。

故に、竜蔵は刀子の質問には答えたくとも答えられない。

すると、正門の向こう側にいる人物も、こちらに気付いたのか……どこか、とても嬉しそうな表情で、竜蔵に向けて手を振り始めた。

「あれ？ お兄ちゃん！… なんで、こんな所にいるの〜！」

とても嬉しそうな表情で、竜蔵に手を振るのは、妹の美夏……。まさに件の人物として、今回の事件では重要人物なのではあるが……。

なぜ、彼女が“ここにいるのか”？

そんな妹の問には、こちらが聞きたいと返したいところだが、

今の竜蔵と刀子には、そんな余裕は無い。

走る速度を上げた事によつて、重厚かつ堅牢な東野台の正門が一気に近くなる。

すると、ここで正門の横に建てられていた控え室で待機していた警備員が気付いたのか、イソイソと焦つた様子で、四畳程度しかな

い建物から出てきた。

『こらーーー！　そこの二人、止まりなさい！！』

なにやら伸縮可能な警棒を手に持ちながら、警備員の控え室から出てきた、制服を身に纏つた中年の男性であつたが、走り続ける一人は、その男性の言葉に聞く耳を持つとはしない。むしろ、これから起こす行動のために、走るギアを更に一段階上げていた。

そして、まずは竜蔵が、正門の前に立ちはだかるとする警備員よりも先に

「ふつーーー！」　ガンーーー！

重厚な正門へと飛び上がり、一度門の頂上付近に飛びついた後、背中と腕の筋肉を利用して身を門の向こう側へと一瞬で乗り出し、訳も無く東野台の敷地内から飛び出していく。

その流れるような壁越え、もとい門越えは、どこか猫の様な印象を持たせていたが……着地時の衝撃を消すために、両足で地に付いた後、膝のクツショーンを上手く使う姿は、やはり技術を持った人間の動きであった。

門を難無く越えた竜蔵は、すぐさま後ろへと振り返る。

「刀子！　早くしろーーー！」

「分かつていいーーー！」

竜蔵の急かす声に、刀子はすぐに答えるが、既に警備員の男性が、正門の前に陣取つてしまっていた。

『一人は逃がしたが、君は残つてもらつよーーー！』

警棒を右手に持ちながら、通せんぼの格好をする警備員の男性……。

しかし、それでも尚、刀子に焦りの表情も、驚きの表情も浮かぶ気配が無い……むしろ、走る速度を緩めずに突っ込んできている。

そして、警備員と刀子の間合いが、あと二歩半程度まで詰まつた

とや。

刀子が“飛んだ”

『は？』

あまりの行動に、呆けた声を出してしまった警備員の男性であつたが、刀子の跳躍は、たとえ学校指定の鞄と、愛用の木刀を持ついたとしても、重みを感じさせない、優美なもので……。

長くも艶やかな黒髪を風に揺らし、制服のスカートも気にせず、空へと飛び上がった姿に、警備員の男性は見惚れ『…………』

グシャ！！

見惚れ、上を見上げてしまつた事によつて、見てはいけないものを見てしまつた警備員の男性は、丁度真上に差し掛かつた刀子の“踏み台”にされ、意識を混沌へと沈めていった…………しかし、地に倒れ崩れる彼の表情は、年甲斐にも無く頬を染めた、幸せそつなものであつた。

警備員の男性の顔面を、履いているローファーで踏み台にした刀子は、荒々しかつた竜蔵の正門越えとは違つて、全く門へと触れる音すら發せず、軽やかに、そして優雅に門の向こう側へと着地をした。

着地する時でさえ、荷物が弾む音以外しないのだから、かなりの身のこなしだと、刀子の門越えの一部始終を眺めていた竜蔵は感じた。

着地の際の衝撃を消すために、膝を曲げながら身を屈めていた刀子が、乱れた髪や荷物の位置を直しながら、ゆっくりと立ち上がつた……。

「すげえな…………けど、酷くないか？」

「つるさい……。さつさと次に行くのであるつ……。」

随分と余裕そつに門を越えた刀子であつたが、やはり花も恥らう年頃の女。

不可抗力とは言え、下着を見られてしまった事が恥ずかしかったのか、頬を朱色に染めていた。

すると、そんな門越えを果たしたばかりの一人に、何やら信じられないといった表情の美夏が歩み寄ってきた。

「お、お兄ちゃん？ その女は誰……？」

わなわなど、刀子にさす指を揺らしながら、震える声音で兄に尋ねる美夏……。

彼女自身、最初は知らない女と一緒に歩いているという兄の目撃情報を聞きつけて、これまで追つてきていたのだが……まず、それが事実であった事。

更には先程、その知らない女の“下の名前と思われる呼び名を兄が発していた事”に、超絶ブラコン娘である彼女の認識許容量は限界を迎えるような状態だった。

すると、美夏の震えている問いかけに、これまで刀子に視線を向けていた竜蔵が振り返った。

「あ……それはな……なんというか~」

美夏という、今回的重要人物であり自身の妹でもある存在に、竜蔵はどうやって、後ろに未だ頬を染めながら立つている刀子を紹介しようか、頭の中で思考を張り巡らせ始めた。

普通に説明をするか？

いや、それだと東野台からの警備員やら教職員やらの追っ手が来てしまう……そんな時間は無い。

なら美夏も連れて、ここから逃げるか？

いや、それも今行なっている事を考えると、拙い気がする。

だったら、いつそのこと執行部の存在を伝えて、どうしてここにいるか分からぬ美夏に帰るよつ、強く言つべきか？

ダメだ……これに至つては、規約事項とやらに反してしまい、俺が会長の“物”になつてしまつ。

どう頭の中で思考を繰り返しても、もともと頭を使うよりも体を動かす事の方が得意な竜蔵には、これといった名案が浮かんでこな

い。

しかし、ここで竜蔵でもない、美夏でもない人物が、突然動きを見せた。

「何をしている…立ち止まっている時間は無いのだぞ…」

「は？」

「え？」

この気まずいといつより、どうしていいのやら分からぬ状況を打破したのは、先程まで下着を見られてしまった事によつて頬を染めていた、冴島刀子であった。

彼女は、今回の事件の重要な人物である美夏を放つておき、先に問題を起こしてしまつた東野台大学付属高等学校から離れる事を選択したのだ。

故に、彼女は既に、東野台商店街の直線道路を、軽やかかつ、しなやかな走りで駆け抜けている。

「あ、待てよ…！」

刀子の声に少し遅れて、竜蔵も再び脚を動かし、回転数の速い力強い走りを見せ始めた。

「え？ あ、ちょっと…！ お兄ちゃん…？」

美夏は一人の…といつより、自身の最愛の兄が、こちらを放つておいて、他の女へと向かっていく姿が信じられなかつたのか？

反応が若干遅れ、一人の逃走を見送る形となつてしまつた。

すると、前を走り出したばかりの兄が、美夏へと動きは止めずに振り返り…。

「事情は後で説明するから…！ とりあえず、お前は早く家に帰れ！！ 分かったな…？」

それだけ言って、前を先導する刀子と共に、何がなんだか分からぬといつた表情の美夏から、遠ざかつていつてしまつた…。

暫く、状況の整理のために冷静になろうとした美夏であったが。（なに？ 今の…てか、あの女？）

頭を整理しようとして、落ち着かせようとすればする程。

少し見ただけで、美夏でも綺麗な女性だと認めてしまう人物に対して、黒い感情が沸々と煮えたぎり始めてしまう。……。

（お兄ちゃんに命令？ てか、明らかに下の名前で呼ばれてたよね？ なに？ なになに何なの？）

浮かんでくるのは、嫉妬心か、それとも殺意か……？

（生意気つていうか、許せないっていうか……お兄ちゃんに色目を使う売女（ビッグ）は、もういなくなつたと思つてたけど。やっぱり、湧き出てくるんだね……）

前は“鬼姫”とかいう女だつたが、あれはもう違つた学区の学校に通つてるから、心配無いと思っていた……。

（これはもう、私以外の女は危険分子だと思つていいのかな？ ううん……今は、そんな、その他大勢じやなくて、目先の糞女をどうすべきかだよね）

既に、美夏の綺麗だつた瞳には、他者が見れば引きずり込まれてしまいそうな深淵しか写つていない。

何を考えているのか分からない……いや、何をしでかすか分からないといった黒い雰囲気を醸し出す美夏であつたが。そんな姿すら、彼女の蠱惑的な容姿により、他者が見れば見惚れてしまいそうな、神秘的な魅力を放つていた。

すると、すでに視界から消えてしまつていた兄達を追うために、美夏が制服のポケットに仕舞つていたスマートフォンを右手で取り出した。

そして、例に漏れずGPSのアプリを起動させ、兄がどこに逃げたのかを探り始めた。

地図上に表示されたアイコンが、東野台の商店街を既に抜けてしまっている事を告げていた。

なら、もうゆっくりと立ち止まつていい暇は無い……。

そう考えた美夏は、スマートフォンのGPSアプリを起動させたまま、ゆっくりと、静かに歩を進め始めた。

最初は歩くような歩幅と速さであったが、次第にそれは早くなつ

ていき、アスファルトの路面を踏むテンポが上がっていく。  
そして遂には、美夏の柔軟な肢体を駆使した、流れるような走り  
が、先に行く竜蔵たちを追走し始めていた……。

## 執行部のお仕事（5） 始める事件（記録セミナー）

今回も、急いでいるためチラックなしだす。  
すみません。

## 執行部のお仕事（5） 始まる事件

東野台大学付属高等学校から逃走を図り、一応無事に面倒事から逃れた二人は現在……。

「さて、次はどこだ？」

「本来なら、東野台の近くの学校に行く筈だったが……君が仕出かした事によつて、それも難しくなつてしまつてな？」

「……いや、マジでゴメン」

第一区内で、東野台の地区に住む学生達が良く利用をする繁華街で、かなり遅めの昼食を取つている最中であった。

一人がいる繁華街は、以前、竜蔵と美夏が入学式後に訪れた、二橋駅前の隣町に当たる場所で、第一区内にある学生が良く集まる街の一つなのだ。

良く集まる街といつても、学園都市の第一区内は、そこまで広い地域ではないため、こういった街は二橋駅前と、いじ“東野台駅前”にしか無い……。

しかし学区内にある学校数は、二橋学園や東野台大学付属高等学校を入れて12校ある。

そのため、こういった一つしかない繁華街には、連日学生達が押し寄せてくるのだ。

証拠に、周りを見渡しても制服・制服・制服だらけの、ある一定の趣味を持つ者達にとつては天国の様な光景が広がつていた……その代わり、カップルも多いため、現実を直視する事にもなるが。

また、先程から繁華街の説明ばかりしているが、一人が現在昼食を取つている場所は、学園都市外にもある、何の変哲もないハンバーガーショップの一階席だ。

二人は、その一階席の外を眺められる窓側で、一人用の席に向か

い合つて座つている。

店内の内装は、ファーストフード店らしく、大人でも寛げそうな、黒や赤などの壁紙に、そこまで明るくはない照明を使った、シックな雰囲気が漂つてはいるが……中に屯しているのは、その殆どが学生達のために、落ち着いた雰囲気は意味を成さず、少々騒がしい話し声が、其処彼処から聞こえてきていた。

「しつかし聞き込みが、こんなに難しいものだなんてな……」

対面に姿勢良く座る刀子から、嫌味の込められた視線を向けられた竜蔵は、ちょっとした話題転換を行なおうと、疲れた声音で先程までの聞き込みによる感想を述べた。

「ふん……まあ私も、そこまでこういった捜査活動はした事が無いからな。気持ちは分かるよ」

明らかな話題転換に、刀子は仕方ないと溜息を付きながら、竜蔵の言葉に同意を示した。

その刀子の様子に、竜蔵は意外そうな顔をしつつも、自身の前に置かれたトレイに乗つてはいる、包装紙で包まれたテリヤキバーガーを手に取つた。

「何を驚いた顔をしているのだ？」

竜蔵の表情に、刀子は不思議そうな聲音で尋ねる。

「いや、てっきり、お前つて、こういった事をするのが長いのかなつて、俺は思つてたから」

言いながら、竜蔵はテリヤキバーガーを包んでいた包装紙を手馴れた様子で剥がしていく。

それを眺めつつ、刀子も自身の前に置かれていたファイレオファイフシユバーガーを手に取り、竜蔵と同じように包装紙を剥がしていく。た。

「別に……確かに私は、こういった事に關しては長いが。聞き込みの様な、情報というより、知略を使つた行動は、あまり取つた事がないのだ」

「……つていうと？」

包装紙を剥がした竜蔵は、そのまま一口、血塙の口に片手で持つているテリヤキバー ガーを運び、食す。

だが、対面に座る刀子は、包装紙を剥がすのに慣れていないのか？少々手間取つた末、よつやくシッククリ来る剥がし方となり、竜蔵と同じようにフィレオフィッシュバーガーを、その小さな口で一口食した。

「むう、少しショッぱいな……」

「まあ、こういったもんは、塩分がかなり高いからな、仕方ねえよ……つていうより、それが良いんだがな？」

「……連れてきてもらつて悪いが、私には合ひそうも無いな。一応、頼んだものは全部食べるが」

「味の濃い薄いは個人差だから、別に気にするなよ。それより、聞き込みはあまりした事が無いのか？」

ファーストフード特有の味が、ビーフやら刀子には合わなかつたのか？

彼女は、その皺一つ無かつた白い眉間に歪める。

しかし、そんな事よりも、竜蔵がテリヤキバー ガー片手に話を進めた。

「そうだな、どちらかと言えば、私も荒事専門だったから、こういった行動は慣れていないのだ」

「荒事ね……それって、俺が今まで手伝いでやつてきたのと、どう違つうんだ？」

インテリア調の、少し小洒落た椅子に背を預けながら、大股開きで尋ねる竜蔵。

手伝い……それはもちろん、この事件に関する前まで、竜蔵が立つていた執行部でのポジションの事だ。

なぜ、その様なことをしていたのかは、今は省くが。

大体、これまで竜蔵が執行部の手伝いとして行つてきた事は、本命の仕事の邪魔となる小事……つまり、雑魚を事前に散らしておく仕事が主たるものだつたのだ。

それが、本命の仕事となると、どう変わるのか？

この時、竜蔵はただの興味本位で尋ねたのだが……。

「……正直、あまり話したくはないな」

気軽にしている竜蔵の様子とは対照的に、刀子の表情が突然、神妙なものへと変わった。

それを感じ取った竜蔵は、片手に持っていたテリヤキバーガーではなく、今度はトレイに乗っていた飲み物であるコーラを反対の手で取り、容器に刺さっているストローで一口飲んだ。

「そうか、なら別に話さなくて良いわ……いずれ、俺も知る事になるだろうし」

口に含んだコーラを飲んだ後、竜蔵から発せられた、特に気にした様子もない言葉に、刀子が驚いたように眼を見開く。

「知りたくないのか？」

当然の疑問……そう思つて、刀子は竜蔵に投げかけた筈だつたが。「知りたくない、と言えば嘘になるけど。逆に、そんなにしてまで知りたいかと聞かれれば、別に知りたくも無いと答える……そんなもんだろう？ 興味本位の事なんて」

「……確かに、そうではあるな」

“ふつ”と、軽く吹き出すよつた含み笑いをしたあと、刀子はどこか、不思議と納得した感覚で、田の前の男の言葉を受け入れた。そんな何をしても絵になる、優美な容姿をしている彼女を田の前にしながらも、竜蔵はトレイに乗っていたポテトを数本摘み、それを一気に口に入れる。

口に含んだポテトを、嚙んでいる音を鳴らさずに、行儀良く飲み込んだ後、竜蔵は話を続けた。

「それに、言いたくない事つてのは、人それぞれ必ずあるもんだ……だから、俺も深入りはしない様にしてる。面倒」ととこりか、長つたらしい相談とかされても、困るしな」

どこか悟つたような、目の前の男の物言いに、刀子は思わず気になり、声を返してしまった。

「君にも、そういうた言いたくない事があるのか？」

その問いに、竜蔵はこれといって、特別な反応は見せず。

「無いように見えるか？」

「まあ、少なくとも何かに思い悩んでいる様には見えないな

「そうか…… そう見えるか」

と、自然に目の前の刀子とやり取りをして、すぐ横の窓へと視線を移した。

外には、こちらの店と、向こう側のアパレルショップを分断するかのように、広い片側三車線の道路が、異様な存在感を放っていた……が、学園都市には移動手段として車は主流ではないので、そこには普通に歩行者が歩いていた。

だがまあ、たまに自転車や大学生の車、学校・学園専用のバスが走つてくるため、別に歩行者天国といつ程のものでは無いのだが……。

しかし、そんな学生による歩行者の多い人込みを、一階の窓から眺めていた竜蔵の視線が、ある一点で固定されてしまう。

そこには、一人の女性が立っていた…… それも、周囲から男女問わず視線を独占するほどの、可憐な容姿をした人物。

だが、竜蔵はその女性を知っていた…… というより。

（美夏ッ！？）

身内で、しかも妹の美夏であった。

人込みの中、ただ立っているだけでも周りとは一線を画した優美さを誇っている妹が、こちらに無表情の視線を向けたまま、何やら右手に持っているスマートフォンを弄くつている。

すると、竜蔵の制服のズボンに入っていたスマートフォンが、マナーモードでの振動を伝えてきた。

着信…… 田覚ましではなく、おそらくメールの知らせ。

直感で竜蔵は判断すると、そのまま視線を窓の向こう側で、未だこちらを見ている美夏に固定したまま、どこか緊張した面持ちで、

ポケットから震えているスマホを取り出した。

やはり着信として着ていたのはメールで、竜蔵はそれを手馴れた手つきで操作しながら確認する。

その時、窓の向こう側で、ずっとこちらを見ていた妹が、背筋の凍るような微笑を浮かべたのを、竜蔵は一瞬だけ見たような気がした。

そして、届いたメールを開き、竜蔵が読んだとき。

彼の頬に、一筋の汗が流れるのを、目の前で見ていた刀子が不思議そうに眺めていた。

開いたメールに書かれていた内容……それは、

『ソコニイルオンナハダレ』

全てカタカナの文面……。

この文面を妹が使う時……竜蔵は、その意味をよく理解している。

といつより、骨身に染みている。

（怒ってる……やばい、完全にキレてるよ、美夏の奴！）

そう、この全部カタカナで表示された文面を、妹が使うと……それは、彼女が本気で怒っている事の表しなのだ。

竜蔵は、このメールを読んだとき、“バツ！”と勢い良く、視線を窓の外の美夏へと戻した。

すると、そこには既に……。

“妹の姿は無かつた”

自身の兄を、全文カタカナという文面で恐怖のどん底に陥れた美夏は。まるでファーストフード店の一階にいる兄から身を隠すように、近くにあつたアパレルショップに身を潜めていた。

それも、『よく自然に目当ての服を探しているかの様に……。

しかし、内心は直ぐにでも兄達のいる、ファーストフード店に乗り込み、あの見知らぬ女を、いま手に持つている赤いワンピースの様にしてやりたいと、沸々と黒い感情を煮えたぎらせている。

だが、それをやつてしまふと、また逃げられてしまう可能性があるため、迂闊な行動は取れなかつた。

何故なら、実は先程まで美夏は、竜蔵たちに走り負け、追跡を一時諦めていたからだ。

当初は、あの得体の知れない女が兄の足を引っ張り、簡単に追いつけると踏んでいたのだが。どうやら東野台で見せた尋常じやない跳躍の様に、あの女も相当な運動能力を持つていたらしく、美夏では追いつけなかつたのだ。

それに歯噛みをしながらも、渋々G.P.Sで再び兄の追跡に戻つた美夏であつたが、さつきの光景を発見して、遂に我慢の限界を超えそうになつてしまつたのだ。

（許せない、あの女……お兄ちゃんと昼食を外で取れるなんて、どれだけ私が苦労するイベントだと思つてるのよ？ ただでさえ、一昨日の入学祝が久しぶりのイベントだつたのに、あの女め）

外見上は、学校帰りに、自分に似合つ服を楽しそうに探す可憐な美少女……。

しかし内面は、あのポッヒ出の女を、どう始末しようかと策略を練るヒットワーマン（殺し屋）といつても過言ではない。

すると、そんな隠された内面を見破れず、楽しそうな外見に騙された、一人の店員が美夏に営業スマイルで近づいてきた。

『ようしければ、試着なさいますか？』

『ういつた店に入つていい限り仕方が無いが、鬱陶しいと思いつつも対応せざる負えない美夏は。店員に負けないぐらー……』という

より、圧勝してしまつほど、小悪魔スマイルを内側を隠すために顔に貼り付けた。

「いえ、ちょっと色が気になつたってだけですので」  
言いながら、持つていた赤いワンピースを元の場所へと掛ける美夏。

制服を着た女子高生にしては、垢抜けた仕草と、可憐さの中に、どこか大人びた雰囲気を持つ彼女に、アパレルショップの店員である女性は、思わず頬を染めて目の前に立つてゐる同性を眺めてしまう。

流れるように、良く手入れの行き届いたストレートの黒髪……細く姿勢の良い腰つきに、スッと地面に真つ直ぐ伸ばされてゐる長い美脚。また、それだけではなく、制服越しからでも分かるぐらいに形の良い胸が包容力を演出し、細く整つた輪郭に、女性らしい可愛さと美しさを兼ね備えた顔立ちが、更に彼女の魅力を引き立てていた。

完璧……同性である身でありながら、そう呟かざる負えない容姿。そんな同性を間近で見た店員の女性は、（もしかして、モデルとかやつてる娘なのかな？）と、勝手な当たりを付けていた。

しかし当の本人は、ショッピングの店員など一瞥した後に、すぐに視線を外してしまった。

興味が無いのだ……ただ、それだけの理由だ。

だが店員は、その仕草も絵になるなと思いつつも、おそらくは“話かけるな”のサインだと相手の心理を察し、その場から静かに離れていった。

意外に、空氣の読める店員だった様だ。

店員が去つた後、美夏は再び、ショッピングの入り口付近の位置で、向かい側のファーストフード店一階の様子を探り始める。

まだ、二人は昼食を取つてゐる最中のようだ。

出来る事なら、今から乗り込んで妨害してやりたいところだが、先に言つた通り、逃げられてしまつては元も子もいため、美夏は

一人が店内から出ようとする瞬間を待つ。

計画としてはこうだ……。

一人が一階席から出る 自身も動く おそらく一人は「ゴミを捨てるために、少々時間をかけるだろう（どう見ても見知らぬ女は、ああいつた店には慣れていない様子だつたから）

その間に、向こう側の歩道まで走り、店の自動ドアの前で待ち伏せをする 一人がゴミ捨てを終え、店から出ようとした瞬間。（お兄ちゃんの腕に絡まってしまえば、もう逃げられない……） そうなれば後は女の事を問いただし、いかに私がお兄ちゃんを愛し、そして愛されているのか突きつけてやれば、あれも大人しくなるでしょう

（パーフェクト）  
完璧……正に完璧な計画だ。

美夏があまりにも非の打ち所が無い計画だと、胸中で酔狂しそうになつてている。

「ツ！？」

突然、後ろから気味の悪い視線を感じたような気がした……故に、美夏が思考の世界から弾かれるようにして、後ろを振り返った。しかし、そこには先程、話しかけてきたショッピングの店員や、数人の客しかいない。

気のせいか……と、頭を傾げそうになつた美夏であつたが。

フウウン 「？」

なにやら聞きなれない、小さな掃除機の起動音の様な音が、美夏の耳に入ってきた……が、それは本当に一瞬の出来事で、すぐに聞こえなくなつてしまつ。

モスキート音？

そんな事が真つ先に浮かんだが、どうにも音の種類が似た感じではなかつた。

虫が飛んでいるというより、どこか機械的な音に感じたからだ。

何だったのだろうかと、疑問に感じた美夏であつたが、深く考へても分からないと、すぐに割り切つたため。その疑問は、すぐに頭の隅へと追いやつてしまつた……もしかしたら、ただの気のせいかもしれないと言い聞かせながら。

だが、ここで

（また、変な感じがする……）

先程感じた、気味の悪い視線と同じような、嫌な感覚が美夏を覆い始めた。

どこからだと、周りから不振がられない様に、視線を店中に彷徨わせる美夏であつたが……。

（どこ？ この感じは、どこから来てるの？）

やはり、嫌な感覚を覚える視線の主は見つからない。

なぜ美夏がここまで、“視線”に対してもうつたのだが……度重なる被害で、段から、男性からの視線というものに慣れているという事もあるが……それよりも、実は美夏は、以前にストーカーの被害を一度受けた事があるのだ。

まあ、どれも同級生の男子が行つていた事で、当然、その一件とも兄に助けを頼み、解決してもらつたのだが……度重なる被害で、自己防衛機能が発達したのか？

それによつて美夏は、こういつた背筋に嫌な感覚が走る視線には、非常に敏感になつていたのだ。

故に、感覚の察知に間違はない、美夏は自信を持つて周囲に気を配れるのだが、やはり見つからない。

視線の相手は、どうやら非常に身を隠すのが上手い相手の様であった。

こういつた場合、美夏は素直に近くにいる兄に助けを求めるのだが。今回は、そういう選択をするのは些か早計かもしれない。

なぜなら、もし助けを呼んだ場合、一緒にあの女も付いてきてしまう可能性があるからだ。

最悪の場合、あの女に恩というものを与えてしまうかもしれない

それは非常に避けなければならない事だ。

理由は簡単……例えば恩を知らぬ存ぜぬで仇で返したとしよう。すると、もしあの女が兄と本当に親しい仲だつた場合。美夏自身の悪評が、直接兄へと流れてしまう可能性が有るからだ。

逆に兄と、あの女が親しくなかつた場合、そういう事は気にしないで恩を仇で返す気満々なのだが……その可能性は、一人だけでファーストフード店に入つてゐるのを考えるに、低いと見ていいだらう。

だとすれば、この視線をどうする？

兄達のいる方向とは、反対側の、店の中央付近に意識を配る美夏は。上手く先程と同様に服を選ぶ振りをしながら、なんとか視線の主を探し出そうと、思考を張り巡らせる。

白を基調とした、清潔感の有る内装に、外からも中が見えるよう壁の殆どがガラス張りになつてゐる工夫が、とても現代的な印象を与えている店内には。現在、数名の店員と、8人の客が確認できる……その内、こういつた氣味の悪い視線を出せる男は、一人だけ。一人はレディース限定の品揃えに似つかわしくない風貌の、カジュアルな服装の男だが、どうやらコレは違うようだ……なぜなら、彼女連れで、先程から気持ち悪い程にイチャイチャとバカツブルぶりを發揮しているからだ。それでもまあ、自身の彼女よりも一線どころか、かなりの差を画してゐる美夏には、何度も眼を奪われてゐる様であつたが。

なら、残るは一人……。

この店の店員である証の名札を着けた、背の低い男のみである。

背の低い男の店員は、先程から会計のレジで客を待つてゐるだけなのだが、どうにもチラチラと、美夏の方へと視線を向けてきている……。

(あ、目が合つた……)

店内に視線を巡らせてゐた美夏と、店員の男の視線が合つた。

しかし、それはすぐに外されてしまつ……ショップの店員なら、服を選んでいる客の女性と目が合つたのなら、会釈なりなんなりのアクションを取るはずだ。

だが、それは一切無く、店員は何事も無かつたかのように視線を外したのだ。

怪しい……美夏の何だかよく判らないセンサーが、アイツは黒だと訴えかけてくる。

これは、一度店内を出たほうが良いのだろうか？

そう思い、美夏は手に持つていた服を、もとのラックに戻し、店の中心から踵を返し、店から出ようと出入り口へと歩き出した。

すると……（動いた！）

これまで、レジのカウンターから一切動こうとしなかつた男の店員が、何やら従業員用の扉へと歩き出したのを、美夏は出入り口付近で一瞬だけ振り返つて確認した。

休憩か、それとも別の何か……？

店員の男が、レジカウンターの向こう側にある従業員用の扉へと、どのような用事で向かつていったのかは分からぬが。先程までの気味の悪い視線や、目が合つたときの仕草などを考へるに、多少の警戒はしておいた方が良いだろうと、美夏は店内から出ながら考えていた……。

妹から来た恐怖のメールについては、いま気にして仕方が無い事……。

竜蔵にとつては、実際それでは済まないのだが。メールの内容どころか、彼の妹が窓の外にいた事すら気付いていない刀子にとつては、別に気にする必要も無い事に変わりは無い。

また、それよりも気になる事が、現在進行形で起きているために、竜蔵自身、妹から来たメールに気を取られている暇が無いのだ……。

「……ふん」

「気付いたか?」

「まあね、露骨過ぎるだろ」

竜蔵はそう言いながら、インテリア調の椅子の背もたれに、体重を面倒臭そうに預けた。

対面に座る刀子の表情は、先程までの和やかなものではなく、いつでも荒事を開始できるような、鋭くも凜々しいものへと変わっていた。

「さつきからか……客層がガラリと変わりやがった」

「釣れたと見ていいのかな?」

「多分、それで合つてるとと思つ……けど、これは思ったよりも面倒になりそうだな」

二人は傍から見れば不自然な点など全く無い普段どおりのペースで、昼食であるトレイに乗つかった品を食していくが。その醸し出す雰囲気は、これまでのものとは違つて、気の緩みなど全く無い、隙の無いものであった。

竜蔵は大口で残りを片付けていき、刀子は小さな口で少しづつ、上品に両手で持つたフィレオフィッシュを食べていく。

そして、竜蔵は自身が頼んだ全ての品を完食し、刀子も初めて食したファーストフードの味に戸惑いながらも、何とかそれらを完食し、ナフキンで口に付いた油を拭つた後、苦味の薄いお茶で口を直していた。

周りからは、そんな二人を睨みつけるかのように、数十人の男女が異様な雰囲気で、それぞれの席に座つてゐる……どう考えても、普通の客の仕草、空氣ではない。

竜蔵と刀子が座るのは、二階へと上がる階段から最も離れた、窓際の席だ。

故に、この異様な客層へと変化してしまつた二階の空間を、確り

と見渡せる位置にいる。

また、それは逆も然りで、ガラリと変わってしまった客層の視線は、窓際の一人へと集中していた。

「さつと見て、男8人に女4人……」

「君は、どちらを選ぶ？」

だが、そんな視線を集中させられていたとしても、一人に焦りも恐怖も無い。

むしろ、睨んでくる連中全てを踏みにするかのように、一人で不敵な笑みを浮かべている。

好戦的な……それでいて、どこか落ち着いた雰囲気を持つ二人の居住まいは、座っている姿勢は対照的ではあるものの、やはり似ているものがあった。

竜蔵はポキポキと、片手で器用に指の関節を鳴らして、拳という名の箱ボックスを整えていく……刀子は、後ろの壁に立て掛けていた、木刀の入った竹刀袋を静かに手に取り、ゆっくりと座っている膝の上に置いた。

「男だ」

「なら、私は女人が相手というわけか……」

短く役割分担を終えた後、竜蔵と刀子は各自立ち上ると同時に、椅子の下に置かれていた学校指定の鞄を肩に掛け、片手で包装紙などのゴミが乗った、机の上のトレイを手に取ると。何事も無かつたかの様に、それら昼食で出たゴミを、近くのゴミ箱で分別しながら捨て、この二階の空間から出ようとした……。

すると、そんな二人に合わせるかのように、二階の席で座つていた者達が一斉に立ち上がる。

二人は、その様子を振り返ることなく音だけで確認し、そのまま二階から一階へと下り、店の自動扉を出て、ファーストフード店を後にした。

そして同じく、先程まで二階に座っていた者達も、ゾロゾロと竜蔵と刀子の後をつけながら、店を出て行く。

「そこの脇道に入れ。確か、そこなら人通りも少ない、広い場所へと出られた筈だ」

学生達が行き交つ、片側三車線ある大通りを歩きながら、刀子が隣にいる竜藏に指示を出す。

しかし、竜藏はこれに眉端を吊り上げる。

「広い場所でやるのか？ それはキツイんじゃないか？」

多対一をやる場合、なるべく一対一の状況を作り出せねば、後ろからの襲撃も当然あるため危険だ。

それは、こういった世界を少しでも渡つた事がある者なら、誰だつて知りえている心得……。

竜藏は、この考えの下、刀子の“広い場所でやる”という、少々無謀な提案に疑問を覚えたのだが。

「構わない……第一、私の得物は狭いところでは振り回しづらいからな」

「そうか、なら別にいつか」

多対一で、手っ取り早く一対一……もしくは、それに近い状況を作り出すには、狭い路地を選ぶのが最適といえる。だが、それは武器など無く、素手のみで闘うといった場合だけ有効な手段なのだ。

しかし、普通の神経をしている者なら、数十人いる相手に対して、いくら一人いるとて広い場所でやるうとは考えはしない。

そう考えた竜藏は、すでに切れ長の、“刀の様な眼”を鋭く研ぎ澄ましている刀子に向けて、口を開こうとした……が。

「確かに、いくら一人とて、多勢に無勢の状況で広い場所を選択するのは愚考と言える」

「…………だらうな」

口を開こうとした竜藏よりも先に、刀子が前を見据え歩きながら、その考えを読んでいたかのように言葉を遮つた。

竜藏は、言葉を遮られた事など気にせずに、前を見据えながら刀子の言葉を聞くことにした。

「しかし、今日の目的は陽動と、もう一つあつた筈だな？」

「確かに、あつたなそんなの」

今回の陽動を行なうと決めた際に、事前に木佐貫千代女から聞かされていた事。

それは、今回の聞き込みが犯人を焦らせる陽動である事と……そして、竜蔵に執行部での動き方を教え、刀子に武術的な成長を促すために、荒い闘いというものを経験させるといったもの。

改めて目的を思い出した竜蔵は、隣を歩く刀子と共に、人通りが多い大通りから脇道に入していく。

同時に、刀子が竜蔵に視線を向け、楽しみといった聲音で

「今日は勉強させてもらつよ? “竜蔵”」

「見てて気持ちのいいものじやないと思つが……まあ、勝手にしろよ」

脇道へと入つたあと、竜蔵は口中にしては薄暗く狭い裏道だと最初は思つたが。少し歩くと、田の前にコンクリートの建物と建物の間にポツカリとできた、都会の隙間の様な、正方形の広い空間へと出てきた。

なるほど……これは御あつらえ向きの場所だと、思わず声を漏らしそうになつたが。

それは、後ろから聞こえてくる数十人の足音によつて、口に出される事は無かつた。

(さて……久しぶりに、真面目にやつてみますかね)

今日は、これまでの手伝いとは違つて、見学の者がいる。故に、恥ずかしい姿は見せられないと……。

竜蔵は珍しく、じつこつた場面で真剣な顔つきになるのであつた。

執行部のお仕事（6） 一方的な乱戦（前書き）

竜蔵無双。

そして、またチェック無し更新。

## 執行部のお仕事（6） 一方的な乱戦

一橋学園の本校舎四階にある、教員用のPCルーム。

本来なら、ここは学園の教員専用の部屋となつており、一般的の生徒は立ち入れない場所とされているのだが。実際には、教員自体、ここではなく他の場所で研究などを行なつてしているので、現状は“誰も使わない無駄なスペース”として学園関係者内では認知されている。

しかし、それなら何故、別の用途として利用しないのか？

その理由は、現在進行形で執行部の木佐貫千代<sup>きさぬき ちよめ</sup>女が行なつてている、信じられない光景にある。

（おやおや、もう動くのですか……意外に、犯人の方も堪え性が無いようだ）

胸中で今回の事件の犯人に対する嘲笑を浮かべる木佐貫。

木佐貫が現在、彼女以外に誰もいないPCルームの中心で行つている事……それは、学園都市第一区の警備システムの一部ジャック。もつと具体的に言つてしまえば、第一区内にある全ての監視カメラにアクセスし、街の様子を、このPCルーム内で伺つていたのだ。室内は外からの明かりを遮断するために、窓を暗幕で閉め、天井に埋め込み式の蛍光灯も明かりは灯されていない。故に、主だった明かりは、室内の正面に値する場所にある、壁に埋め込まれた大型のスクリーンのみである。

通常なら、この壁に埋め込まれたスクリーンは、教員達が会議やらプレゼンやらで使つたりする筈だったのだが、現在は執行部の人間以外に使つていない。

木佐貫は、そんなスクリーン全体に映し出された、第一区内の街の様子……とりわけ、今回の事件で重要な“人物”が写つている監視カメラの映像を、丸眼鏡ごしに眺めていた。

（しかし動いたとしても、おそらく、これらは尖兵に当たる者達でしょう……どう考へても、本命ではないし、相手がこちらの様子を伺おうとしているとしか思えない。もしくは、戦力調査といったところでしょうか？）

キヤスタ付きの椅子に背を預け、腕を組みつつもスクリーンに視線を向けていた木佐貫は、そこで目の前に起動していたPCのマウスに、組んでいた腕から解いた右手を添えた。

そして、PCのディスプレイに表示されていた無数の動画の中から、数件の動画をクリックする。

どうでも良いが、ディスプレイにはかなりの動画が、小さな表示で同時に再生されているため、容量的に大丈夫なのかと心配してしまった。起動しているPCは、部屋中にある他のPCと接続されたため、演算機能が向上しているらしく、どうやらそういう心配は必要なかつたようだ。

木佐貫が数件の動画をクリックすると、これまで正面にあるスクリーンには“竜蔵と刀子”などしか映つていなかつたのが、今度は“美夏とそれを追う男”的映像も追加され。正面にあるスクリーンには、他のも合わせて合計で5件の監視カメラの映像が同時再生されるようになつていた。

（同時に仕掛けってきたのを考えるに、これは組織的な犯行と見ても良いのでしょうか……いえ、もしくは、ただその辺にいたチンピラや、知り合いを使ったのか。どちらにしても、まだ断定が出来ないのが口惜しいですね）

スクリーンに映し出された映像では、美夏が大通りとは違つた裏路地を走り、追つてくる男を撤こうとしている光景や、竜蔵と刀子が、何やら数十人の男女のグループと話している光景が展開されていた。

どちらが危機的な状況かと考へれば、断然男に追われている美夏の方なのだが、それを眺めている木佐貫は至つて冷静だ……。

（出来れば、刀子さんと桐嶋さんには、その中に入り何人かから情

報を聞き出して欲しいところですが……あまり期待しない様にしておきましょう。多分、全員黙らせてしまいそうですが……そうなると、桐嶋さんの妹さんに期待すべきでしょうか？情報によれば、彼女も実は護身用として、そこそこお兄さんから教えを受けているという話ですし、身体能力的に考えれば、あの程度の小物、何の苦も無く倒せるはずでしょからね）

一体どこから情報を仕入れているのか、とても気になるところであるが……。

そんなことよりも、ここで一人の人物が、この正面のスクリーンによる明かりしかない暗い部屋に、後ろの扉から入ってきた。

「あらあら、なんだか楽しそうな感じね」

朗らかな声音で、スクリーンを眺め続ける木佐貫の後ろから話しかけてきたのは、栗色の豊かな髪に、軽いウェーブのかかった、柔らかそうな雰囲気が特徴的な学園の生徒会長、一橋姫樹だ。

姫樹は、いつも通りの眼を閉じた和やかな微笑みを浮かべながら、部屋の中心へと歩を進める。

「会長、お疲れ様です」

これまで黙してキヤスタ付きの椅子に座っていた木佐貫が立ち上がり、姫樹の方へと振り返ったと同時に彼女は一礼をする。

それに片手で答えながら、すぐに視線を戻すよう「はい、お疲れ様。でも、今は前を見ていて頂戴」と、木佐貫に柔らかく姫樹は返した。

木佐貫は、姫樹の言つとおりに、再び椅子に腰を下ろした後、スクリーンへと視点を固定した。

姫樹は、そんな彼女の隣に、胸下で腕を組みながら立つ……それにより、姫樹の豊満なバストが制服ごしでに強調されるが。それを手放しで喜ぶ者など、この場には生憎といなかつた。

「現在、桐嶋さんと刀子さんには、陽動兼情報収集のため、外を周

ついて貰っていたのですが、どうやら早々に犯人が餌に食いついてくれたようだ」

隣に、ただスクリーン眺めながら立つていてるだけで、逸脱した存在感と安心感を与える姫樹を控えさせながら、木佐貫は状況の説明をし始めた。

姫樹は、それを楽しそうにしながら、閉ざされた瞳のまま耳を傾けていた。

「なるほどね……それで、美夏さんの方は？」

「彼女は現在、陽動のお一人から離れる形で、他の者に追われています」

「大丈夫なの？」

「ええ、彼女は一応、中学の頃は新体操で実績を挙げ、この学園に首席で入学してきた程の能力を持つた方です。別に問題は無いかと……それに、護身術は英才教育らしいですから」

「桐嶋君が教えているのかしら？」

「はい。実は彼女、中学の時に一回ほどストーカーの被害に遭つていたらしく、その時に桐嶋さんから色々と教えてもらつていた様です」

「ストーカー……」この言葉に、姫樹は一瞬嫌そうな顔をしつつも、すぐにいつも通りの微笑みへと表情を戻した。

「私も、何度も被害に遭つてるから分かるけど、あれは結構くるのよね……」

「そうですね、その時は私が対応しましたが、あれは出来れば一生縁の無いものだと思いたいです」

「まあ、相手が好きな人だつたら、逆に襲っちゃうかも知れないのだけれどね」

「人は、そんな世間話をする様なやり取りで、現在進行形で厄介事を担つてている二人と、巻き込まれた形の美夏が映るスクリーンに視線を向け続けてる。

「まあ、ストーカーの話はここまでにして、今は犯人の特定を急ぎ

たいので、少し作業に入ります」

「特定ね」

「？」

木佐貫が他愛の無い世間話から、本来の任務へと戻るうつとすると、姫樹が何やら意味深な微笑みを浮かべ始めた。

彼女は普段、常に瞳を閉じ、微笑を絶やさない人物なので、こういった声のトーンの変化や、表情の作り方で感情の変化を露にしている。

そういうことを良く知る木佐貫は、彼女の意味深な微笑みを敏感に感じ取り、視線をスクリーンから隣に立つ姫樹へと向けた。

視線を受けた姫樹は、スクリーンから目を放さないまま「これは、あくまで私の“勘”なのだけれどね」と、前置きをしながら話し始めた。

「多分、犯人は学園都市の人間では無いわ」

本人は“勘”といつていたが、口調や声音自体は、どこか確信めいた印象がある。

いわゆる、リーダー……いや、統治者の資格と言つべきか？

そういうふた、人に信頼と行動力を生み出す“力”が、彼女の言葉には込められているのだ。

だからこそ、木佐貫も彼女の言葉には不思議と耳を傾ける仮に、この言葉を他の者が吐こうものなら、木佐貫は一向に相手をする気など無かつただろう。

「都市外の人間が犯人ですか？ そうなると、少々厄介な事になりますが……」

姫樹の“勘”を真に受けた木佐貫は、考え込む様にスクリーンを見つめた。

「私の考えだと、今スクリーンに映っている小物達は、おそらくその辺で雇われた小遣い稼ぎに過ぎないわ……それも、“第十一区”以降の区画の人間ね。でなきや、中学時代や現在でも、“あっちの世界”では絶対の名前として君臨して、桐嶋君に喧嘩なんか売ら

ないでしょ？」

「“第十一区”以降の区画ですか……“未知の区画”などと称されている、あの無法地帯の様な場所の住民達ですね」

木佐貫はスクリーンの動画はそのままに、PCの操作を行なうために、動画を表示しているウインドウを最小化し、何やらマウス操作を数回した後、キーボードを打ち始めた。

姫樹は、そんな木佐貫の様子など一瞥もせずに、状況が動きそうなスクリーンの動画を眺め続ける。

「まあ、無法地帯とはいっても普通に暮らしている人の方が多いし、ただ周りが勝手に、治安が悪いからというだけで付けた俗称なのだけね？ ただ、学園都市創設者の孫娘である、私ですら認知できていらない地域があるのは確かよ」

「それだけでも、十分に未知ですよ。会長が認知できていないという事は、一般人からしたら、殆ど近寄らないような場所です。気味が悪いと思うのは、仕方が無いことだと思いますが？」

「まあね、ただ、どんなに素性が分からない人たちが流れ着いていようと、人間は人間よ……それ以上のものなんて、出てくる筈は無いもの。恐れるどころか、何の心配もする必要は無いわ」

第十一区以降の区画に対して、そういうて断言する姫樹に、木佐貫は疑問を覚えた。

故に、木佐貫は作業を続けつつも、何の遠慮もなしに姫樹へと尋ねる。

「本当に、そのなのでしょうか？ 第十一区以降の区画は、第一区から第十区までに籍を置く学生が問題を起こした場合、島流し的な意味で送られる区画でもあります。全てを網羅していいにしても、会長なら何か知っているのでは？ それも、人以上の何かがある可能性も……」

何の遠慮も無しに尋ねられた姫樹であつたが、昔からの付き合いとして、彼女が自身に対して、そこまでの抵抗を持っていない事は知っていたので、特に気を害す事も無く、普通の友人と話すかのよ

うな聲音で答えた。

「さあ、どうかしらね 第一、私がもし知っていたとして、何の問題があるのかしら？ 千代女は、何か問題でもあると思つ？」

「……いえ、ありません」

「そう」

不服そう……という訳ではなく、答えてくれないのは最初から分かつていたかのような反応。

それに、姫樹はいつも通りの朗らかな微笑みを浮かべながら、短く相槌を打つた。

二人の前に映し出されているスクリーンの映像では丁度、竜蔵と刀子が数十人の相手を前に、そろそろ荒事を始めようかとしている所であった。

（さて、一応、今回の目的でもある刀子さんの成長を促すための荒事です。確り見届ける事にしましょうか……）

「第十一区ね……じゃあ、俺が知つてる奴も、何人か居るのかな？」  
さつきまで対峙しつつも、ペラペラと相手が喋つてくれた事を、竜蔵は何気なく吟味するが、特には何も出てこず、ただの感想だけをポロリと零した。

そのポロリと零した竜蔵の感想に、隣に立つていた刀子が意外そうに反応する。

「ほう、君にはああいつた知り合いがいるのかい？」

「まあね～……むしろ、そっちの方が多いかな」

「随分と余裕じゃねえか……たかが一人だけだつてのによ」

狭く薄暗い裏路地を通り、辿り着いたコンクリートの建築物群の隙間に出来た、正方形の広い空間。

そんな、都会の空白部分で、竜蔵と刀子は計12人の男女を前にしながら、余裕を持つ様子で佇んでいた。

12人の男女比率は8対4……そのうちの多い方である男の塊から、一人のリーダー格だと思われる体格の良い男が。すでに荷物を地面に置き、各自自由に構えを組んでいる竜蔵と刀子の二人に、最大限の凄みを込めたメンチを切りながら近づいてきた。

「余裕で悪いか？ そつちだつて、たかだか1・2だろ？」

集団のリーダー格だと思われる男は、まずは竜蔵の前に立つたのだが……身長差のせいで見下ろされながらも竜蔵は、片眉を吊り上げた何でも無いという表情で、男のメンチに答えた。

竜蔵の前に立つ男は、少々分厚いダウンジャケットや、裾が地面によつて擦り切れているズボンを身に纏つているものの、そのだらしの無い服越しからでも分かるほどに筋肉が太く発達しており、脂肪も程よく乗つかつている……身長は大体180cmぐらいで、竜蔵よりも10?高い。

また、骨格も太いのか、広い肩幅に相まって、顎も頑丈そうに出来ており、おそらくは“組み技系”か、それともそういうたスポーツの経験者かと、竜蔵は相手を挑発しながらも分析していた。

竜蔵に明らかな挑発をされた男は、一瞬眉間に皺を寄せるも、すぐには表情を二ヤけた笑みを浮かべたものに変えた。

「はつ……たかだか1・2つつてもよ、中には俺みたいに格闘技経験者だつているんだぜ？」

やはり、何かをやつてている者だつたかと……隣で竹刀袋から木刀を抜き出した刀子は、別に気にする事も無く胸中で呟いた。

「見たところ、おめえらも何か齧つてゐみたいだが……体格差つて知つてゐるか？」

「ああ、俺は嫌つていうほど知つてゐるな」

「私も、まあ少なからずは理解している」

自身よりも背の低い竜蔵を、馬鹿にしたかのように指差しながら言つた男であつたが。二人はそれを、特に気にした様子も無く答えた。

ちなみに、竜蔵は両手を腰に当てた、どこか偉そうな格好ながら

も、立つている足は樂にしている姿勢で、刀子はすでに木刀を左の腰元に構えた、静かながらも直立の臨戦態勢を取つてゐる。

しかし、男はこれらの一人の態度が気に入らなかつたのか、ニヤついていた表情が強張り、どこか肉体に力みが感じられる雰囲気を醸し出し始めた。

単に言えば、怒つてゐるという事だ。

「だつたら、話は早いな。おとなしく俺らにボコられるや、な？ついでに、そつちの女は今日一日、俺らに貸してもらうぜ？」

そう言いながら、男は木刀を静かに、そして脱力した様子で構えている刀子に下卑た視線を向ける。

その視線に、刀子は“刀”的ように鋭くも妖艶な瞳を細めながら「俗物が……」と、小さく呟いた。

どうやら、相当気に触つたようで……隣に立つていた竜蔵も、その刀子の不機嫌な様子を感じ取つていた。

だが、刀子の機嫌が最悪に達しようとも、竜蔵には別段、変わつた様子は見られない。

彼は、ただただ、目の前にいる集団を自信に満ちた空氣を醸し出しながら見下していた。

「こいつを貸すつて。いや、止めといた方がいいぞ？」

「はつ！ 何を言つたつて、お前が黙ればこの程度の女。すぐに俺の“こいつ”で喘がせてやるよ！」

男は竜蔵の言葉に、右手の中指と手首だけを小刻みに動かすジェスチャーを示した。

これには竜蔵も（あ……そろそろ切れちゃうかな？）と、刀子の方を見たのだが……。

当の彼女は、頭に“？”が浮かんできそうな何とも言えない表情をしながら、男のジェスチャーを見つめていた。

ああ、こいつは相手の挑発すら理解してないな……と、竜蔵は刀子の俗世に対しての無知ぶりに呆れ混じりで驚いていた。

しかし、そんな事よりも、竜蔵は視線を目の前でこちらを見下

す男に向けた。

「まあ、終つた後の事は好きにしていいから、それよりも……」

「は？」

「間合いだろ？」

「パアンッ！！」

刹那、この都会の隙間ともいえる広い空間に、竜蔵のローファーが履かれた右足の甲と、男の左頬が衝突する、破裂音に似た鋭くも生々しい打撃音が木靈した。

同時に、竜蔵が美しい弧を描きながら蹴り抜いた方向に、力無く崩れていく男……。

気付けば、ここにいる全ての者達の時間が、ノーモーションで右上段回し蹴りを決め、蹴り足を静かに元の位置へと戻している竜蔵によつて止められていた。

自身よりも10？程、背の高い相手に、あまりにも唐突で、蹴った姿勢が一切崩れない、あまりにも美しいフォームを見せた竜蔵に、文字通り皆、魅せられていたのだ……。

そして、当の本人である竜蔵は、不意打ちとも言える一撃で意識を刈り取つた相手など一瞥もせずに、残りの連中へと視線を向けた。

「どうした？ 喧嘩をするんだろ？」

両手を広げ、相手に“来いよ”と挑発する彼の姿は、まさに場慣れした者の姿であった。

刀子は、そんな竜蔵の事を眺めつつも、自身の足元に転がつた、既に意識が刈り取られている男に視線を下ろした。

男の目は閉じられ、蹴られた左頬は赤く染まつている……おそらくこの後、この赤く染まつた部分は紫色に腫れ上がり、人前に出るのが恥ずかしくなるようなものとなつてしまつであろう。また、地面はアスファルトだつたために、倒れた際にぶつけた右側頭部にも、ちょっととした出血が見られた。

そんな、地面にうつ伏せで沈んでいる男をみて、刀子は竜蔵の不意打ちを“見事”と評価した。

「だったら早く来いよ、焦れちゃうだろ 」

心なしか、どこか楽しそうな聲音で、竜蔵は残りの面子に対して挑発を行なう。

いや、むしろ彼は前へと歩き出した……それもゆっくりと、ジリジリ間合いを詰めるのではなく、大胆に、堂々と一歩一歩進んでいく歩き方でだ。

不良のグループというのは、大抵が一番強い奴がリーダー格を任される。

故に先程、竜蔵が不意打ちとはい一撃で仕留めた体格の良い男が、この集団で一番強かつたという事になるのだが。それを一瞬であっけなく倒した竜蔵に、残った面子は尻込みし始めてしまったのか……。

「おいおいおいおい……来ないのかよ？」

集団へと何の躊躇いも無く近づいてくる竜蔵に、残された面子は迂闊に出れないのでいた。

男7人、女4人の計11人の集団が、たつた一人が醸し出す雰囲気に圧される……。

この光景は、不良の世界では有つてはならぬもの……たつた一人の相手に、ツッパリの世界に生きる者達が圧されてしまう事は、後のためにも有つてはならぬ事。

だが、さつきも言つたように、既に集団の中で一番強い人間はやられてしまい、ましてや、その時に見せたノーモーションの右ハイは素人には理解できずとも、格闘技経験者ならば一瞬で気づく事があつた。

『あいつ……やばいんじゃないか？』

『ああ、蹴りが綺麗とか、そんなレベルじゃなかつた。あれは、目の前でやられたら見えねえぞ』

『切れも半端なかつたからな……こりやあ、全員でマジになつて掛

からないと拙いな』

そう、格闘技だけではない、これは全てのスポーツに関して言える事だが。

ワンプレイ……または、たつた一動作。

これだけを見ただけで、理解できてしまふ実力の違い……“次元の違い”というものがある。

それは、素人よりも一度直にその動きを経験した者ほど分かるもので。更に言えば、長く続けていれば続いているほど、トップと自身の差というものが、良く理解できるようになつて来る。

この場に居る格闘技経験者達は、それをたつたの一動作……竜蔵の、自然体からの無拳動の右ハイで理解してしまつたのだ。だが、そうこうしているうちに、その次元が違うと感じてしまう程の実力を持った男が、集団の最前列にいる三人の前に辿り着いてしまつた。

間合いとしては約3歩半……無理やりに詰めれば、一拳動で接近できる距離だ。

しかし、竜蔵を前にした三人は出てこない。むしろ、こちらから出るのではなく、竜蔵を迎え撃つようにして、各々好きな構えを取つてゐる。

竜蔵から見て左がテコンドー……ほぼ半身の、蹴り主体の構え。竜蔵から見て中央がボクシング……奥足である左の踵を地面から少し上げ、両腕でファイティングポーズを取りつつも、目の前の獲物を狙うように身を屈めた、パンチ主体の構え。

竜蔵から見て右が素人……今にも飛び掛らんとした、構えと言えない構えを取つてゐる。

其々が其々、好戦的な姿勢を見せてゐるが一向に出てくる気配はない。

それに竜蔵は一度、面倒臭そうに溜息を付くと、おもむろに、ブレザーの前ボタンに手をかけ始めた。

三人の男達は、その様子を油断無く見つめている……。

「来ないのなら、俺からいつちやうぞ」

竜蔵はボタンを外したブレザーを脱ぐ仕草そしながら、更に間合

いを歩きながら狭めていく。

そして、竜蔵がブレザーを脱ぐかと思われた瞬間。

中央に立っていた、油断無くオーソドックスなファイティングポーズを取っていた男の顔面に、竜蔵の左拳が真っ直ぐに深々と突き刺さっていた

「あ……」

その歩きながら、肩口から放たれた拳動の見えない左拳を引くと同時に、潰された男の鼻が露となるが。竜蔵は更に、その左を引く動作を利用して、足先と腰を順に右へと捻り、生み出した流れの力を乗せた右のストレートを、相手の顎へと突き出し、正面から打ち抜いた。

右の拳面に相手の顔面を打ち抜いた際の気持ち良い感覚が広がり、脱ぐと見せかけ、前ボタンだけを外していたブレザーが、竜蔵の体の捻りに同調して翻る。

上着を脱ぐという、不良の世界では様式美とも言える行動を、馬鹿らしくも逆手に取つた、二度目の不意打ちに、顔面を正面と顎の二箇所打ち抜かれた男は、勇ましい構えなど無かつたかのように、地面へと意識を沈めていった。

これにより、ようやく周囲の者達にも火が付いた様で……。

「てめえ…… よくもッ！？」

竜蔵から見て左に立っていた男が、取っていた構えに違わない、鞭の様な左回し蹴りを。竜蔵の顔面に向けて蹴りだすが……それは、竜蔵が相手の蹴り足の膝を、左の掌で押さえただけで止められてしまつた。

「なッ！？」

「フッ！」

短い呼吸と共に竜蔵の左下段廻し蹴りが、男の軸足であつた右足を刈り取つた。

凄まじい威力と脛の硬さに、左のハイキックを蹴つた姿勢のまま  
だつた男の表情は一瞬で苦痛に歪む。

いや、そんな事よりも、流れるように蹴りの軸足を刈られてしまつた男は、地面から足裏を剥離させてしまい、宙へと身を晒す事となつてしまつ……そして、待つてているのはアスファルトの地面。足を刈られ、宙を舞つた男は落下する拍子に、その無防備となつた後頭部をアスファルトの地面に衝突させてしまつ。

まるでボールの様に弾んだ男の頭部は、その落下の勢いと威力を生々しく示し、当然の様に男はそのまま意識を地面に沈めていった。しかし、この現象を起こした当の本人は、既に近くにはいなかつた。

次に竜蔵は、前衛三人のうち、残つていた素人の男へと爆発的な踏み込みで肉薄していた。

あまりに速い入り込み……竜蔵とさして背の変わらない男は、一瞬で懐を許してしまつた事に驚きつつも、場慣れした反応で接近してきた竜蔵の顔面目掛けて、こちらも前に出ると同時にバッテイング（頭突き）を仕掛けた。

だが、待つっていたのは、竜蔵の硬い左肘……そう、左肘の打ち上げであつた。

グシャリと、頭突きをしていた筈の男の顔面が潰れ、鞭打ちの様に後ろへと頭部が跳ね返された。

竜蔵は踏み込みの勢いを殺すために前に突つ張つていた左足を、今度は軸足へと変え、そこを起点にして左へと振り向き、肘で顔面を潰した男を無視しながら、再び残りの集団へと向き直つた。

顔面を肘で潰された男が、後ろへと仰向けで倒れていく……その際、男の後頭部がアスファルトへと激突したのは、誰にも止められない事であつた。

三人……三人だ。

最初のリーダー格に続いて、三人の男が、何の問題も無く無力化されてしまつた。

まともな抵抗が出来たのは、その内の一人のみ……と言いたいところだが、実のところ、竜蔵に受けを使わせた二人目の男しかいなかつた。

更に言えば、一人目のブレザーを脱ぐフェイクという、こちらの心理を突いた奇策。二人目の、落ち着いて蹴りを放つ際に重要な关节となつてくる膝を押さえ、受け返しとして左のロー・キックで軸足を刈るという、切り返しの速さ。最後に三人目の、下手をすれば逆に肘を硬い額へと衝突しかねない状況を、躊躇せずに振り抜いた、度胸の強さ。

どれもこれもが、相手の場数の多さや、圧倒的な実力を示す指標となつてしまつ。

マジでやらないと拙い……そう考へ、前衛三人に押さえさせた後、全員で袋にしようとしていた。だが、それすらも実力のみで打ち破られてしまつた。

もう既に、自然体の状態で、こちらが来るのを待つてゐる竜蔵に對して、残された者達が出来る事は一つしかなかつた。

それは特攻 瞬間、残りの男4人が、一斉に竜蔵へと走り出した。

走り出した男達の中には格闘技や、その他のスポーツ経験者もいるために其々が良い体格をしており、まるで壁の様な印象を、この特攻に持たせていた。

しかし、その4人の男達の特攻に対し、竜蔵が取つた行動もまた……。

突貫であった

最初に肉薄をしたのは、真正面にいた二人……。

竜蔵は、その二人に対し、なんと多対一では考えられない“タックル”を纏めてかました。

いや、“タックル”というよりも、これはラグビーでいう“オ

バー”に近い。

“オーバー”とは、ラグビーの試合中に、タックルをされたプレイヤーが置いたボールをキープするために、大勢の男が、その置かれたボールに群がってくる相手を押し返す基本的な技術。だがこれは、時に得意な者が行なった場合、2人だろうが3人だろうが、まとめて一人で押し返すことがある。更に言えば、この技術はボールを奪う側も使うので、三人がボールを守るために固まっているところを、時に一人で剥がしてしまった者もいる。

そして、竜蔵が学園のラグビー部で付いているポジションはフオワードのフランカーという場所で、ある意味最も、この技術を得意とする者が付く場所なのだ。

故に、竜蔵の屈強な腕の力で胴体部分を捕まえられた男達は、衝突の力でも負け、簡単に地面から足を浮かされてしまう。

持ち上げられたと気付いたときには、既に竜蔵は一人を両腕で捕らえたまま、強靭な脚力でアスファルトの地面を走り出し、四人で構成されていた壁の中央部分を、強引にこじ開けてしまった。

だが、持ち上げられた一人もただでは……いや、次の瞬間には、二人とも竜蔵から解放され、押し出されるようにして元の場所へと放り投げられてしまった。

これにより、竜蔵は正面から4人を相手にするのではなく、あえて囮まれるように4人を相手にする事となつた。

この状況の拙さを知っている者からすれば、何をやつているのかと問われそうだが、当の本人には関係が無く……むしろ早速この状況を覆そうと、左斜め後ろにいた相手に振り返り、その間合いを奥足である右足を使って一步で詰めきつた。

この爆発的な瞬発力から生まれる鋭い踏み込みに、接近を許した男は反応が出来ず

「シツ！」

カシヤツ！！

その顎を、竜蔵の左フックによつて打ち抜

かれてしまう。

踏み込みと同時に、左の足先を内側へと捻り、その捻りの力を上手く膝・足の付け根・腰・腹と流し、最終的に胸や肩甲骨、腕などを通して拳面に宿らせた、完璧な左フックは、例外なく男の意識を一瞬で刈り取つた。

糸の切れた人形の様に、顎を右から横に打ち抜かれた男は、固い地面へと前のめりで倒れていいく。

竜蔵は、そんな男など一瞥もせずに、すぐに後ろへと“左肩”から振り返つた。

するとそこには、今にもこちらに振り上げた右拳で殴りこんできそうな男がいた。

しかし、そんな局面に立たされても、竜蔵の表情に焦りは見られない。

なぜなら、相手の右の拳は“こちらには届かない”と悟つていたからだ。

「だあッ！！」

男が気合を込めながら、振り上げていた右の拳を、大振りで振り抜く……が、空を切る音はしても、肝心な骨や肉を殴る生々しい打撃音は響かない。

なぜなら文字通り、男の大振りな打ち下ろしの右は、虚しく竜蔵のすぐ目の前の空を切つたからだ。

外した……そして、大きな隙を相手に見せてしまつた。

それに気付いたとき、男の左側頭部に鋭い衝撃が“光の瞬きの様に起つた”。

その衝撃の正体は、竜蔵の右上段廻し蹴り……だが男は、この衝撃の正体すらも知る事が出来ずに視界を真っ暗に染めてしまつた。

なぜ、迫つてくる相手に対して攻撃が届かないと判断したり、間合いが必要な蹴りが出せたのか？

それは竜蔵が振り返る際に“左肩”から振り返つたことで、奥足にする予定だつた右足を更に前に出した状態から振り返つたため、

間合いを後ろから襲つてくる相手と“半歩分”空けた事に理由がある。

相手は後ろ向きだつた竜蔵の頭部目掛けて拳を出そうとしていた……だから、半歩分空いた間合いに対応できず、そのまま振り切つてしまつた。

また、この半歩分の間合いは、空手を得意とする竜蔵にとつては何の問題にもならない“蹴りの間合い”故に……空ぶつた事によつて出来た相手の隙を突く事は、竜蔵にとつては造作も無い事だつた。右の足を、蹴つた状態からゆっくりと引いた竜蔵は、視線を先程、四人の壁から引き剥がした一人へと向けた。

残るは一人……そう、もう8人もいた男達の集団は、既に2人だけになつてしまつたのだ。

『お、おい……どうすんだよこれ！？』

『知るかよ！ 僕だつて訳わからねえよ！！』

これまで6人の男達を、二人目以外一撃で済ませてきた男は、いま田の前で何事も無かつたかのように佇んでいる。

「どうする、どうちが先に来る？」

すると狼狽する男一人に向けて、竜蔵が口を開いた。

当然、声をかけられたとしても、警戒してしまつては一人は黙り込んでしまつて反応を見せない。

怯えた小動物かと、竜蔵は鼻で呆れるように溜息を付く。

しかし、そんな竜蔵の態度にも、二人は出て来る気配が無い……

これは、もう終わりかなと、竜蔵がおもむろに刀子の方に視線を向けると。

「なんだ、もう終つてるのか」

「君の戦い方をゆっくり見学するためには、少し急がせてもらつた」

『ま、まじかよ……』

既に刀子の方は、4人居た全ての女を無傷で地に伏せさせた後で。彼女は静かに、手に持つていた木刀を、いつも通りの竹刀袋に納めている最中であつた。

残り一人の男達は、それを見て驚愕を覚える……。

いくら女だとしても、メンバーの中でも武闘派で通つた気の強い女達4人を、何の問題も無く、あんな涼しい顔で片付けたのだ。そして更に言えば、4人中3人が武器持ちだつたはず……だが、それらの武器は虚しく持ち主と共に、アスファルトの地面の転がつてゐるだけだつた。

男達2人が、そやつて木刀を竹刀袋に納め、見学のため胸下で腕を組み始めた、凜々しい顔立ちの刀子を見ていると……。

「ドンツ！」　「ハラツ！？」

突然、一人の男が苦悶の表情をしながら、痛々しい呻き声を上げた。

その声と、何かの打撃音に驚きながら振り向いた、もう一人の男の目に入ったのは……。

「よそ見しちゃいかんだろ、なあ？」

仲間の男の右足の甲を、竜蔵が左足の足刀（“そくとう”と読み、足の外側で相手を蹴るというより刺す様に放つ蹴りの事）で踏み抜いていた光景だつた。

仲間の男の靴を履いている右足に、竜蔵のローファーを履いた左足の外側部分が深くめり込んでいる。

当然だ、なぜならこの足の踏み抜きは、竜蔵がほほ飛び蹴りの要領で蹴つていたので、全体重が仲間の男の右足甲に刺さつていていたのだ。

足を踏み潰されたかと錯覚を起こすほどの、あまりの痛みに、仲間の男は後ろへと身を下がらせようとしてしまつ……しかし、この足で相手の足に釘を打つた様な状況を、竜蔵が見逃すはずも無く。「シツ！」

踏み抜いた足はそのまま、奥足である右足を地面に着地させた瞬間……着地の際に屈伸をしていた膝を思いつきり地面を蹴りながら

伸ばし、その勢いを利用した右アップパー・カットを、男のがら空きとなつていた顎にかち上げた。

竜蔵の硬い拳が、男の下顎を粉碎すると同時に、頭も鞭打ちの様に後ろへと弾かせた。

すると、顎を打ち抜かれた男は、竜蔵に右足を踏み抜かれたまま、後ろへと仰向けで倒れていった。

「ひいッ！？」

そして、最後の一人となつてしまつた男が、この光景に驚愕を覚え、後退りをしてしまう。

最後の一人……そう、最後の一人なのだ。

12人いた集団が、たつたの一人に対し、なす術も無く壊滅させられそうなのだ。

竜蔵が、今しがた仕留めた男の足から、左足を引いた。

「さて、どうする？」

暗に、『まだやるか？』と尋ねる竜蔵。

だが、男は自身よりも背が低い竜蔵を、驚愕の目で見つめるだけだ。

田を『反らせばやられてしまつ……だが、『反らすとも、まともにやつて勝ち目など無い。

男は既に詰んだ状況に、歯噛みすら出来ないまま、とにかくガードを挙げた構えを取るしかなかつた。

両拳を肩の位置まで挙げ、肘を緩やかに曲げた、背筋が伸ばされたアップスタイル……背の高い選手が、低い選手の顔面パンチを、身長差と障害物として置いている腕だけで防ぐ、なかなかに厄介なガードスタイルだ。

しかし、そんなものは竜蔵にとつて、物の数ではなかつた。

アップスタイルというのは、上体を反らしているため、中々下や腹への攻撃に反応しづらい……その弱点を嫌というほど理解している竜蔵は、セオリー通りに、相手の伸ばされた足へと、右のローキックを放つ。

前へと出ながら、確りとバランスを固定した軸足である左足を捻り、全身の回転力を使って放たれた、竜蔵の鞭の様な右のローは、相手の左足の大腿四等筋を例外なく蹴り抜き、断裂させるという威力を見せ付けた。

「あ、あああッ！？」

竜蔵に左足を外側から蹴り抜かれた男は、悶絶しそうな痛みに耐えかね、思わず地面に頭を垂れてしまつ……。

ロー・キック一発

たつたこれだけで、竜蔵は自身よりも背の高い男を仕留めたのだ。

そんな竜蔵は、左足の太ももを押さえながら、苦悶の表情を浮かべる男を見下ろす。

「じゃあ、ちょっとだけ話に付き合つてもらおうか？」

既に勝敗が決したこの状況は、勝者である竜蔵と刀子に、全ての権利が委ねられていた。

「あ、ああああッ！？」

しかし、腿の筋肉を断裂した男は、額に汗を浮かべるほどに悶絶しながら、竜蔵の話を聞くことはしない……いや、聞く余裕が無いのか？

すると、そんな情け無い悲鳴を上げる男に苛ついたのか、竜蔵が男の頭部を、軽くローファーが履かれた右足で小突いた。

「人の話ぐらい聞けるだろ？　おい」

「あッ！　あぐう……ッ！」

「はあ……根性ねえな、お前」

竜蔵の言葉に、やはり男は答える余裕など無く、痛みの走る伸ばした左足を押さえながら、苦悶の表情を浮かべるのみであった。そんな状況を見かねたのか、刀子が口を開いた。

「どうやら、情報を聞き出すには少しやり過ぎた様だな」

「……だな」

刀子の言葉に、竜蔵が疲れたように相槌を打つ。

だが、いま情報を聞きだす機会を失えば、いつ有益な情報得られ

るのか分かつたものではない。

そうなると、妹に対しての盗撮被害が更に酷くなる恐れが有る。これは、体裁なんか気にしている場合ではないかと、竜蔵は非情になる事を決断した。

「だつたら、少し聞き方を変えてみるか」

「うん？ どういう事だ？」

突然、なにか思いついたらしく竜蔵に、刀子が不思議そうな表情を向ける。

すると、竜蔵は何やら制服のズボンの後ろポケットから、少々値の張りそうな長財布を取り出した。

そして、再び地面でもがいている男へと視線を戻した。

「おい」

「あ、あああッ！？」

短く呼びかけられた声に、男は呻き声を挙げながらも視線を向ける……どうやら、少しは意識を傾けるだけの余裕が出てきたようであつた。

それを確認すると、竜蔵は次に、刀子の近くで意識を失わせていた4人の女達へと、何やら踏み込むような視線を向けた。

「よく聞けよ？ いま俺の財布の中には、コンドームが2つほど入つてる」

「「ツ！？」」

瞬間、痛みに喚いていた男だけではなく、竜蔵の仲間である筈の刀子までもが、信じられないといった表情をする。

しかし、そんな二人の視線と反応を無視しながら、竜蔵は手に持つていた長財布から、本当に一つの未開封になつていてるコンドームを取り出した。

「お前がこのまま何も喋らないのなら、俺はこの一つのコンドームを“有効活用”しなくちゃならない……ああ、俺は別に構わないんだ。だつて気持ち良いし、それにつまでも財布の中に入れてくれるものでも無いしな」

「て、てめえ……ッ！？」

痛みに耐えつつも、竜蔵に精一杯の睨みを向ける男であつたが、本人には何も伝わっていないようだ。

「さて、そうすると誰にしようかな？ ほお、結構可愛いのもいるんだな、お前のチームは」

竜蔵は、そう言いながら刀子の周りで伸びていた女達に歩み寄つた。

「近づくんじゃねえ！！ それ以上、そいつらに近づくんじゃねえ！！！」

「それはお前次第だな。大体、お前らも同じような事をやって来るんだろう？ それが今更……」

男は地に這い蹲りながらも、メンバーである女4人を守ろうと、必死に声を荒げるが。竜蔵はそんな男には見向きもせずに、倒れ付している女達を、一人ずつ顔を上げさせながら物色している。

そんな竜蔵の様子を見て、刀子は険しい目つきに表情を強張らせているが、特に口を挟む様子は無い。

「お、この娘いいな…… それと、こっちの娘も、何だか肉感的でエロいな」

「おい！ 触るな！！ そいつらに触るな！！」

どうやら竜蔵は目当ての女を一人ほど見つけたのか、一度満足そうに頷いた後、倒れている相手の顔を物色するために屈んでいた体勢を戻した。

そして、立つた状態になると同時に、少し離れた場所で、いまだ這い蹲つている男に目を向けた。

「だから言つてるだろ？ それはお前次第だつて…… とりあえず、ちゃつちゃつと始めるから、刀子は戻つてくれ」

「……」

言いながら、竜蔵は自身のズボンのベルトに手をかけた。

刀子はこの竜蔵の指示に一度目を瞑つた後、暫く何やら考え込む振りを見せながら、どうにか良心に了解を得たのか、そのまま、

広間の奥に置いてあつた荷物を手に取つた後、残された者達には目もくれずに、この場を後にしていった。

竜蔵と男は、口の刀子が無言で去つていいく様子を見た後に、再び目を合わせた。

「じゃあ、いただきます」

そう宣言すると、竜蔵は外したベルトはそのまま、刀子に無傷で氣絶させられた、うつ伏せで寝ている一人の女の下半身に手を觸れた……が。

「ま、待つてくれッ！？ 話す！ 全部話すから…！」

地面に這い蹲つていた男が、意外にも早く折れたようであつた。その言葉を聞き取ると、竜蔵はすぐさま外していたベルトを締め直し、這い蹲る男へと速い歩調で歩み寄り「そうか、なら早く話せよ？ 今すぐにだ！」と、言に怒りの籠つた聲音で、這い蹲る男の胸倉を片手で掴み、引き上げた。

瞬間、無理やり引き起こされた事により、筋肉が断裂した左足に激痛を覚える男。

「あぐうッ！？」

「情けねえ声を出す前に早く言え！ てめえらは誰から指示を受けて、こんな事をした！？」

肉体の割りに、ある程度整つた輪郭と男らしい顔立ちをした竜蔵の表情が、怒気に歪む。

語氣を荒げ、胸倉を掴む手には力みの証である、筋肉の筋や血管を無数に浮かばせながら、竜蔵はすぐにでも相手から情報を得ようとする。

その、田の前の男の形相に、胸倉を掴まれ無理やり引き起こされている男は、痛みと恐怖で顔を歪ませ、若干の涙を目に浮かべながら、竜蔵の指示に大人しく従つのであつた……。

あの広間から少し離れた、薄暗い路地の入り口付近……つまり、明るい大通りとアンダーグラウンドの境目で、刀子は壁に背を寄りからせながら、竜蔵の事を待っていた。

腕を組み黙して待つ、その凜々しい佇まいは、鋭い雰囲気と共に、彼女の現在の心情を表しているかのようであった。

すると、そんな彼女の待ち人である竜蔵が、やれやれといった雰囲気を醸し出しながら、薄暗い路地からダラダラとした歩調で現れた。

しかし、竜蔵が戻った事に気付いている筈の刀子は、一向に“不機嫌そうに瞑つた眼”を開こうとはしない。

（ああ……こりや完全に怒つてゐるな）

そんな彼女が醸し出す、己が心情を竜蔵は確りと察知し、現状がどういった拙さを持つてゐるのか考えさせられた。

おそらく彼女は、いくら相手から情報を吐き出すためとはい、ああいつた手法を取つた事に腹を立ててゐるのであろう。……。

そう答えを導き出した竜蔵は、すぐさま彼女に向かつて口を開く

……。

「ごめんな、流石に、あのやり方は気分が悪かつたか？」

「それもある……だが私にとつては、その程度の事は関係ない」

「へ？」

しかし、どうやら竜蔵が導き出した、彼女が怒つてゐる理由は外れだつたらしく、竜蔵は思わず呆けた声を出してしまつ。

なら、他に彼女が機嫌を損ねてゐる理由はどこにあるのか？

その答えは、背を預けていた壁から離れ、真つ直ぐにこちらを見る彼女から聞くことが出来た。

「私が気に入らないのは、君がやはり“あの時”、私に対してかなりの手加減をしていた事だ」

腕を胸下で組み、竜蔵へと鋭い視線を向ける刀子から出された、彼女が不機嫌な理由は。一昨日の放課後、学園の屋上で行なつた、決闘に近かつた二人の闘いの事であつた様で。

竜蔵は、この答えを聞いた瞬間、ゲンナリとした表情を浮かべる……心なしか、いつもは堂々としている肉体と姿勢も、どこか疲れたような空気を出していた。

だが、そんな竜蔵の様子を田の前で確認したとしても、刀子は言いたい事を止めようとしない……むしろ、ヒレヒレとばかりに攻め立てる。

「さっきの乱闘の最中、私が君の闘いから眼を反らしていた部分があると思うのか？ 思うのであつたら心外だ。あの程度の連中など、よそ見していても相手に出来る」

「は、はあ……」

「まあ、それは良いとして……問題は今回の君の動きと、あの時の君の動きに、明らかな違いがある事だ。その違いとは相手を叩き潰そうという敵意が込められているか、いないかの違いだ！ どうして、あの時に同じような動きをしてくれなかつた！！ 手心を加えて、私が悔しむ姿を嘲笑するためか？ そして今回も、そんな私の姿が見たかつたからか？」

ああ……すんごい面倒臭いと、内心思いつつも、どうにも田の前で憤慨する刀子に強く出れない竜蔵。

まあ、確かに手加減をしていたのは、終つた後にも言つていた事だし事実だ。それに、今回の動きと、あの時の動きに違いがあつたのも事実だ……それは間違いない。

多分、目の前の冴島刀子という女は、本当に武術一直線で生きてきた人間なのであつ。だから、異性である自身であつても、手加減をされていた事に誇りが許さなかつたのだろう。

そんな事を、学園の評判からしたら珍しく感情を露にし、ひねりに向けて捲くし立てる彼女を眺めながら、竜蔵は考えていた……。

執行部のお仕事（7） 空を舞う妹・容赦のない妹（前書き）

今回は妹の場面です。

## 執行部のお仕事（7） 空を舞う妹・容赦のない妹

12人の集団を難無く倒し、そんな乱闘があつたなど感じさせない竜蔵と刀子の一人は、街の中心地でも有る、夜になればライトアップなどをして、とても視覚的な娛樂を与えてくれる噴水が名物の“中央公園”へと来ていた。

ここは、もう一つの繁華街である“一橋駅前”とは違つて、街の中にも緑をと植えられた木々や、まるで自然の絨毯だと思わせる天然芝が広がり、公園の中心である噴水を起点にして、東西南北に分かれた、赤レンガが敷き詰められた通路が方々へ枝分かれしている。二人は、その中心地点である噴水の近くに設置されていた、雨を防ぐために天井のあるウッドデッキのベンチに座つていた。

そこで竜蔵は学園にいる木佐貫に自身の携帯電話で連絡を入れ、刀子はウッドデッキのベンチで、静かに姿勢良く座つてゐる……。

「ああ、確かに第1-1区の連中だつたみたいだ。それはちゃんと吐かせたから問題は無いんだけど……」

『問題は無いのだけど?』

竜蔵の耳に当たられたスマートフォンから、木佐貫の落ち着いた声音が聞こえている。

「どうやら、あいつらは外部の人間から金で雇われてたらしいんだ。それも一人2万だと……俺に喧嘩売るのに2万で受けるとか、安く見られたもんだよ」

『確かにそうですが、街のチンピラの小遣い稼ぎなんて、そんなものですよ。ただ、私が驚いているのは、外部からの犯行だつたという事もありますが、それよりも“会長の勘がまた当たつた”事です

ね

驚いているとは言つていてもの、やはり声に抑揚を入れてくれないため、全くそつといった気配の無い木佐貫の落ち着いた様子。む

しろ、彼女から出てきた突拍子も無い事に、竜蔵が驚いていた。

「“また”ですか……あの人は、ホントに人なのかよ?」

『私も小さなときから一緒に育つてきましたが、の方の勘や物事の感じ方は常人には理解しかねる領域にある様に思います。だから、私たちの様な凡人がいくら考えたところで、の方には遠く及ばないでしょ?……』

「確かに」

呆れたように木佐貫の考えに同意を示す竜蔵……その姿を、ベンチに姿勢良く座っていた刀子が静かに眺めていたのだが、当の本人は噴水に視線を向けているので、それに気付いていない。

『まあ、の方をものに出来る人は、いるにはいるのですが……』

「はい? 『ごめん、良く聞こえないんだけど?』

『いえいえ、何でもありませんよ~』

何やら携帯電話の向こうで、勝手にこちらには聞き取れない声で独り言を呟いていた木佐貫に、竜蔵は怪訝な顔をするも、話を進める事にした。

「とりあえず、俺らはこれからどう動けば良い? 一応、敵方が釣れたけど、まだやるのか? てか、また釣れるのか?」

『それは無いでしょ、あれは敵戦力の把握および目的を探るための尖兵みたいなものです。その辺のチンピラでは相手にならないと理解出来たでしょ? し、桐嶋さんが相手の内情を知ろうと“意外にも”尋問をなさつたので、相手側はこちらが情報収集をしていると当たりを付けたはず。なら、もうアナタ達に探りを入れるような事はして来ないでしょ? ……よつばどの馬鹿でなければ』

途中、木佐貫なりの皮肉を込めた言葉も入っていたのだが、竜蔵はそれに気付けず、ただただ彼女の分析に「そうか」とだけ短く答えた。

「なら、俺らは戻つていいのか?」

『そうですね……いや、戻るよりも、その辺をブラブラしていくください。一応、あなた方は情報収集として動いている訳ですし、暇

があれば気の向いたときに聞き込みでも行なつていてくださいな『どこかこちらを労つていいかの様な聲音に、竜蔵はどひにも怪しいと考へていたのだが。確かに木佐貫の言つ事も一理があるので、それに甘える事にした。

「分かつた、だつたら好きに暇を潰してくるわ」

『はい、よろしくお願ひします。それと、どうしても途中で刀子さんを襲いたくなッ

プー、プー、プー……。

木佐貫との連絡も済んだ竜蔵は、携帯電話の通話モードを切ると、そのままベンチで静かに座つていた刀子へと振り向いた。

「千代女さんは何と？」

視線を合わせると同時に、刀子が至極真面目な凜々しい表情で、竜蔵に問いかけてきた。

それに竜蔵は「もう相手も来ないだらうから、好きに街を周れだとよ」と、疲れたという溜息を吐きつつ答えた。

「そうか、なら私はまだ情報収集を続けようと思つたが、君はどうする？」

刀子は言ひながら、春の風が吹く中、ゆうべつとベンチから立ち上がる。

その様子を一瞥しつつ、竜蔵は一拍の間だけ考える素振りを見せ

……。

「俺は妹を探そうかと思つが……そうだな、ついでに何か買い物でもするか？」

などと、目の前の刀子に逆に聞き返した。

田の前に立つ男から、予想だにしなかつた誘いを受けた刀子は、一瞬惑うも何とか持ち直し、相手の意図を探るために視線を合わせた。

「私は情報収集を続けると言つたのだが……」

「それについてで良いし。てか、お前にとつても別に悪い話じゃないから、とりあえず頷いておけよ」

押しの強い……というより、どこか先輩が後輩を誘うときの様な雰囲気で、竜蔵が渋る刀子に同意するよう他意の無い微笑みを向ける。

その微笑は、竜蔵の普段は仏頂面な表情とのギャップで、何故か相手を安心させるような優しさが滲み出でていた。

おそらく彼は、もともと妹が一人もいる身分なので、外見や行動とは裏腹に面倒見の良い性格をしているのかもしれない……が、当の刀子は、そんな事など知る由も無い。

「いや、これまでの君の行動を振り返つていくと、かなり不安を覚えるのだが？」

「お前は失礼だな？ 僕の何処に、そんな不安がらせる要素が有るつてんだ」

心外と、竜蔵は当然の抗議を入れるのだが……。

「東野台での軽率な行動や、尋問のためとはい、性的な暴力に出るぞという脅しを、何の躊躇いも無く行なつた事……これらをたつた2時間程度の間にやつてのけたのは、正直不安を覚えるには十分すぎる判断材料だと思うが？」

今回の聞き込みに出向いた筈の計画が、自身のせいで頓挫してしまっている事を指摘され、竜蔵はまだ10代にも関わらず、ぐうの音も出ないという心境に立たされてしまった。

しかし、ここで何か言い返さなければ、今の誘いが下心のあるものだと勘違いされてしまう。

それは断じて無いと、竜蔵は己のプライドを賭けて、この状況を打破するために、強引に口を開いた。

「それはそれ、これはこれだろ！？」

「君は一度、自ら私の立場になつてみて、今の言動を吟味する必要がある様だ」

無理矢理に出した竜蔵の言葉に、刀子は頬を引き攣らせながら、

呆れた様子を見せていた。

「……」

そんな彼女の視線と表情に、意心地を悪くしたのか、竜蔵が無言で反省したような、不貞腐れたような仕草を始めた。

正直、筋骨隆々の男が、こうじつた子供っぽい態度を取る姿はどこかシユールな光景だったが……どうやら、その光景に耐えかねたのか、刀子が仕方ないといった様に頭を片手で押さえた。

「はあ……分かつたから、そんな情け無い子供みたいな態度は取らないでくれ。一応、君は私に勝った身なのだとぞ？ 確りしてもらわねば、私が負けてしまったのが馬鹿みたいではないか」

「ふふん 勝負事で勝ち負け以前に、相手の性格にまで口出しするなんて、お前もまだまだ子供じやん」

音を上げた刀子に対して、なにやら得意げになる竜蔵……。

そんな彼に刀子は再度、呆れるように溜息を付いたが、どうやらこれも目の前の男は無視したようだ。

「まあ、そんな事はどうでも良いんだよ。とりあえず、ここから動くから着いて来いよ？」

言いながら、竜蔵はアクティブに呆れている刀子を置いて、ウツドデツキのテラスから軽快な足取りで出て行ってしまう。

それに根負けした刀子も、普段は凜とした歩き方は成りを潜め、どこか仕方なくついていくといつた雰囲気を醸し出しながら、竜蔵の後を追うのであった。

竜蔵からの連絡を終えた千代女は、隣でいつも通りの微笑を浮かべながら、正面のスクリーンに閉じられた瞳を向けている姫樹に視線を向ける。

「どうやら、会長の“勘”はまたしても当たったようですね

「そうね~

」

訳も無い……いや、当たつていて当然だとでも言うかのよつて、

姫樹は特に何することも無く千代女の言葉に相槌を打つた。

「桐嶋さんの所に当てられた12人の方々は、どうやら何者かに雇われて第十一区から来ていたようです。それも一人2万円だとか……」

「安く見られたものね、桐嶋君も刀子ちゃんも。私だつたら、もうちょっとお金を積んだ後に、必ず相手を潰すための装備を持たせ、蜘蛛の巣の様に張り巡らせた罠を張つてから当てるのだけれど……まあ、彼らの事を良く理解していないようだったから、仕方ないわよね」

朗らかな微笑みを浮かべてはいるが、考えている事が徹底的な黒い思考という事に、色々と他者から見たら背筋が凍るような思いをするかもしれない。

だが、ここにいるのは昔から一橋姫樹という高校三年生の少女を知つてゐる千代女しかいない。

故に、彼女の裏の顔ともいえる黒い部分が垣間見えようとも、全く表情は変えず、整然とPCのディスプレイに注視している。

「確かに、彼らの並外れた身体能力や格闘技術を知つていていたのなら、それくらいは必要でしょう。まあ、そんな事よりも、一応相手方の裏に繋がりそうな情報は得られたので、これを元に探りを入れてみますが……」

言いながら、千代女はPCのディスプレイから正面のスクリーンへと視線を移す。

そこには、何者かに都会の裏路地で追われている、竜蔵に妹

桐嶋美夏の姿があつた。

彼女は、持ち前の柔軟性や驚異的な身体能力を駆使して、追つ手から悠々と逃げ続けているのだが、相手もなかなかしぶとい上に、あまり加速が出来ない狭く、すぐに曲がり角が現れる道のせいで撒くに撒けない状況が続いていた。

「美夏さんが気になるの？」

正面のスクリーンに目を向けた千代女に、姫樹が視線は向けぬままに問いかける。

「ええ、少々梃子摺つている様ですし、それに……」

「伏兵がいる場所に誘き出されている?」

「その可能性があります……美夏さんも美夏さんで、どうやら自分で追つ手の事は解決しようとしているので、余計に心配です」「人目のつかない裏路地。これなら、どこにでも伏兵なんて忍ばせられる……確かに心配ね、あの美夏さんがいくら桐嶋君から英才教育を受けていたとしても、素人の女の子が男一人以上を相手にするなんて無謀だわ」

「ですね……会長?」

「はい、なんでしょう」

千代女が、隣にいる姫樹に眼鏡越しの真剣な表情を向ける。

それが何を意味するのか察しがついている姫樹の表情は、どこか楽しそうな雰囲気を醸し出している。

そして、千代女があくまで事務的な聲音で言葉を続けた。

「これから私が直接、彼女の救援に向かいたいのですが……ここをお任せしても宜しいでしょうか? 探りの方は、向こうで美夏さんを助け、追つ手の方から情報収集をした後に行なうので」

「ええ、任せて頂戴 あと急ぐでしょうし、車庫に駐車してるバイクも使って良いわよ

「ありがとうございます」

姫樹の軽い許しを得ると、千代女はキヤスタ付きの椅子から立ち上がり、深々と一礼をした後、すぐさま教員用のPCルームから立ち去つていった。

千代女が部屋から出て行くのを一瞥した姫樹は、再び視線をスクリーンへと戻す。

「さて、千代女が直接出向いたのなら、私はただ状況を眺めていれば良いということね」

この言葉からも、姫樹が千代女に絶対の信頼を置いている事が伺

えるであろう。

それだけ、彼女は様々な物事に関して優秀な人材なのだ。

そして一橋姫樹という少女は、彼女の様な優秀な人材を、すぐに欲しがる癖が有る。

どうしても、目の前にどんな分野でも突出した才覚を持つ者が現れてしまうと、様々な手を駆使して自身の傍に置きたくなってしまうのだ。

他者から見れば悪い癖の様に思えるが、彼女や彼女の周りの人間は、一切そういう事は思っていない。不思議な事だが、それだけ彼女の“眼”は正しい人材を選定し、結果を生み出してきたのだ。そしてまた、今の彼女の胸中には、欲しい人材がすでに一人ほどリストアップされている。

一人は既に引き込むための最終段階に入った……そして、もう一人は今、目の前のスクリーンで走る姿が映し出されている。

「この娘は私の直感通りの娘なのか……それとも、それ以上なのか？」お手並み拝見といきましょうかね

胸下で腕を組みながら、姫樹はいつも閉じられている瞳を珍しく少しだけ開く。

すると、このスクリーン以外の明かりが無い暗い室内でも、妖艶な輝きを放つ血の様に“紅い瞳”が姿を現す……もし、この場に誰か他の人間が存在していたのなら、彼女の瞳を見た瞬間に、確実に意識を奪われてしまうであろう。

それ程に美しく、そして吸い込まれるような魅力を持つた“赤い瞳”。

これが、人の才能や可能性を見抜いてきた姫樹の瞳の色であった。

狭く、薄暗く、そして何やら表の通りとは違つた臭いがする裏路地……。

人通りなんて皆無に等しく、建物と建物の間から差し込む太陽の光だけが視界を明るい光で照らしてくれるが、その殆どが建物の影によつて陰気な印象を持たせている。

走れど走れど同じ風景。

アスファルトの地面にコンクリートの壁……時たま室外機や猫などといった、少しだけ違つた光景も見られるが、基本的に一般人にとって長くは居たくない空間。

そんな中を、先程からひたすら走り続ける美夏は、少々焦りを感じていた。

（意外に離せないか……結構、相手も足には自信有るようね）

しなやかに伸びる脚を軽快な回転数で走らせ、自慢の長い黒髪を風に揺らしている最中、美夏は胸中で後ろから追つてきている一人の謎の男に対して、改めて警戒心を募らせていた。

そして目の前に曲がり角が見えれば、すぐに柔軟な体捌きで、ほぼ直角に近いコーナリングを見せる。

これまで既に10分以上を走つてきていたが、未だ衰えどころか乱れすら見られない……ペース自体は中距離を走るときの7~8割で走つてるので、これは驚異的な持久力とも言える。

しかし、流石にこのペースで長い時間走るのは人体的に難しいものがあるのか、美夏の顔には汗が流れている。

（たく！しつこいつたら無いわね、糞の分際で……。あ～ん！こんな事になるんだつたら、力ずくでもお兄ちゃんに助けを頼むんだつたよー！）

後ろから追つてくる男が、今しがた美夏が曲がった場所を、大外回りで曲がりきる。

今の男のコーナリングを見る限り、どうやら根本的な身体能力は美夏の方が上みたいだが、どうにも走つている環境が悪いせいしかれないので、

ここは大通りに出るべきかと考へるも、どの道が大通りに通じているのか分からぬために、ほとんど直感で走り続けているのだが、

一向に人通りがある場所には辿り着けない。

むしろこれは、どんどん墓穴を掘っているのではないかと勘ぐつてしまふほどであった。

（でも、今はそんな事を後悔してる暇なんて無いわよね！）  
進めど進めど人通りのある道には出れず、どう離すか？ どう撤くかを考えようとも、狭い裏路地という空間では名案など浮かぶはずも無い。

携帯で連絡？ いや無理だろう  
直線の道での走りならまだしも、こうも曲がり角が多くては、迂闊に意識を別方向へと向けるのは愚行と言える。  
ならどうする……？

自身が裏路地の迷路の行き止まりに辿り着く前に、思考の方が行き止まりへと先に辿り着いてしまう。

（これはもう一か八か、撃退するしかないのかな……）

だがリスクが大き過ぎる……。  
もし相手が強くて、撃退に失敗し、逆に捕らえられてしまつたのなら？

そうなつてしまつてはもう、創作物の世界でなければまずは無事では済まないであろう。

具体的に言えば、世の中が騒いでいる児童ポルノの問題なんて、屁のツッパリにもならないぐらいに身体的・精神的な傷を負わされてしまつ。

自身が世界で最も愛している兄に貰つてもう前に、他の肩または糞または蛆虫にも劣る劣等愚民に傷物にされるなど、有つてはならない事なのだ。

今はこの様にハイリスク・リターンという、撃退しても次が予測不能な不公平な状況なのだ……慎重に選択肢を選んでいかなければならぬ。

が  
しかし。

「えッ！ うそッ！？」

美夏が、もう何度目か分からない曲がり角を曲がると、そこにはコンクリートの壁が聳え立つ、閉鎖的な空間が広がっていた。

そう、美夏は遂に行き止まりへと辿り着いてしまったのだ。

後ろから、これまで美夏の事を追いかけていた男の足跡が、駆け足で近づいてくる……。

まずい 紛く逃げなければ

でもどこへ？

正面を見ても、無機質な色しかないコンクリートの壁。

後ろに振り返ってみても、先程曲がってきたばかりの場所以外に何も無い。

すると、とうとう追っ手であった男が、美夏の目の前に現れた。

「はあ……はあ……梃子揺らせやがって」

背丈はそれ程高くは無く、体型も細身でいかにも現代人といった雰囲気を醸し出す、アパレルショップからこれまで美夏を追いかけてきた男性店員は、春用のシャツを汗で濡らし、顔や体にも大粒の汗を大量に流している。

どうやら、美夏とは違つて、男の方は相当無理をして走っていたようだ。

（拙いわね……これは本格的に）

「は、はは！ 間違いねえ、写真の女だ……」

目の前に現れた、体型も何もかもどこにでもいそうな金髪の男の様子に、美夏は気味悪さと身の危険を感じ、身構えながら後退る……。

右肩を前に出した、真半身の構え……左利きである美夏が、もつとも動きやすい形で、足の置き方もスタンスを広げるのではなく、すぐにもステップを切れるように、ほぼ自然体で置かれている。また、荒事には免疫が無い美夏は、余計な力みが生まれないよう、元気でガードを挙げていない。

その構えた姿は、表情に焦りは見えて、これまでの彼女とは違

つた、可愛らしいではなく、凛とした印象を持たせていた。

当然、これは兄直伝の美夏専用の構えだ。

しかし、そんな裏事情など知った事かと、男は黒いジーパンのポケットから携帯電話を取り出し、ディスプレイを覗いた。

「へへへ……悪いが、ちょっとアンタの写真を撮らさせて貰うぜ？  
ああ、服は脱がなくていいぜ？ なぜなら、俺が脱がすんだからな！」

（うわ……気持ち悪い）

走ったせいで汗まみれ・息切れの激しい男の様子に、美夏は嫌悪感を抱かざる負えない。

それに、なんだか勝手に発情して鼻息も荒いし……やつぱり、お兄ちゃん以外の男なんて、生きてる価値すらないかも知れないね。美夏は目の前の男と対峙している最中、そんな事を直感的に考えていた。

しかし、嫌悪感を抱いている美夏などお構い無しに、男がジリジリとこちらへと間合いを詰めてきた。

男の体勢は、今にも美夏へと飛び着いてやろうと、前傾姿勢になつてている。

気持ち悪い……ますますもつて、気持ち悪い。

美夏があまりの嫌悪感に表情を歪めていると、男は何を勘違いしたのか。

「おお、いいね、その恐がつた顔。ゾクゾクするわ！ 特に下の方なんて、もう外に出たがつて仕方がねえって言つてるよ……」

恐がつてゐるんじゃない、生理的に受け付けないだけだ。

そう言つてやりたいところだが、事実、美夏はあまりの緊張に体が強張りそうであった。

いけない……お兄ちゃんに言わっていた事は、どんな事があつても、体の反応を鈍らせる無駄な力は入れるなつたと、美夏は自身を落ち着かせるために、兄の言葉と“声”を思い出していく。

『そうじゃない。股関節の力と脊柱起立筋の力を抜きながら立つん

だ

『丹田つてのは、『リリ』下腹部の辺りにあるんだ。擦つてやるから、意識してみる』

『柔らかく…… そう、お前は柔軟性が武器なんだから、無理な体勢でも出来るだろ（蹴りを）？』

『脚の形といい、腰のしなやかさといい…… お前はホント、良い体してるよな（競技者として）』

『そう、上下に動いて（膝のバネを使つた、構えている最中のリズム取り）……』

『可愛いよ、美夏』

『大好きだ、美夏』

『抱かせてくれ、美夏』

（そう、思い出して…… そうすれば、お兄ちゃんが力を貸してくれる…）

前半が色々と勘違いされそうな発言集で、後半はほほ美夏の妄想であつたが、どうや彼女にはそれで十分すぎる様であった。

恋する乙女とは、時に驚くべきポジティブ思考を誇るもの……それが常時解放できる状態なのだから、彼女は有る意味で精神的にタフな面を持つていると言える。

しかし現状は精神的なタフさを有してこよつとも、田の前の鼻息荒く迫つてくる男をどうにかしなければ打破できない。

「はは、そう下がるなつて。でも、壁際まで行つてくれるんなら手間が省けるよ。だつて、あとはケツを向けさせれば突っ込んでやるだけだからなー！」

「……」

自身の優位性を確信している男は、ビームでも下品な言葉を吐いてくる。

それを精神的に落ち着いた美夏は、無言で眺めている。

あと一歩…… 実際には、美夏と男の間には5歩分の間合いか空いている。

だが、竜蔵から自身の特性に合わせてもらつた闘う術を教えられた美夏には、これでも射程圏内の距離。

「へ、へへ……ホントに良い体してんな、アンタ。それに顔もメチヤメチヤ可愛いしょ~」

あと1歩……ジリジリと詰められてくる間合いで、美夏の集中力も更に研ぎ澄まされる。

ゆつくりと、膝にバネを最大限利用できるようにするため、ちょっとした溜めを作つていぐ。

自然立ちから少しだけ曲げられた美夏の傷一つない綺麗な両膝に、劣情に囚われた男は気づいていない。

「そうだ、そのまま怖がつてくれよ 無理矢理つてのは燃えるか……」

男が前傾姿勢の大勢で、美夏の最も得意とする間合いで足を踏み入れた その時であった。

「ふツ！」

美夏が短い息吹と共に、ほぼ無<sup>ノーコーション</sup>拳動で中空へと舞い上がった。

「へ？」

突然視界から消えるほどの跳躍を見せた美夏に、間抜けな声を漏らしながら目を奪われる男。

しかし、完全には美夏の跳躍を追い切れず、男は彼女を視界の外……つまり死角へと逃してしまつ。

（お兄ちゃんが言つてた。人間は、自分の想像を上回る事が起きたと、一瞬硬直を見せるって）

弾まないアスファルトの地面からの跳躍だったにも関わらず、男の頭上を悠々と舞いながら、伸身の錐揉み回転を魅せる美夏の動き。それは驚異的な脚力と、強靭なバネや瞬発力が無ければ有り得ない跳躍。

そして美夏は、男の頭上を中空で頭と足を上下逆さにした状態から、体勢を元に戻す回転を加えながら、利き足である左足を後ろへと振りかぶり……。

「スパーングッ！」　　と、男の後頭部を、宙に舞いながら足の甲で蹴り抜いた。

「あう……」

相手を見失つたと同時に、突然後ろから襲つてきた美夏の蹴りの衝撃。

これに男は脳を完全に揺らされてしまい、蹴られた勢いで前めりに崩れ落ちてしまう。

そして男の後頭部を蹴り抜いた美夏は、元いた位置から扇を描いた曲線の跳躍のまま、地面へと華麗に着地をして魅せた。

舞つていた空から地へと降り立つた美夏は、乱れた髪を整えながら、意識をすでに刈り取られた男へと、完全にゴミでも見るかのような見下した目を向けた。

「私の身体に危害を加えようなんて、身の程を知りなさい、この劣等生物が」

絶対零度の視線……美夏の怒りは計り知れないが、もしこれが特殊な性癖の持ち主だつたりすれば、これだけで「褒美となつてしまいかねないものであつた。

しかし、そんな視線を裏路地に転がつた生ゴミに長々と向けてやる義理はない。

美夏はそう考え、この薄暗い空間からをつとじようつと考へたのだが。

（うん？　でもおかしい……どうして“ゴミ”は、私のことを執拗に追い掛け回し始めたの？　そもそも、コレはショップの店員だつた筈でしょ？）

ここで美夏は、そもそも何故、自らがここまで追われなければならぬのかという疑問に行き着いた。

おそらく、これまで只管に逃げていたから、根本的な問題を考える暇が無かつたのであらう。

浮かんできた疑問は、すぐに処理せねば納得がいかない。もともと勤勉でもある美夏は、そういうた疑問の下、すぐさま行動に出る。

まず、うつ伏せで倒れ伏している男に歩み寄る。

次に、そいつの右側面へと位置を移す。

放り出された男の手……さらに言えば、その右手首に、まずは左足のつま先を置く。

そして仕上げに、右足の甲で男の小指を、下から迫り上げていけば……“パキッ！！”

「あッ、ああああああ！！？」

枯れ枝を折った時の小気味よい音と共に、苦痛の悲鳴を上げながら男が目を覚ました。

「あら、おはよっ。一回で目を覚ますなんて、残念ね」「あ、あがああッ！？」

目を覚ました男は、激痛を感じた右手へと視線を移す。

そこには、右手首を踏まれ、小指が本来なら有り得ない方向へと向いている光景が広がっていた。

しかし、男の悲劇は更に続く。

「こっちに顔を向けないでくれる？ 汚いから」  
グシヤツ！ と、男の顔面が美夏の右足によつて蹴り抜かれる。

突然の正面からの蹴りに、男は鼻から出血し、あまりの痛みに苦悶の表情を浮かべてしまう。

また、脳震盪から目覚めたばかりなので、状況整理と視界が定まらない。

そして更に言えば、頭もそうだが下半身にも力が入らない。完全に足に来ていた様だ。

相手が反撃が出来ないと判断すると、美夏は再度、男の折れた右小指を右足のつま先で踏みにじった。

「あああああッ！！」

「痛いでしょ？ やめて欲しい？ やめて欲しいなら、今から私が言ひ事に全部答えなさい。答えられなかつたら……分かるでしょ？」

一応ゴミ以下の分際でも、脳みそつていうのがある様だし

戦慄を覚えるよつた微笑みながらも、どこか妖艶な雰囲気のある

美夏の表情。

普段の可愛らしい彼女からは考えられない魔性の微笑みで見下ろされている男は、その顔すら禁める事が出来ずに痛みにのた打ち回る。

いい加減、男の癖に悲鳴しか上げない相手に嫌気が差してきたのか、美夏は更に器用な脚捌きで、今度は右手の薬指の腹に右足の甲を潜らせた。

「ねえ？ いい加減に泣き喚くの止めてくれないかしら……あまりにも汚い声だから、耳が穢れそうなのよね」

また折られる 完全に恐怖心を掌握されてしまった男は、唇を噛むようにして漏れ出てきそうな悲鳴を飲み込み、美夏の要求に首を振る事で答えた。

「そり、なら質問するわね？ お前は何で私を追いかけてきたの？ 明確な理由が出てこなかつたら……察してくれたかしら？」

「はつ、はい！」

底冷えしそうな聲音で尋ねてくる美夏に、男は視線を合わせずに怯えた様子を見せる。

だが、喋らなければ折られると……まだ視界や思考が朦朧とする中、それだけに狂信的に囚われながら男は知つてゐる事を洗いざらに話したのだった。

## 執行部のお仕事（7） 空を舞う妹・容赦のない妹（後書き）

次回は息抜きとして、竜蔵と刀子の繁華街歩きと、美夏と木佐貫の遭遇。

そして、美夏が行きのバス内で気にしていた、あの場所へと竜蔵と刀子が入ってしまいます。……。

また、美夏の戦闘描写は半ば読んで下さっている方々にイメージしてもらうといつ、読者頼りな感じになっていますが、大丈夫でしょうか？

まだ一回しか書いていませんが、分かり難くは無かつたでしょうか？

それだけが心配です。

## 執行部の仕事（∞） 強引なプレゼンテーションを打ち切り（前書き）

今回も、あまりチョックなく、1万5千文字を垂れ流しです。

## 執行部のお仕事（8） 強引なプレゼントには気をつけろ

「なるほどねえ……私の盗撮画像が、そんなに高値で取引されたの」

「あ、ああ！　だ、だからもう許してくれ！　ほ、ほんの出来心だつたんだ！！」

美夏に右手首を踏まれ、既に小指を折られている男は、まるで命乞いでもするかのように必死の懇願を、じわじわを絶対零度の視線で見下ろしている美夏に向ける……が。

パキンッ！！　　「あ、あ、ああああッ！！？」

地に伏せる男の願いなど美夏が聞き入れるはずも無く、更に男の薬指が、彼女が右足に履くローファーの底によつて反り返るよつこ折られた。

枯れ枝が綺麗に折れた様な、実に小気味良い音……しかし、このコンクリートに囲まれた裏路地の行き止まりで木霊したのは、人間の骨が折られる音だ。

しかし、そんな痛みに歯を食いしばりながら悶絶する男を眺めていても、美夏の冷たい表情に変化は見られない。

そして更に、美夏は男の中指の腹に右足の甲を捻り込み、器用に動かして男の中指を靴底で押し込む形へと移していく　　その様は、まるで足で紙などを一つ折りにするかのようだ、傍目から見れば滑稽なものであつたが、やつて本人のバランス感覚や、やられている本人の心情などを察すると、笑い事では済まない。

「や、やめてくれッ！！？」

痛みに悶えていた男が気付き、驚いたよつて反応するが

パキンッ！！

再び、このコンクリートとアスファルトで構成された都会の薄暗い裏路地に、男の骨が折れる音と悲鳴が響き渡つた……。

あまりの痛みと恐怖で脳震盪から田<sup>だ</sup>が覚めだばかりの男は、また再び白目を剥きながら失神している。

そのままのままにしたくなかった。

その直ぐ傍で、美夏は男の後頭部を蹴つたり、指を折つたりに使つたローファーを使い捨てのティッシュで綺麗に拭き上げていた。理由は簡単だ……ただ、兄以外の男が触つた・触れた物を、いつまで

それだけの理由だ。

まだ新品同様の艶を持つているローファーを拭き終えた美夏は、とりあえずここから出ようと、肩に掛け直していた鞄からスマートフォンを取り出し、GPSの地図アプリを起動する。

スマートフォンのディスプレイを眺めながら、男から得た盗撮についての情報を、頭で整理していく。

（私の盗撮画像がネットに出始めたのが、入学式から直ぐの事……で、その肝心の画像は、どう見ても私自身の協力が無ければ撮れない、かなり距離の近いものばかり。更に言えば、その盗撮画像の他にも、サイト運営者を名乗る男から、私やサイト内にHPされた被害者達の写真を撮つてきたり、内容に応じて賞金が支払われる……本当に糞みたいな奴らね）

美夏は裏路地が迷路の様に展開している地図を眺めつつ、このコンクリートの壁やらアスファルトの地面しか見られない閉鎖的な空間から出ようと、歩を進め始めた。

状況は、かなり芳しくは無い。

湧き出る嫌悪感や、自身が現状置かれている立場に対して感じる、背筋を這い回るような気味の悪い感覚……出来れば、今すぐにでも兄や家族の下に行つて、抱きしめてもらいたい。

そうすれば、幾分かは守られていると肌で感じる事ができ、少し

は安心できるかもしない。

だが今は、人通りが皆無と言つても過言ではない、「コンクリートの迷路を行き来している。

こんな所に、自分が望む存在が駆けつけてくれるとは思えない。故に進む……胸を張り、背筋を伸ばして、気丈に振舞いながら気を紛らわす。

しかし、もう何度目か分からぬ角を曲がったところで、美夏にとつて最悪な光景が広がつていた。

（そんなつ！？ 二人も！）

曲がり角を曲がつたばかりの美夏の目の前に、先程蹴り倒した男よりも体格の良い二人の若者が、狭い道を塞ぐように、こちらを向きながら佇んでいた。

いくら兄の英才教育を受けていた美夏でも、一人はまだしも二人となると手に負えない可能性がある。

正面に佇む二人の男達に、まだ反応は見られない。

しかし、次の瞬間には一人の男が同時に前へと体勢を傾け始めた。走り込んでくる 美夏の脳裏に、最悪の状況というものが過ぎつた。

二人の男に取り押さえられ、服を剥ぎ取られ、肢体を弄られ……嫌だ、絶対にそんな未来は迎えたくない。迎えてしまつた場合、一生癒えない傷が残されてしまうかもしれない。

そんなことになつてしまつたら、愛する兄に見放されてしまうかもしれない……。

美夏が、こちらに走り込んでこよと前傾姿勢になり始めた男達に対して、恐怖を感じつつも精一杯の構えを取つた瞬間。彼女が感じていた恐怖心は、杞憂に終つてしまつた。

「あれ？」

先程の男を蹴り倒した際に見せた、右肩を前に出した真半身の構えを取つていた美夏が、目の前の光景に間抜けな声を漏らしてしまつた。

なんと、前傾姿勢で走りこむ体勢に入っていたと思われていた男達が、まるでドミノ板の様に、力無く、体の真正面からアスファルトの地面に倒れこんでしまったのだ。

前のめりで倒れ伏せる際、男達の顔面がアスファルトに叩き付けられ、頭部がボールの様に弾むが、男達に目を覚ます気配は無い。突然、うつ伏せで沈黙してしまった男達を、美夏が訳が分からないと言つた風に眺めていると。

「どうやら間に合つた様ですね」

この閉鎖的な空間に、全く相容れない落ち着いた様子の女性の声が聞こえてきた。

もしこれが、夜などであつたら、思わず身をビクつかせてしまう所であつたが、幸いまだ15時の時刻を回つたところ。

故に美夏は、倒れ伏せた男達から声がした方向へと視線を上げていつた。

そこには、一人の同じ学園の制服を身に纏つた女子生徒が立っていた。

特徴的な大きな丸眼鏡や、三つ編みで結われた長い黒髪……背筋の伸びた立ち姿や、スラリと長い脚は、彼女の体型がとても整っている事を示している。

背は自身よりも少し低めだが、制服の左胸にある色つきの刺繡で、自身よりも一つ上の三年生だという事が分かる。

そして、そんな先輩の女子生徒を呆けた視線で美夏が眺めていると……。

「挨拶をするのは初めてでしたね。初めまして、私は生徒会副会長兼書記係の三年、木佐貫千代女と申します。以後、お見知り置きを

……

事務的な聲音で自らを名乗り、目の前の地味な格好が特徴の女は、これまた事務的にペコリと一礼をする。

しかし、突然の状況の変化に少々戸惑い氣味の美夏は、千代女の自己紹介に対応しきれず。

「あ、えつと……」

「取り合えず」安心して下さい。私は貴女、桐嶋美夏さんに害を及ぼす者ではありません……列記とした一橋学園の生徒であり、生徒会のメンバーです。ほら、これが生徒手帳と生徒会メンバーに配られる会員証です」

言いながら、自身の懐から小さなワインレッドの手帳と、その中から一枚のＩＣチップ入りのカードを取り出す。

それをとにかく一端落ち着こうと、一度深呼吸した後に確認する美夏……いつの間にか、千代女との距離は、この確認のために大分近くにまで歩を進めていた。

「確認できましたか？」

「は、はい……その、危ないとこを助けて頂いて、本当に助かりました」

「いえいえ、こちらとしても、貴女に危害が加えられてしまうと拙いものでしたので」

相手の胸の刺繡の色から先輩だと理解していた美夏は、自然と畏まったく様子で千代女に頭を下げる。

千代女は、別に大したこととはいらないと、美夏のお礼に手を振りながら答えた……が、美夏には少し気になるところがあつたので、すぐに下げていた頭を戻し、千代女と視線を合わせた。

「あの、ところで、どうして私の名前を知っていたのですか？ それに、なんで私が危ない目に合つと木佐貫先輩が拙くなるのですか？」

冷静な者ならば、千代女との会話で必ず疑問に思う事を、美夏は助けてもらつた相手に失礼が無いように尋ねる。

それに対して、千代女は。

「その事に関してですが……とりあえず、一度ここから出ましょ。一応、目につく限りの障害は排除したのですが、また新たに出てくるとも限りません。表に出ると、私のバイクがありますので、そちらで……そうですね、桐嶋さんにも状況の説明が必要だと思います

ので、学園に戻りましょう」「

バイクという単語を出しても、とても一人で乗れるバイクに乗っている格好には見えないのもそつだが。それ以前に、突然現れ、突然男たちを倒し、突然こちらを連れて行こうとする千代女に、美夏は警戒心を覚え始めていた。

「どうして学園に戻らないといけないのですか？」

当然の疑問、だが千代女は極めて事務的に美夏の問いに答えた。「そこが貴女にとって、今一番安全な場所だからです。それでも信用出来ないと言うのなら、お兄さんに今から連絡をしてもらつて、私の素性確認を行つてください。一応、最近知り合つた仲ですので、私の信用を証明してくれる筈です」

「兄が……ですか？」

流石に初めて話す先輩の前で、“お兄ちゃん”という呼び名を使わなかつた美夏。

しかし、それ以前に田の前の千代女から、自身の兄に“信頼されている”という一コアンスの言葉が出てきたことに、内心で嫉妬の邪念を加熱し始めていた。

だが、実際いつまでもここで話している訳にはいかないし、現在の状況を教えてもらうためにも、美夏は千代女に着いて行かなければならぬ。

故に美夏は、懐疑心を捨て去れないながらも。

「……分かりました、そういう事なら着いて行きます」

まだ疑つてゐるが、その視線を向けつつ、千代女の提案に同意を示した。

「そうですか、意外ですね。もつ少し渋るのかと思いましたが……本当に、お兄さんには確認を取らなくて良いのですか？」

意外とは言いつつも、表情に変化は見られない千代女。

「はい、兄の言葉も大事ですが、実際に生徒会のメンバーのようですし。それに、目の前の助けて頂いた手前もありますし」

「ふむ。まあ、それでしたら早く学園に向かいましょうか。貴女も

現状、自分が置かれている状況を知りたいでしょうし……それに、貴女の事を待つていてる方もいらっしゃいますし

「待つていてる方ですか？ それは誰でしょうか？」

地図アプリを起動していったスマートフォンを鞄に戻しながら、美夏は不思議そうな聲音で言葉を返す。

自身を待つていてる人物？

しかも、この状況で？

もともと登場の仕方もタイミングも、どうも怪しい雰囲気が漂っているのを否めない千代女に対し、美夏は益々疑り深い視線を向けてしまう。

それに一瞬「ふ」と、美夏に対して初めて苦笑という形で表情を崩す千代女。

すると、その様子に美夏が「何か可笑しかしな質問でしたか？」と、不服そうにしていた。

「いえ。ただ警戒の仕方というより、警戒心の強さがお兄さん譲りなのかなと……不思議と感じてしまいまして」

「兄譲りですか……」

美夏の表情は真剣そのものだが、内面は兄に似ていると言われて、ガツツポーズどころか小躍りしそうな程に浮かれている。

それを察してかいまいか……千代女は、これまでの無表情や苦笑とは違つた、どこか優しそうな微笑を浮かべる。

「お兄さんに似てていると言われるのは嫌ですか？」

「い、いえ！ そんな事は……無いです」

内心を見透かされたのかと、一瞬驚きを見せた美夏であつたが、素直に千代女の問いに答える。

別に隠す事でもない……何故なら将来は、似るだけではなく二人の“愛の結晶”も作る予定なのだから。

「兄妹仲が良いのは、とても素晴らしい事だと思います。実際、貴女のお兄さんも素晴らしい方ですからね、大切にした方が良いですよ」

「はい、私にとつても、兄は尊敬できる人なので」

「それをお兄さんが聞いたのなら、さぞ喜ばれるでしょう。なにせ、

学年で成績トップの妹さんに尊敬されているのですからね……」

お世辞や社交辞令ではなく、目の前に立つ、奇跡とも呼べるぐら  
いに可憐かつ、異性を釘づけにしてしまいそうな肢体を持っている  
容姿端麗な二つ下の後輩に、千代女は心から思つたことを素直に伝  
える。

だが、いつまでもこうしてはいられない、本来の目的に戻るために、千代女は踵を返し、背中を美夏に向かた。

「さて、無駄話もこれくらいにして。そろそろ学園へと向かいまし  
ょうか」

問い合わせるような口調だが、既に歩を、Uのコンクリートの迷宮  
の出口へと進め始めてしまう。

「え、あ、待つてください！」

突然、有無も言わさず歩を進め始めてしまつた千代女に、慌てて  
着いて行こうとする美夏。

それを振り返りもせずに千代女は確認すると、なるべく歩調を合  
わせつゝも、少々急げるようペースをコントロールしながら、後  
ろから着いてくる美夏を先導していくのだった。

半ば強引に……いや、呆れるぐらい自分勝手に竜蔵が刀子を連れ  
てきた場所。

それは、今回の執行部としての仕事で始めに向かつた、東野台の  
地に立つ前。

行きのバス内で起きた、現代技術によつて生み出された最新機器  
に、まさか流行に敏感な筈の女子高生が、他者が見たなら絶句しそ  
うなぐらい戸惑うという一幕で感じた危機感を解消できる場所。

そう、それは……。

「「」」何だ？」

「見て分かれ。携帯ショップに決まつてんだろ？」

目の前に佇む、現在売つている料金プランやら新機種やらを宣伝している旗が何本も店前に並んでいる、正面が完全にガラス張りの携帯ショップに、古風どころか文明が一つか二つ遅れている状況の刀子はオドオドしながら、隣に立つ竜蔵へと視線を向けた。

その視線は、いつもの凜々しくも鋭いものとは違つて、どこか不安を隠しきれない少女そのものであった。

しかし刀子が、どんなに目の前の携帯ショップに物怖じしていようとも、なんものは関係無いとばかりに、竜蔵は勝手に歩を進めてしまう。

「ま、待つてくれ！？」

勝手に店内へと向かおつとした竜蔵の制服の右袖を、刀子は思わず反射的に掴んでしまう。

突然、制服の袖を掴まれてしまつた竜蔵は、若干鬱陶しそうにしながらも振り返りながら。

「早く來い……てか、別に恐がるところじやないだろ？ 携帯ショ

ップだぞ？ その辺の店と、なんら変わり無いだろ？」

「だ、だが……」、こういつた場所は、初めて来たのだ。仕方ないだろう……

普段のハツキリと物を言つ彼女からは考えられない程の、気の弱い様子に竜蔵は。

「じゃあ、このまま入るぞ。そつすれば良いだろ？」

「え？ あ、おい……」

まるでお化け屋敷を渋る子供を、無理やり中に連れ込むかのように、竜蔵は刀子に右の袖を掴ませたまま、店内の自動ドアを開け、中へと入つていつてしまつた。

当然、取り残されまいと、ほほ無意識に竜蔵へと着いていく刀子。

その表情には、既に彼女の涼やかで凜々しい雰囲気は感じられない。

「いらっしゃいませ~」

しかし、状況は既に狼狽している刀子を容易く置き去りにしていく。

目の前にはショップの店員である、上は長袖の白いワイシャツとベスト、下はタイトスカートを身に纏つた、目下の泣き黒子が魅力的な大人の女性が立つていた……そして、その後ろには様々な機種が並べられた棚や、4つの番号が振られた受付カウンターなどが、白を基調とした店内に設置されている。

「本日は、どのようなご用件で?」

「携帯が欲しいんですが、何か良いの有ります?」

「はい~」 それでしたら、こちらへどうぞ

刀子が店内をキヨロキヨロと、不安そうに眺めていると、竜蔵と店員が流れるように話を進めていく。

いや、むしろ話どころか、もはや他所の家に置かれた猫の様にしている刀子を置いて、さつさと2番の番号が振られた受付カウンターへと足を動かしている。

だが、そこはやはり日本中を探し見ても中々お目にかかるない身体能力と反応の持ち主。

店員と竜蔵に置いて行かれそうになるのを、再び前を歩む男の袖を掴んで阻止したのであった。

まあ、阻止したと言つても、ほとんど引き摺られる形で、受付カウンターへと連れ去られてしまつたのだが……。

「何か、ご希望などはありますか?」

焦り、狼狽している自身にとつて、いつの間にかに受付カウンターの店員側の席へと移動していた、大人な色香のある女性店員は、こちらにお客専用の席に座るように促しながら、早速、様々な機種が表紙として載っている自社のパンフレットを、カウンターへと並べ始めた。

店員から、「どうぞ、お掛けになつてください」のワードを聞くと、竜蔵は慣れた様子でカウンターに並べられた一脚の椅子を引くと、そのまま腰かけた。

刀子も、それに習つて、不安そうな顔をしながらも、椅子に腰を下ろした。

「そうですね……取り合はずスマートフォンで、予算は“4～5万

”くらいなんで」

「4～5万だと！？」

そんな金額、今の私は持ち合わせていない  
そう、驚きを  
続けようとしたが。

「心配すんなつて、金なら俺が持つてるから。お前は黙つて、そこで座つてれば良いんだよ」

しかし、刀子の驚愕を読み取ったかの様に、竜蔵が声音でも表情でも心配ないと、視線を隣に座る彼女には向けて答える。  
だが、流石に4～5万の金額を、同級生の男子に払わせるくらいなら、即刻この場から立ち去つた方が良いと考へた刀子は。

「いくら後から返すとしても、そんな大金を払わせる訳にもいかないし、ましてや返すにも大変な金額だ。流石に、相手に對しての思慮が欠けているぞ？」

などと、あまりの出来事から、ようやく立ち直つた普段の様子で、店を出ようと席から立とうとする。

「まあ、待つて」

「きやッ！？」

隣で、これまた何時の間にやら店員から勧められたパンフレットと睨めっこをしていた竜蔵が、席を立とうとしていた刀子の左腕を右手で掴み、そのまま無理矢理に元の席へと引き戻した。

そのあまりの引きの力と瞬発力に、刀子は思わず外見からは中々連想できない、とても女の子らしい短い悲鳴を上げてしまう。

しかし、そんな刀子など気にせず、竜蔵は視線をパンフレットの開かれたページに固定したまま告げた。

「金なら俺の奢りだよ……てか、簡単に言えばプレゼントだな」「普、プレゼントだと？」

個人的に、他人にはあまり聞かれたくは無い、情けない声を晒してしまった刀子は、珍しく、その白くきめ細かな肌をした頬を紅く染める。

だが、竜蔵から出てきた信じられない言葉に、顔を朱に染めながらも目を見開く。

当然だ、なにせ4～5万の買い物を、一介……ではないかもしないが、高校生が他人のために全額払うと言っているのだ。

これには、刀子のみならず、目の前で竜蔵にパンフレットに記載されていることを説明していた店員すらも、驚きの表情を隠せないでいた。

そんな雰囲気を感じ取ったのか、竜蔵は特にこれといって気にした様子もなく、パンフレットのページを捲りながら言葉を続けた。

「別に遠慮しなくても良いんだぞ？　お前も知ってるだろ、俺が去年だけで、そんじょそらのリーマンよりも稼ぎ出した事なんて」「だが、それでも受け入れる訳にはいかないだろ？　金額が大き過ぎる」

「受け入れる受け入れないじゃない、受け取れ。これはお前のためでもある以前に、俺の……いや違うな。俺の妹のためでもあるんだからな」

「妹さんのため……？」

話していくうちに、朱に染まっていた刀子の表情が、もとの白面へと戻つていく。

それに連れて、ショップに入った時から落ち着かなかつた心情も、次第に落ち着いていくのが感じられる。

どうやら、竜蔵から美夏を連想するワードが出て来た事で、今回の執行部の仕事について再認識できたのが要因となつた様であつた。「ああ。いま起こってる面倒事は、お前みたいな文明に取り残されかけるアノログには荷が重いし、そんなのが相方としていたら、

それこそ足手まといになる」

言葉足らずではあるが、竜蔵が何を刀子に伝えようとしているのか？

学園でも、常に成績優秀者として数えられる彼女には、確りと理解出来ていた。

要は、今回の事件はネット上の問題や、最新技術が用意されているかもしれない可能性がある、現代的な要因が多数あるため、連絡手段の確立など、こちらも最低限の事は用意しておこうという事だ。

本来なら、連絡手段の確立など、現代に生きる若者なら日常的に完了している筈なのだが、携帯電話を所有していない刀子にとっては、それが出来ていない。

故に、竜蔵は満足な体制を整えるべく、刀子に携帯電話を持たせようとしているのだ。

そうすれば、別に一緒に行動をしていなくとも、個々で動いて、なるべく多くの情報が得られる筈なのだ。

それが出来ないという時点で、確かに頭と容姿は良いが、現代的な争いとなると、剣の腕しか役に立たない刀子は、役立たずと言わても仕方ない。

この事実に、刀子が気まずそうに表情を俯かせている。

「まあ、でも気にするな。今日からお前も、これで文明人の仲間入りだ。金の事なら心配するな、去年稼いだは良いが、使い道が無さ過ぎて困つてた所だからさ」

「し、しかし……」

「しかしも何も、俺は妹の問題の解決のために、ただ金を注ぎ込んでるだけだぞ？ お前に拒否権どころか、気にする権利すらない」

「あのう、料金プランは“カップルプラン”で？」

「いえ、普通に学割で」

押しの強すぎる竜蔵に、完全に押し切られている刀子は、口ごもりながら反論しようとしても、すぐに言葉を発する前に棄却されて

しまつ。

そして更に、本人を置いて料金プランの相談にまで発展している、竜蔵と女性店員のやり取り。

カウンターの上には、学割プランの料金設定の内容が表記された、料金プランの説明用の紙が、既に置かれていた。

「だ、だが」

「黙つてろ。取り合えずパケ放題とか、必要なのは入れておくから、月額でいくら掛かるのかとか記憶しておけよ？ まあ、たぶん後で会長とか木佐貫先輩とかが、色々教えてくれるとは思うから安心しておけ」

言いながら竜蔵は、勝手にこれから刀子が使う事になる携帯電話の料金プランまで決めてしまった。

あまりにも身勝手、あまりにも傍若無人。

確かに最初の支払いはすると言つていたが、その後、こちらが支払う内容まで、刀子に相談すらせずに進めてしまう男。

本来の彼女なら、この様な輩は、すぐにでも木刀で黙らせる術を取るのだが……。

ここは学園の中でも無いし、ましてや先程、大立ち回りをしていた裏路地などといったアンダーグラウンドでもない、ただの携帯ショップだ。

故に、何を言つて良いか判らず、居心地悪そうにする以外、刀子には取れる行動が無かつた。

ありがとうございました

先程まで購入する携帯電話について、色々と話していた女性店員が、営業スマイルと嫉妬に塗れた邪念を織り交ぜた、新手の笑顔を浮かべながら、見事なまでの一礼を入れて、店の外へと出て行く一

人を見送った。

外は既に、そろそろ空が日中の色から、次の色へと変わってしまったのではないかといふ予感させていた。

人の往来も、次第にピークを迎えてある繁華街の情景。そんな中、携帯ショットから出てきた竜蔵と刀子の二人は、取り合えず落ち着ける場所へと移動しようと歩き出した。

「そ、その……本当に良かつたのか？ こんな高価な物を、私が無償で貰つても？」

人の行き来が盛んな歩道を、スラリとスカートから伸びる脚で、姿勢良く歩きながら、刀子が竜蔵に遠慮がちに尋ねてきた。

彼女の左手には、先程、竜蔵が刀子と自身の妹のために購入した、スマートフォンの箱を入れた紙袋がぶら下っていた。

どうやら竜蔵は本当に、刀子に対して料金プランなど合わせて、約4万7千円の買い物をキャッシュで行なつた様であつた……いくら自分で稼いだ金だとは言え、金遣いが荒いにも程があると感じる買い物だ。

しかし、当の竜蔵は訳も無いといつた風に、刀子の問いかけに視線を向けずに答えた。

「お前に使わせるために金払つたんだから、当たり前だろ？」

「いや、だがしかし……」

「気が進まないなら、その分、今回の事件解決に力を回してくれ。そっちの方が、色々と建設的だ」

「……」

それっきり、これでこの話はお終いと言外で語るよに、竜蔵は歩を早めてしまう。

突然の贈り物に、気持ちの整理どころか、本当に受け取つて良いのかすら判断できない刀子は、先を行こうとする竜蔵を、つい追いかけてしまう。

おそらく、色々と強引に話を進められてしまつたため、自分でもどうして良いのか分からぬからである。

後ろから、ちょっとした早歩きで着いてくる刀子を認めるに、竜

蔵はようやく彼女へと視線を向けるために振り返った。

「本當なら、ここで一手に分かれてつてのが理想なんだが……使い方、分からぬだろ?」

いきなり振り返ってきた竜蔵に、少々驚きながらも、すぐに言っている事を理解し、刀子は左手に持っている紙袋に視線を下ろした。そこには、今まで自分が持つとは想像だにしていなかつた、最新機器が収められた箱が入つてゐる。

だが、確かに竜蔵の言つとおり、この最新機器の使い方など、縁の無かつた刀子に分かる筈など無い。

「あ、ああ……」

別段、事情さえ分かつていれば恥ずかしくも無い問い合わせだつたのだが、そこはやはり現代の女子高生。周りの同級生が皆、当然の様に扱える物を、自分は一切扱えないという事実に、多少の羞恥心を感じてしまう。

そんな彼女の“らしくない”様子を見て、竜蔵は少し優しく微笑みながらも、取りあえずはそこからだと、次に向かう場所を告げようとする。

「だつたら、とりあえず静かなところが良いな。そつちの方が、俺も教えやすい」

「お、教えてくれるのは嬉しいのだが……その、本當に」

「ぐじい。さつきも言つたら? 悪いと思うんなら、早くうちの妹から盗撮魔を引き離してくれつて感じの事を」

「そ、それはそだが……」

「納得が行かないなら、将来返せる余裕があつたら返しに來い。取り合えず、俺はお前に“それをあげた”んだから、今は気にするな

本当に強引な男だなと思いつつも、これは一向に言つ事を聞く気が無いと判断した刀子は、腑に落ちない思いを感じながらではあるが、一先ずは受け入れようと、とりあえずは無理矢理に納得をした。彼女から一応の納得を感じ取つた竜蔵は、なら次は改めて場所移

動だとばかりに。

「じゃあ、この辺で俺が知ってる静かな場所に行くから、ちやんと着いて来いよ?」

と言つものの、ズカズカと先に行ってしまった。

「ああ、分かった……」

その彼の様子に、また身勝手さ……とにかく、マイペースさを感じた刀子であつたが、まあ今は言つ事を聞くしかあるまいと、微妙に疲れた様子で着いていくのであった。

着いていこうと思つてしまつたのは、本当に間違いだつたのかもしれない

「な、なななな……」

田の前に広がる、まだまだ日が落ちるには早いといつて、大体5階くらいで建てられた建築物群には、様々な色のネオンで照らされた看板が、この地域の在り様を妖艶に示していた。

そこに行きかう人々も、男女のペアで、各自どこか熱の籠つた浮かれ具合を醸し出している。

「さて、久々に来たけど、ここも変わってないな」

アスファルトの道路に、左右に立ち並ぶ建物の配置自体は普通のものだ。だが先に示したように、醸し出す雰囲気や色は、これまで刀子が見てきた・感じてきた中でも許容し難い、"いやらしき"もある。

「な、なんなのだ、ここは……」

「うん? ここか?」

あまりの非日常的な(刀子にとって)場の空気で、彼女は端正な顔立ちを真っ赤に染めながら、思わず前に立つ籠蔵に聞いてしまう。

しかし、刀子に聞かれた竜蔵は、訳もないといった声音で

「ここはホテル街だ

「あ、ああああ……」

その答えを聞いた瞬間、刀子からヤカンのお湯が沸騰した様な甲高い音が聞こえてきたような気がした。

また、彼女の特徴的な“刀の様に”妖艶で切れ長の瞳は、何度も瞼をパチクリとさせながら、閉じたり開いたりしていた……そして、既に顔だけではなく全身朱色に染まっている。

しかし、そんな後退りすらしてしまいそうな拳動すら見せている刀子に対して、竜蔵は。

「何してんだよ、早く行くぞ」

「あッ、おい！？ ちょっと待て！！」

持前のマイペースさと身勝手さを駆使して、彼女の紙袋を持つている左手を、同じく左手で掴み、そのまま強引に足を進めてしまう。当然、刀子もこんなネオンがかつた街並みを、男に手を引かれて進みたくないと拒絶反応を起こしたので、抗議の言葉を発した。

だが、やはりそこは高校生といえども、世界で活躍するプロの格闘家……ただでさえ異性であるのに、肉体も世界クラスの竜蔵に、刀子の非力な力で抗える筈もなく、必死の抵抗など無意味とばかりにズカズカと馬力を上げて行ってしまう。

「い、いくら静かな所といつても、ここは違うであろう！？」

前を問答無用で突き進む竜蔵に対して、刀子は全力で抗うが、強引な彼の手と歩みは止まらず、とあるピンク色の塗装が施された『Today』の自動ドアを通過してしまう。

中の様子は意外にも、座れば心地よく柔らかそうな待合用のソファーや、植木鉢に植えられた観葉植物などが整った洋装を示していたのだが、刀子にとつてはそれどころではない。

「ま、待ってくれ！ たとえ君に買ってもらつた携帯電話のお返

しが、すぐには出来ないといつても、これは無理だ！　こればかりは無理だ！」

ジタバタと掴まれている手を引き剥がそと、指取りを試みたり、捻つて相手の重心を崩そうとしてみたりとしていたのだが、どうにも竜蔵の左手を引き剥がす事ができない。

これが彼の握力と軸の強さかと、一瞬感心しそうになるも、やはり今はそれどころではない。

既に刀子の手を引っ張つている竜蔵は、自動ドアから正面奥に行つた場所にある壁に設置された、部屋指定用のパネル前に辿り着いていた……いや、もう手慣れた手つきで304の部屋指定パネルのボタンを押した後であった。

そして、竜蔵はそのまま近くにあつた“部屋の鍵が纏められた棚を無視して”、この空間の隅にあつたエレベーターへと歩を進める。タイミング良く？　エレベーターの両開きの扉は、竜蔵と刀子を歓迎するかのように開かれていて、流れるように二人は案外広いエレベーターの中へと入つて行つてしまつた。

「ちょ、ちょっと本当に待つてくれ！？　こ、これは問題どひうではないぞ！！」

普段は凜々しい眼を全力で見開きながら、刀子はエレベーターの階指定をしている竜蔵へと訴えかけるが、当の本人は聞く耳を持たないというより、どうしてそこまで落ち着いた様子で異性を、こんな場所へと連れ込めるのかと驚く程であった。

すると、両開きで開いていたエレベーターの厚い扉が、無慈悲にも機械によつて閉じられてしまつた。

出来上がる、エレベーターという狭い空間の密室……。

その状況と空氣を感じ取つてしまつと、次第に刀子の目から涙が滲み出てきてしまつ。

怖い……もし、いますぐ目の前の男が、こちらに襲いかかるかとすれば阻むものなど皆無だ。

自分自身、肩に掛けている木刀をつたとしても、こんな狭い空

間では何も出来ずに押し倒されてしまうのである。……ましてや、この男は、その程度の抵抗では何の意味も成さない程に強い。

自身よりも強い人間が相手の際に生じる、どうしようもない無力感に、刀子が感じている身の危険は更に増大される事になる。

エレベーターが、目的の階である三階へと上がり始めた。

一瞬だけ全身に軽く重力がかかったと感じた以外、この場に変化は見られない。

目の前で背を向け、こちらの左手を掴んだままの男は、何も口を開こうとはしない。

エレベーターが目的の階へと到着する電子音を、やはり機械的に発した。

瞬間、再び目の前の竜蔵に、買つてもらつた携帯電話が入つた紙袋を持つている左手を引っ張られる。

それに気づいた頃には、エレベーターの厚い扉は、まるで竜蔵の進行を支援するかのように両側へと避けられていた。

辿り着いた三階の様子は、赤い絨毯を廊下中に敷き詰め、洋風の壁紙が張られた壁には、ほんのりと暖かい印象を持たせる、少々明りの弱い照明が、蠟燭立てに見立てた様子で幾つも等間隔で設置されていた。

そして、壁に視線を向けているなら、自然に視界へと入つてくる、

“こういつたホテルの部屋の扉”。

ネームプレートの代わりに部屋番号が入れられている、普通のホテルと比べても差異のない、ロイヤルホワイトの扉……その扉の先では、今どういつた“行為”が行われているのか？

考えた瞬間、あわあわと訳の分からぬ言葉を発しながら、刀子は混乱や狼狽などといった、思考の錯乱状態に陥つてしまふ。

（お父様、お母様……）

刀子の手を強引に引っ張つていた竜蔵が、錯乱状態に陥つてしまつて、刀子を無視しながら、三階のシックな雰囲気を醸し出して、廊下を突き進んでいく。

（今日、刀子はとんでもない過ちを犯してしまいました）

ズカズカとズカズカと、堂々と“こういったホテル”的廊下を進んでいく竜蔵の前に、遂に目的地である304の部屋番号が振られた扉が現れた。

（自己の弱さのせいで、流されるままに高額な商品を買い与えられ、そこに付け込まれ、遂にはこんな所にまで連れ込まれてしましました）

もはや涙目で、田を漫画の様にグルグルと回している刀子は、ここにはいない両親に向けて、授かり受けた身体が意に反して汚されてしまう事に、心からの謝罪を胸中で懺悔していた。

（これから刀子は、このお父様・お母様から譲り受けた、穢れ一つない身体を、田の前の男に汚されてしまいます……どうか、お許しください）

そして、そんな刀子の悲哀など関係無いかの様に、竜蔵は田の前の扉のドアノブを右手で回した。

刹那

「横に飛べ！！ 刀子！！」

「へッ！？」

突然、ドアノブを回していた筈の竜蔵が、錯乱して棒立ち状態であつた刀子を抱え、田の前の扉の正面から外れる様に、真横へと飛んだ。

同時に、さつきまで二人が立っていた場所を、開ける予定であつた“扉”が、室内から何か爆発に押し出されたかの様に吹き飛んできた。

厚さが防音対策のために足されているロイヤルホワイトの扉が、室内から吹き飛ばされた勢いのまま、対面の廊下の壁へと轟音を響かせながら激突する。

「はえ？」

想像していた形こそ違えど、竜蔵から前倒しで覆いかぶさられた刀子であつたが、あまりの出来事に、それどころではないと思

考を再び混乱させてしまつ。

吹き飛んだ扉が、もともとあつた場所を見れば、扉の縁を枠ぐつていた箇所に、所々衝撃によつて出来てしまつたひび割れなどが確認でき、室内から発生した何らかの力の威力を物語つてゐる。

それを確認出来れば、本来は裏で色々と執行部の仕事をこなしていた刀子に、一切の混乱は見られなくなる……日常的な思考から、非日常的な思考へと、本能といつても過言ではないぐらゐの切り替えを行なつたのだ。

「ちつ……これも相変わらずか」

「何を落ち着いているのだ！ そこをどけ！ 敵かもしれないのだぞ！？」

竜蔵に前倒しで押し倒されてゐる状況ではあつたが、肩に掛けていた木刀を素早く抜き出していた刀子は、自身の上で覆いかぶさりながら舌打ちしてゐる男を、何とかどかそと、その分厚い胸板を押してみたり、膝でゴリゴリとした鍛え抜かれてゐる腹を押し出そうとしている。

しかし、一向に竜蔵が動く気配が無い。

それもそつだらう、まず体重や筋質量といった根本から違うのだし、もともと刀子は木刀などで打つのは得意でも、組み合つた体勢はあまり得意ではない（ある程度の相手なら、それでも戦える）。

開けようとしていた扉が吹き飛ばされるという非常事態だというのに、妙に落ち着いた様子の竜蔵に苛立ちを覚えつゝも、刀子はどかないのなら止む無しと、持つていた木刀の柄頭で、竜蔵の下顎を寝てゐる体勢で、下から打ち上げた。

もちろん、腕だけの力ではダメージなどは生まれないので、寝ていた体勢から瞬発力を利用して腰・腹・胸を一気に反りだし、その力を腕に伝えた体を使つて行なつたので。

ガツンッ！！ 「あでッ！？」

見事に竜蔵の下顎を、寝ている体勢でありながらも、木刀と顎骨の衝突音を響かせながら打ち上げたのだった。

しかし、その程度で昏倒する男ではなく。

「痛えな！！ なにすんだよ！？」

下から襲つてきた木刀の柄頭の痛みを感じながらも、すぐさま視線を己の体の下にいる刀子へと落とした。

だが抗議の声も、確かにもつともな事なのだが、現状を考えれば……。

「何をするだと？ それは先程から、私が君に聞いたかつた事だ！」

！ 大体、突然このような場所に強引に連れてこられて、何度も拒否をしたのに無視をされ、あまつさえこの状況に陥つた私の立場を考えれば、その程度の痛みでは足りないくらいだぞ？」

木刀を両手で持ちながら、押し倒されながらではあるが、これまでの鬱憤を晴らすかのよう声を荒げる刀子。

そんな、一応両腕を地面につつかえ棒代わりに立てているが、自分の体の下で肩身狭くしている、万人が見ても美少女……いや、美女だと答えてしまつ程の、凛々しくも可憐な容姿をした刀子に竜蔵は。

「いや……その、なんかゴメン」

顔を赤らめながら、どこか恥ずかしそうに明後日の方向を向いてしまう。

近くで見れば いや、別に彼女の優美な姿に距離など関係ないのだが 細く整つた輪郭に、触れば解けてしまいそうな程に柔らかそうな唇……白く張りのある肌は、とても清純で汚れ一つ無く、筋の通つた鼻筋は、まさに彼女の凛々しい顔立ちにピッタリのものであった。

だが何よりも、彼女の“刀”的に妖艶で鋭い瞳は、見るもの全てを虜にしてしまいそうな、そんな深い魅力が感じられる。

故に竜蔵は、思わず顔を赤らめて視線を反らしてしまつたのだが、今はそのような時ではない。

「どうより、どうしてこのタイミングで照れたのか、こちらが問いたいぐらいだ。

突然そっぽを向いてしまった竜蔵に、刀子が怪訝な顔をする。まさに、その時であった……。

「あ～らあら？ どうぞの馬の骨が来たと思ったら、アンタだったの？」

扉が弾け飛んだ部屋から、一人の猫目が魅力的な女が出てきたのは

は

「この文字数で良いのかな？」

「というより、本来なら、あと一場面ぐらい書きたかったのですが、そうするとどう考へても2万など軽く越えてしまつたので、ここに切りました。

ラブホ……どうしてああいう所つて、面白にネーミングが多いのでしょうか？」

「ま、ネーミングよりも、最近のは中の方が遊びだらけなんですね？」

「する」となんて、実際には「つか」一つしか無いっての……。

「とりあえず、次回はこの続きを書いて、その次の回で事件の中盤……いや、終盤に差し掛かるのかな？」を書きたいと思つていてるんで、テンポ良く更新していくたいと思います。

できればだけね……！」

「どうでも良いですが、あと1ポイントで総合100ポイントになるとですね、この改訂版は……。」

「あと、できれば感ゲフン！ も欲しいかな……なんて。」

「とりあえず、この章が終われば、一応のほほんとした話に移るので、その時に色々聞きたいと思つます。」

「ではノシ

まずは遅れですみません。

最近、色々と忙しくなつてきた身+パソコンがインターネットに繋がりづらいう状況に陥つていて、なかなか更新どころか執筆すら出来ない状況でした。

なので、今回はかなり合間合間で書いていたので、少しチグハグしているかもしれませんので、矛盾などを見つけて下せつたら、何かしら報告して頂けると嬉しいです。

意図的に、あまり明るすぎない様にしている、落ち着いたシックな照明の明かりも然ることながら、広い洋風な部屋の中央には、キングサイズの円状のベットがスペースを陣取っている。

しかし、それはここという“場所”を考えれば、仕方の無い事なかもしない……。そう、例えキングサイズのベットの頭側に位置する壁一面全てが、部屋の全体を映し出せるほどの鏡張りだとしても、仕方の無い事なのだ。

また、ここに入つてくる前に、向かいの廊下の壁へと吹き飛ばされた鉄製の扉は、応急処置程度の手抜き作業で、もとあつた位置へとほぼ“立て掛けられている”状態だ。

扉付近……つまり、部屋の玄関に当たる場所には、なぜか来訪者に對して、すぐにでも体を綺麗にしろとでも言つているかのよう、妙に間取りのあるバスルームがある。

ここまで説明でも、今現在、竜蔵と刀子がいる部屋が、ただ寝泊りするだけのホテルの一室でない事を物語つているのだが

ここには、まだ、ただのホテルの一室で無い事を示す、非常識なまでの機材が存在していた。

「お～、なんか、また増えてないか？」

「はあ？ そんなの当たり前でしょ。街のセキュリティってのは、日々進歩しているのよ」

「これは、凄いな……」

部屋の中央に設置された、円状のキングサイズベットを囲むよう、様々な街の様子が映像として映し出されているモニターが、先導者の後ろを歩いている、竜蔵と刀子の二人を、機械による冷たい圧力で出迎える。

地面に敷いてある、カーペットの感触を靴底越しに感じつつ、目

の前にある50は越えていっているのではないかと思えるモーターの数に二人は其々、呆れ混じりの驚きと、素直な驚きを示す。

すると二人の前を先導していた、頭の両端にある一束の尻尾、つまりツインテールと、活発そうな猫目や愛らしいハ重歯が特徴的な少女が、後ろへと軽快なターンをして見せた。

「まあ、この程度で驚かれるのも悪くは無いんだけど……まずは、ここに来た理由を聞きましたようか？」

竜蔵と刀子に振り返った少女は、その逆三角形に整った輪郭と、活発そうながらも賢い雰囲気のある顔立ちが魅力的な美少女で、特徴的なハ重歯と猫目が、今は妖しげな微笑を浮かべていた。

髪型は、真ん中に分け目こそあるものの、左は少しだけ下ろし、右は後ろに流しているという左右が対象ではない別け方をしており、また頭の両端には、彼女の肘辺りまで伸びた二つの尻尾が、柔らかそうにサラサラと揺れている。

体型は細くしなやかな腕や脚が、スラリと優美な線を描きながら伸びていて、女性らしい膨らみも、平均以上かつ美形という、完璧なスタイルを、竜蔵や刀子とは違った学校の制服越しに強調していた。

身長は、大体160後半で、170?の竜蔵と刀子の一人と比べても、さして差はない。

また、いつもここでモニターを眺めているせいなのか、縁の赤いお洒落な眼鏡をかけている。

「久しぶりに会つたつて言うのに、世間話も無しか？」

そんな、外に出れば直ぐに異性の視線を集めてしまいそうな少女に、ここに来た理由を問われた竜蔵は、どうせ期待する反応など返つてこないだろうと、分かりきった質問返しを、ちょっととした溜息交じりに行なつた。

「一応、この私と腐れ縁だつたら、分かるでしょ？　回りくどいのは嫌いなの、無駄だから」

「はいはい、そうだつたな～そつだつた。お前は、そういう奴だつ

たな？」

少女は言いながら、特徴的な猫耳を、眼鏡越しに細める……。

だったら聞くなという、意味の込められた少女の視線を、やっぱり聞くだけ無駄だったという態度を取る竜藏は、若干うんざりしながら後ろへと流した。

しかし、久しぶりに出会った彼女の性格に変化が無い事を確認した竜藏は、相手の言うとおり、早速本題へと入るため、近くにあった化粧台の椅子を引き出し、そこに腰掛けた。

「まあ、ここに来る理由なんて、一つか二つしか無いだろ？」

腰掛けた椅子に背を預け、だらりと下ろした両腕は、太ももの上で手が組まれている。

そんなリラックスした体勢を取りながら、竜藏は既に、キングサイズベットに脚を組みながら腰掛けている、この部屋の主に問いかけた。

すると、この部屋の主は「確かに」と呟きつつ、自身と竜藏とは違つて、いまだに背筋を綺麗に伸ばしながら立つて、いる刀子に、同じくベットへと腰掛けるよう促した。

「失礼する」

スッと、衣擦れの音を静かに鳴らしながら、刀子はこの部屋の主に一礼をしたあと、促された場所へと、近くに荷物を置いた後に腰掛けた。

腰掛けた場所は、丁度この部屋の主の右隣。  
なぜ対面にならなかつたのかと聞かれれば、この部屋に椅子が一脚しか存在しなかつたからだ。

「それで？ その一つか二つしか無い理由の、どっちを私に頼みに来たの？」

刀子が自身の隣に腰かけると、一瞬、この部屋の主である少女は、意味深な笑みを浮かべたが、すぐに竜藏へと勝気な声音を向ける。

「両方だ」

部屋の主の問いに、竜藏は即答する形で答えた。

「両方ね……」

「両方だ」

復唱する竜蔵に、少女は面倒臭そうに「はあ～」と溜息を付く。

「なら、最初に一番面倒なのを聞きましょうかね」

少女は組んでいた脚を解き、全身で体を気持ち良さそうに伸びをしたあと、制服は着ているがソックスは履いていない素足の状態で、キングサイズベットの中心へと振り返り際に飛び込んだ。

ボスつと、柔らかい掛け布団から空気の漏れ出す音がする。

ベットの中心に身を投げ出した少女は、そのままうつ伏せの状態で、視線を周辺を囲んでいるモニターへと踊らせ始めた。

その様子を、ただ見送っていた竜蔵は、相手の準備が出来たと判断すると、寛ぎながらの体勢であるが、眞面目な話に入る事にした。

「俺がお前に頼みたいのは、いま起こってる盗撮事件についてだ」「でしょうね」

「なんだ、知つてたのか？」

素つ氣無い様子で、既に周知だつた事を告げる少女……そんな彼女に、竜蔵は言葉とは裏腹に、別段以外でもなんでもないといった様子で、話を続ける。

ベットに腰掛けながら、少しだけ身を捻り、少女の背中へと視線を向けている刀子は、一人のやり取りを黙つて眺めているだけだ。

「知つてるも何も、最近、丁度その事について調べてたのよ。そしたらアンタと、そここの冴島さんが色々と嗅ぎ回つてゐつて、ネット上で話題になつてたから」

「私の事を知つていたのか？」

が、しかし……突然、まだ名乗りもしてないのに、自身の事を知られていた事に驚いたのか、刀子は思わず怪訝そうな表情を、ベットでうつ伏せになつてモニターを眺めている少女に向てしまつ。

「知つているも何も、冴島さんを知らないなら、この業界では“もうぐり”って呼ばれちゃいますよ？ あ、そういえば、まだ私が名乗つてませんでしたよね？」 私は第三区にある女子高に通つてゐる、藤

じゅ

城理香りかつて言います「

視線は動かさず、藤城理香と名乗った少女は、履いている裾の短いスカートのポケットから、何やらタッチパネル式の携帯電話を取り出し、手馴れた様子で操作をしていく。

「ふうん、お前つて、そんなに有名だったんだな？」

「私も初耳だ」

「ちなみに、アンタは中学の時からよ？ 随分と暴れてたものね～。その度に“鬼姫”ちゃんを筆頭に、私・美夏ちゃんつていう順番で、どうされてたけど……よし、出てきた」

手に持った携帯機器を操作しながら、片手間で昔話を懐かしむ理香。

すると、どうやら彼女が行なつていた、何らかの作業が完了した様であった。

「とりあえず、どこでも良いからモニターの方を見てくれる？」

理香の指示に、二人は一面鏡張りの壁の前にある、天井に固定されているモニター群の真ん中辺りに視線を向ける。

「ネット・人脈・タレコミ・買収……色々と手は使ってみたけど、どうにも不明瞭な点が否めないのよね、まだ」

一人が視線を向けると、モニターには数々の情報が箇条書き形式で羅列されていた。

その中には、自分達が今日行なつた行動や、最初に千代女から言われていた予測など、様々な情報が表示されていて、必要なものは動画や画像などといったものまで添付されている。

「盗撮画像が撮られた地域関係だつたり、アンタや冴島さんを襲つたチンピラ集団の背後関係、さつき美夏ちゃんを追い回していた男が、いつ犯人と交渉していたのかだとか……」

「美夏が追い掛け回された！？」

「追い掛け回されたけど、未遂で終つたわ。男は美夏ちゃん自身に撃退されたし、その後はアンタのとこの木佐貫千代女に、バイクで学園に連れられてたから、もう大丈夫よ」

一瞬、竜蔵のもともと威圧感のある顔立ちが、怒気に染まりそうであつたが、理香の事後報告を聞いた瞬間、乗り出していた椅子の背もたれに、再び体重を安心した様子で預けた。

「あの女ひとがか……」りや、帰つたらお礼の一つはしておかないとな。てか、なんでお前が木佐貫先輩の事を知つてるんだ？」

素朴な疑問として尋ねたのだが。

「さあね。聞きたいのなら、『これ』を私に貢ぐ事ね」などと言いながら、右手で人差し指と親指の先を合わせた“マネー”のジェスチャーを取る理香。

これは、あまり踏み込んでいけないものなのだと、竜蔵は長い付き合いである理香の様子で察した。

「まあ、そんあ事より話を聞きなさい。不明瞭な点を挙げたら切が無いのだけど、それでも流石は私。事件が起きてから今日までの短時間で、ある程度の犯人へのルートは掴んでいるわ」

「いや、ちょっと待て。背後関係は分からんじやなかつたのか？」

「実際に事件の手綱を握つている奴は、まだ把握していなければ、どこをどう調べれば良いのか？ または、どういった理由で犯人は犯行に及んでいるのかは分かつて……信用が無いのなら、教えても意味ないしね」

うつ伏せの体勢で寝ていた理香が、今度は竜蔵に向けて悪戯な笑みを浮かべながら、ベットの上で胡坐を搔き始めた……すると、胡坐を組んでいる脚の間から、理香のスカートの中身が見えそうで見えないという、影を有効利用した高度なチラリズムスポットが発生した。

“そこ”を、ひたすらに興味が無いといった雰囲気を醸し出しつつも、内心必死で覗き見ようとする竜蔵は、気持ち背もたれに預けていた体を、下に少しだけずらす。

「たつぐ、アンタつてホント見境が無いわよね？ 見たつて履いてるのはブルマよ、残念でした」

呆れたように、確信犯的な胡坐を掻いていた理香が竜蔵の行為を嘲笑する。

しかし、ブルマと申したか 竜蔵が目に送る集中力が、微妙に上がる。

ええい、もう少し透明度は上がらぬのか！？

竜蔵がチラリズムという、どうしても男としては反応せざる負えないチャンスを物にしようと躍起になつてゐる。

「その、少しだけでも良いのだ。貴女が知つてゐる情報を、私達に教えて欲しい」

これまで竜蔵と理香のやり取りに、なるべく積極的な介入を見せなかつた刀子が、一旦腰掛けっていたベットの縁から立ち上がり、理香に真剣だという空気を伝えながら頭を下げた。

その様子に、流石の竜蔵も、くだらない事に構つてゐる暇は無いと、元の位置へと背筋を戻した。

「報酬なら、使い道の無い金があるし、必ずお前が満足する額が払える。だから、今のは忘れてくれ」

「まあ、別に頭下げられなくても、お金をえ払つてもらえれば、私はいくらでも情報を垂れ流す準備はあるんだけどね。てか、アンタは真面目な雰囲気を少しぐらいは保ちなさいよ……」

はあ～という、呆れた溜息と苦言を竜蔵に向けながらも、理香は持つていた携帯電話を操作し、モニターに移る映像を切り替える。

どうやら、彼女の持つてゐる携帯電話は、ここにあるモニターのリモコンとしての役割を担つてゐる様であつた……つまり、電話でもあるが、多種に渡る機能が搭載された端末としても利用できるみたいだ。

「取り合えずは、話に戻るけど、大丈夫？」

「ああ、頼む」

竜蔵の返事と、刀子の頷きを確認すると、理香は一人に再びモニターへと視線を向けるように促した。

モニターには、前に木佐貫に見せてもらつた、盗撮画像がじゅさ

れでいるサイトが映し出されている。

「簡潔に説明すると、まず調べるなら、アンタの学園を調べた方が良いわね」

理香から早速出てきた、今日行なった事が全て無駄になってしまいそうな言葉に、竜蔵は首を傾げ、刀子は無表情で話を聞いていた。「理由は一つあるのだけど……まず一つは、サイトに画像がＵＰされてからの間に、アンタんとこの学園に在籍してる生徒が写ったのが、他の学校の被害者よりも圧倒的に多い事。特に、美夏ちゃんの画像がやたら多いわね」

美夏の画像が多いという理香の見解は、先に聞かされていた千代女と同じもので、やはり彼女も妹が狙われていると、竜蔵に注意を促した。

それに竜蔵は“分かっている”と、言外で語るよつこ、一度だけ頷いて見せた。

「で、一つ目は、今回の盗撮事件で使われている撮影機材ってのが、半径30m以内で操作しないと、機能しないっていうやつだからよ」「撮影機材つていうと……」

「超小型自立飛行偵察機。聞いた事は、あるでしょ？」

超小型自立飛行偵察機……理香から出てきたワードに、竜蔵と刀子の視線が細まる。

そういえば、今回の聞き込みに出てくる前、教員用のＰＣルームで木佐貫千代女が、この機械が使われている可能性があるとか言つていた筈。

竜蔵が頭の中で、学園での事を思い出していると。

「その反応は、一応知つてゐて感じの反応ね……なら、説明してあげようかしら？」

一人の反応を伺つた後、得意げな表情をしながら、理香が自らの情報を誇らしげに垂れ流し始めた。

「超小型自立飛行偵察機つてのは、大体一ヶ月前に、学園都市の大学で発表された、災害時や医療の現場などで活躍が期待されている

新技术よ。だけど、まだ発表段階で試作機が数機しかない状態の、貴重な機械なの」

貴重な機械という部分に、刀子が「貴重なら、こんな下らない事件に使用される事は無いのでは?」と質問を投げかけてきたが、理香は「ところがどっこい!」と、待つてましたと言わんばかりに、刀子の質問に食いついた。

「その超小型自立飛行偵察機、通称『天道虫（Lady beetle）』は、作ったのは良いのだけれど、大学側がまだ試験飛行を外では行なつていらない状況だつたのよ。だからこそ、野外での操作が半径30m以内つていう欠点を修正できていなかつた」

「はあ? どんだけ抜けてるんだよ。もう発表してるんだろう?」

「ええ、多分、作った教授つてのが、これが初めての実績だつたらでしょ? 興奮して、すぐに学会や、その他の報道機関に発表しちやつたそなのよ。これは、その大学内にある様々な研究室の学生達から集めた情報だから、『まあ』信用して良いわね」

「まあつて……頼りねえな」

「仕方ないでしょ? その教授もそうだけど、大学 자체、全然有名なところじやなかつたんだから」

教えてもらつて? いるだけ、ありがたいと思? いなさいと理香は付け加えながら、手に持つて? いた携帯端末を操作し、モニターに映つていた情報の映像を切り替えた。

すると、モニターに何やら、小さく白い球体の物体を説明する画像が映し出される。

「これが、いま説明してる『天道虫（Lady beetle）』の画像よ。大体、大きさは2ミリ程度で、重さは5グラムに満たない軽さ。内部には外から取り入れた空気を循環させ、また再び外に吐き出す事で推進力や浮力を得る装置が取り付けられて? いるわ。まあ、これのせいで中身の大半が空洞になつてて、撮影用のカメラを当初の予定とは違つて、正面にしか取り付けられなかつたつていう事情もあるけれどね」

「初めはどうするつもりだつたんだ？」

「名前の通り、てんとう虫の斑模様を真似て、全体にカメラを取り付けようとしていたみたいよ？ ま、そんな事したら、まずこれは飛べなくなつちゃうけど」

竜蔵と刀子は、理香の簡潔な説明に耳を傾けつつも、『天道虫（lady beetle）』が映し出されているモニターに視線を固定させている。

確かに、理香の言うとおり、『天道虫（lady beetle）』にはカメラが一つ、正面に玉玉の瞳孔みたいに取り付けられている。それはまるで、てんとう虫というよりも、浮遊する玉玉と称した方がシックリするぐらいにだ。

「基本的に色は白なのか？」

「そうね、だけど塗装次第で、その環境に擬態できる可能性があるわ」

「だとすると、田で見つけるのは難しいか……」

「確かに目視は辛いかもしれないけど、近くにいれば、この『天道虫（lady beetle）』が吐き出すトマトの噴出音が聞こえるはずよ」

「いや待て。確かにこれって、蚊とかハエとかよりも静かに飛ぶって話だろ？ 音も聞こえづらいんじゃないかな？」

竜蔵はモニターに対し、指をさしながら、事前の触れ込みとの違いを理香に確認する。

しかし、当の理香は、特に何に対しても反応するでなく、「別に、よくある事よ」と前置きをした。

「カタログ上のスペックと、実際のスペックが違う事は。ただ、それは大抵カタログスペックよりも下回る結果が付いてくるだけの話。簡単に言えば、話を盛つてると、見栄を張るためにね」

なるほど、確かにと竜蔵は頷く。

実際、携帯電話のスペックを一つとつたとしても、カタログ上の通信速度やら電池の耐久時間などで相違が見られる……それも、素

人目には良くわからない単位が使われた上、カタログに記載されたスペックを下回る形でだ。

これは所謂、理香の言つとおり見栄を張つてゐるのである「ひと、竜藏は短い納得をする。

「だから、といつのも変だけど。実際、この『天道虫（lady beetle）』は空を浮遊している最中、H-A-R-Eの噴出音やら、風を切る音だとかで結構つるさこいらしこのよ。まあ、いわむせこといつても、ふとした拍子に聞こえてくる程度だけれど」

大体、これぐらいかな……と、理香は興味なさげな様子で、『天道虫（lady beetle）』の説明を終え、次に移つた。

「で、この機械が何で使われてゐるのか分かつたのかつていうと……まあ、あれね。大学の研究室ではなくて、教授の自宅からメールの送受信履歴とかを覗いてみたの」

「……どうやつて？」

「仮にも私と長い付き合いのアンタだつたら、ある程度は予想が付くでしょ？」

「ハッキングつてやつか？」

「じ名答」

周辺にキラキラとした星が舞つていそうな、愛らしい笑みを浮かべる彼女であつたが、やつてゐる事は完全に犯罪行為である。

そんな理香の様子に、竜藏はうんざりとした視線を向けるが、彼女には一切答えた様子は無く、話を進めていた。

「覗いてみた結果、まあ、あのつまらなそうな教授から面白い情報が抜き出せたのよ」

「面白い情報？」

「ええ、どうやらあの名前も思い出せないほどに冴えない教授は、都市外に拠点を置く暴力団組織に対して、金目欲しさに『天道虫（lady beetle）』を数機、売り渡していたらしいわ」

「暴力団か……」

「厄介だな」

暴力団という、裏社会の中心的組織と言つても過言ではない名詞を聴いた瞬間、一人が苦い表情をしながら、今回の事件の危険度が上がつた事を確認していた。

「冴島さんの言うとおり、実際かなり厄介な事になつてゐるわ」「二人の苦い様子を見送ると、理香は再びモニターへと身を捻り、寝転がる様にしてから視線を向け、手に持つてゐる携帯端末を操作する。

すると、これまで『天道虫（lady beetle）』を表示していた画面が、一斉に『鷹』の文字が中心に彫られた、確りとした作りの金バッヂが表示された。

『『天道虫（lady beetle）』を教授から買い取つたのは、この紋を象徴としている“鷹蛇組”（たかだはなだ）』。もともと長い間、日本極道の中心的組織である“花田組”内で若頭を担つてきた組だけど、つい最近に組長が抗争で死んじやつたみたいでね、いわゆる、誰が次を引つ張るかの内部抗争の真つ只中なのよ』

理香は説明をしながら、モニターに映す映像を、流すようにして切り替えていく。

その中には、先程説明をした、鷹蛇組の組長の顔写真や、花田組の家紋、そして内部抗争を行なつてゐる鷹蛇組での中の人物二人の顔写真が映し出されていた。

これらの画像は、数あるモニターの真ん中辺りに有る画面が流し、流された画像は其々他のモニターに留められていた。つまり、説明の流れを補つてゐるのは、中心に位置する一つのモニターだけだ。

『そんな物騒な状況の組が、どうして最新の技術を欲しがつたんだ？ てか、買い取つたのがコイツらなら、犯人もコイツらつて事になるんじやないか？』

『あら、アンタにしては珍しく正解を口にしたわね。正確には、この組にいる若手も若手の下つ端が、勝手に先走つて、教授から『天道虫（lady beetle）』を、野外運用の試験結果も込みで買い取つたのよ。それも、かなりの大金を叩いてね』

「教授は、その大金に目が眩んで、折角発明した機械を、こんな連中に売り渡したという訳か」

呆れると、刀子は姿も見た事が無い教授に対して、落胆どころか軽蔑の言葉を吐く。

実際これは、この部屋にいる他の一人も同じ感想の様で、なぜ成功間際まで来ていたのに、暴力団から出てくる大金に目が眩んでしまったのかと、理解出来ない様子でモニターを眺めていた。

「大金に目が眩んだつてのもあるだろうけど、突然の成功に戸惑つていたつてのもあるかもしれないわね。まあ、どうでも良いけど……」

「取り合えず、話を戻すわよ？」

理香の言葉に、二人は無言で頷く。  
それを彼女は確認するまでも無く、さっそくモニターに映る映像を切り替えた。

「教授の話はここまでにして、どうして暴力団の下っ端が、この機械を欲しがったのかについてなんだけど……これね」  
「」の指示に、竜蔵と刀子の二人は、画面が切り替えられたばかりのモニターに注視する。

そこには、“新人アイドル発掘計画”などと書かれた、ある芸能事務所の企画書の文章が、文字がクッキリとした状態で映し出されていた。

「これは、なんだ？」

竜蔵が、その映像を見た瞬間、右頬をヒクヒクと不機嫌そうに引きつらせながら、怒気の孕んだ声音で理香に尋ねた。

すると理香は、そもそもなんと、竜蔵の疑問に答える。

「なにして、芸能事務所の計画書よ？ もとは企画として、イベント形式で発掘させようとしていたそうだけど、予算の関係でボツになつたものね」

「それはいい、別にどうでも良い……俺はただ、なんでこんなものが関係していくのか、それを聞きたいだけだ」

「そうね、説明は簡潔に……理想だわ。じゃあ簡単に説明するけど、

ぶつちやけこれが今回の事件で、犯人が目的としているものよ」

言いながら、理香が画面を端末を操作し、画面を再び切り替え、

今回の事件の発端となつた、盗撮画像が纏められたサイト、『女子

高生丸秘盗撮画像館』が表示された。

「こここのサイトは一見、どつかの変態の脣が作成したものだと思つかもしれないけど、実は違う」

「どういう事だ？」

「分からぬの？ 同類の変態の癖に？」

「俺は変態じゃない、ノーマルな人間だ」

「あ～はいはい、そういう事にしつくわ」

自身が変態ではないと否定する竜蔵に、理香は面倒臭そうに片手をフラフラと振りながら、話を先に進めようとする……しかし、自分から話を振つておいて、それは無いだらうという視線が、竜蔵から送られていたが、彼女がそれを気にするはずも無い。

「このサイトを良く見れば分かると思うけど、基本、従来の盗撮系統の画像と違つて、自然な姿……というより、プライベート写真みたいな撮り方をした画像ばかりなのよ。で、ここに疑問を感じた私は、このサイトを運営している奴が誰なのか、色々と調べてみたわけ」

「またハッキングか？」

「違うわよ、たどりR」とか調べていたら、ちょっとアンダーラウンド的な掲示板に貼られてたのよ。“新アイドル発掘コンテスト”とかいう、ふざけたスレッドの中にな。で、そこを流し読みしてつたら、スレ住人に投票とかさせてたわけ。ホント、くつだらない連中よね」

サイトのURLを貼っていたという事は、自身の妹の写真がネット上に、既に出回つているという事実に直結している。

竜蔵は、これに嫌悪感と怒りを覚えたが、ここでどうこう出来る事では無いので、それは胸の内に収める……だが、この事件で犯人を自分が見つけることになつたのなら、その時は全力を持って潰

してやるうと、心に決める。

「で、ここからが漸く、暴力団の下つ端が『天道虫（Lady beetle）』をどうして欲しがつたのかつて話に入るんだけど……まあ、これもそんな難しい話じやないわね。ただ単に、この芸能事務所が新人アイドルを発掘するのを、『天道虫（Lady beetle）』を使って協力しようつて話よ」

「協力して、その暴力団員に何の得があるんだ？」

「まず、この芸能事務所にはスカウト専門の社員が一人もいないのよ。まあ、看板になるアイドルもいなし、ましてや立ち上げたばかりの事務所だから、仕方ないのかもしないけどね。だからこそ、今回の暴力団員の話は魅力的だった」

「だって、本来なら芸能関係の大人が入つて来れない学園都市の内部で、新しい戦力となる女の子を掘り出せるかもしないんだもの、そりや必死になるでしょ、他の事務所でも出来ない事だから、差も付けられるしね。暴力団員は、そこに金の話を持ちかけながら、卑しく付け込んで来たつてわけ……実際、事務所側も発掘には全力で取り組んでる姿勢だしね、断られる心配も無かつたみたいよ？　ただ、この暴力団員の狙いは、どうやらそこだけじやないみたいね」

「どういう事だ？」

饒舌に語られる理香の情報であつたが、要点自体は確りとしているので、竜蔵でも全てを理解する事が出来たが、どうやら話は……

というより、今回の事件の主要人物である暴力団員が構想している絵は、ここからが本番であつたようだ。

「聞いたこと無い？　アイドルの娘達が、自分の仕事を得るために、触りたくも無いオツサンと一緒にしたり、芸能事務所とヤクザの関係を保つために、また同じような行為を強制されるつて話。アンタも同じような業界で活動してるんだから、一度くらいは耳にした事、あるんじやない？」

卑猥で卑劣な世界……もともと、荒事での裏社会に関わっている刀子は、こういった別の裏社会がある事も知つてはいたが、同性な

どを抜きにしても、腹から煮えくり返るような怒りを感じずにはいられなかつた。

弱い立場の人間に對して、自らの欲求を満たすために、それに付け込む汚い者達。

どうしても刀子は、こいつた連中を生理的に受け付けない性格なため、それに近しい業界に身を置いているという竜藏に対して、達觀した理香とは違つた厳しい視線を送つてしまつ。

だが竜藏は、その刀子の視線に気付くと「俺がしてる様に見えるか?」と、別に気にしていない様子で尋ねた後、理香の投げかけに答えた。

刀子は無言で、厳しい視線を向けてしまつたことの謝罪を含めて、彼の言葉に首を横に振つていた。

「枕営業ね……聞いた事はある」

「暴力団員が狙つてるのは、その利権よ。今回の盗撮で目を付けた娘に対して、何かしらのアプローチを後々かけていき、あわよくば芸能事務所に所属させて、金持ち相手に売春やら何やらもやらせ、その娘を心身共に弄んでいく……ホント、腐つた連中よ」

そして、その目標に、美夏ちゃんが最重要人物としてリストアップされてる……。

理香は、これまで達觀した面持ちからは想像できなかつた、嫌悪の念と、苛立ちの念を、自らが操作しているモニターに対して露にし始める。それは、この話を聞かされた竜藏も同じであつた。

腐れ縁……彼女は、竜藏に対して、自身との関係をそう表した。

という事は、竜藏の妹である美夏も知られているのは当然の事である。

ちなみに、理香は美夏の事を、かなり好意的に見てゐる人物の一人だ。

「だからこそ、私も協力は惜しまないわ……お金は貰うけど」「抜け目無いつて、言ってやりたいが、ありがとうな」

負の表情から、一気に小悪魔的な微笑みを浮かべた理香に、竜藏

は呆れながらも素直に礼を述べる。

すると、何やら理香がモニターから視線を振り向かせた後、ハトが豆鉄砲をくらつた様な、何ともいえない間抜けな表情を露にした。

「……なんだよ？」

その意外とでもいうのかの如く、視線を向けてくる理香に対しても、竜蔵が居心地悪そうに尋ねた。

「いや……その、アンタが素直にお礼が言えるなんてね。少し驚いたつていうか、何と言うか……」

「お前は失礼な奴だな、本当に」

右頬をポリポリと搔きながら、馴れない相手の反応に戸惑う理香に、竜蔵は容赦の無い言葉を浴びせる。

しかし、やはり理香には堪えた様子など全く無く。

「ま、人は日々成長していくって事ね。じゃあ、そろそろ詰めに入りましょうか」

「たつぐ……」

飄々とした理香の変わり無い性格に、竜蔵はちょっとした懐かしみを覚えながらも、取りあえずは話を進めることに同意した。

「私が得た情報は、大体こんな感じなんだけど……細かい事を付け加えるとすると、まだ下つ端の暴力団員が無名すぎて誰なのか掴んでない事だつたり、どうやつて暴力団員は外から学園都市に接触をしているのかつてぐらいかな？ 一応、下つ端が動いているっていうのは、外の情報網から仕入れたものだから、間違いは無いのだけれど……あと何で、少女売春みたいな事に及んでるのかは、利権を自分の出世のために利用する事らしいわ」

理香が、これまで説明した事の補足事項を、搔い摘んで並べていく。

竜蔵と刀子は、それに真剣な表情で耳を傾けながら……。

「それだけ分かれば十分だ。後は、こっちで何とか出来そうだ」

「うむ、これで学園内にいる盗撮の実行犯を捕まえれば、もしかしたら裏に繋がる情報が手に入るかもしれないからな」

其々、これだけの情報を提供してくれた理香に対して、感謝の意を示した。

「確かに、冴島さんとアンタが通う学園にいる実行犯は、確実に『天道虫（lady beetle）』を渡されてる奴だしね、捻つて絞れば、それなりの情報が出てくる可能性は大よ」

理香の言う通り、後は学園で実行犯を捕まえ、情報を吐かせれば、裏へのルートは容易に辿れる可能性がある。

行動の指針が、聞き込みなどという曖昧なものではなく、明確に示された瞬間であった。

キングサイズのベットが中央を陣取る部屋で、照明以外に明りを灯していたモニター群の映像全てが、電気の無駄とばかりに消され、画面には無機質な黒が一面を支配していた。

故に、この部屋を照らすのは、仄かに明るい程度の、柔らかい照明のみ。

ただ寝泊りするだけが目的ではない、この場所で、こうこうした照明の中、男一人・女一人の組がする事と言えば……。

「しかし、アンタとも一年ぶりか……改めて見ると、またむさ苦しくなったわね」

「言い方が酷いぞ、お前」

「確かに、私も一学年の頃に何度か見かける事はあったが、肉体の成長には目を見張るものがあったな」

昔話に花を咲かせる事……。

何とも色の無い話だが、所詮は初対面に近い刀子の存在や、別段男女の関係という訳でも無い竜藏や理香にとつては、ここもまだ溜まり場と変わり無い場所なのかもしれない。

まあ、これには昔話ついでに、刀子に対して理香の紹介も含まれていたのだが。

しかし、ここで竜藏がある事を思い出した。

「ああ、そう言えば、ここに来た理由って、他にもあつたんだった」「は？　あ～言つてたわね、そう言えば。正直、説明してる間に忘れてたわ」

「他の理由？」

「お忘れとは、やろ～やろ～と想えていた所に、厄介事が舞い込んでくると、まるでデータの上書きの様に良く起こる事だ。

故に、この部屋にいた三人が、いま竜蔵が思い出すまで、今回の事件に関する情報を聞き出すのと違つた理由を忘れていたのは、有る意味で仕方の無い事だったのかも知れない。

何故なら、もう一つの理由とは……。

「で、もう一つってのは何なの？」

「いや、ただ単に、コイツに携帯の使い方を教えるつてだけなんだよ。」ここには、教えるのに静かな場所を探してたから、そういえば近くにあつたなつて感じで、ついでに入つてきた感じなんだわ」

「へ～携帯の使い方ね……」

「この様に、どうでも良い事にも程があるものだつたからだ。

竜蔵と理香に、同時に視線を向けられた刀子は、少々恥ずかしげに「な、なんだ？」と身構えた。

その様子に、理香が何を思ったのか。

「冴島さんつて、携帯電話使つたこと無いんですか？」

「いや、まあ。その……はい」

「うつ……か、かわつ……」

「うん？」

「可愛い～ツ～！」

「おわツ～？」

突然、恥ずかしそうに縮こまつっていた刀子を押し倒す様に、見事なまでの某怪盗ばりのダイブを決め、彼女に飛び掛つた。

しかし刀子には、剣術で鍛え上げた眼の良さや反射神経、そして体捌きがある……いくらキングサイズのベットに腰掛けてるとはいひ、何の抵抗も無く倒される女人ではな

ドサツ！

否。

刀子は、あまりの理香の飛び掛りの勢いと力強さになす術無く、円状のベットに前倒しで押し倒されてしまった。

覆いかぶさる様に、いつの間にか両手首を押さえられ、両脇腹の横に理香の両膝を置かれてしまった刀子。目の前には、その活発ながらも知的に整った顔立ちと、大きな吊り眼がちの猫目と八重歯が魅力的な理香の顔が、紅潮した状態で見下ろされている。

あまりにも相手との距離が近いため、理香が普段使っている香水の程よく甘い匂いが、刀子と鼻孔を擦る……また、四つん這いでこちらを押さえ込んでいるために、理香の特徴的なツインテールが、ベットにしな垂れかかっている。

だが、この様な状況になつても、刀子の表情には狼狽は見られない。

むしろ油断無く、こちらを前倒し状態で押さえ込んでいる理香を睨み付けているぐらいだ。

「今の動き……明らかに素人のものでは無いな

「えへ、私つて実は、やつてる武術の名前は言えませんけど、足技とか得意なんですよ」

警戒心を募らせる刀子を流しつつも、理香はその形の良い胸の先端と、刀子の胸の先端を合わせるように体勢を屈ませ始めた……。

既に、顔と顔が、もう少しで接触してしまいそうな距離まで、二人は密着していた。

これだけ近いと、互いの髪の匂いや吐息、肌の張りや瑞々しさまで、全てが手に取るよう感じられる。

刀子が背中を預けるベットが、理香が体重をかける度に軋む音を鳴らす……それは、シーツの衣擦れも同じように音を発していた。

「でもホント、噂通り綺麗な顔……肌も白いし、睫毛も長いし、何

よりその眼が魅力的なんですよね、冴島さんって

「褒めてくれるのは素直に嬉しいのだが、これ以上、可笑しな真似をするというのなら、情報を提供してくれたとはいえ、それなりの対処をするが？」

押さえられるがまま、なすがままにされている刀子であったが、その表情に不敵な笑みを浮かべる。

だが、理香の行動は更にエスカレートし、遂にはその互いに長く優美な曲線を描いている脚を、絡みつかせるようにし始めた。

組み伏せられている刀子の股下に、理香の左足が無理やり捻り込まれる……なるほど、確かに足の力は得意というだけは有ると、刀子はそれでも尚、冷静に相手を分析していた。

手には木刀は無い、あるのは、いまだ傍観を決め込んでいる、あの薄情な男から買つてもらつた、スマートフォンとやらが入つている紙袋だけだ。

「良い匂い……これつて香水じゃないですね？ それに、こんなに引き締まってるに、触ると柔らかいなんて」

「……」

耳元で囁かれる、理香の吐息に似た言葉に、刀子は無言で聞き流す。

次第に、理香が刀子の右手だけを解放して、自由になつた右手で、彼女の体を弄り始めた。

が、しかし……。

「そろそろ、その辺にしどけよ？ セイキからブルマ履いたケツが丸見えだぞ？」

二人の間を割つて裂くように、竜蔵が化粧台の椅子に腰掛けながらも、呆れた声音を理香の背中に発した。

「なッ！？ アンタ、どさくさに紛れて、どじ見てんのよ！？」

飛び跳ねる様に、理香が覆いかぶさっている刀子から絡めていた足を解き、上半身だけ起き上がり、捲れていたスカートを両手で押さえた。

すると……。

「へ？」

これまで自身を前倒しで押さえ込んでいた理香が膝立ちになつたのを見計らつて、刀子が電光石火とも称せる動きで、油断していた相手が何をされたか分からぬ程の投げを仕掛け見せた。

いつの間にか取られていた右手首を起点にして、理香の視点が刀子を中心にながら一回転し、ベットへとその背中を叩き付けられた。

幸い、柔らかくスプリングの利いた場所に投げられたため、理香はノーダメージで済んだが、一瞬何が起こつたのか？

つた、唖然とした表情を、今度は逆の立場で、こちらを見下ろしてきている刀子に晒してしまつた。

「団に乗るのも良いが、咄嗟の反応が弱い様だね」

「あ、あははは……」

形勢逆転された理香は、乾いた笑みを、明らかに凍て付くような微笑を浮かべながら怒つている刀子に向ける。しかし、その程度で許してくれるものでも無い。

「私も勉強になつたよ。どんな時でも、相手を侮らない事……そういえば、ここに入つてくる際、扉が吹き飛んできたのは、君の足技だつた様だね？ 初めは流石に何かの仕掛けかと考えていたけど、さつきの動きで合点がついた」

投げた体勢のまま、理香の右手首をいつでも極めるよう、両手で取つている刀には、既にさつ今までの油断は一切見られない。

これはヤバイかも……と、理香が腹を決めようとした、その時。「どうでも良いが、そんなに一緒にふざけたいんなら、藤城、お前がソイツに携帯の使い方、教えてくれよ。お前、確か教え方上手かつたろ？」

再び竜蔵が、二人の醸し出す蛇に睨まれた蛙の空氣をぶち壊す様に、間に割つて入つてきた。

まさか、あの白状で朴念仁で無愛想だつた男からの救いの手が！？

思わぬところで、腐れ縁の男の成長を感じた理香であつたが、こ

こは機を見て敏なりを実践する状況、戸惑つてなどいられない

「そ、そうね！ 携帯の使い方ぐらい私の手に掛かれば、どんな機

！」

刀子をベットから仰ぎ見る体勢であつたが、理香は竜蔵の頼みに虚勢では無い自信を滲ませながら、全力で答えた。

「あとはよろしく頼む……少し  
暑夏の方が夏になら  
るから」

「つづらよつこ、まよひ、二つ三つ放置していい、気はつ  
言しながら、龍蔵は刀子と理香の二人を置いて、この本来なら寝  
るだけでは済まされないホテルの一室から退室しようと、化粧台の  
椅子からゆづくりと立ち上がった。

۷۰

折角の助けが、あまりの自分勝手気質が故に、マイペースに離れて行こうとするのを、理香が思わず呼び止める。だが、彼は無情にも刀子に手首を極められる寸前の彼女を置いて、部屋からスタスタと出て行こうと……いや、そのまま行ってしまうかと思われたが、ただ応急処置程度で立て掛けられている扉を前にして、二人に振り返った。

その様子に、理香は一瞬、あの男も捨てたものではないという希望的観測を、頭に過ぎらせたのだが。

ああ、それと……ソイツ、かなりの機械音痴だから、一かに教え  
てやつてくれよ？ お前は、多分かなり迷惑を掛けるだらうから、  
言われた事を“落ち着いて”こなせよ？

落ち着いてという部分に、妙に強調されたアクセントが含まれていたが、竜蔵はそれだけを言って、再び前を向き直り、立て掛けられていた扉をどかして部屋から出て行ってしまった。

おそらく、そのままエレベーターへと乗つて、妹がいるであろう一橋学園まで行つてしまひう事であらう。

理香は、その事実に……。

「ふ、ふふふ……」

「？」

「そつくるか……そうね、アイツは昔からマイペースだったものね」「どうしたのだ？ というより、教えてもらつ身としてではあるが、私も早く学園に戻らなくてはならないのだ。だから、早くご教授願いたいのだが……」

さつきまでは襲われた身であったが、ここからは教えを請う身であるため、刀子は極める寸前であつた理香の華奢な右手首を離し、己自身も少しだけ相手と間を取り、キングサイズのベットに正座をした。

だが、当の理香の様子がおかしい……。

どうおかしいのか聞かれれば、何やら吹っ切れた印象が……。

「だつたらコツチも好き勝手に“やらせてもらう”わよ！？ 私のテコトコ領域に女の子一人残していつた事が、どういう意味を持つのか、アイツに再認識させてやる！－！」

いや、何やら意味の分からぬ方向へと吹っ切れていた……。

多分、いくら腐れ縁とはいえ、アポ無で久しぶりに会つた友人が関節技を極められそうにも関わらず、薄情・自分勝手に面倒事を置いていき、そのまま我関せずとばかりにトンズラをぶつこいた事に、怒りのメーカーが振り切つたのであろう。

突然、訳の分からぬ怒りを露にしながら、ウガーンと起き上がり、理香に、刀子はどうして良いか分からず、咄嗟に警戒心を高め、身構えてしまう。

しかし、刀子は知らなかつた……。

この藤城理香という少女が怒り狂つた時、なかなか竜蔵でも宥めるのに梃子摺る事に

そして、彼女が実は……。

百合<sup>レバ</sup>つ氣のある女性だという事に



中途半端なのは、文字数的に切りなきゃ拙いこと感じたからです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9403w/>

仁義なき妹【改訂版】

2011年12月15日22時52分発行